

自然なる日本文化の ころ

＜ 仏儒 以前 信仰古層 と 日本的習合 ＞

Foundation of Kyoto culture
Principle & Origin of Japanese culture

原初的な神信仰から、仏教、儒教の受容と、その日本的な習合、変貌について図解にて整理した。江戸時代までに徐々形成されてゆく「神・仏・儒一致」への過程である。その原初的信仰は「清浄」や、「水」と関係する。それらは古事記の記事や神名に**表現**され、祭祀に先立って唱える「祓詞」の「祓戸大神」とは、古事記で黄泉から帰還した伊邪那岐が禊をした時に化成した船戸神以下十二神の総称である。そのあと水中で「海の神」たちを生み、水で身体を洗い、誕生する神々が「洗左御目時、所成神名、**天照大御神**。次洗右御目時、所成神名、**月讀命**。次洗御鼻時、所成神名、**建速須佐之男命**」である。神話で重要な神々を生み出す、水と関係した「生命の誕生・再生」への思いである。また天照大御神は「**天之眞名井**」で、「十拳劔」を「振篠（ふり**清め**）」て宗像三神たちを生む。**神産巢日神**（カミムスヒ）**高御産巢日神**（タカミムスヒ）の「**産巢日**」（ムスヒ）は、**生命「霊」**（ヒ）の誕生・再生と関係し、その「ムスヒ」は、水の「掬ひ」でもあり、水中の「霊」を取り込んだ。

「霊」と「魂」について 「霊」は万物に宿る精神で、死んで天に昇る「魂」霊と、地上に残る「魄」霊があり、そのため死霊はあると考えられ、死魂は無い。祖霊神は、その「魂」の集合体である。生前の「魄」が「穢」で、「禊祓」で封じる。すなわち生前死後の「魂」は、**清らかな**のである。「魂」は、**神格**とも関連し、宇迦之御魂神、大國御魂神、布都御魂、国魂などに顕れる。例えば、倭大国**魂**神（やまとのおおくにたまのかみ）は、日本書紀に登場し、日本大國魂神とも表記する。大和神社（奈良県天理市）の祭神である。（魂魄概念は、中国の道教靈魂不滅説に由来。日本には鎌倉時代に渡来）

「禊」と「祓」について 「禊」が身体の穢れを除去して**浄める行為**を指すのに対し、「**祓**」は罪や災いをとり除く行為を指していた。だが、両者は機能が近いこともあり、記紀の時代には既に、「ミソギハライ」と複合した言い方もされる。

「**修祓**〈しゅばつ〉」の際、奏上される**祝詞**「祓詞（はらえことば）」より「**修祓**〈しゅばつ〉」とは、「**祓の神事**」 「祓」は、神道の神事において、禊や**斎戒**の後に行われる、重要な意義を持つ浄化の儀式である。斎戒とは、物忌み（ものいみ）のことで、ある期間中、ある種の日常的な行為をひかえ穢れを避けること。

祓は、神を迎え交流する準備として、**罪穢れのない清浄な空間**をつくる意義がある。「**神道の根本思想**」は、神事に臨む個人のものだけではなく、この世界のあらゆる罪穢れを徹底的に祓い浄め、「**明**（あか）き**浄**（きよ）き正しき直き」**境地**を求める**姿勢**にある。

「祓詞（はらえことば）」
かけまくもかしこき いざなぎのおほかみ
掛介麻久母畏伎 伊邪那岐大神
つくしのひむかのたちばなのおどのあはぎはらに
筑紫乃日向乃橘小戸乃阿波岐原爾
みそぎはらひへたまひしときになりませる はらへどのおほかみたち
御**禊祓**閉給比志時爾生里坐世留 **祓戸乃大神**等
もろもろのまがごとつみけがれあらむをば はらひたまひ こよめたまへと もほすことを
諸之禍事罪**穢**有良牟乎婆 **祓**閉給比 **清米**給閉 登白須事乎
きこしめせと かしこみかしこみもほす
聞食世登 **恐美恐美**母白須

天の思想

自然摂理の意味
治世者の「天道」
自然運命である「天命」
徳治倫理運命の「天下」

「天の思想」とは、原初的には自然摂理をいう。古事記の「天之御中主神」 聖徳太子の憲法三条「天覆地載 四時順行 万氣得通」の「天」。儒教の、倫理的応報で天地万物を支配、合理的法則を意味する「天」、 仏教の天界・四天などの護法神や、道徳的善行による天界往生する生天信仰にある「天」、老荘思想では、自然法的なもので運命な「天」、それらの「天」を習合した思考また行動を意味する。

和の思想

徳仁礼信義智

徳：自然なる徳
仁：仁徳 奉仕、情け、慈悲
礼：礼徳 尊敬、礼節
信：信徳 信賴、信用
義：義徳 正邪を正す、正義
智：智徳 習得、スキル習得

徳の思想

北条重時「六派羅殿家訓」
「仏・神・主・親への崇敬」「因果の理」

道徳教訓書の代表「五常内義抄」
「儒仏一体の道徳思想」
儒教道徳の五常
「仁・義・礼・智・信」
仏教の五戒「不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語戒・不飲酒戒」

日本文化の特性 基本原理の体系より

マナイズム

原始宗教として、タイラーが提唱した生命万物の「霊」観念がアニミズム。その前段階の観念としてコドリントンがポリネシア信仰で紹介し、人類学者マレットが提唱。**超自然的・神秘的な、非人格的な力の作用(マナ)**を定義した。

＜イギリス 文化人類学＞

「神の思想」

自然の下に生かされている
自然調和 循環と継承
清浄心 と 清明心

「自然」の中の人間

自然・水 から誕生する生命
神は、清浄な場所に来りくる存在
超越した力を持ち、恐れ畏（かしこ）むべき存在

「仏の思想」

諸行無常
万人平等の成仏
前世・現世・来世 救済

人間への教え、
人間から捉えた世界観
万人平等の成仏 法華思想
「自然」には言及しない。
世界を時間軸でとらえる
意識が強い

「儒教の思想」

君子秩序 仁義礼智信
徳治と放伐

人間と人間の関係性
政治思想との関係が強い

自然の法則・力

太陽・月・水
季節

マナイズム 見えないチカラ
精霊 植物・動物 花鳥風月

生命源泉
自然恩恵
天候・天災

水と産霊(ムスヒ)の信仰

穢れを落とし、**水**によって生命が誕生する
水の中の靈魂を体内に入れ、体と**靈魂**を結合する。

魂の継承

霊(ヒ)の存在
清浄な水に宿る

清浄心
清明心

水をもたらず
山の信仰

原初共同体 モラル
地域生活・祭祀

自然への恩恵・畏怖
樹木・狩猟の地
雷・災害の地

八百万信仰

アニミズム

自然共生・原生思想

循環思想

皇祖霊信仰
氏族祖霊の長

和合思想

縄文・弥生習合

神々習合

母系による出雲・神武
国譲と習合

天の思想

和の思想

日本的仏教
平等思想

神仏習合

徳の思想

日本的儒教
天命と習合
合議・寄合
情の仁義

日本的仏教
国家鎮護
変化観音
現世利益
（二求両願）
不動明王

日本的儒教
官学分離
（科擧不採用）
学問・実用

神・仏・儒 一致

皇祖靈繼承信仰 と 儒教思想

天皇と日本

臣下による天皇殺害は、崇峻天皇5(592)年、蘇我馬子による**崇峻天皇暗殺のみ**が確かな歴史として日本書紀に記されている。その後、1400年以上、天皇は我が国で尊厳されている。天皇即位前には、皇族間やまた豪族間の勢力闘争と関係し、幾度となく闘争はあるが、天皇に即位されてからはこの事件だけである。安徳天皇は、祖母・二位尼(平時子)に抱かれ、極楽浄土に参られようと、東を向いて伊勢神宮を遙拝、西を向いて念仏を唱え、壇ノ浦の急流に身を投じらた。安徳天皇は、歴代最年少の数え年8歳で崩御された(『平家物語』『先帝身投』より)。この事件は、源平闘争に巻き込まれた夭折ご崩御であり、ご本人殺傷を目的とした直接的行動ではない。

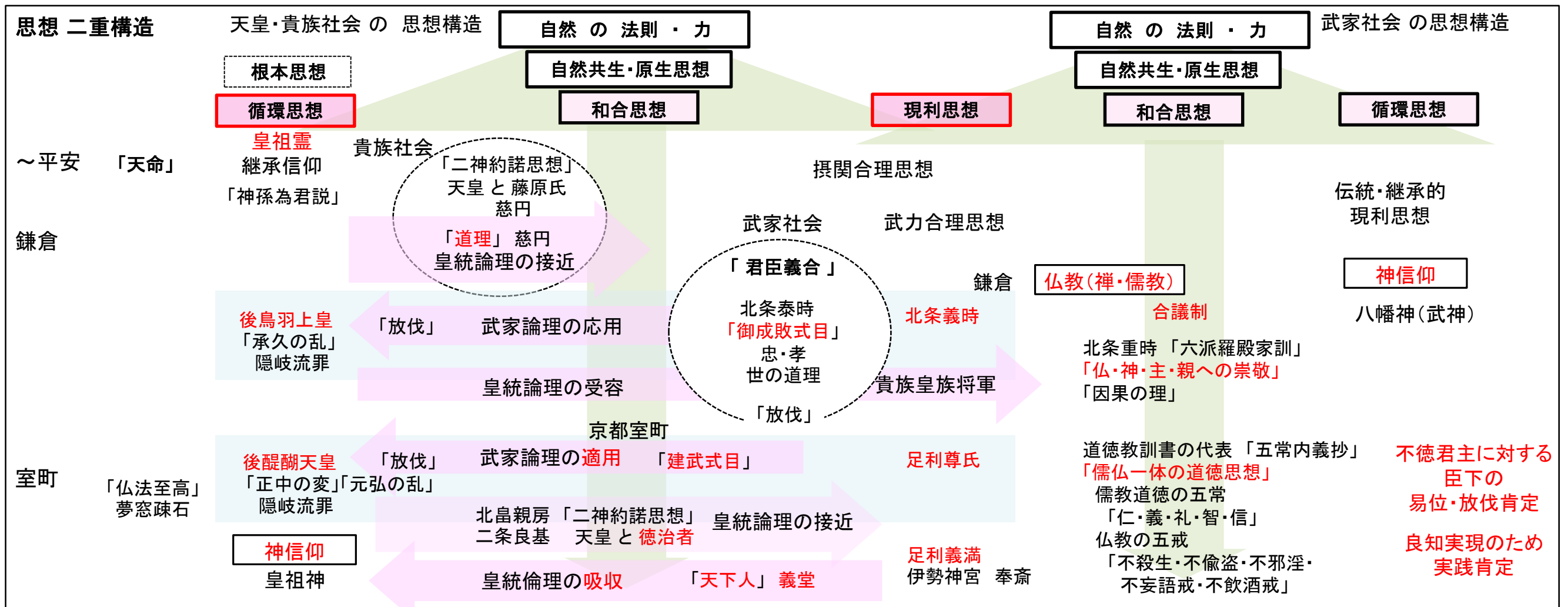
平安時代の約400年の間に成熟した「**天皇・摂関政治**」と、新たに誕生・成長してゆく「**武家政権**」との併存、権威関係確立への時代が、鎌倉から室町である。天皇自身の意識とは別に、武家は、その「**徳**」に期待し、また武家もその集団において「**徳**」「**君臣義合**」を理想とした。そして、その関係に疑念が生まれた時、争乱が発生した。武家間においては、勢力抗争もあるが、概ね「**交渉**」「**大義**」が求められた。それらの姿勢は、「**儒教**」の影響もあるが、天皇皇統が存続された理由にはならない。なぜなら、儒教中国で、国家は皇帝ごと討伐され変わっている。我が国では、当然ながら**天皇**は儒教伝来以前から継承されてきた。しかしその当初の伝来後も、武力で勝る武家誕生後も、また朱子学・用明学と変貌伝来し人々に影響した後も、同様に天皇は継承されている。この史実は、我が国の文化思想を理解する重要な手掛かりであり、また、この独自の歴史を説明できないと「文化思想論」は成立しないだろう。そのためには、儒教そのものを理解し、それと分別することで、武家を含む人々の天皇尊厳意識が浮き彫りにされ、その結果、儒教伝来以前に存在した「**我が国固有精神**」が判ると考える。また相対的に、「併存関係」を理解しなくてはならない。

崇峻天皇(すしゅんてんのう、欽明天皇14(553)年頃～崇峻天皇5(592)年頃)は、蘇我馬子の指示を受けた東漢駒によって暗殺された。泊瀬部皇子(はつせべのみこ)は、蘇我馬子大臣により、即位推薦された。一方、大連の物部守屋は、穴穗部皇子を即位させようとするが、穴穗部皇子は蘇我馬子によって殺されてしまう。その後、蘇我馬子は、物部守屋を滅ぼし物部氏は没落してしまう。泊瀬部皇子が崇峻天皇として即位したあとも、実権は常に馬子が握っており、天皇は次第に不満を感じるようになった。馬子は「天皇は自分を嫌っている」と警戒し、そして東国の調を進めると偽って天皇を儀式に臨席させ、東漢駒に暗殺をさせた。異常事態下であるにも関わらず、天皇暗殺後に内外に格段の動揺がなく多数の皇族・群臣の同意を得た上での「宮廷クーデター」とする説もある。その後、第31代用明天皇の妹であった額田部皇女が、馬子に請われ、豊浦宮において推古天皇として即位。神功皇后と飯豊青皇女(いいとよあおのひめみこ)以外で、史上初の女帝となった。

『日本書紀卷第廿一 馬子宿禰、詐於群臣曰「今日、進東國之調。」乃使東漢直駒弑于天皇。或本云、東漢直駒、東漢直磐井子也。是日、葬天皇于倉梯岡陵』

天皇・貴族社会と武家社会の思想二重構造

鎌倉から室町時代、それぞれの社会は、同じ国民として共通の思想構造を持つが、天皇・貴族社会は、皇祖霊継承信仰といった循環思想に比重し、武家社会は、儒教の影響も受けながら、現利思想に比重した。その二重構造を背景に、両者騒乱の過程で、双方の思想が習合していく。その証しが、天皇を継承、公家社会を持続させながら、武家政権が共存してゆく歴史事実である。鎌倉から京都室町への、地理的接近にも現れている。本思想構造で歴史を辿ると、当然ではあるが儒教は現利思想の範疇に影響し、循環という別の思想軸を置かないと天皇継承は説明できない。



ひとつの命題がある。ドナルド・キーン氏と司馬遼太郎氏との間で議論となった「**日本人のモラル**」と**儒教との関係**である。キーン氏は、そのモラルの原点を儒教とし、司馬氏は江戸時代など儒教教育からの影響は認めつつ、それ以前の「**オリジナルなモラル**」を強調。また、社会体制への影響は少なかった、とする。二人共通して「**世間**」への意識としての「**恥**」、そして近松門左衛門の歌舞伎からは、儒教的に行動しようとして解決できない状況で最後は純粋に自棄に至る、そのことを日本的とする。キーン氏は、古事記の死後の穢れ「黄泉の国」への意識と、「心中」の動機や死ぬ直前の重要な意識とを比較して、神道より死後浄土への仏教的意識を指摘した。その上で、「神道は誕生、日常は儒教、死には仏教」に成る「**矛盾した信仰構造**」を好評価する。応えて、司馬氏は、「死後の黄泉の国意識」以前の「痴呆的空間」なる「**古代原初的神信仰**」が日本文化の底辺に「**皿**」としてあり、その上に仏教・儒教がのる、とその構造を結論する。そして最後に、三信仰を適時利用する「便宜主義」を特徴として加える。司馬氏は、その神がいます場所は**清め**られなければならない、とした。以上『日本人と日本文化』より **その「清め」と「モラルの原点」の関係**など、以下に検討する。

古事記以前の信仰とは？ モラルは日常生活に顕れる、日常生活から信仰を読み取る。とすれば、その時代の手掛かりとして一つの記事がある。俗称で『三国志魏志倭人伝』と呼ばれている書物である。中国西晋の陳寿によって、呉の滅亡**280年**から、陳寿の没年297年の間に書かれた歴史書『三国志』。その中の『**魏書**』第30巻烏丸鮮卑東夷伝**倭人条**」のことで、陳寿死後、中国では正史として重んじられた。仏教儒教の伝来や、古事記が書かれる400年以上前、弥生から古墳時代に変遷しようとしていた時代。当時の倭人(日本人)の習俗や地理などについて書かれ、我が国の状況を文字として確認できる現存最古の書物である。「**邪馬壹國**」はこの書物に登場し所在が議論を呼んだが、書物信頼性を一旦留保し、人々の日常生活に注目したい。以下に該当部分だけを抽出した。ここで描かれているのは、地域に分散して、漁撈採取、農耕で自活し、窃盗、訴訟が少なく、風俗が整った生活。また、尊卑序列の下、臣服敬意の礼儀ある姿である。そして、葬儀では、喪に服し、水中練沐したとされる。つまり、練を着て水に浴することで「埋葬後に**死の穢れ**」を水で洗い清めた」という事である。中国から来た人が脚色する理由は無く、これらは参考とすべき記述と考える。仏教儒教の信仰、教えない時代に、これほど整った生活が行われ、古事記よりはるか以前に、死に対する穢れの意識が存在した証拠となる。この書物で記されている多くの地域小国は、縄文の漁撈採取を引き継ぎ、弥生の水稲など農耕を併用している。防衛の武具は持つが、この中国人が各所巡訪できる程の安定状態と考える。**地方分権自活型**の共和状態である。

風習では、事を起して行動に移るときには、骨を焼いてト占で吉凶を占う。先ずト占を唱えるが、その語句は令亀の法の如く、火坼(熱で生じた亀裂)を覩て兆(きざし)を占う。つまり、自然に問いかける「ト占」や「卑弥呼(巫女)や鬼道」の語から、背景には原始で自然な神祭祀があり、それを中心に充実した地域生活が営まれていた。この「地域」が「**世間**」であり、その「習俗から逸脱」することが「**恥**」である。その神祭祀は、自然を前提とした素朴な信仰であるため、白紙であり、司馬遼太郎氏の言う「**皿**」なのである。

また、「死」がもたらす生者の「**穢**」、その解消方法として「**禊**」が存在した。「**禊**」の行為には、水の中の**靈魂**を体内に入れ、体と靈魂を結合させるという意味があった。その名残として、水を両手のひらで掬って(すくって)飲む動作を『水を掬ぶ(むすぶ)』と言う。この生命誕生再生の「むすぶ」は、のちの古事記で、**神産巢日神**(カミムスヒ)**高御産巢日神**(タカミムスヒ)の神名に顕れる。また、今日使われている「結ぶ」は、本来、内在するものを外部に逸脱しないための外的な形である。生命誕生再生のための自然への信仰、その神のいます場所や、「死」に際した生者は、「むすぶ」力を保ち再生するために、清められ穢なきものでなければならない。つまり「**穢**」「**禊**」の意識は、地域社会における生命誕生継承のための自然信仰に由来するとともに、我が国の人々に儒教以前に「清浄心」「清明心」を育んだ。「**恥**」の原点は「**穢**」なのである。両氏対談では、この記事は引用されてない。しかし「日本人のモラル」を議論するには、源流として、前提すべきと考える。

俗称『魏志倭人伝』 原文より

戸	竊	四	其	無	如	所	不	棹	憂	生	婦	一	水	食	有	其	徒	有	櫓
及	少	五	人	別	令	云	知	揉	不	口	人	人	中	肉	棺	身	跪	無	木
宗	諍	婦	壽	人	龜	為	以	櫛	謹	財	如	不	澡	喪	無	體	有	輿	
族	訟	下	考	性	法	輒	為	號	出	物	喪	梳	浴	主	櫛	如	屋	僮	木

原文 5, 6ページ 部分

「土地山險、多深林、道路如禽鹿徑。有千餘戸、無良田、食海物自活、乖船南北市糴」土地は山が陰阻で、深い林が多く、道路は獣や鹿の小道(獣道)。千余戸あり、良田は無く、**海産物**を食べて**自活**しており、船で南北の市(物々交換の場)に出かけて、糴(てき＝穀物を買求める 物々交換する)する。「今倭水人好沈没捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽、後稍以為飾。諸國文身各異、或左或右、或大或小、尊卑有差。」今の倭の**海人**は水に潜って上手に**魚や蛤を採取**する。身体の刺青は大魚や水鳥を厭うからである。後にやや装飾となった。諸国の文身は**各自に異なり**、左や右、大や小、**身分の尊卑**で差がある。

「其風俗不淫」その**風俗は淫乱ではない**。「種禾稻、紵麻、蠶桑緝績。出細紵、縑綿。其地無牛馬虎豹羊鵠。兵用矛、楯、木弓。木弓短下長上、竹箭或鐵鏃或骨鏃、所有無與儋耳、朱崖同。」**水稻、紵麻**(カラムシ)の種をまき、**養蚕**して絹織物を紡ぐ。細い**紵**(チョマ＝木綿の代用品)、**薄絹、綿**を産出する。その地には、牛・馬・虎・豹・羊・鵠がい**ない**。矛、楯、木弓を用いて戦う。木弓は下が短く上が長い、竹の箭(矢柄)あるいは鉄、あるいは骨の鏃、有無するところが儋耳(ダンジ)や朱崖(シュガイ。ともに海南島の地名)に同じである。

「倭地温暖、冬夏食生菜、皆徒跣。有屋室、父母兄弟臥息異處、以朱丹塗其身體、如中國用粉也。食飲用籩豆、手食。其死、有棺無槨、封土作家。始死停喪十餘日、當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒。已葬、舉家詣**水中澡浴**、以如練沐。」倭の地は**温暖**、冬や夏も**生野菜**を食べ、皆が**裸足**で歩いている。屋室があるが、父母兄弟は寢室を別とする。朱丹を身体に塗り、中国の白粉を用いるが如きである。飲食には**御膳**を用い、**手で食**べる。**死ねば**、棺(かんおけ)はあるが槨(かく＝墓室)はなく、**土**で密封して**塚**を作る。死去から十余日で**喪**は終わるが、服喪の時は**肉を食べず**、喪主は哭泣し、他の人々は歌舞や飲酒をする。葬儀が終われば、家人は皆が水中で**水浴**びをする。**練沐**(練り絹を着ての沐浴)のようである。

「其俗舉事行來、有所云為、輒灼骨而卜、以占吉凶、先告所卜、其辭如令龜法、視火坼占兆。其會同坐起、父子男女無別、人性嗜酒。見大人所敬、但搏手以當跪拜。」関連記事『魏略』其俗不知正歲四節、但計春耕秋收為年紀。」その風習では、事を起して行動に移るときには、為す言動があり、すなわち骨を焼いて**ト占で吉凶を占う**。先ずト占を唱えるが、その語句は令亀の法の如く、火坼(熱で生じた亀裂)を覩て兆(きざし)を占う。そこでは会同での起居振舞(たちいふるまい)に、**父子男女の差別がない**。人々の性癖は酒を嗜む。大人(高貴な者)への表敬を観ると、拍手を以て跪拜(膝を着いての拝礼)にあてている。『魏略』その風習では、一年に四季があること(歴)を知らない。ただし、**春に耕し、秋に収穫**をすることを計って年紀としている。

「其人壽考、或百年、或八九十年。其俗、國大人皆四五婦、下戸或二三婦。婦人不淫、不妒忌。不盜竊、**少諍訟**。其犯法、輕者沒其妻子、重者滅其門戸及宗族。尊卑、各有差序、足相臣服。收租賦。有邸閣國、國有市、交易有無、使大倭監之。」その人々は長寿で、あるいは百年、あるいは八、九十年を生きる。その風俗では、国の高貴な者は皆、四、五人の婦人、下戸(庶民)はあるいは二、三人の婦人を持つ。**婦人は淫乱ではなく、嫉妬をしない**。**窃盗をせず、訴訟は少ない**。そこでは**法**を犯せば、軽い罪は妻子の没収、重罪はその一門と宗族を滅ぼす。**尊卑は各々に差別や序列があり、互いに臣服**に足りている。租賦を収めている。邸閣(立派な高樓)の国があり、国には市があり、双方の有無とする物を交易し、大倭にこれを監督させている。

「及郡使倭國、皆臨津搜露、傳送文書賜遺之物詣女王、不得差錯。」郡使が倭国に及ぶときは、皆、港に臨んで点検照合し、文書、賜物を女王に詣でて送るが、**間違いはあり得ない**。

「下戸與大人相逢道路、逡巡入草。傳辭說事、或蹲或跪、兩手據地、為之恭敬。對應聲曰噫、比如然諾。」賤民が高貴な人物と道で出会えば、後ずさりして草群に入る。言葉で伝達すべき説明事は蹲(うずくま)るか、跪(ひざまづ)いて、両手を地に着けて**敬意**を表す。応答する声は**噫**(いい)と言い、これで承諾を示す。

ドナルド・キーン氏は、日本文学研究の第一人者であり、英訳などを通じ、世界に発信いただいた。その著書などから、日本文化についての考えを抽出し、当方「原理」を検証したい。キーン氏が、長年の研究を経て、日本人、日本文学・文化を象徴すると考えた語彙を、引用著書の順に図中、上から下に配列した。キーン氏の当初からの研究である文学から抽出された「日本人の好み」「日本文学の特徴」の言葉「**暗示**」「**無常**」「**保守性**」は、時間時代の経過を意識する心情、伝統など**循環的**である。それと比較し、下段の「日本人の特徴」を表す「**あいまい(余情)**」「**はかなさへの共感**」「**礼儀正しい**」「**清潔**」「**よく働く**」の「五項目」は、**現利的**な部分まで捉えた言葉として、当原理構造において、バランス良く配列できる。「**不均整**」「**あいまい(余情)**」は、両極習合への葛藤の顕れであり、また、自然なありように通じる「**簡素**」と共に**和合的**であり、「**女性の重要性**」は、仏教の一乗思想、万人往生など平等の顕れと考える。同氏、文学からのアプローチからも検証出来たと考える。

著書『**古典の愉しみ**』では、「日本人の好み」についてのエッセーを引用し、その「**重要な特性**」について、「暗示・不均整・簡素・無常」を取り上げている。

「**暗示**」は、「例えば桜満開だけを乐しまず、初めや終わりにも深い漂いがある」「男女の情も、逢い見るだけでなく、逢えずに終わってしまう悲しさを感じる」など指摘されている。物事の過程の描写、過程の心情を大切にしている。

「**不均整**」は、中国など芸術・建築と比較され、文学・書道・陶器・生け花・造園を例示されている。

「**簡素**」は、まず、吉田兼好『方丈記』に記された庵の構造や装飾を取り上げた。千利休の理想「サビ」で、あからさまに富を示さず、また富だけで得がたい価値感も表現した。少ない香料、淡い匂いの食べ物について、近年、外国人の日本食趣向に触れた。

「**無常**」は、彼が最も不思議なものとし、西洋の永遠に対し、ラフカディオ・ハーン『心』を引用され、「うつろうもの」を望んでいたとした。世界の文学で共通の問題である「人生のはかなさ」が、日本だけは、美にとって不可欠とした。木造建築もまたしかりとする。特別に、桜は、うつろうもの、はかないものとして好まれる。夏目漱石が、西欧人の自然変化に無関心さに驚いたことも紹介する。

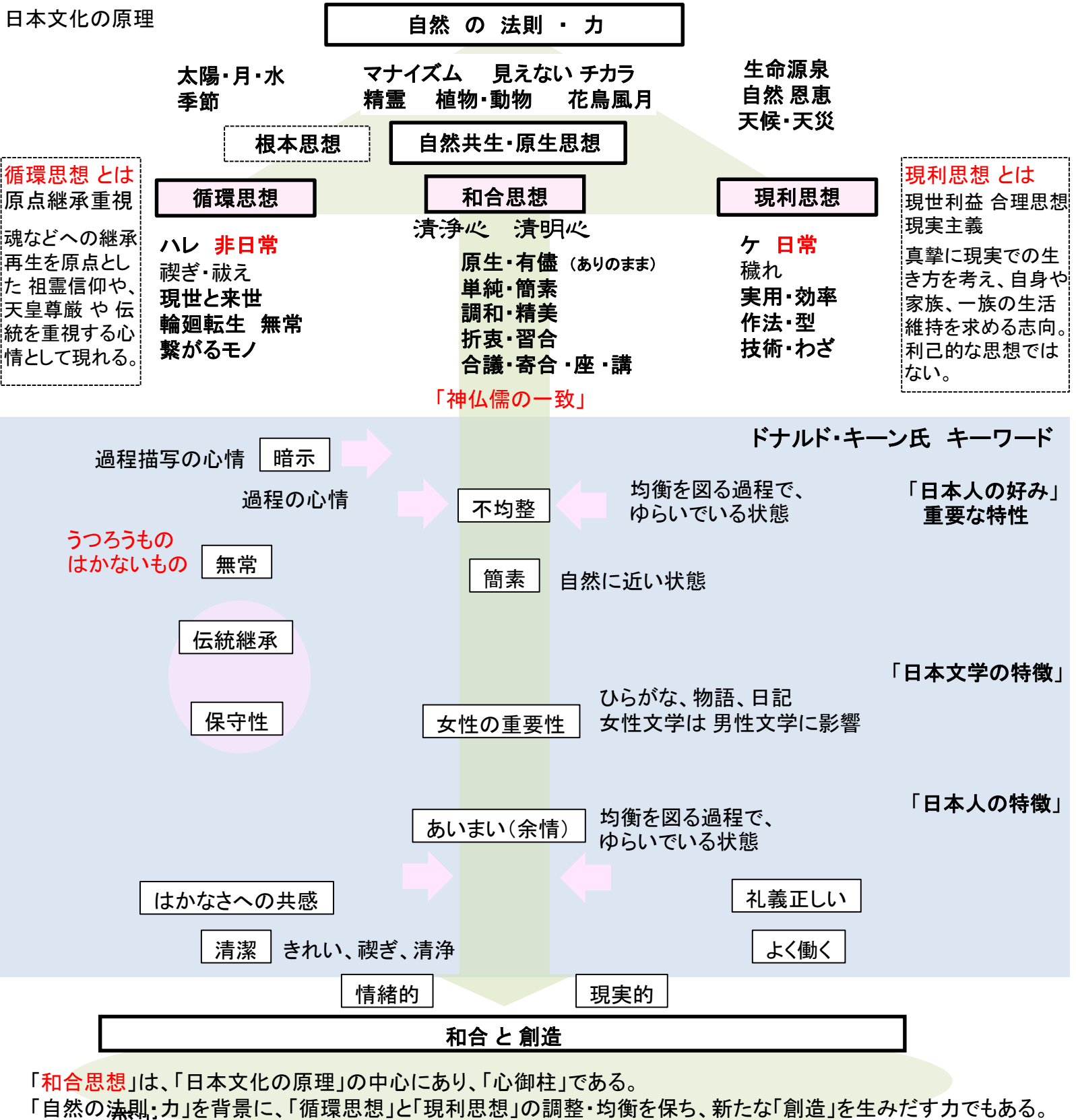
過去の日本の美は、変転の激しい時代でも生き続けている、と結ぶ。
(このことを「**伝統継承**」と、追加したい)

著書『**日本文学の歴史**1』で、「日本文学の特徴」として、二点に絞っている。

まず、中国や東南アジアの文学と比較して、和歌と散文における「**女性の重要性**」をあげ、『源氏物語』『枕草子』の物語と「日記」の、男性作家への影響に注目する。そして、「**保守性**」として、今日までの和歌・俳句の興隆、能・歌舞伎・浄瑠璃の公演、古典文学の芝居や映画化を指摘された。

さて、司馬遼太郎氏とキーン氏の対談『日本人と日本文化』の中で、議論となった「**日本人のモラル**」について、改めて、キーン氏の最新の見解を、確認できることが出来た。
2015年放送NHK「戦後70年企画『**ドナルド・キーンの日本**』」である。

キーン氏は、俗称で『三国志魏志倭人伝』すなわち『三国志』『**魏書**』第30巻烏丸鮮卑東夷伝**倭人条**を引用され、「日本人の特徴」について、「**礼儀正しい**」「**清潔**」が描かれている、とされる。当論「儒教以前 自然なところ 清浄心 清明心」で、この点について指摘したが、やはり「日本人のモラル」を議論するには、この時代の記述を源流として、前提すべきと考える。「**礼儀正しい**」は、話す相手など代名詞や敬語の多様な使い分け、「**清潔**」は、「美しい」の意味も表す「きれい」でもあり「風呂好き」や「禊」へ話題展開。キーン氏は、さらに「**あいまい(余情)**」「**はかなさへの共感**」「**よく働く**」を加え、以上「五項目」を、「日本人の特徴」とされている。「**あいまい(余情)**」は、男女のやりとり、絵画の墨による稜線で例示された。「**はかなさへの共感**」は、散りゆく桜を愛でる心情を、上記「無常」と同様に列記されている。「**よく働く**」は、特に昭和世代には共感できると考える。



ドナルド・キーン氏は、『源氏物語』との出逢いや日本文学研究を通じ親日家であった。しかし、それまでの日本人に対する認識と、第二次世界大戦の日本兵「玉砕」と、そのことに対する日本人自身の美化意識との矛盾に悩んだ。日本人に対し「自己美化」「特殊性」への過剰意識に警鈴を鳴らしつつ、天皇の存在にひとつの答えを模索した。「日本人の本当に美しい部分、伝えるべき日本人」を求め、日記文学に手掛かりを探し、谷崎潤一郎氏の戦中執筆『細雪』の意義に注目された。 2015年放送NHK「戦後70年企画『ドナルド・キーンの日本』後編」 詳細を、下段に掲載する。

誠に僭越ながら、それら日本人の心情構造を、本論「日本文化の原理」で説明できる、と考える。その当事者の心情を軽々しく判断してはならないが、「玉砕」そして「特攻」の行為には、**清浄心・清明心**を背景に、古くは「切腹」に通じる「**潔し**」「**恥**」、そして「**穢れ**」への**忌避心情**が底流し、外的には、神国意識の下、天命天下の「礼義」「忠義」がのしかかっている。最後の瞬間には、ムラ・共同体的な「諸共」「一蓮托生」が、衝動として働いた結果ではなからうか。一方で、戦中に『細雪』を執筆した谷崎氏の心情は、当時の体制の対極として「**均衡**」しようとする思いであり、本論でたびたび指摘してきた日本文化の作用でもある。秀吉の「赤楽茶碗」に対する、利休の「黒楽茶碗」に代表される「原点・ありのままへの回帰」均衡と理解したい。その構造を図解したが、「玉砕」や、その「美化意識」には「循環・現利・和合」の三点からなる心情・思想が重層する複雑性がある。「神仏儒の一致」が、負の作用となった、と言え、語弊があるかもしれないが、その要素は濃厚である。

谷崎氏の『細雪』も、循環的な心情・思想、すなわち「**伝統を重視する心情**」から発せられたものだが、日本兵と文学者という、その主体者の置かれた立場、状況の違いにより、なされる行為が異なった、と考える。しかしながら、国家総体が、前者に向かう中での『細雪』誕生の意義、すなわち「均衡」を発見いただいたキーン氏の指摘は、日本人の誇りとして受け止めなければならない。「日本文化の原理」に依って、その価値が理解できるのである。

ドナルド・キーン氏は、2015年放送NHK「戦後70年企画『ドナルド・キーンの日本』」の中で、重要な疑問を打ち明けた。第二次世界大戦中、アッツ島で、なぜ、日本兵は自決したのか？キーン氏が目撃したアッツ島だけではない。ニューギニア島ブナやガタルカナル島でのいわゆる「玉砕」、そして、「特別攻撃隊」カミカゼも、同じであろう。文学を通じて「日本人の良さ」に好感していたキーン氏は、失望しつつも、それまで抱いてきた日本人に対する認識との矛盾に悩んだ。戦後、元日本兵達からの答え「仏教による精神的犠牲」「全体に引きこまれた結果」も、その解決にはならなかった。

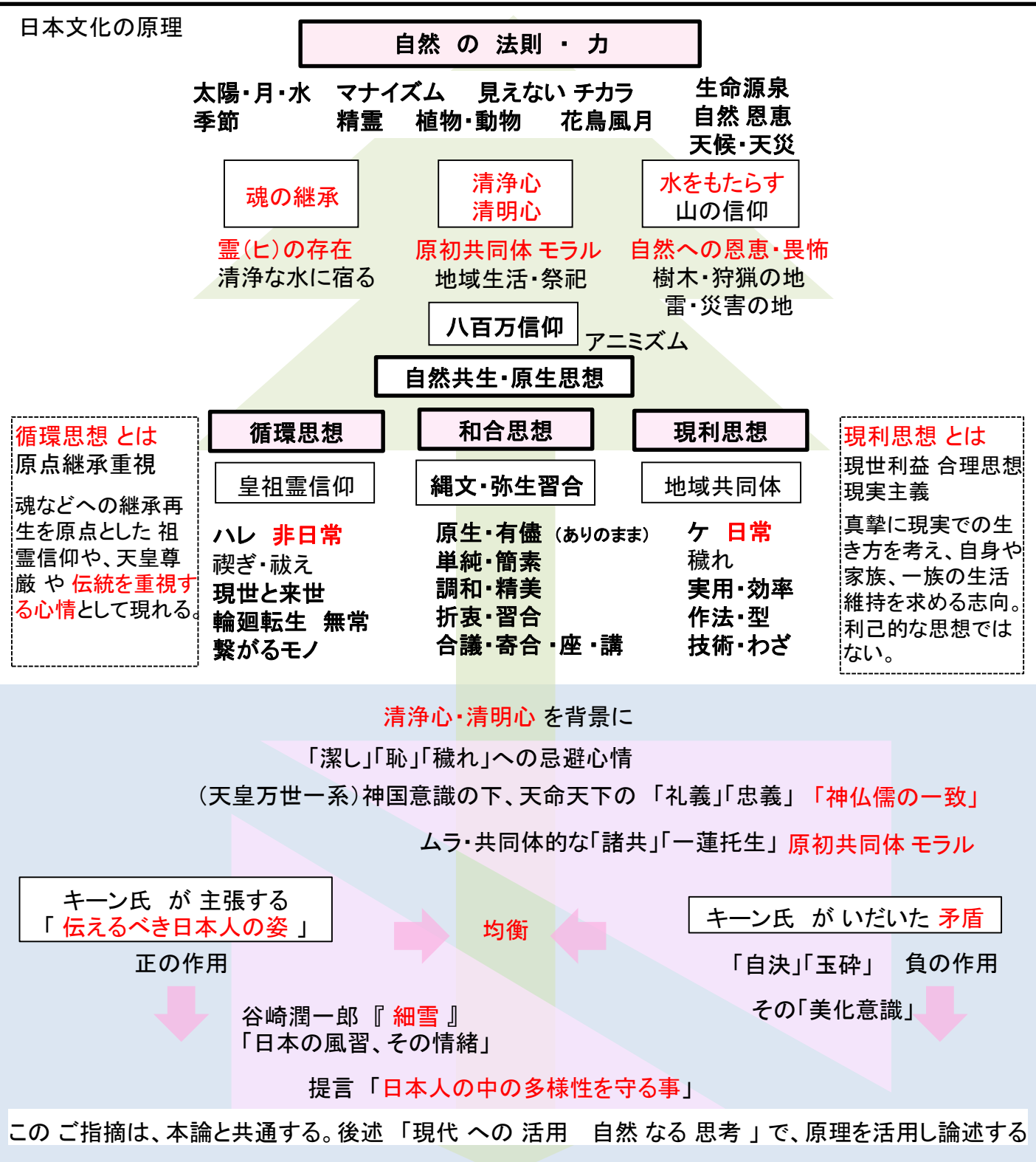
1970年代、司馬遼太郎氏との交流を通じ、新聞社で連載『**日本人の質問**』を始める。外国人であるキーン氏に、日本人から投げかけられる質問を題材に、日本人に対する、「美化しすぎてはいけない」「特殊性を意識しすぎている」という問題意識を持つ。それは、「同志意識を楽しんでいる」「西洋に対し、日本文化の理解を広める努力を惜しんできた」などのメッセージとなる。そして、その背景には、天皇の存在があるとし、日本の中にだけいるとそうなるのだが、外国に出ると日本を理解しようと自覚する、と考察したが、近年の日本人たちの海外留学減少を危惧する。

1983年からの連載『**百代の過客 日記にみる日本人**』では、平安時代から現代までの日記に、その当時の人々の考え、感情を見だそうとした。鎌倉時代、女性の『弁内侍日記』では、先例にこだわる役人への批判。江戸時代末、『遣米使日記』からは、外国人に対する「真心はかはらざりけり」と感じる思いを指摘した。高度成長期にあって、表面的な文明摂取を批判する永井荷風『新帰朝者日記』に、真の文明を見だそうとする姿も見た。一方、キーン氏が、表現の自由者として認識していた伊藤整が、『太平洋戦争日記』では、日本兵の自決を「美しい戦い」と讃美することに、また矛盾を思い出す。

そしてそのあと、悩むキーン氏は、『疎開日記』から、戦中において連載中止になりながら最後は自費出版した谷崎潤一郎の姿を発見する。その著書『**細雪**』を以って、谷崎は「日本の風習、その情緒を、大切に伝えようとした」、と讃美する。これこそが、「**伝えるべき日本人の姿**」であると確信する。

「日本人の本当に美しい部分を忘れるべきではない」「信じることを成し遂げた谷崎潤一郎の様な人を忘れてはならない」と、主張する。谷崎氏は、キーン氏に、裏側の見えない部分の美しさを大切にする「羽織り」を、その形見として伝えた。

その後も「戦争と日本人の考察」は続いたが、ひとつの結論として、戦争防止のため「**日本人の中の多様性を守る事**」を、提言とした。そして、2011年東日本大震災発生後、整然と行列する姿、助け合う姿に、「日本人の真髓」を再認識したキーン氏は、2012年3月、日本人国籍を取得し「**鬼怒鳴門**」となった。**伝統**は時には隠れて見えなくなってしまうが、それは確かに日本人の中に流れ続けている。日本人は、伝統を守り、過去の良さから、楽しみを得ることに魅力を感じるべきだと、未来の日本に向け期待される。



『日本人と日本文化』の中で、ドナルド・キーン氏は、司馬遼太郎氏に語る。「たとえば、『寿の門松』の場合を考えると、主人公与次兵衛はひじょうにむづかしい選択にぶつかるのです。妻のお菊を愛していながら、もうひとりの太夫吾妻を愛している。どうしたらいいのかわからない。二人とも実に心の素直ないい女性で、それでしまいには完全に主人公は狂ってしまう。当時の観客は、きっとあれを見て同情したでしょう。どうして同情したかという、彼は純粋に考えた、**純粋**に自分の感情のままに行動したからだと思います。利害打算が全然なくて、儒教的な考えもなく、ただ純粋に自分の気持ちのままに動いた。それは私にいわせると、ひじょうに**日本的**です。しかし、発狂するまでの心の動きを規制するものはきわめて儒教的だった。」 司馬氏も賛成しつつ、仁義礼智信の儒教は、ぬきさしならない問題において、最初の問題とする。 答えて、キーン氏は、「(儒教について)かなり遠いところまで大切に考えるでしょう」と、補正を提起された。 本論は、このことが重要 と考える。

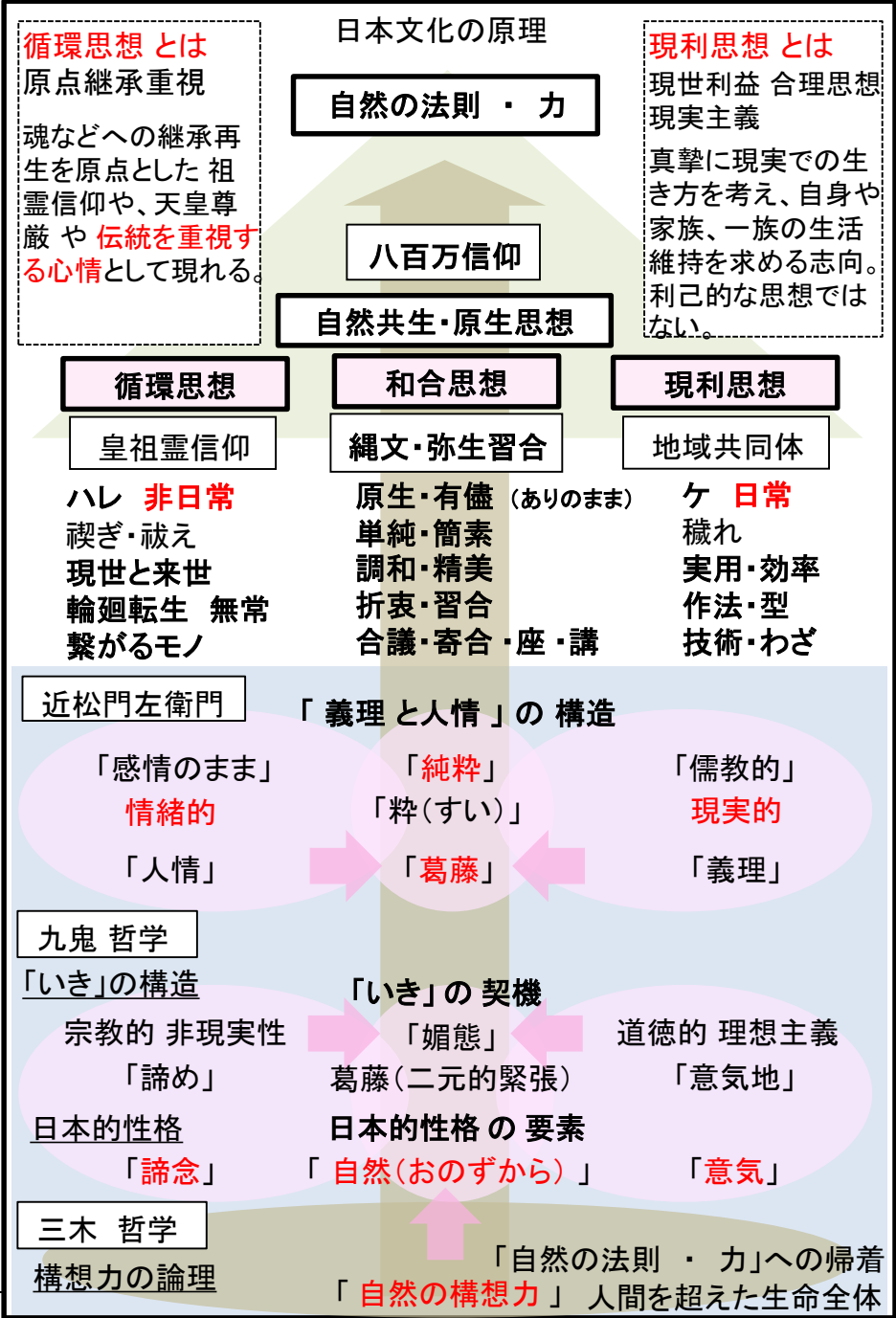
この対談の中に、実は、日本文化にとって重要な言葉や真髓が語られている。**「純粋」**や**「感情のまま」**、そして**「儒教的」**、「どうしたらいいのかわからない」と表現された**「葛藤」**である。 上記『寿の門松(ねびきのかどまつ)』とは、近松門左衛門作 上方の浄瑠璃で、1718年、大坂竹本座で初演された、本名題「山崎与次兵衛寿門松」の略称である。 いわゆる**「義理と人情」の世界**を描いた物語で、『女殺油地獄』なども、儒教的な人間関係と、親子の人情との葛藤がある。 同じく近松『曾根崎心中』は、西国三十三所観音巡礼を終えた直後のお初と、醤油屋の手代・徳兵衛の、「未来**成仏**うたがひなき 恋の手本 となりけり」と誓う **心中**が結末である。 その顛末に至る過程で、主人への義理や、友人への人情、友人の不義理があり、そして最後に、結納金横領がないことを、死んで身の潔白を証明するという徳兵衛の儒教的判断に、お初は人情的に**心中**を決断した。つまり、**「義理」と「人情」とは、その様な「葛藤」の世界なのであり、その背景に、前述の「純粋」や「感情のまま」、「儒教的」な心情がある。「人情」とは、親子・恋人の間の、義理以外の人間関係において、主に本能的で感情的な心情である。 当論「日本文化の原理」においては、「義理」が(現実)儒教的で現利的であるのに対し、「人情」は情緒的で循環的であると考える。(「循環的」とは、生命(魂)などの世代継承を表す心情、概念、思想と定義した) **「義理と人情」の二つの言葉の組み合わせは、現利的な心情と、循環的な心情との「均衡」、つまり和合しようとする「葛藤」が表現されている。その「純粋」さに観客は同情した。 そして、キーン氏は、それら全体をとらえて「日本的です」と表現された、と考える。****

その考えが許されるとして、**「純粋」「感情のまま」「儒教的」**の解釈について、「日本文化の原理」に配列、図解した。 この会話の中の**「純粋」**、上方の**「粹(すい)」**は、恋愛などにおいて、儒教的やその他要因との葛藤・折合いで突き詰めた末に結晶される文化様式(この場合の「発狂」「心中」)を生みだした。つまり、「感情のまま」と「儒教的」との**「葛藤」**が「純粋」であると考える。 ある説明では、大坂の「すい」は、**「推」**であって、推とは「推し量る」「推理する」「推量を測る」の推とされる。つまり相手の心を慮って行動することを「すい」という。従って「すい」というのは、相手に伝わらないと成立しない。相手の心を慮る行動ができない人間のことを**「無粹」**(ぶすい)という。相手の心を読み解くのが日本の商いで、無粹な人間は商売にならない。これが純粋の「粹(すい)」で、つまり「粹」とは、一旦、上方に限定されるとしても日本文化の構造全体を表現していると考える。

対して、江戸の**「いき」**とは、異性間の関係を、突き放さず突き詰めず、常に距離を接近せしめることによって生まれる、と言われる。「いき」は粹と表記されることが多いが、これは明治以降で、上方の美意識である「粹(すい)」とは区別しなければならない。 江戸の「いき」は、また「意気」であって、「意気地なし」という言葉があるように、己の生きざまの気概を示す言葉である。 自らを犠牲にしてまでも相手の心を慮って行動するのが上方大坂の**「すい」**。自己の意思を断固として表明するのが、江戸の**「いき」**なのである。 その**「いき」**から、論理を展開したい。**「粹(すい)」**と同じく、**「いき」**の構造も、また原理で説明できる。 京都大学名誉教授で、『善の研究』の著者である西田幾多郎氏。彼は、この「宇宙」の無限なる活動の根本を**「神」**とよび、実在の根本であるとする。その働きが無限であるという意味で「無」とも表現した。これが「無」の哲学の源泉である。西田氏から始まる京都学派の哲学者、お二方の考えを紹介したい。 田中久文氏の著書『日本の哲学を読む』から、以下に要約する。

九鬼周造氏 の考えを、著書『**「いき」の構造**』などから解説する。 **「いき」**の契機は、**「媚態」「意気地」「諦め」**によって成立している。それらは、わが国の道徳的理想主義と宗教的非現実性によって支えられ、前者は**「武士道」**によって、後者は**「仏教」**によって育まれてきたという。 **「媚態」**とは、異性に近ずきながら合一して「一元」化することなく、精神的には一定の距離を置いて「二元的」緊張関係を維持させること「可能的関係」を構成すること。この**「媚態」**の緊張関係を維持し、磨きをかけるのに必要なものが**「意気地」「諦め」**で、**「意気地」**は、異性にもたれかからない「心の強み」、**「諦め」**は、「流転、無常を差別相の形式と見、空無、涅槃を平等相の原理とする仏教の世界観」に基づく。 仏教の**「諦め」**は、真理を明らかにする「明(あか)らむ」という意味を持つ。そのあと父母、友人の死が連続し、妻と離婚した当時、著書『偶然性の問題』では、人間は他者との偶然的出会いを生きるとし、「無」が強調される。 因果によって説明できるものを「必然」とし、因果関係が二次以降に作用し、説明がつかない偶然を「仮説的偶然」とよんだ。二元的関係において「いき」と共通し、「無」が作用しているとする。 晩年、昭和12年(1937)『**日本的性格**』で、「いき」の契機と共通する「意気」「諦念」に加え、「自然(おのずから)」を強調し、「日本的性格の要素」とした。「自然」は、偶然に任せて自在に生きることが、大局的に目的必然にかなったもの、すなわち「予定調和」になる。 西洋では、目的必然に服従する**「自由」**であるが、道徳観の違う日本では、**「自由」**は、偶然のままに生きる**「自然」**と融合しているとした。

その**「自然」**に関連し、三木清氏の考えを、著書『**構想力の論理**』を主に解説する。 三木は、人間とは、「構想力」によって新たな「形」を創造してゆく存在であると考えた。人間は、動物と違い本能では自然環境と調和できず、乖離した存在であるが、生きてゆくために「構想力」によって環境と結び付ける働きをなし、「技術」的であるとした。 彼が評価するカントの言う「天才の特性」、つまり、「独創性」「範例的」「芸術的創造」と共に列記した**「自然として働く」の「自然」に注目した。**そして**「自然の構想力」**という概念、すなわち 人間を超えた生命全体、自然全体が「構想力」を持っている、と考えるに至る。 また、さらに超越的な世界を模索し、遺構『**親鸞**』では、親鸞の宗教は「真理」の問題であり、「真に具体的な絶対性」をもつという。念仏はあらゆる人において同一、平等で、「御同朋同行」主義がうまれた、とする。 以上引用 本論は、このことをとらえて**「日本的です」**と、考えたい。これは親鸞の「自然法爾(じねんほうに)の事」(後述)への合流を示し、**日本的哲学として「自然」に帰着する特性** と考える。



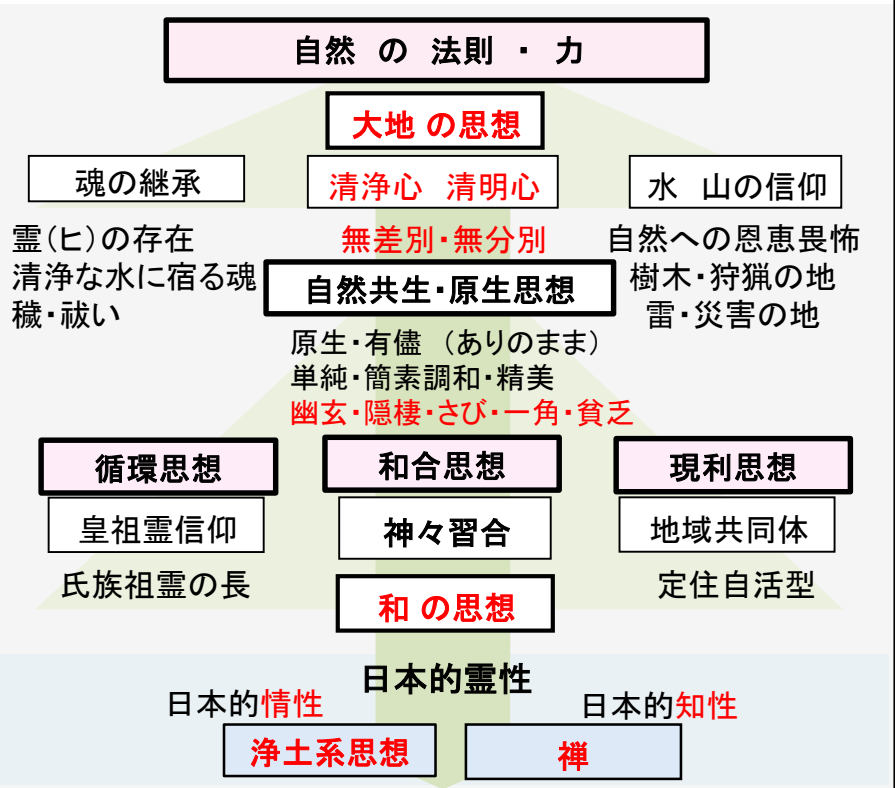
鈴木大拙氏は、69才の1939年「禪と日本文化」(原題 Zen Buddhism and Influence on Japanese Culture「禪仏教と日本文化への影響」)、74才の1944年「日本的靈性」を著し、1966年96才で没した。「禪と日本文化」 禪は、仏陀の精神を直接に見ようと欲する。その精神は、般若(超越的智慧)と大悲(般若と得て個人的な利益や苦悩に思ふ患わず作用する万物への愛)である。とする。禪で、般若は無明と業に密雲に包まれて、我々の内に睡っている般若を目ざまそうとする。禪は、知性と論理を蔑視し、事物の真髓が把握せられた後に、知識の価値を知る事ができる。禪の考え方は、精神に焦点を置き、形式を無視する。よって、どの様な形式にも存在し、不十分不完全なる事で、精神が顕著になる。形式・慣例・儀礼の否定が精神を浮き彫りにする。無執着である超越的な孤高が、清貧主義、禁慾主義の精神である。孤高は仏教では絶対と解釈され、森羅万象の中に存在する。 多くの内外権威者は、禪宗が日本人の性格形成に重要な役割を果たし、日本人の道徳的・修養的・精神的な生活の背景にある、という。 以下、個別の文化との関係で、禪を説明している。

- ・「禪と美術」 中国と比較し、我が国民の文化生活への影響が大きい。 ただし中国の宋学、絵画に影響し、特に南宋絵画は中国で廃れたが、日本の国宝となる。南宋「一角」と日本「減筆体」の極めて少ない描線・筆触は、禪の精神と一致する。表現される「わび」は、世間的な富・力・名に頼らず貧困、自然であり、禪はそれを親しみ、単純性を味わう精神である。精神を重視するため形式は無視され、不完全となり、そこに古色と原始性が伴うと「さび」となる。知性は均衡を欲するが、本来、日本人が好み文化の特性でもあるそれら「非均衡・非相称・一角・貧乏・単純・さび・わび・孤絶」は、禪の真理「多即一、一即多」の認識、つまり個々の事物を完全と見ると同時に「一」に属する「多」の性質を体現するものとする認識、と一致し、またその認識から生まれる。
- ・「禪と武士」 禪は、道徳的に首尾一貫の意思・哲学的には生と死の無差別で、武士を支援し、潔い死と関係させる。また、禪修業と戦闘精神を単純・直裁・自恃・克己的で一致。当時、既成仏教が強い京都と違い、鎌倉の地での禪導が可能であったと説明する。
- ・「禪と剣道」「刀は武士の魂だ」という言葉に、忠・自己犠牲・尊敬・恩愛および宗教的感情の涵養を見る。 大刀と小刀を帯びる鍛錬は、道徳的・精神的な目的で、禪と提携した。沢庵の「無心」や、「無我」や悟りを目指す禅僧と「技を完成させる武者修行」で例える。
- ・「禪と儒教」 禅僧は、儒教研究や、神仏儒と問わない書物印刷で貢献した。儒教朱子学を通じた武家幕府との関係や、神道への信仰哲学的な刺激効果と共存に注目する。
- ・「禪と茶道」 原始的単純性の洗練美化、人為排除自然親和。禪と密接する感情的要素の「和敬清寂」の説明で、聖徳太子によって明文された日本意識である「和」を、我が国の地理環境・温暖気候による固有の心とした。(1935年出版、和辻哲郎 著「風土」が影響か?)また、この執筆当時、1939年の社会的・経済的・民族的難題に際し、その美德を守護する「禪による救済」を説いている。「寂」では、快楽と刺激を求める当時の現代生活に対し、教養的享受や根本的再起を提言している。また実業家の早衰に触れ、武士の闘争に対する茶道に、心身爽快と普遍価値想起の効果を見出す。
- ・「禪と俳句」 改めて日本と仏教との深い関係と、他の仏教と禪の違いを「われわれ自身の存在、実在そのものの秘密を直接に洞察すること」とする。悟りの原則は事物の真理に到達するために概念に頼らぬこととし、西洋人の心理は秩序論理的で、東洋的心理は直感的とする。禪と日本の芸術概念との精神的関係として「妙」つまり日本文学における「幽玄」は、「永遠なる事物の瞥見、実在の秘密への洞徹」として悟りと通ずる。禪の心は、宇宙自然に面し、対象物や特殊存在に興味し、季節に移り変わる自然のできごとに深く関心を持つ。これらの直覚を詩的形式で表現することを俳句とする。日本語の豊かさがこれを実現する。日本人の心の強みは、最深の真理を直覺的につかみ、表象を借りて現実的に(俳句などで)表現することにある、とする。

「日本的靈性」 「禪」と「浄土系思想」が、インドや中国には無い、最も日本的靈性なるもの、とする。「靈性」の定義は、精神や心に包みきれない物(物質)を含み、倫理性を伴う「精神」を超越する「無分別智」である。 靈性に目覚めることで初めて宗教がわかる。靈性の直感力は精神より高次元で、靈性に裏付けられた精神の意思力は、不純なものを含む自我を超越し、聖徳太子「以和為貴」の真義に至る。とする。靈性は、民族がある程度の文化段階に進まぬと覚醒せず、日本でそれは鎌倉時代とする。平安時代の貴族、女性文化時代を経て、時勢頹廃が自身存在の反省を促し、蒙古襲来や南宋交流に刺激された武家文化を通じて、日本靈性たる「禪」と「浄土系思想」が民衆に萌芽した。 鎌倉時代、越後から関東の「大地性」に触れた親鸞や武家階級が、それら靈性たる思想を生み、政治的側面では日蓮を動かした。 ここでいう「浄土系思想」は、末世思想では無く、「純粹他力」と「大悲力」を指す。 浄土往生の是非ではなく、弥陀の誓願を信じ、その大悲を、親鸞が「大地」で体認した。また法然から遡り、日本の教主として聖徳太子に進み、自身の靈性が日本的なる所以を意識した。 日本的靈性の情性方面に顕現した「浄土系思想」は、個己の方向に超個の人を見る。日本的靈性の知性(概念性)方面に顕現した「禪」は超個の人の方向に個己を見る。その双方は「超個の人でまた個己の一人一人である。この一人一人が超個の人」という自覚で共通する、とする。

解釈するに、その「靈性」を理解する手掛かりが、上記の「聖徳太子」、そして「大地性」と「修験道」である。「大地性」とは、大地に関わりの無い生命は無く、親しむべき「愛の大地」とする。人間は大地において自然と人間の交錯を経験する。鎌倉時代は、雲の自然、大地の自然が、日本人をしてその本来のものに還らしめたと言ってよい、と定義を結ぶ。「修験道」について、それまで貴族たち上層部に留まっていた奈良仏教や最澄・空海の真言が、「神道」と抱合を遂げて発展し、それは日本的靈性の外郭に触れた、という。それらに共通する思想が、「万物自然そして人間、また人間同士の一体性と共生和合」である。仏教では、弥陀という名で、万物自然の般若(超越的智慧)と大悲(般若と得て個人的な利益や苦悩に思ふ患わず作用する万物への愛)を認識し、「禪」で内省的に自覚、「浄土系思想」では称名することで体認する。「修験道」では、自然の中での体認を通じて「大地」を感じる、そこで直覚させるものが日本的靈性ではないだろうか。

著者は、本来内在するも顕在していなかった靈性が、社会的弛緩への反動や外圧により覚醒したとする。その「本来のもの」とは？ また、その発祥理由は？ 他国との比較で説明が必要である。 文中の断片を繋ぐと、『靈性は日本精神の明き心、清き心が深層意識に沈潜し、無意識無分別に莫妄想に働く時、靈性が認識せられる。万葉集に歌われる神、清明心には反省無観の機会がおとずれていなかった。「清明心、丹心、正直心、物忌み、穢れ、祓う」は、素朴で原始的な日本の情性であり、伊勢神道は「神道の目覚め」であるが、形而上学的基礎をもたず、「絶対者の絶対悲」を欠くことで、靈性的領域に認めない』とする。 執筆当時の戦中神道に筆者は寄りがたい心情があり、「伊勢神道」への見解については、直覺性を重視する靈性論理とは矛盾がある。しかし、両部や山王、そして元寇を契機に仏教意識して発祥した伊勢神道など、広く神道が、明確な主体性に弱く、仏教や儒教との相対的思想であることは事実である。一方、筆者は、それらの原始的な日本の情性と靈性発生との関係は否定しない。ここに、我が国独特の地理環境・温暖気候、つまり自然や「大地の思想」を前提に、著者が定義する「靈性」を含む我が国の心情、信仰、思想の一貫性を見出す。原始的な日本の情性が無ければ靈性の覚醒もなかった。 つまり、「禪」と「浄土系思想」が、インドや中国で長期かつ国家的に信仰文化として根付かず、我が国では、ここでいう「靈性」という形で顕在した。 その源流が「原始的な日本の情性」である。



「天寿国曼荼羅刺繡帳」 [中宮寺 解説](#)より

日本最古の刺繡遺品として知られる「**天寿国**曼荼羅繡帳」は、推古天皇三十年(622)、聖徳太子の妃である**橘大郎女**が、太子薨去ののち、図像をつくって太子往生の姿を偲びたいと、宮中の采女に命じて、**太子が往生**されている**天寿国**のありさまを刺繡しめられたもの。

もとは繡帳二帳よりなり、そこには**百個の亀甲**が刺繡され、亀の甲には一個に**四字**ずつ、都合四百文字で繡帳造頭の由来が示されていました。幸いその銘文の全文が『**上宮聖徳法王帝説**』という本に書き留められており、それによると、絵を描いたのは東漢末賢(あやのぬかこのまけり)、高麗加世溢(こまのかせい)、漢奴加己利(あやのぬかこり)。これを監督したのは棕部**秦久麻**(くらべの**はたくま**)である。年を経るにつれて曼荼羅は破損し、現存するものは一部にすぎないが、紫羅の上に、白・赤・黄・青・緑・紫・樺色などのより糸をもって伏縫の刺繡が施された繡帳は、鮮麗な色彩を残しており、七世紀中葉の染色技術、服装、仏教信仰などを知るうえで貴重な遺品である。(現在、本堂にレプリカ展示、実物は奈良国立博物館に寄託)



当説見解「天寿国曼荼羅繡帳」の「**天寿国**」とは 「衣装・天皇称(上宮聖徳法王帝説)」より、製作時期を、推古朝～**天武**朝まで として

聖徳太子は、三教義疏を記した。と『日本紀(日本書紀)』は記録する。『法華経』・『勝鬘経』・『維摩経』の解釈本である。法隆寺聖徳宗の高田良信長老が集体した「**法隆寺教学の研究**」によると、その根本經典は**法華経**である。三教義疏は「**大乘一仏乗教と空観理解による平等**」、つまり万人平等の成仏を説いた、とする。ちなみに三教の内、法華義疏に登場し帰着尊重された救済者が「観音菩薩」である。

法隆寺や四天王寺の「救世観音」はその功德を解釈総合する呼称であり、伝来元の北魏の「家」を中心とした死者追善から、国家レベルの救済に進化した。

「法華経」二十八品(ほん)の内、十六品が「**如来寿量品**(ほん)」、二十五品が「観世音菩薩普門品(ぼん)」である。下記の**日蓮宗「法華宗教義」**でも、その「如来寿量品」が最重要とされ、三世益物(さんぜやくもつ)の本仏釈尊を説く。つまり、**寿量**本仏釈尊が過去・現在・未来の三世に亘り、一切衆生を**教化**して**仏道**に入らしめられることとする。

すなわち、聖徳太子の本願として描かれた「天寿国」の思想は、往生した場所ではなく、過去・現在・未来であり、それらで衆生教化することで、成される「**理想世界**」のことである、と考える。一般的に阿弥陀仏の浄土とされている極楽への「往生」ではない。

我が国の「浄土信仰起源」として、經典の伝来、講経や仏像、仏画伝来が、以下の通り記録されている。

慧隱(えおん)は遣隋使として、推古天皇16(608)年、小野妹子に従って学僧の旻(みん)、南淵請安らと共に渡り、31年間の留学。推古天皇30(622)年の太子没後、**舒明天皇**11(639)年に帰朝、「**無量寿経**」を招来した。舒明天皇 **640年 厩坂宮に阿弥陀如来を安置し、無量寿経**講経。また、孝徳天皇 652年の難波長柄豊碕宮 **内裏でも無量寿経**を講経した、と『日本書紀』は伝える。つまり、「浄土」は、太子没後に伝来した信仰思想である。くしくも太子が派遣した遣隋使が持ち帰ったが、「天寿国」は「浄土」ではない。尚、聖徳太子の『維摩経義疏』に『無量寿経』は引かれているが「出家に拘らず、世俗で人々に働きかけ弘通してゆく在家菩薩行の実践」が主旨であり、上記「太子が往生されている」の往生が、いわゆる死後の浄土を示す論拠とはならない。

あらためて近年の「天寿国繡帳」に関する研究を調査すると、『わが国における**仏教図画と經典**』の中でも、図画が表現している内容は、「法華義疏」と同じく「法華経」を弘める内容であることを指摘している。弥勒たち菩薩や執金剛神たちの画像より、法華経の「2、薬王品、25、観音品、27、厳王品、28、普賢品」との一致を、その論拠とされている。

「法華経」 妙法蓮華経如来寿量品第十六より 久遠実成 「**寿**」の意味

「如来寿量品」の「如来」とは、真如の妙理、すなわち妙法を覚った本仏のことでもあります。その本仏が衆生済度のため、この娑婆世界に現れて説法教化されたのが、迹仏釈尊である。当品は迹仏釈尊が「開迹顕本」して、**久遠已来常住不滅**の本仏なることを明かし、如来の**寿命**は無**量**にして永劫に尽きないことを説き示されたので、「如来寿量品」と申します。当品は、法華経二十八品の中で、一番肝要な本門の正宗分であります。この「**寿量品**」は法華経の**魂魄**(こんぱく)であり、一切経の生命(いのち)であり、全仏教の真髓でありますから、古来深遠で高度な哲学的・宗教的・倫理的解釈がなされています。

一切経の中では法華経、**法華経の中では「寿量品」を唯一最高**、絶対の権威ある經典と仰ぐ。「寿量品」を要約したものが、五百十字の「**自我偈**」である。

三世益物(さんぜやくもつ)の本仏釈尊

「**三世**」とは、**過去・現在・未来**を言います。「物」とは衆生のことで、「益物」とは衆生を教化して利益を与えることを言います。すなわち「三世益物」とは、**寿量**本仏釈尊が**過去・現在・未来の三世に亘り、一切衆生を教化して仏道**に入らしめられることです。この三世常住不滅の活動は、法華経「寿量品」にのみ説かれた法門であります。すなわち、寿量本仏釈尊による五百塵点劫の久遠本時より、大通智勝仏等による衆生教化を「過去益物」と言い、インドに出現して一代五十年説法教化された釈尊の活動を「現在益物」と申し、八十歳で非滅現滅を示されてより後、未来永劫に亘る常住**不滅の化導**を「未来益物」と申します。

本仏**釈尊**の三世益物は「常在靈鷲山」とあるごとく、常にこの娑婆世界に住して説法教化されるということで、「**寿量品**」の中心思想は**三世常住の益物**であり、縦に三世を貫き、横に十方世界に普遍して、**全宇宙法界の衆生**をお救い下さる有難い仏さまです。大日如来とか阿弥陀如来は娑婆の衆生とは無縁で、三世益物の徳は無く、ひとり「寿量品」の教主釈尊にのみ具わった仏徳である。しかし、縁無き衆生は度し難しですから、釈尊の因行果徳の具足した本門寿量のお題目、すなわち「本果実証のお題目」を、身・口・意に修行することが肝要である。とする。「法華宗教義」より

「**天寿国**」とは、聖徳太子の理想世界である、と仮説する。では、その理想世界とは、何か？

佐伯 定胤(さえき じょういん)氏は、1950年(昭和25年)法相宗を離脱し、法隆寺を本山に新たに初代佐伯良謙として聖徳宗を開いた。宗派信条は、太子の教理を解釈した七条からなる。聖徳宗の高田良信長老の著書「法隆寺教学の研究」によると、その七条の根本は「**大乘一仏乗教**」である、とする。

「**一仏乗教**」とは、『法華経』・『勝鬘経』に由来し、一人として成仏せざるものはなく、あらゆる万善万行、すなわち日常の人間生活そのままだが**多種多様**であるにもかかわらず唯一の常住真実の仏果に究極する、という意味である。この大理想を達観し、十七条憲法が制定された。また、『維摩経』を通じて、凡夫及び二乗の偏執を打破し、空観を理解し、偏執差別を打破して、四生の終帰、万国の極宗とした。つまり「**万人平等の成仏**」を説いた、とする。「大乘一仏乗教」を、特に力説しているものが、「法華経」の太子註釈「法華義疏」である。

太子の考えを考察する。 聖徳太子の「理想世界」を探る手掛かりは、「法華経」と、「冠位十二階」、そして「十七条憲法」、そして「敬神の詔」や神社創建である。 それらを総合しなければならない。**法華経**の中で「寿量品」が唯一最高で、その「寿量品」の中心思想は三世常住の益物であり、縦に過去・現在・未来なる三世を貫き、横に十方世界に普遍して、**全宇宙法界の衆生**の救済を説く。しかしなぜ、**憲法**で、その法華経の主体たる「仏」は二条に登場するのか？ その意味は重要である。なぜなら、その仏教の前に「自然なる調和」の「和」、つまり我が国古来からの「自然調和なる神への信仰」があるからと考える。つまり、この「**寿量**」とは、自然の恩恵、つまり古事記でも記される、水、海、山など原初なる自然神の力の下にある。「天寿国繡帳」で太子の言葉として記された「**世間虚仮 唯仏是真**」の教えとは、「自然の見えない力こそが真実で、この人の世は(その力の表現による)仮の姿である」である、と考える。

「**神道**」という言葉の初見は、『日本書紀』585年頃、聖徳太子の父である**用明天皇**の信仰を解説する記述、「天皇、仏法を信(う)けたまひ、**神道**を尊びたまふ」である。しかし、その神道には明文化されたものはない。ただただ多様な自然神、皇祖神を祀る信仰である。しかし、当時、仏教によって逆に我が国古来の信仰が浮きぼりに意識されてきた。その結果、「神道」と呼ばれ始めた。その「**神の概念**」を 聖徳太子は外来の經典に求め、治世に生かしたのではないか。治世には明文が必要である。

鈴木大拙氏は『日本的靈性』の中で、禪は、仏陀の精神を直接に見ようと欲する。その精神は、**般若**(超越的智慧)と**大悲**(般若と得て個人的な利益や苦悩に思ふ患わず作用する万物への愛)である、とする。「禪と茶道」では、原始的単純性の洗練美化、人為排除**自然親和**とした。 禪と密接する感情的要素の「**和敬清寂**」の説明で、聖徳太子によって明文された日本意識である「**和**」を、我が国の地理環境・温暖気候による**固有の心**とした。 また、「浄土系思想」とは、末世思想では無く、「純粹他力」と「大悲力」を指す、とした。つまり、「**禪**」は、**自身の内**に 自然なる「摂理」「和敬清寂」を感じること。「浄土系思想」とは、**自身の外**に 自然なる「純粹他力」「大悲」を願うこと。と 解釈すれば判りやすい。

聖徳太子は、自然調和な神信仰たる「和」の思想を前提に、「仏」への崇敬、「法」「僧」で具体化した。その教学は「法華経」を主とする「三教」である。なぜなら、その教えは時間と空間を超越し、**万人に平等な慈悲力**を説いているからである。まさに「**自然の力**」である。他に何かあるだろうか？ 太子の「法華義疏」では「**一大乗**」という言葉で、普遍的な平等統一を表現している。太子は明文化されていない自然調和な神信仰を、三法崇敬で方便した、と考える。そして**冠位**に明らかな様に、本来は「仁義礼智信」の儒教から、自然なる条件として治世者の「徳」を前提に「**仁礼信義智**」と序列した。そのことは、憲法四条の、治世者に求める「礼」にも表れている。

【 聖徳太子「神信仰」の論拠 】

推古15年(607)、聖徳太子は推古天皇の下、**神道**の神を厚く祀ることとして、「**敬神の詔**」を出した。 四天王寺境内には鳥居があり、伊勢遥拝所・熊野権現遥拝所、そして守屋祠がある。日本書紀巻第廿二 豊御食炊屋姫天皇 推古天皇 『十五年春二月庚辰朔、定壬生部。戊子、**詔**曰「朕聞之、曩者、我皇祖天皇等宰世也、跼天踏地、**敦禮神祇**、周祠山川、幽通乾坤。是以、陰陽開和、造化共調。**今當朕世、祭祠神祇**、豈有怠乎。故、群臣共爲竭心(ともにためにこころをつくして)、宜拜神祇。 甲午、皇太子及大臣、率百寮以祭拜**神祇**。』

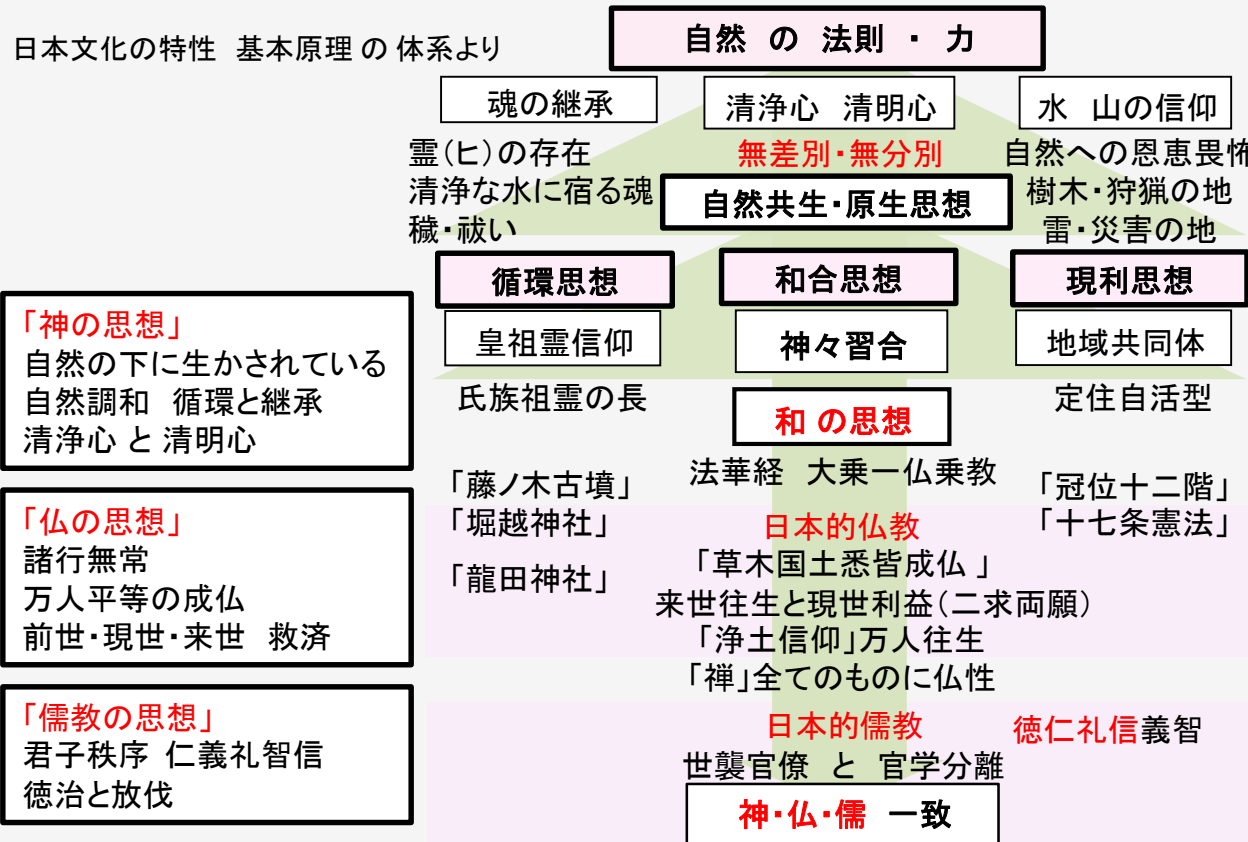
・聖徳太子が創建したとされる**四天王寺七宮** 小儀神社(四天王寺東門前) 土塔神社(同南門前) 河堀稻生神社(天王寺区大道) 久保神社(同勝山) 大江神社(同夕陽丘町)

堀越神社(同茶臼山町)祭神 **崇峻天皇** 上之宮神社(同上之宮町) 今宮戎神社(浪速区恵美須西)。法隆寺の鎮守社として、現在の龍田大社より、**天御柱命・國御柱命**の二神を龍田神社に勧請した。聖徳宗の高田良信長老は、藤ノ木古墳被葬者の一人を**崇峻天皇と、合理的な推定をされている**。

日本的に編集された「神仏儒習合の共生」こそ、「天寿国」たる「理想世界」である。それは、「万人平等思想」を伴い、聖徳太子を原点とし、江戸時代にその完成をみる長い歴史をたどる。我々日本人は、神に自然なる「和」と「清」を、仏に「無」と「悲」を知り、儒に「徳」と「伐」を得た。

「聖徳宗信条」

- 一 聖徳法王ヲ開祖ト仰ギ御製ノ三経疏ヲ以テ立宗所依ノ根本聖典トス
- 二 **大乘一乗教**ヲ以テ教義ノ神髓トナス
故ニ所行ノ功德ハ**普ク一切衆生ニ廻向**シ我等ト共ニ仏道ヲ成ゼンコトヲ念願スベシ
- 三 **法華経**ノ万善同帰仏寿無極ノ玄旨ヲ以テ信仰向上ノ宏猷トナス
故ニ所修ノ善事ハ悉ク己人慾ヲ超越シ挙げテ仏果証得ヲ要期シ**永遠ノ生命**ナルニ安住スベシ
- 四 **勝鬘経**ノ十大受ヲ以テ菩薩道修行ノ典儀トナス
故ニ正法ヲ摂受シ無相ノ大乘心ヲ忘レザルヲ要ス
- 五 **維摩経**ノ弾呵折伏ノ活手段ヲ用ヒ**三乗差別ノ偏執ヲ打破**スルヲ以テ善巧ノ方便トナス
故ニ無我ノ空理ヲ自覚シ和光同塵ヲ示シ而モ感累ニ梁セラレズ無垢ノ浄名ヲ揚ゲンコトヲ希フベシ
- 六 **和**ヲ以テ貴シトシ件ヲ無キヲ宗トスルヲ宗トスルヲ道德実践ノ要諦トナス
故ニ**上下和睦**シ鬭争ヲ避ケテ人生ヲ円満ニ樂マンコトヲ望ムベシ
- 七 篤ク**三宝**ヲ敬ヒ直キヲ挙げテ枉レルヲ 措キ無我ノ大道ニ撒スルヲ以テ**道德修養**ノ靈枢トナス
故ニ三宝ヲ恭敬シ崇高ナル信仰ニ立脚シ以テ正直心ノ人格ヲ修ムベシ



「和合思想」が初めて明文化されたのは「**十七条憲法**」である。日本書紀、先代旧事本紀の推古天皇12(604)年に記される。以下、日本書紀原文より引用する。

「**皇太子**親筆作**憲法十七條**。一曰。以**和**爲貴、無忤爲宗。人皆有黨亦少達者、是以、或不順君父乍違于隣里。然、上**和**下睦諧於**論事則事理自通**、何事不成」また最後の十七条でも、独断を禁じ、議論することで、道理に至ると、再度説いている。「十七曰。夫事**不可独断**。**必與衆宜論**。少事是輕。不可必衆。唯速論大事。若疑有失。故與衆相辨。辞則**得理**。」

和合についての論拠を記紀、神社、考古より、母系による氏族習合、出雲と神武に代表される新旧勢力、神々の共存とした。その過程で争乱はあったが、両者が存続したことは和合と判断してよく、その証拠に東西の遠隔地域以外は、律令から国家として共同、統一してゆき、今日の日本がある。のちに皇統や武家による内紛はあったが、国家として分裂した歴史はない。また、和合の原点を長期な縄文、漁撈・狩猟の生活、水耕稲作をもたらした人々との共栄とし、発生の由縁を我が国特有の自然環境とした。その説、飛鳥時代までに和合の源流があることを「**十七条憲法**」は証明する。**聖徳太子**による、それまでに習俗熟成されてきた「**和合思想**」の**明文化**である。突然、発祥された思い、思想ではない。二条以下の憲法には仏教や儒教が影響するが、一条は認められない。理由を下図に示したが、元来、目的が違う。仏教は人自身、仏と人。儒教で身分秩序を維持する「礼」に依らず この条は「人と人」を説く。明文された思想が我が国に適正したことは、その後の神仏習合、武家・民衆の合議・寄合などの制、心学・報徳の思想発生が追証する。なにごとく唐突に始まらず、因果縁起がある。文言だけでなく、前後の史実因果から、和を以て説は検討されるべきである。

我が国は、ギネスでも認定された**世界最古の国家**であり、君主制として規定されている。**世界最古の企業**は、大阪四天王寺の「金剛組」、その次が京都の「財団法人**池坊華道会**」である。不思議だが、ともに聖徳太子とご縁がある。金剛組は四天王寺建立のため百済から渡来した宮大工が発祥。池坊は、伝承によると太子が四天王寺建立の用材を探した六角堂の地、その池のほとりに小野妹子を始祖とする僧侶が住み、宝前供花が起源。和合がものごとの創造につながり、自らを存続させる。「和合思想」がもたらした**長命の証**である。不思議ではなく必然かもしれない。



池坊『花伝書』

日本文化の特性 基本原理の体系より

参考 空海「**三教指帰**」

儒教・道教は、仏教が考える「五蘊が仮に和合してできた国土、仮の世界」での教えにすぎない。仏教が説く真理の一部分である。ここでは、それを前提に現世での思想とする。

道教

道(タオ) 漢民族土着伝統思想
多様均衡世界 神仙長命仙人

「道」を世界万物の根源で無・混沌水のごとく万物に恩恵柔軟である。そのから誕生した天地は悠久で、無為自然で、節度の重要を説く。

仏教

輪廻 概念 悟り 成仏

道教は、人為を捨てて自然に生きることを説くのであって、自然との神秘的な合一のことを「和」と表現していることもあるけれど、人と人の間の「和」を説くものではない。

仏教は、現世を空とし、それを知らない無明を克服して悟りを得ることを本願とする。「和」が一番大切であるという教えはない。慈悲の教えもあるけれど、それもまた「和」とは違う

・心学 庶民教化 神道・儒教・仏教の三教合一説。正直の徳。天地の心を獲得し、私心無く無心による仁義を説く。

・報徳思想 神道・仏教・儒教などと、農業実践から考案。豊かに生きるための知恵。教えの大極に向かう道心を説く。

太陽・月・水
季節

自然の法則・力

マナイズム 見えないチカラ
精霊 植物・動物 花鳥風月

生命源泉
自然恩恵
天候・天災

自然共生・原生思想

和合思想

縄文・弥生習合

八百万信仰

神々習合

母系による出雲・神武習合

平等思想

和の思想

徳 仁礼信義智(冠位・憲法)

神仏習合

合議・寄合

茶道(禪)

心学 石田梅岩
報徳思想 二宮尊徳

和合と創造

現利思想

呪術祭祀
巫女 呪術

自然の神
精霊
祖霊
首長霊

政治思想

根本思想

皇統・氏族
血統信奉

儒教

君子秩序 仁義礼智信

皇統
律令・摂関

皇統
武家・式目

戦神

守護神

儒教は「仁、義、礼、智、信」をその徳目としているが、「和」という徳目はない。論語の学而第一12「有子曰。禮之用。和爲貴。」は、礼の説明である。この文章を参考にしたとしても、「以**和**爲貴」と、「和」を主題にしたことに注目すべきである。第一条に「礼」の文字は無い。

「和合思想」は、「日本文化の原理」の中心にあり、「**心御柱**」である。「自然の法則・力」を背景に、「循環思想」と「現利思想」の調整・均衡を保ち、新たな「創造」を生み出す力となっている。



原理を仮説し、信仰・文化の歴史を辿ってくる。

その過程で「循環的なもの」と「現利的なもの」との間で「均衡作用」があることに気付いたその検証にも努めた。

仏教では、阿弥陀如来に対する薬師如来や観音菩薩。また、天台智顗の「三諦円融」空仮中の均衡は、それを受け入れることで浄土信仰や禅・日蓮誕生の土壌となった。闘争する武家に対して、静寂なる茶道や禅。茶道は、武家など日常に対する非日常を均衡させる作用。絵画では花鳥画に対する水墨画で均衡した。その**均衡**をもたらした源が自然の法則・力を潜在する日本文化であり、和合的な現象として現れたと考える。神仏習合はその代表であり、戦う神と鎮魂の仏である。

古事記、古代から中世まで日本文化の原理を仮説・検証してきたが、改めて逆に「均衡」を意識して古事記をふりかえると、「天之御中主神」と「月読命」がその作用で共通していることに気がつく。両者は同時に誕生した活動的な他の二者の間で、無作為な力・作用である「均衡」を象徴しているのではないか。「**天之御中主神**」と「**月読命**」、そして、火照命（海幸彦）を兄に火遠理命（山幸彦）を弟に持つ「**火須勢理命**（ほすせりのみこと）」も同様で、いずれも天津神・国津神ではなく、ただ存在を記される。

冒頭に提起した「**天之御中主神**」の意味、それは、自然の法則・力と考えた。なぜなら、そのあとに誕生した「**高御産巢日神**」は別名「高木神」、神の依ります神籬（神体木）、**天地を繋ぐもの**出雲大社、伊勢神宮の**心御柱**に表現される。そして、「**神産巢日神**」は、須佐之男命が殺した大氣都比賣から穀物の種を生み、また大国主を蘇らせる**循環再生**を表す。この神代再生は、**世代・時間の継承**を表現している。つまり、その頂天に語られる「天之御中主神」は、「**場所**」と「**時間**」の**概念**で、それぞれ「高御産巢日神」と「神産巢日神」とに繋がる、「自然の源、原理」であり、「法則・力」と考えた。その解釈は誤りではなかったが、その「自然の法則・力」がもたらした具体的な力、すなわち「均衡作用」とも言える。

とすれば、古事記の「**月読命**」の意味は何か？ その神も同じ作用をもたらし、国譲りを演出したと考える。**天照大御神に象徴される**「太陽」と**建速須佐之男命**の「大地」、昼間の太陽は大地を熱っする。しかし、特に晴れた夜には、放射冷却で大地は逆によく冷える。太陽と大地の熱循環（交流）作用が高まっている状態だ。その晴れた夜には「月」がよく見える。太陽と大地の好循環は**月の作用**と考えたに違いない。自然に敏感で稲作など農耕が主な生活では、ごく自然な発想、信仰と考える。

「国譲り」の主体は大国主とその代理者や天照大御神に派遣された者たちだが、その前に月読命を登場させた意味は、「国譲り」の予言、伏線であろう。二者択一ではなく二者均衡の支点と考える。その存在は、いわゆる二極の「**間**」と表現したら理解しやすいかもしれない。

自然の法則・力から誕生した**和合の神格**が、「天之御中主神」であり、「月読命」である。では、その神話の基本思想は誰のものか？ 記紀編纂を勅命した人、武力で皇位についた天武天皇は語りづらい。最終的な編集者、藤原不比等にとっては、祖神の活躍が最重要であった。

その思想の草案者は、やはり「和」の思想家、**聖徳太子**と考える。古事記の神話部分などは「国記」を反映しただろう、そして十七条憲法とは、均衡させる作用、和合思想で結びつく。京都の**月読神社**は、顕宗3年(487)、阿閉臣事代(あへのおみことしろ)が朝鮮任那渡航の際、壱岐から分霊した元来は海神である。現在は**秦氏**松尾大社の摂社で、その境内に聖徳太子を祀る社がある。月読神社によると、**太子は月読神を崇敬**したとされ、ここに祀られていることがその証である。また、その仮定だと、聖徳太子以前に鏡威信が天照大御神の様な固有名詞で信仰化されていたことになる。

日本書紀は、推古28(620)年 推古天皇、聖徳太子による歴史書、「天皇記」「国記」「臣・連・伴造・国造百八十部等の本記」が編纂されたと記す。それら書物は、皇極5年(645)乙巳の変の際に、蘇我蝦夷の家とともに燃やされ、**船恵尺**(ふなのえさか)により「**国記**」のみ取り出されて残ったと記録する。**船恵尺**の子供が**道昭**で、入唐し玄奘と同じ房に住して学問し、招来した法相宗は奈良時代に栄えた。「国記」編纂の約100年後、712年「古事記」が、720年には「日本書紀」が撰上された。

ユング心理学の権威で元文化庁長官の**河合隼雄先生**『中空構造日本の深層』では、この無為な中央にのみ注目している。しかし日本文化の理解にとっての重要は、**両極の思想軸の発見、認識**である。

日本文化の原理



自然の法則・力 自然神（山・海・水）

熊野詣 古代・山への「旅」 原点回帰 と 反体制 非日常 死・再生への旅路

古代、「山」は神が降臨する場所、禁足地であった。雨をもたらす雲を生み、雨は川となり水をもたらす。また「山」は風を、雲は雷を生む。人智を超えた力が信仰を産霊び、結ばれる。大和の三輪山、日吉の八王子山、紀州の熊野、京都では松尾の大杉谷、賀茂の神山など、縄文から弥生時代の「**神山信仰**」が、神々の誕生起源である。その禁足地である「山」に分け入らせたのは神仙思想をもつ道教、その影響が伺える「**役小角**」は、神山信仰と山岳修験の狭間で、神と仏、道教と密教を繋ぐ存在である。修験道では、天台本山派の高祖、真言当山派の元祖**聖宝**への秘法伝授者として、金峯山修験本宗では修験道始祖と金峯山開創者として、修験道諸派から尊厳される。

「役小角」原初伝来を、「日本書紀」に続く六国史第二、菅野真道らの延暦16年(797年)「**続日本紀**」、そして薬師寺僧、景戒著の弘仁13年(822年)頃の「**日本霊異記**」、それら平安初期文献から以下要約する。「役の優婆塞」(役小角)は**加茂役公**、(舒明天皇の時代に)**大和葛城**に出自し、神仙憧憬を持つ。呪法を用いて前鬼・後鬼を駆使し、金峯と葛木峯を通行。弟子の韓国連広足から妖惑の罪で、もしくは葛木の**一言主大神**から天皇への謀反讒言を受け、**文武天皇**3(699)年、伊豆に遠流される。「日本霊異記」後日譚、釈免のあと新羅に至り一言主大神を呪縛し未だ解脱せずと記す。

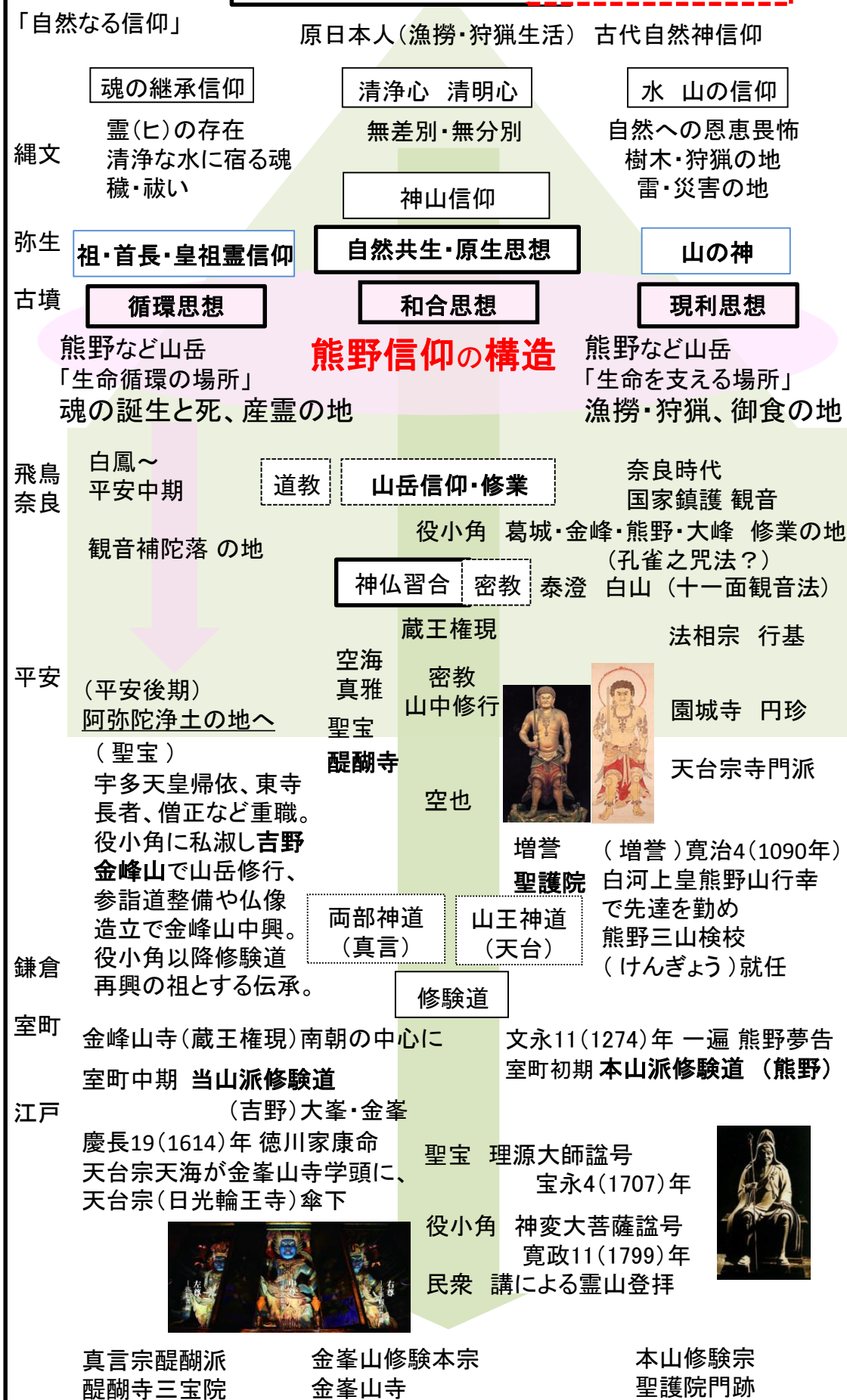
賀茂の地や一言主大神は、古事記の神武東征以前の「出雲から大和」にかけた**地祇国津神**の系統である。大宝元(701)年施行された大宝律令、その令の註釈書である令集解の**国記**(868年頃成立)では、天神天津神の伊勢と山城鴨に対し、大神と**葛木鴨**を地祇国津神と認識されたが、山城鴨と葛木鴨は「高鴨神社」と「御歳神社」「鴨都波神社」から「下鴨神社」など全国鴨社は、天照大御神、神武天皇以前の歴史で結ばれており、「葛城一言主神社」も同地域である。葛木南方、五条から吉野は東阿田など、稲作に適さず縄文文化が永らく続く古代風土地であった。

以上の記述や歴史背景から、大倭朝廷から見た「役小角」は**古代性を持つ反体制の象徴**とされたと考える。18才の文武天皇(実体は生母、のちの元明天皇)の701年「大宝律令」、710年「平城京遷都」と、壬申の混乱期を経て、皇祖神話・国家体制整備を時代背景に、約100年後の平安初期に彼の伝承が記された。当時、都市中では寺院建立が規制されていたが、南山城・愛宕・西山・山科など周辺山岳寺院では、すでに役小角は多く伝承されていた。

大宝令に定められた「**僧尼令**」は「僧尼の破戒行為的な犯罪に対する処罰、国家が任命した僧綱による寺院及び僧尼への自治的な統制、**私度や民衆教化の禁止**及び**山林修行**や乞食行為に対する制限」をした。また、一言主大神は、712年『古事記』、雄略天皇460年に葛城山鹿狩りににおいて天皇が敬服。720年『日本書紀』では共に狩りをする対等的立場に。797年『続日本紀』には、天皇と狩りの獲物を争い土佐国に流された。と変化された神である。その神を翻弄する役小角は、「まつろわぬ」集団内部の紛争、神祇祭祀に対する異教讒言の表現かもしれない。

「山中修行」は、**古代性を持つ反体制的性格**を底流し、都市的政治仏教から遠離れた山岳で拡大していった。「役小角」と同時代、秦氏系統である「**秦澄**」は、越前白山から山城に至っている。そのあと法相宗からは「**行基**」。自然界と仏教・修行との関係は、奈良時代、宇宙的真理の華厳宗「毘盧遮那仏」をめぐり接近。平安京天台は叡山、宇宙(法界)の真理(法)「大日如来」が最高仏の真言密教は高野山を拠点に、天台から「空也」も愛宕で山中修行した。

平安京周辺山岳で、都創始前は法相僧侶の「**観音菩薩**」、都創始後は天台・真言で「薬師如来」が主に祀られた。一方、600年代後半、役小角開山伝承の「金峯山寺」「大峯山寺」は「**蔵王権現**」を本尊とした。釈迦如来(過去世)、千手観音(現在世)、弥勒菩薩(未来世)を本地とする権化である。密教彫像などの影響を受けて、仏とも神ともつかない**日本独自の尊像**が祀られた。修験道伝承では、蔵王権現は役行者が金峯山での修行の際に感得したとされる。また**聖護院**など密教系修験道では、密教「三輪身」で大日如来の自性輪身に対して、教令輪身である「**不動明王**」を本堂や護摩堂本尊とした。現世利益祈祷の修法「**護摩**」は、バラモン教で供養祭祀「ホーマ」の音訳である。



自然の法則・力

太陽・月・水 季節
マナイズム 精霊
見えないチカラ 植物・動物 花鳥風月
生命源泉 自然恩恵 天候・天災

自然神（山・海・水）

「自然なる信仰」

神山信仰

大地の思想

魂の継承信仰
霊(ヒ)の存在
清浄な水に宿る魂
穢・祓い

清浄心 清明心
無差別・無分別

水 山の信仰
自然への恩恵畏怖
樹木・狩猟の地
雷・災害の地

自然共生・原生思想

原生・有儘（ありのまま）
単純・簡素調和・精美

「信仰」から「思想」へ

根本思想

循環思想
皇祖霊信仰
氏族祖霊の長

和合思想
神々習合

現実思想

現利思想
地域共同体
定住自活型

和の思想

「聖徳太子」
神仏儒一致の源流

神仏習合

循環とその継承
自然たる**持続**

山岳信仰・修業

密教
山中修行

「思想」から
「霊性」顕在へ

天台智顗「三諦円融」との適合
安然・良源「草木国土悉皆成仏」

日本的**情性** 日本的**霊性** 日本的**知性**

自然なる万人浄土 **浄土系思想** **禪** 内なる自然

「純粹他力」と「大悲力」 「般若と大悲」内なる般若の自覚

修験道

霊性 「大地」
自然の力を感じる

現実性 「山中」
自然の中で実践



「 自然なる 日本 日本人とは 」

三教 三聖 義疏 < 原理活用 >

Foundation of Kyoto culture
Principle & Origin of Japanese culture

日本文化の原理 現代への活用 釈迦と孔子が考えたこと

釈迦と孔子出現について、歴史的風土的背景から確認したい。 同じ様な時代であるのに、なぜ、彼らは異なる事を考え、違う教えを生み出したのであろう。
釈迦は、自然崇敬な環境の中で、支配的な身分社会に疑問し、「ありのままの人間」を考えた。 **孔子**は、人間社会の争乱の中で、乱れた秩序に疑問し、「然るべき人間関係」を考えた。 同じ時代、違う環境で、その時に、考えるべきことを、自然に考えた。 **自然なる人間と、自然たる人間関係**を考えたのである。以下解説。

釈迦が生まれた今のインド亜大陸は、多様な気候を持つ。 現在、森林面施は国土の約20%だが古代は広域にあり、北部を主に河川流域が広い。西部の砂漠、南部の高原 広い沿岸部では、海洋から直接、気圧変化の影響を受ける。また、日本と比較し赤道に近いことや、北部ヒマラヤ山脈の影響で、モンスーンなどで激しい気候変化となる。 首都ニューデリー付近では、10月から3月が乾季で平均気温約20度、4月から9月は平均気温約30度で、前半が乾季、後半が雨季。一方、北部東西地域を中心に河川流域は肥沃で、紀元前3000年頃～1900年頃を主説とし、インダス文明繁栄の理由となった。

ムンダ人やドラヴィダ人を中心としたその文明地域に、同1300年頃、西方から白人系遊牧民のアーリア人が侵入し定住、支配した。 その支配原理が、身分制度「**ヴァルナ**(カースト)」であり、現在まで続いている。 アーリア人が創出した**バラモン教**、その聖典が、『リグ・ヴェーダ』(ऋग्वेद Rigveda)など、古代インドで「知識」を意味する「ヴェーダ」である。**バラモン**とは、サンスクリット語の「**ブラフマンに属する**」意味であるブラーフマナを音訳した漢語「婆羅門」、それを日本で音読みした言葉である。 司祭階級を意味するバラモンを頂点に、クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラが、宗教的身分階層である。 その「**ブラフマン**」(ब्रह्म brahman)は、バラモン教や、紀元前800年頃から形成される**ウパニシャッド哲学**において「**宇宙の根本原理**」とされる。 バラモン教が変質し400年頃から興隆するヒンドゥー教では「**宇宙の創造を司る神**」とされる。 ヒンドゥー教は、バラモン教の身分制度を継承し土着の神々信仰を取り込んで誕生、現インドの主たる宗教となっている。つまり、「**ブラフマン**」の理解が、インドの信仰理解に直結する。 前述の『リグ・ヴェーダ』には、「太陽神」のウシャスたち、「太陽の光照作用の神格」のヴィシュヌ、「モンスーン」の神格であるルドラ、「天地両神」のディアウスとプリティヴィー(仏教でディアウスは虚空蔵、とプリティヴィーは地蔵)、「激しいかみなり」である雷霆(らいいてい)のインドラ、そして、「ブラフマンの主」を意味するブラフマナス・パティ(祈祷者)の歌が掲載されている。 その歌は、「真理を具現化する讃歌・祈祷」の意味を含む、とされる。ブラフマンと同一であるとされる**アートマン**は、サンスクリット語Atma を語源とし、個の中心にあり認識をするものである(**梵我一如**)。ガンジーの**マハトマ**は、「**マハー**(महर्)

 (偉大)と「魂」の意味のマートマンの、**マハートマー**「偉大なる魂」の意味。 **マハラジャとマハラニ**は、偉大な王と王妃。『ヴェーダ』を聖典とするバラモン教は、冒頭の通り、豊かではあるが比較的激しい自然環境から誕生した、天・地・太陽・風・火などの**自然神**への崇拝を原点とする。 しかし先住民族への支配を確立するため、自然への多神信仰から、**一神信仰**としてブラフマンを選択し、その神を司祭する階級を最上位としたのである。 釈迦は今のネパール南部に誕生し、遊行したヒンドスタン平野は、インド北東のインダス・ガンジス・ブラフマプトラ川の3水系が生んだ広大な沖積地域である。インド大陸の北方にあった十六大国時代の一つ「**コーサラ国**」。その国の部族、身分制ではクシャトリアのシャークャ族の首都、カピラヴァストウの出身である。「シャークャ」はサンスクリット語で「有能」の意味。「シャークャ族の聖者」が同「シャークャムニ」で、漢訳した**釈迦牟尼**(しゃかむに)が省略され、「**釈迦**」と呼ばれた。

釈迦たちが暮らした地域でクシャトリア階級を中心に、バラモン教が生み出した身分制を否定する集団が誕生した。 その自由な発想をする人たち、「努力する人(沙門)」の集団から、修業と厳格な生活をする「**ジャイナ教**」、そして、当初は修業を試みるが、やがて坐禅で**瞑想**した釈迦から仏教が誕生することになる。王子として成長した釈迦は、物質的幸福の限界を感じ、万人共通の苦しみ、老・病・死や、欲望の克服に注目し、出家した。 真実は誰にも分からないが、仏教の起源や教えを説く仏伝は、その様に伝える。それが釈迦であり、仏教が伝えたい教えである。つまり、元来は、激しさもあるが恵まれた自然環境、そこで誕生した**自然崇拝**な多神教の世界において、侵入者が支配原理として**一神を頂点とした身分制社会**を創造した。その社会を**疑問視**した人々の一人、**釈迦**は、自然たるありのままの人間を見つめるため、世俗から離れ、瞑想したのである。 その背景には、やはり、土地柄、自然に恵まれた環境があったと考える。 自由な発想や、出家者たちを支える人たちの生活環境が必要だからだ。 **自然の恩恵の中で、誕生した教えが釈迦仏教**である。 その悟りは、本論「ブッダから学ぶこと」で触れる。

孔子についても、「孔子から学ぶこと」で、その考えに触れる。 紀元前552年頃の春秋時代、実力主義が横行し身分制秩序が崩壊されつつあった周末、魯国の**昌平郷**で生まれた。 遊学し政治参加、齊・衛・陳・匡・曹・宋と諸国遍歴、**魯**に戻り、六経(易・書・詩・礼・楽・春秋)を編纂。 周の開祖である文王や、周創始者の武王の異母弟である**公旦への復古**を理想として、仁道政治による秩序構築を迫及した。 中国の風土は、大きく南北でまったく違う。南方向に増える年間降水量、その1000mmのラインが「秦嶺・淮河線」である。南方の長江文明起源が紀元前1万年前であるが、北方の黄河文明は紀元前7000年以降とされる。古代から、長江(揚子江)流域が稲作、黄河流域が小麦、さらに低温乾燥となる北方は草原地域で、羊・山羊の酪農、馬などの遊牧を主とする。そのため「北麦南稻、南船北馬」と言われる。 隋、唐、宋(北宋・南宋)、元、清は、遊牧民の王朝そのものか、その援助によって成立したとされる。 長江の北方に淮水(わいが)あり、その間にも多くの小河川がある。 支配的にはその地域で南北に分断されやすい。元来の気候風土を背景とした生活の違いから、三国時代の曹操など、北の騎馬軍団が南の水軍に敗れている。 隋時代、楊堅(文帝)は、この問題を解決するために587年に淮水と長江を結ぶ**邗溝**(かんこう)を開鑿し、589年に陳を滅ぼして、南北を統一した。隋の二代皇帝煬帝が即位し、黄河から杭州へとつながる「京杭大運河(けいこうだいうんが)」が、610年に完成。 南方の農作物の北方輸送が簡便大量化し、唐以降の王朝にも多大な恩恵をもたらした。 黄河との交差点に位置する「開封」は北宋の首都として繁栄し、商業隆盛。 その様子は『**清明上河図**』(張昞端画)に描かれた。
孔子が生まれ、遍歴した場所は、その北方地域にあたる「魯」の周辺である。 インドの釈迦はもちろん、中国南部と比較しても、**自然の恩恵は低かった**と考える。つまり、インドにおける自然崇拝の様相は、この孔子周辺では低い。 いわゆる中国思想の「天」も、全ての人には天(天帝)から、一生をかけて行うべき命令(天命)とされ、自然への恩恵や畏怖を心情とする信仰思想ではない。 儒教ではないが、同じ中国、道教成立に影響する「陰陽」「五行説」も、崇拝より理論であり、山東半島を中心に発祥・拡大した「神仙思想」も、また、不老不死を望む人間側の話である。 孔子は、その様な中国北部の環境の中で、自然界への思いではなく、人間自身、親子関係、政治上の人間対人間といった**社会的関係に、自然な有り様を追及**したのである。

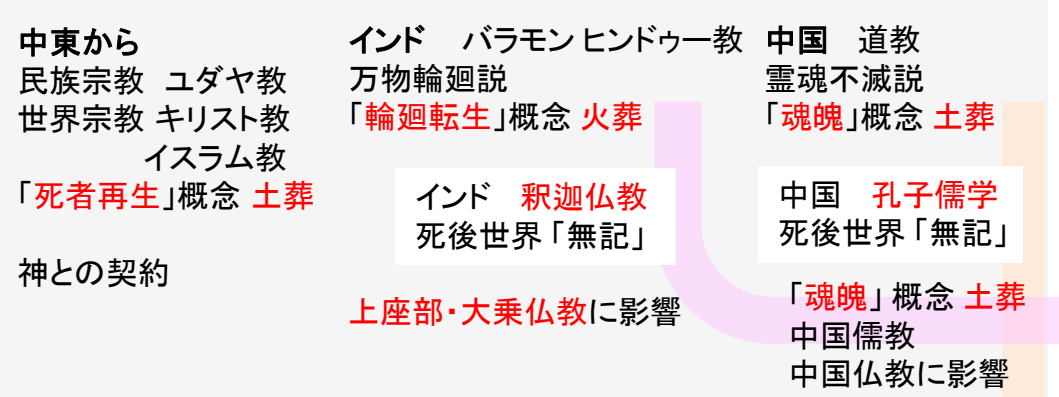


我が国の死生観にも、神仏儒が習合し、迷いながら、土葬から火葬への長い歴史を辿ってきた。宗教は、地獄を語る。世界の宗教は、一神教、多神教問わず、ほとんどは信仰の裏腹に地獄を伴う。ブッダも孔子も死後の世界には「無記」であった、この世での生き方を説いただけである。 仏教や儒教へと宗教に移行する過程で、浄土や来世再生を願う心情が経典に表現された。

死後の世界は、誰にもわからない。臨死体験も近年、脳科学的に論証されつつある。しかしまた、自然なる世界にその力や天の理を、また人間の意識の存在に霊、魂を感じざるも得ない。図に、「霊」や「死」、葬送についてまとめた。 古代の「神」、「霊」といった魂の循環思想から、浄土信仰による輪廻転生の否定、「禅」による死への無関心と、現利思想へと傾向。その過程で神の思想と共通する浄土信仰が、和合の霊性として浮き彫りとなった。

我々日本人は、自然の中に、この世に共存し降臨する「霊」を感じ、春に來り秋に還山する祖先神に豊作を願った。「死後は皆、神になる」これが古代からの日本的信仰である。 その思いは混乱の時代、古代インドの「輪廻転生」を、仏教を媒介に受け入れ、「来世」への輪廻、「極楽と地獄」を受容した。そして、「**皆、神になる**」は、**浄土信仰**「**皆、浄土にいける**」に至り、お盆に來り還る先祖の「霊」に繋がる。 また、古代中国の魂魄概念が渡來し、再生する「魂」の依代である位牌が定着した。

このように「神仏儒習合の死生観」が、現代の神社や寺院、墓・仏壇や行事に残る。 教学から信仰・宗教へ、土葬から火葬へ、宗教と葬送は絡み合いながら変遷してきた。



宗教とは、本来、良き「死後の世界」と、そこに至る過程と方法を提示し、現世での安心感をもたらすべきものである。 しながら、世界宗教には、方便にしる地獄を説いたり、一神教であるが故に、他宗排他などの副作用もある。

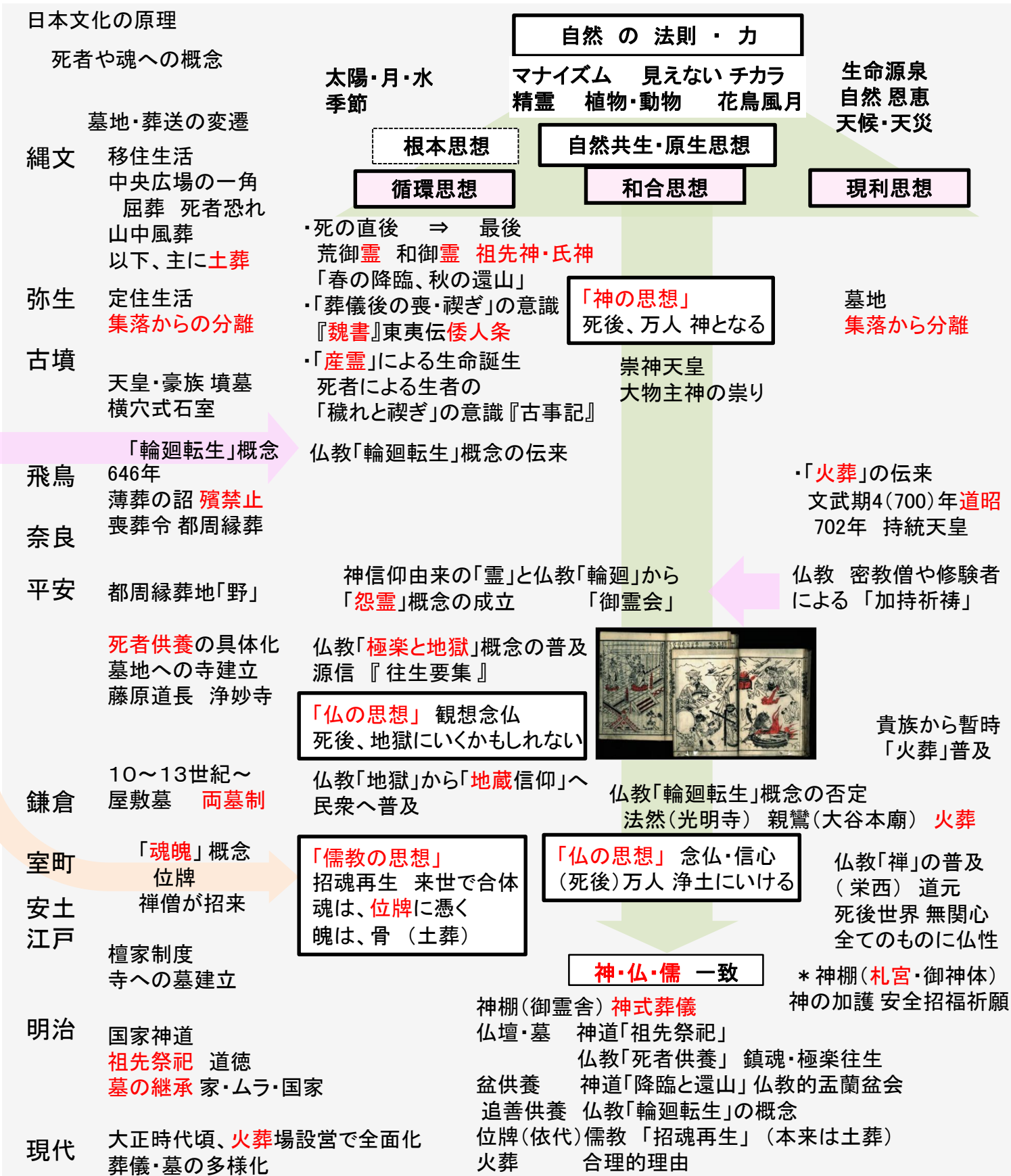
医者であり、睡眠と夢や、死と宗教などの研究家、**杉山弘道氏**は「葬式仏教」に、日本人の「融通無碍」、寛容で合理的な宗教心を見る。 古代からの自然なる森羅万象の「霊」、アニミズムの精神が、唯一の神の存在を否定し、平等な神々、神棚と仏壇、位牌を受容したと、する。

僭越、所感として、付け加えるとすれば、アニミズムの前に、超自然的・神秘的な、非人格的な力の作用である**マナイズム**がある。 なぜなら自然なる神を敬う心は、生命万物の「霊」を超える心と考える。 また、「タマ」霊力がなお宿る「**モノ**」として、「**遺骨**」が大切にされることにも注目しなければならない。 多くの戦没者の遺骨を尊ぶ思いは大切にされなければならない。

日本人の寛容力の背景には、やはり**真髓**がある。 良識な「霊」「魂」への思いは、「**大和魂**」と呼ばれ、「和魂漢才」でも表現されように、中国などから流入してきた知識・学問をそのまま日本へ移植するのではなく、基礎的教養として採り入れ、それを日本の実情に合わせて応用的に政治や生活の場面で発揮する心である。 その言葉は、『源氏物語』の『乙女』帖を初見に、「もののあわれ」を共感する、「はかりごとのないありのままの素直な心」「古来から伝統的に伝わる**固有の精神**」と考える。 本論は、その精神構造を明らかにするものであり、別途、根拠をしめす。

自然で原初な神への思いは、「死」についても多様に受容しつつ、死後の神、つまり、**無となり、自然と一体となる観念**を底流し、現利思想との均衡で「生」きた。

火葬とされた最後の天皇は1617年に崩御した**後陽成天皇**である。 明治以降、天皇、皇后は**土葬**となっている。しかし、2012年4月、宮内庁は今上天皇が崩御の際は火葬を希望するとの意向を発表した。2013年11月14日、天皇、皇后のご意向を受け、宮内庁は**天皇の葬儀は火葬**とすると発表した。



民間信仰

地域社会の日常的な生活と結びついて展開している信仰現象をさす。特定の教理や組織・教祖をもたないという特徴があり、宗教体系の基層を形成する。呪術的信仰形態を示しており、精霊崇拜・自然崇拜の要素も含まれている。成立宗教のもつ創唱性には欠けるが、成立宗教を支える下部構造を占めており、創唱性を生み出す基盤となっている。民間信仰と類似する概念として、民俗宗教の用語も使われている。民俗宗教は、文明民族の基層社会に展開する民間信仰と同等にみられる性格をもち、両者の差異は、ほとんどないといえる。日本を含めて文明民族の歴史的過程のなかで、地域社会には外来宗教がくり返し受容され、習合と混融が行われたためその領域はさまざまな要素が錯雑しており、一律にとらえることができなくなっている。現象面からとらえてみると、まず**第一に神社信仰**がある。平安時代以後名社大社が制度化され、教理体系も整えられ、明治政府による国家神道化もあったが、その基本は地域社会の氏神(うじがみ)・鎮守・産土(うぶすな)神の信仰である。地域の社会生活に密着した同族や地縁集団が祀る小祠は多様であるが、そのなかで同族の先祖の霊を祀る祖先崇拜が中心となって氏神信仰が形成されていた。しかし純粋な形での氏神信仰は、時代が下がるにつれて変化し、地域の守護霊としての産土神となった。それでも同族団の総本家に祀られる屋敷神の存在に、氏神の古型をみることも可能である。また江戸時代に成立した神棚や仏壇をみると、神棚に祀られる氏神以外の勧請神や、仏壇を通して結びつく菩提寺のあり方、**葬制や墓制**に伴う祖霊・氏神信仰の関連などが反映している。また神社に伴う儀礼・行事などが仏教との習合の結果、成立していることもわかる。第二に仏教が民俗化した**仏教民俗**がある。日本仏教は、各地域社会に浸透したが、特に葬送儀礼と結びついた。死霊祭祀が先祖供養となり、盆や彼岸行事となって表出していることは、よく知られている。また山岳信仰と結びついた霊山・霊場信仰も中世以来発達したが、それに伴い修験道も地域社会の山岳信仰として民間に普及した。町や村から霊山・霊場へ代参をたてたり、巡礼を行なったりする現象は広くみられている。大峯講・出羽三山講・秋葉講・愛宕講など代表的事例である。仏教が地域社会に密着して展開する過程で講が組織化されたが、講は特定の宗派や寺院を離れ、地縁組織として存在している。子安講・念仏講・観音講・地藏講などの信仰的講は、名称は共通していてもその内容に地域差のあることが知られている。第三に**通過儀礼や年中行事にみられる信仰的要素**がある。出産から子育ての過程にみられる産神信仰、危険な年齢に際して行われる厄払いや年祝い、そして葬儀や死者供養の基底には、神社や寺院に帰属しない民間信仰の特徴がみられる。同様に正月元旦から大晦日に至る年中行事には、歳神や田の神、山の神、祖霊や御霊といった神格が登場しており、とりわけ家の神の祭に顕著に表われている。第四に禁忌・予兆・ト占・呪いなどの**俗信**がある。吉凶の占いについては、陰陽道や易学などの知識のほかに石占や橋占・粥占などの伝統的な技術がある。また生業に伴う禁忌などは、山・海の日常生活のなかから生まれた特徴がある。山や海・里など生活環境のちがいから妖怪現象などに地域差がみられたり、動物霊の憑依による憑物の多様性がみられたりすることも注目されている。第五に民間信仰の**担い手**の性格がある。**巫女・山伏・行者**などは仏教・神道などの一定の教派に所属するわけではなく、その系譜も多様である。仏教系の聖、神社系の御師・巫女といった分類もできるが、共通して漂泊・遊行する民間宗教家として位置づけられており、外来宗教的要素を地域社会に伝播させるのに貢献したことは明らかである。かれらは、**精霊を制御する力**をもっていたのであり、直接高邁な教理を布教することはなかったが、地域社会の庶民の需要にこたえて宗教的な救済活動を行っていた。また霊能者とか拝み屋などとよばれて大教団からは排除されてはいたが、時代の変動期には霊的な力を増加させて、新宗教形成の要因をつくった。そのことは民間信仰がしばしば民衆宗教の基盤となっていると指摘される理由でもある。

宮田 登先生 元日本民俗学会会長 『国史大辞典』

墓制

墓にまつわる諸習俗をいう。墓は遺体や遺骨を納め、死者の霊をまつる場所であるが、埋葬または納骨の場所(墓所)、それらの群れる地域(墓域)、石碑のことなど、一般用語としては概念の不明確な点がある。また、遺骨を納める納骨堂や、死者の霊をまつる霊山霊地・位牌堂・供養塔・仏壇などは、一般に墓とは呼ばれていない。古代の墓制については不明な点が多い。わが国においては**霊魂信仰**が支配的であった。霊魂信仰では、物や肉体よりも**生命力としての霊魂を重視**したから、死体は人里を離れた山野や海辺に打ち捨て、**霊だけをまつたもの**と推定されている。大陸から古墳文化が入り、一部上流の支配層には広がったが、大多数を占める庶民の墓制は簡略なものであった。庶民がそれぞれの埋葬地に**石碑**を設けるようになったのは、近畿地方の先進地帯でも中世末、多くは近世の中ごろになってからのことである。埋葬後の**盛り土の上に墓標**としておいた小石と、仏教的な**供養塔**とが合体して、石碑という形が固定したものと考えられる。したがって石碑の形式も、初期のものは供養塔の影響を強く受け、層塔・宝塔・宝篋印塔・五輪塔などのものが多く、仏像形や卒塔婆形のものもある。実際には自然石を利用したものが多かったろうが、石碑に使ったという証拠がなく、忘れ去られたのであろう。近世以後は角石棹形が普及し、上部に屋根形をつけたもの、また幅広薄形など少しずつの変化を見せながらも統一に向かう。現代は横形のもの、復古的なもの、個性的なものも多くなってきた。別に僧侶の墓には**卵塔形**、神職の墓には柄鏡形が用いられる。墓を設ける場所については、長崎県対馬など陰陽師の活躍したところでは、そのつど方角を見て埋葬地を決めたが、一般には一定の墓地に納める。その墓域をどこに設けるかは、先祖観や他界観と結びつき、また実用的な**土地利用のしかたとも関連する**。見晴らしのよい裏山や、奥まった谷の小高いところが多い。また、**死のけがれを忌む感情**とはうらはらに、**屋敷墓・家墓**などといって、自家の屋敷内に墓を設ける例も少なくなかったし、所有する田畑のうち一番の上田(じょうでん)に墓を築くこともあった。後者は、子孫が落ちぶれて田畑を手放すことがあっても、最後まで残すことを見越してのことである。本家の墓域の中や隣接地に分家がつぎつぎに墓を造り、**同族墓**を成しているものもある。明治政府は墓地の新設を許可制とし、免租の関係から共同墓地化を推進する政策をとった。戦後は主として衛生上の見地から、住宅に近接して墓地を設けることを認めず、大都市の地方自治体では、条例によって**土葬を禁止**するところが増加している。まつられる人を中心に見ると、先祖代々の墓・家族墓・夫婦墓・個人墓などがあり、ほかに童墓(わらべばか)・無縁墓などがある。先祖代々の墓は定住的な生活を前提とし、直系の系譜を中心として家族を含める。分家や他出した者も自分が初代の先祖になる道理であるが、**〇〇家**の墓などと記した家族墓を設けることが多い。嫁や入婿は婚家の墓に入るのが普通で、墓制のありかたは、それぞれの時代や地域における家族観を反映している。夫婦墓は夫婦がともに一基の石碑のもとに納まるものである。(中略)生前に自分の墓を建てるのを逆修(ぎゃくしゅ)といい、めでたいこととされている。この場合や、夫婦墓で一方が存命の場合には、朱字を入れておく。

以上の単墓制に対して**両墓制**と呼ばれるものがある。一人の死者に関して、遺体を埋める**埋墓**(いけばか・うめばか)と、その人の霊をまつって石碑を建てる**詣墓**(まいりばか)とを、二重にもつ墓制である。**近畿**地方に最も濃密に分布し、国の南北においては稀薄である。起源については諸説がある。霊肉分離の考えかたは古風であろうが、石碑の普及に伴うものとしておく。昭和三十年(一九五五)代の高度経済成長に伴う大都市への人口集中により、墓制も大きな変容を迫られている。通勤圏の外側に墓地圏ともいふべきものができた。地価の高騰もある。公営墓地は入手困難となり、集合住宅ふうの墓地団地が多くなった。新しい墓地は公園ふうで、暗いイメージは払拭された。またロッカーふうの納骨堂も、数を増してくるものと思われる。 井之口章次先生 國學院大學民俗学研究会 『国史大辞典』

「 自然なる 日本 日本人とは 」

三教 三聖 義疏 < 仏教 >

Foundation of Kyoto culture

Principle & Origin of Japanese culture

ウパニシャッド

古代インドの神秘的な哲学説を記した聖典。「奥義書(おくぎしょ)」とも訳され、ベーダ聖典の最後部にあたるのでベーダーンタ(ベーダの末尾、極地の意)ともよばれる。ウパニシャッドの名をもつ文献は優に100種を超え、**紀元前500年以前**にまでさかのぼれるものから、10世紀以後につくられた新しいものまで雑多である。そのなかで一般に次の14編を**古ウパニシャッド**と称する。それらは、古い散文で書かれた『アイタレーヤ』『ブリハッド・アーラニヤカ』『チャンドーギヤ』『カウシータキ』『タイッティリーヤ』『ケーナ』の6ウパニシャッド、韻文で書かれた『カタ』(または『カータカ』)、『イーシャー』『シュベーターシュバタラ』『ムンダカ』『マハーナーラーヤナ』の5編、さらに新しい散文による『プラシュナ』『マイトラーヤニーヤ』『マーンドゥークヤ』の3編である。年代的には古い散文のものがもっとも古く、ついで韻文のもの、そして新しい散文のものと続く。さらに『チャーガレーヤ』と『アールシェーヤ』をこれに加えることもある。

これ以外の**新ウパニシャッド**はきわめて多数だが、内容によって、(1)古ウパニシャッドの内容を単に発展させたもの、(2)瞑想(めいそう)法としてのヨーガ的なもの、(3)遊行者(ゆぎょうしゃ)的なもの、(4)ヒンドゥー教の神シバを原理とするもの、(5)ヒンドゥー教の神ビシュヌを原理とするもの、以上の5種に分類されることが多い。

古ウパニシャッドの思想は、**一元論的な絶対者**を設定し、その認識を通じてそれと一体化するという、帰一思想を特徴とする。しばしば宇宙原理はブラフマン(梵(ぼん))とよばれ、個別的原理であるアートマン(我(が))との一体(梵我一如(ぼんがいちにょ))を究極的な理想とする。また、**輪廻(りんね)思想**が新たに登場してきたことも重要であり、バラモンに独占されてきた思想界に王侯武士階級(クシャトリヤ)が進出したことも見逃せない。古ウパニシャッドに現れる思想家は多数に上るが、そのなかでも「**有**(う)」「(サット)を原理としたウッダーラカ・アールニ、絶対者を否定的表現で示そうとしたヤージュニャバルキヤ、梵我一如と意向の重要性を強調したシャーンディリヤ、輪廻説のプラバーハナなど重要な人物が多い。そしてウパニシャッドの思想は、後世の正統**バラモン**系統の哲学派、なかでもベーダーンタ学派とミーマーンサー学派の思想に、大きな影響を与えている。

輪廻

〈輪回〉とも書き、〈輪廻転生〉ともいう。サンスクリットでサンサーラsaṃsāra、英語でtransmigration, metempsychosis。車輪が廻転してとどまることのないように、次の世にむけて無限に生死をくり返すこと。原始段階では、人の死後、**靈魂が鳥獣草木や他の人間に転生**するという観念が抱かれたが、やがてインドやギリシアにおけるように、生前の行為と転生後の運命が**因果**的に結びつけられ、洗練された輪廻観が説かれるようになった。

まずインドでは、前8～前7世紀ごろから**ウパニシャッド哲学**において種々の輪廻説が論じられた。そこに共通にみられる主張は、死後、生前の行為(業(ごう)=カルマン)によってその人の主体が他の生物の母胎に入るか、あるいは植物のようなものになる、というものであって、その転生のあり方は善因善果、悪因悪果の応報説にもとづいていた。この**輪廻転生は迷い**の状態とされ、宗教的実践や倫理的行為によって、生まれ変わり死に変わる生き方から解放されるという考え方がおこった。このような業、輪廻説をはじめに体系的に主張したのは最高の祭司身分であった**バラモン**たちであり、それ以後、階級差別の社会組織を合理化するための一種の思想的武器として利用されることにもなった。**輪廻の考え方はのちに仏教**にも受けつがれ、無明(むみよう)(無知)と愛執(あいしゆう)によって輪廻が生じ、それを絶ち切ることによって涅槃(ねはん)や解脱(げだつ)が得られると説かれた。仏教ではこの輪廻のことをとくに〈六道輪廻〉(六道)と呼び、死後の迷いの世界を地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つの生き方(転生)に分けて整理した。

古代**ギリシア**では、前6～前5世紀のオルフェウス教、ピタゴラス、プラトンなどが靈魂の不滅を説くとともに、その靈魂が他の動植物に生まれ変わって流転するという輪廻説を主張した。プラトンの《ファイドン》によると、魂は現世から来世に行ってそこで生存し、ふたたび現世に帰ってくるという。

日本では、輪廻説は仏教とともに受け入れられた。とくに平安初期に成立した《日本靈異記》のなかに輪廻と応報の諸相が描かれている。インド型の輪廻転生説がどちらかという過去、現在、未来にわたる時空のなかで考えられているのに対して、《日本靈異記》に表現されている輪廻説は**現世主義的**な傾向を示しているということができ、その後の日本人の輪廻観をよくあらわしている。[山折 哲雄]

輪廻をテーマにした仏教説話は釈迦本生譚にみられ、仏伝の中にはその前生にいかにか菩薩行を行って仏となったかを説く部分がある。たとえば《**涅槃経**》では、悉多太子は鹿や熊などの動物からしだいに転生して栗散(ぞくさん)王と生まれ、ついには転輪聖王に生まれて菩薩行を行じて仏となった。これをインドではバールフット塔やアマラーバティー塔、アジャンター石窟などの彫刻に彫って、布教にもちいた。日本では、輪廻説は説話の中にしばしばみられ、《日本靈異記》では他人のものや仏物を盗用したために牛に生まれ変わった話があり、また2人の男が犬と狐に生まれ変わって、互いに殺し合う話も載せている。すなわち**仏教説話**は輪廻をテーマにして、来世の悪報を説いて、今世の善行と仏教信仰を勧める。また輪廻を信じた平安時代の高僧仁海僧正は、1匹の牛を見て母の転生とさとり、これを買い求めてたいせつに飼った。その死後は皮を鞣(なめ)して曼荼羅を図絵し、その牛皮曼荼羅を本尊として京都山科に建てたのが**曼荼羅寺**であると伝える。平安時代には空海のような高僧を聖徳太子の生れ変りとするような信仰もおこり、聖徳太子も多生のあいだ仏道を行じた結果、太子と生まれたという説話ができただのも、輪廻思想があったからである。しかしこれを否定する思想もあって、謡曲《安達原》では〈生死に輪廻し五道六道にめぐる事、唯一心の迷なり〉ともあり、輪廻思想はかならずしも日本に定着しなかった。[五来 重]

原始仏教の思想

ゴータマは、そのころ幾多の思想体系が互いに相対立し、矛盾し、抗争している事実

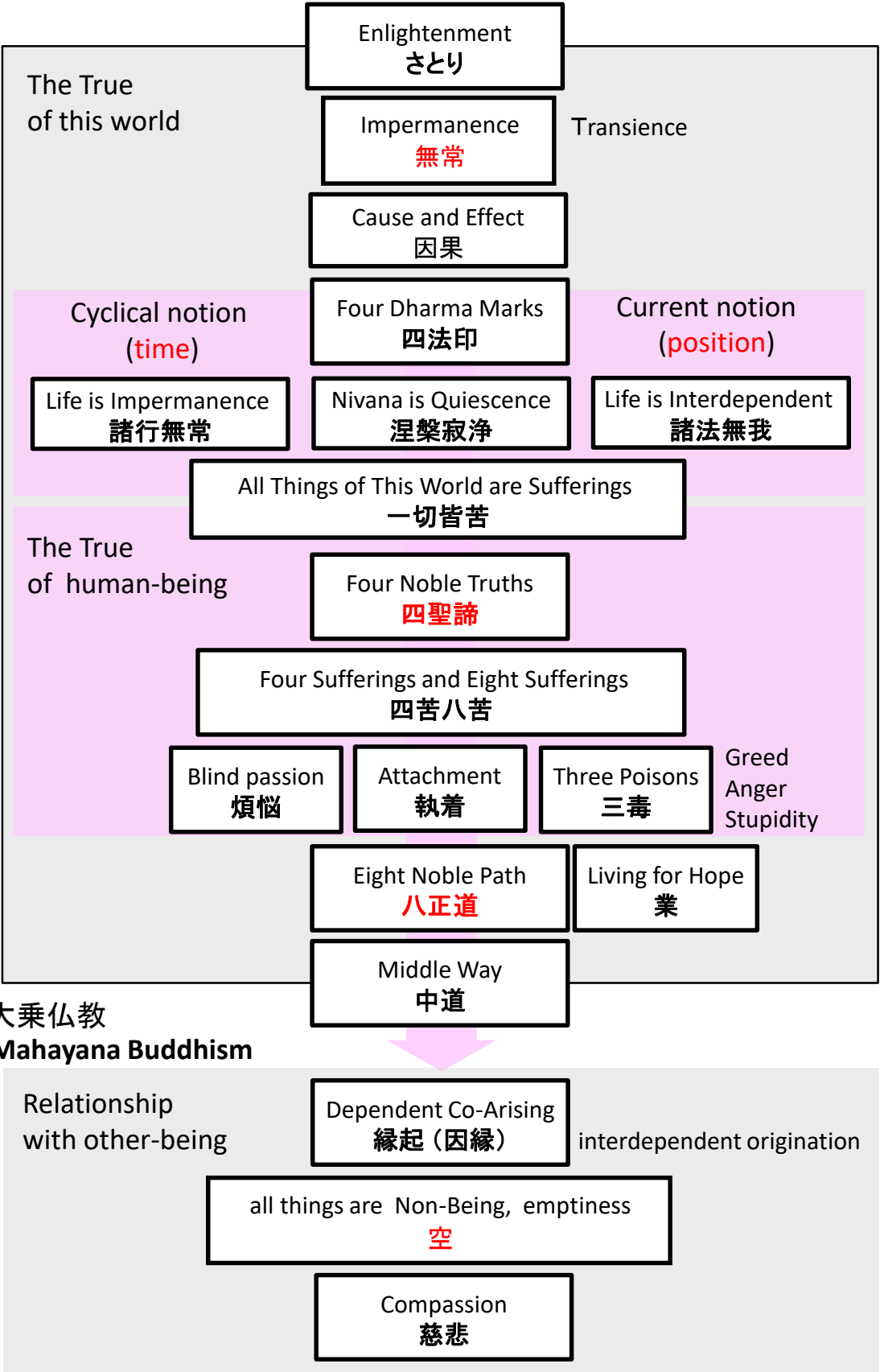
に注視した。この現実を客観的通観的視点からみると、どの思想も相対的で一方的である。多くの哲学者たちは、結局解決できない形而上学的問題について争っているのである。世界は有限であるか無限であるか、からだ

と靈魂とは同一であるか別のものであるか、というような形而上学的問題についての論議は、真実の実践的認識のためには益なきことである、とゴータマは主張した。かれは形而上学のうえでの対立的見解にとらわれず、人間の生きるための真実の道をひとびとに教えようとした。実践的認識の最初に直面した問題は、人生は苦にみちているということであつた。「苦」とは、自分の思いどおりにならぬことをいう。では、なぜわれわれの経験が苦であるのか。一切の事物は、もろもろの因縁が合することによってつくられたものであり、常に変遷し、刹那もとどまることがないからである(無常)。したがって、なにものをも「わがもの」とか「われ」とか考えてはならない。われわれ人間の具体的存在を構成している精神的または物質的な要素ないし機能のいずれをも自己(アートマンātman)と解することはできない(無我)。

仏教では、最高神や第一原因のようなものを承認しない。 迷いの根本は盲目的な欲望だと説く。 苦からの離脱をもとめるひとは、苦・無常・無我の理をよく悟って、真実の認識を完成し、迷いの根本である執着・愛欲を断たなければならない。そのためには修行につとめ、戒律をまもり、禪定をおさめる必要がある。それによって一切の束縛から脱することができる。それが解脱の境地であり、涅槃(ねはんnirvāa)ともよばれる。 実践の基本的立場としては、欲楽と苦行との両極端を排して、不苦不楽の中道を説いた。対他的には慈悲の精神を強調し、人間だけでなく、一切の生きとし生けるものにまで慈悲を及ぼすことを理想とする。 ゼロという数の発見はインド人による。同時に空の思想もまたインド人の独創であるが、いわゆるインド正統派哲学では無いし非存在についての詳しい考察はあっても、空はほとんど顧みられず、それを推進したのはもっぱら仏教であつた。

「空の観法(かんぼう)」が成立し一種の修行の途(みち)となる。それは、むしろ積極的に、ある目標だけを「残るもの」として集中専念し、その他のいっさいを欠如として否定する。この目標を徐々に向上させていくことにより、悟りに近づこうとする。これとは別に、原始仏教には無我が強調され、煩惱(ぼんのう)や我執(がしゅう)などからの離脱をとくに掲げた。 やがて部派仏教に移り、法(ダルマ)に関する教理の固定化とともに、そのうちの保守派(とくに説一切有部(せついつさいいうぶ)、略して有部)は、種々に区分されたあまたの法(有部は75法)をそれ自体で存在する実体としてたて、ここに「法の有(う)」が主張される。この考えは、実はわれわれの日常的な考えを結晶させたものといってもよく、かつそれによって実践の目標や過程も明示されるところがある。それを覆すのが空であって、存在するいっさいのものから、その自体を奪い、さらに実体を厳しく否定して、すべてを「から」にするよう、空は強力に働く。そこには無我説の復活もあり、空によって、法を含むあらゆる存在から自体や実体は消され、我執などのとらわれもすべてなくなる。 有名な「色即是空」の句は、色や形をもつ客観的対象が「独立の実体」としては存在せず、すなわち空であると説き、さらにそれは「空即是色」と続いて、実体を否定してとらわれない空によってこそ、諸対象がそれぞれの局面にその対象として存在しうることを示す。その客観的対象から、主体すなわち「受想行識」についても、同文の空が反復されて、同一の主張がなされる。これは思想史的には、有部への批判として、大乘仏教の先駆を果たした『般若経』のなかに、一種の否定的色彩の濃い空が繰り返し説かれた。

空の論理的基礎づけはその後に初期大乘仏教を確立し定着させたナーガールジュナNgrjuna(龍樹150ころ—250ころ)によって完成される。彼は、すでに原始仏教以来説かれていた縁起説をいっそう深く徹底させ、いっさいの存在が互いに相依・相関しあっており、その際それぞれがおのおのに否定と肯定とを含み、矛盾しつつ相即していることを明らかにした。 こうして実体はまったく無となって空が輝く(これを縁起—無自性(しょう)—空という)と同時に、その空にとらわれることも空として否定される(空亦復(やくぶ)空)。こうして真の自由は達せられるが、これをわかりやすくいえば、煩惱・執着(しゅうじゃく)・凡夫にせよ、解脱・ニルバーナ(涅槃)・如来にせよ、それらを実体として固定させず、凡夫もその煩惱を粉碎して、聖なるものに近づく途が開拓された。なお、上述の「空—残るもの」の説は、後の中期大乘仏教においてその唯識説でふたたび論議された例もある。



大乘仏教

インドで西暦紀元後に興起した新しい形態の仏教。サンスクリットでマハーヤーナMahāyānaという。Mahaとは「大きい」の意、yanaとは「乗物」を意味する。それ以前からあった保守的な仏教(いわゆる小乗仏教)では修行僧が独善的になる傾きがあったのに対して、ひろく民衆のための仏教であることをめざす。

「大乘」の「大」には、大・多・勝の三義があるという。それは(一)偉大な教えであり(二)多くの人々を救い(三)勝れた教えであることを標榜する。大乘仏教は、民衆の宗教であり、諸仏・諸菩薩を信仰する。みずからは救われなくてもまず他人を救うという菩薩bodhisattvaの精神が強調された。諸仏・諸菩薩を熱心に信仰して念ずることを強調するために、多数の仏像が製作された。その製作の中心地は、ガンダーラGandhāra(パキスタン北部)とマトウラーMathuraとであった。最初期の大乗仏教は、**ストウーパ**を崇拝していた一般民衆および修行僧のあいだから起ったと考えられるが、当時は荘園をもたなかった(当時荘園をもっていたのは、いわゆる小乗仏教だけである)。しかし民衆のあいだに根強かった呪術的要素をとりいれることによって、一般民衆のあいだにひろがった。

多数の大乗経典が編纂された。まず多数の般若経典がつくられて、あらゆる事物は空である(一切皆空)ということを説いた。また従前の仏教諸派の超世俗的態度を排斥して、『**維摩経**(ゆいまきょう)』や『**勝鬘経**(しょうまんぎょう)』は、世俗的な在家の生活のうちにあって真の仏道を実践すべしという態度を表明している。『**華嚴経**(けごんきょう)』は菩薩の道を説いているが、一切のものは互いに入りまじり影響し合って成立しているという道理をくり返し表明し唯心説までも述べている。**浄土経典**(『阿弥陀経』『大無量寿経』『観無量寿経』など)は、阿弥陀仏を信仰することによって極楽浄土に生まれることをすすめる。『**法華経**』は、その前半においては、仏教のいろいろな仕方の実践がどれも完成に達するための原因であるといつて、種々の実践法の存在意義を認め(一乗思想)、後半においては、究極には久遠の本仏が存することを説いている。哲学学派としては、**中観派**(ちゅうがんは、Mādhyamika)と **唯識派**(ゆいしきは、Vijñānavādin)とが主なものである。

中観派は、**龍樹**(ナーガルジュナNāgārjuna)に始まるが、種々の論法をもって、あらゆるものが空であるということを論証する。「**空**」とは、縁起とか中道とかの教えと同じ趣意である。唯識派とは、別名ヨーガ行派Yogācāraともいうが、精神統一によって心を静め、外界の事物はすべて心の顕現したものであると観ずる。その教えは、弥勒(マイトレーヤMaitreya)と呼ばれた哲人に始まるというが、体系的な学説は**世親**(天親ともいう。Vasubandhu)により完成された。彼によると、われわれの存在の根底にアーラヤ識ālayavijñānaと名づけられる精神的原理があり、万有はそれから顕現したものにほかならない、ということを説いた。それが発展して、中国・日本では**法相宗**(ほっそうしゅう)となった。唯識説の系統から論理主義的な知識哲学が成立した。仏教論理学(バラモン教系統の古い論理学を「古因明」と呼ぶのに対して、これを「新因明」と呼ぶ)を確立したのは、陳那(じんな、ディグナーガDignāga)であるが法称(ほっしょう、ダルマキールティDharmakīrti)がこれを大成した。因明は部分的に中国・日本に伝えられ、特に奈良で研学された。

三二〇年にグプタGupta王朝が成立し、全インドにわたる集権的な国家体制が確立するとともに、ヒンドゥー教が盛んになったので、仏教も次第にそれに影響されて、ヒンドゥー教的なものに対し妥協適合をせざるを得なくなった。おそらく西ローマ帝国の滅亡に伴う海外貿易の衰退は、インドにおける商業資本の社会的勢威を衰退させ、農村に基盤をおくバラモン教ないしヒンドゥー教を優勢ならしめることとなった。そこで仏教もそれと妥協して**真言密教**(金剛乗Vajrayānaともいう)を成立させた。民衆の間で行われている多数の**呪法**を採用し、**呪文**(陀羅尼dhāraṇī)を唱えて攘災招福を行った。根本の仏としては**大日如来**を想定し、人間の感情欲望を肯定して、即身成仏を期した。それはまた仏教の墮落をひきおこし、**密教**はヒンドゥー教のうちに没入してしまう傾向があった。十一―十三世紀にわたるイスラム教徒のインド征服とともに、仏教はインドからほとんど消滅してしまった。しかしラダク・ネパール・ブータン・チベット・モンゴル・中国・ベトナム・朝鮮・日本の仏教は圧倒的に大乘仏教を受けている。

Original Buddhism by Buddha India

Transience
Impermanence
無常

Human **experience** suffering because everything is the result of ever-changing, interrelated conditions and causes; Dependent Co-Arising“縁起”, Cause and effect“因果”. So human existence is always in **Transience**, Impermanence (Skt: anitya; J: mujō 無常).



Subject of enlightenment for salvation
“Theravādin” ; J: Jouzabu 上座部 specific self-righteous
“Greater vehicle” ; J: Daijō 大乘 all mankind

Mahayana Buddhism

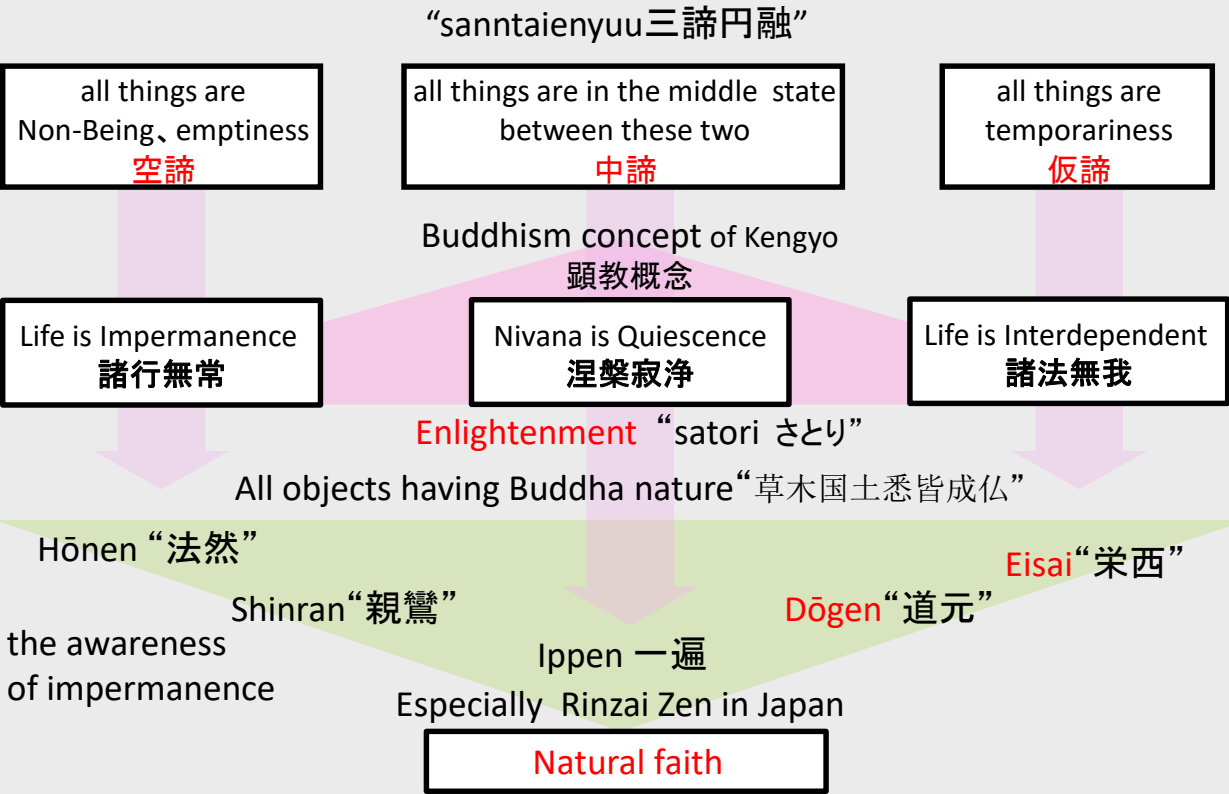
all things are
Non-Being,
emptiness
空

Nāgārjuna “龍樹” **Indian** Buddhist
Human **exist** by Dependent Co-Arising“縁起”, Namely Standpoint of Non-Being “無自性”, or emptiness“空”. So human existence is always in **Interdependence**“相互依存”.
All creatures having Buddha nature“一切衆生悉有仏性” Nirvana Sutra“涅槃経”

Change in perception of the True Image
Coincide with “The Japan code” as “the principle of Japanese culture”

The concept of recognition for the existence in the World

Doctrine of Tendai Zhiyi “天台智顗” **Chinese** Buddhist



『**涅槃經**』に「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅**爲**樂」とある。「諸行は無常であってこれは生滅の法であり、生滅の法は苦である。この生と滅とを滅しおわって、生なく滅なきを寂滅とす。寂滅は即ち涅槃、是れ樂なり」その教えは、『**スッタニパータ**』（経集）と共に最古の原始仏典であり、釈迦の指針的語録『**法句經**』（ほつくぎょう）**ダンマパダ**に登場する。『法句經』は、パーリ語經典の「小部」クッダカ・ニカーヤに掲載されている。また、サンスクリット經典（ウダーナヴァルガ）に含まれている。

釈尊の原初な教えは、釈尊の時代から今日まで、約2500年の間に多様に解釈・脚色された。それら原始經典から、釈迦がどのように考え、どんな教えを説いたか？を、検証追論する。花園大学文学部仏教学科教授の**佐々木閑先生**は、京都大学工学部と同大大学院文学研究科での学問を基礎に、その原初の教えを「**科学するブッダ**」で探求している。その前提として、物理学、進化論、数学を科学の代表としてとりあげ、「**科学全般が人間化**」している、とする。「人間化」とは、西洋でいう一神教「神の力」への思考を縮小し、我々人間固有のレベルにひきつける志向方向のことである。その思考はあくまで脳で行われるため、つまりは脳科学に一旦収斂し、そこから新たな科学理論が出発、パラダイムシフトすると考えられている。例えばダーウィン進化論では、「変異と自然淘汰」から「万物の靈長なる人間」にいたる過程に、自然淘汰が常により良いものを選びとっていくことが必要となり、その思考にはまだ「神の視点」が残留している。木村資生は、その「神の視点」の排除し精緻な数学を導入し、その「中立論」から生存に都合が悪いものが排除され、偶然の産物が我々を形成したとする。これが「人間化」の事例である、とする。（この偶然とは自然、「自然化」と解釈する）著者は、その科学の方向性でもある「人間化」がブッダの思考であるとする。つまり、「神という名の絶対者」のいない**法則性だけの世界観**で人間を見つめる思考である。一神教世界から人間世界へ科学は物質を対象とするが、人間世界の精神を対象とした到達がブッダの思考、教えであるとする。「人間化に向かう科学、その科学と同じ方向性で思考したブッダ」それが「科学するブッダ」である。

では、**ブッダの思考、教え**とは 著者は原初仏教の手掛かりを、スリランカなどに残存する上座部仏教、その經典「阿含經」や、經典全般の共通から、以下3点に集約する。
1、超越者の存在を認めず、現象世界を**法則性**によって説明する。 2、努力の領域を、肉体ではなく**精神**に限定する。 3、**修行**のシステムとして、**出家者**による**集団**生活体制をとり、一般社会の**余り物**をもらうことによって生計を立てる。

ブッダ仏教の修行は、ブッダの言葉を理解するための經典の勉強と、それに沿って行う瞑想の実践である。著者は周囲の多神教世界の影響を受けて、阿弥陀・薬師・大日・観音など超越者を想定した一般宗教、**大乘仏教**に変化した、とする。「自己修練の教え(宗教)」から「**救済の宗教**」への変貌である。般若經、法華經、華嚴經、大無量寿經など多様な系統・經典が誕生した「**爆発的多様化**」の原因を、ブッダ死後数百年後のアショカ王による「破僧」の定義変更とする。そもそも「破僧」とは、出家集団の中でブッダの教えに反する教義を主張し僧団を破壊することであるが、独立した僧団が各地に散在し、経年により教義に食い違いが発生し互いに非難した。その解決として各僧団に「**布薩儀式など集団行事に参加**」を条件とし、それに反することを「破僧」と定義変更した。また同時に釈尊という唯一のブッダに直接、指導してもらえない、また釈迦優位原理「過去にブッダと出会い宣言することを条件に、様々な生き物となって生まれ変わり修行することでブッダとなる」といった考えから、ブッダと出会えない修行者たちの不安不満が高まる。まず、将来のブッダとして**弥勒**が説かれた。そして、この世には釈迦というブッダ一人しか存在しないが、「三千大千世界」や「極楽世界の無量寿仏(阿弥陀如来)」と、この世この世界とは別に、平行して存在する別世界が説かれた。このブッダとの出会い、万人がブッダになれるという大乘仏教は在家信者に希望をあたえた。日常生活を基礎として考えられた修行方法が**六波羅密行**で、その六種の修行の中で最も重要視されたものが「**智慧の完成**」すなわち「**般若波羅蜜**」である。また、別世界の**ブッダと出会う神秘的**方法として、「三昧」「称名」「經典信奉」などが説かれた。

釈迦仏教は、それまでの人生を再構築しようと考え、また上記の出家修行ができる、いわば「**特定の人**」のためにある。その教え「出家者による集団生活体制」「一般社会の余り物をもらう」は、人間社会全般に適用させることが不可能だからだ。その解決過程から誕生したものが、大乘と総称される多様仏教で、大乘仏教は、本来の釈迦仏教の立場からは不合理ではあるが、現実生活者のために「超越者による救済」を説いた、と結ぶ。

当方見解 人間世界の精神を対象とした「科学するブッダ」から「神に似て非なるブッダ」へ、「科学の人間化」とは逆に、「**仏教の超越者化**」が なされてきたわけだ。しかし、その超越者は、一神教でいう天地の創造主、支配者ではないことに注意しなければならない。なぜなら**一神教ではなく多様な超越者**であることが、仏教が日本で受容され、また日本的に仏教が変化した理由であるからだ。その教えは大乘仏教の「**般若心經**」でも説かれている。「般若心經」は、上記の1、「超越者の存在を認めず、現象世界を**法則性**によって説明する」ブッダの教えを留めていると考える。いわゆる「空」の思想は、人間から捉えた世界を、脳科学的に、精神医学的に分析している。そこでは超越者による救済ではなく、ひたすら教えが説かれている。「観自在菩薩」や「三世諸仏」も登場するが、一神教の神ではなく、かれらは「教える主体」や「過去、現在、未来の、悟りの境地に至った象徴」である。

また、生活者にとって重要な教えである「**智慧の完成**」すなわち「**般若波羅蜜**」とは何か？を考えることが重要である。「般若」は「仏の知恵」、「(六)波羅密」とは「布施 持戒 忍辱 精進 禪定 **智慧**」で、大乘仏教の初期に説かれ多くの經典で引用されている。例えば、龍樹は『宝行王正論』で、布施と持戒を「利他」、忍辱と精進を「自利」、禪定と智慧を「解脱」としている。サンスクリット語で「到彼岸」を表す「パーラーミター」、その音を写した漢語が「波羅密多」である。先祖に感謝し自身を深く反省する「彼岸」につながる。**智慧**は、すべての**道理**を会得すること。そのため、以下に説く。この世の実相は「空」で、人間の感覚でとらえている物事はありのままの実際とは違う。あらゆる存在に固定的な実体はなく、つねに**縁起の中で無常**である、つまり流動的に変化している（無自生）。菩提薩埵（菩薩）は**智慧**を得て、実践したので、心のわだかまりやこだわり（罣礙 けいご）がなくなったとする。「**私**」こそがこだわり、苦しみの根元になる。**いのち本体の感覚**に戻れば「私」は解体され、欲も執着もなくなる。「私」を形成していた「識」が浄化され、感覚の純度が上がれば執着、こだわりが無くなる。積年の識からいのちが開放され、「**物事があるがまま**」に純粹に受け取れる。「羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶」は、自己の悟りと他者を悟りに導き、共に彼岸に行き、その成就を讃える真言とされる。その教えを単純に解釈すると、主観ではなく、**客観**で事物を捉えること。しかし、その客観は人間が想定できる内容なのか？ つまり、今までの経験や知識で発想する範疇の客観ではなく、道理を意識した客観でなくてはならない。道理とは、物事のあるがまま、つまり、人間より**自然**がはるかに近い、自然そのものかもしれない。**自然には矛盾がない**。しかし、我々が認識できる自然の範囲がすべてではない。想定外は無限にある。つまり科学で捉えられる自然法則、それには限界がある。おそらく宇宙全体から生命科学まで全てを解明できることはない。なぜならそれ自体が無常だからだ。つまり、**人間の限界**に気付くこと、自然のあり様に学び、その尊厳を感じる事が重要ではなかろうか。おのずと人間は、謙虚になり、感謝し、等しく平等と気づき、無駄な闘争をやめるであろう。

非日常にブッダ仏教があり、日常に大乘仏教がある。我々全員は非日常になれない、しかしブッダは**智慧**はその非日常にあるとする。とすれば、実生活の中の我々は、日常の中に非日常を持ち込み、自身の中で**二者均衡**するしかない。その均等周期は人それぞれであり、非日常に埋没できる環境にある人もいるかもしれない。日本人の「ケガレとミソギ」「ケとハレ」「アマテラスとスサノオ」「武士と禪」「花鳥画と水墨画」などは、その「ブッダと大乘 ふたつの仏教」を受容できた素地であり、成果であろう。自然信仰を基礎とする「多神教」と「均衡、和合」の信仰思想を持つ我々、日本人には、「ふたつの仏教」から学べる可能性は高い。「実業と教養」「実利と奉仕」と方便したほうが、我々現代人には判りやすい。「科学は人間化」するが「無常たる自然は科学で解明できない」。「ブッダは科学した」が、おそらくその**限界**を悟った。**自然の中の人間の立場**を悟った。その悟りが執着からの解放であろう。



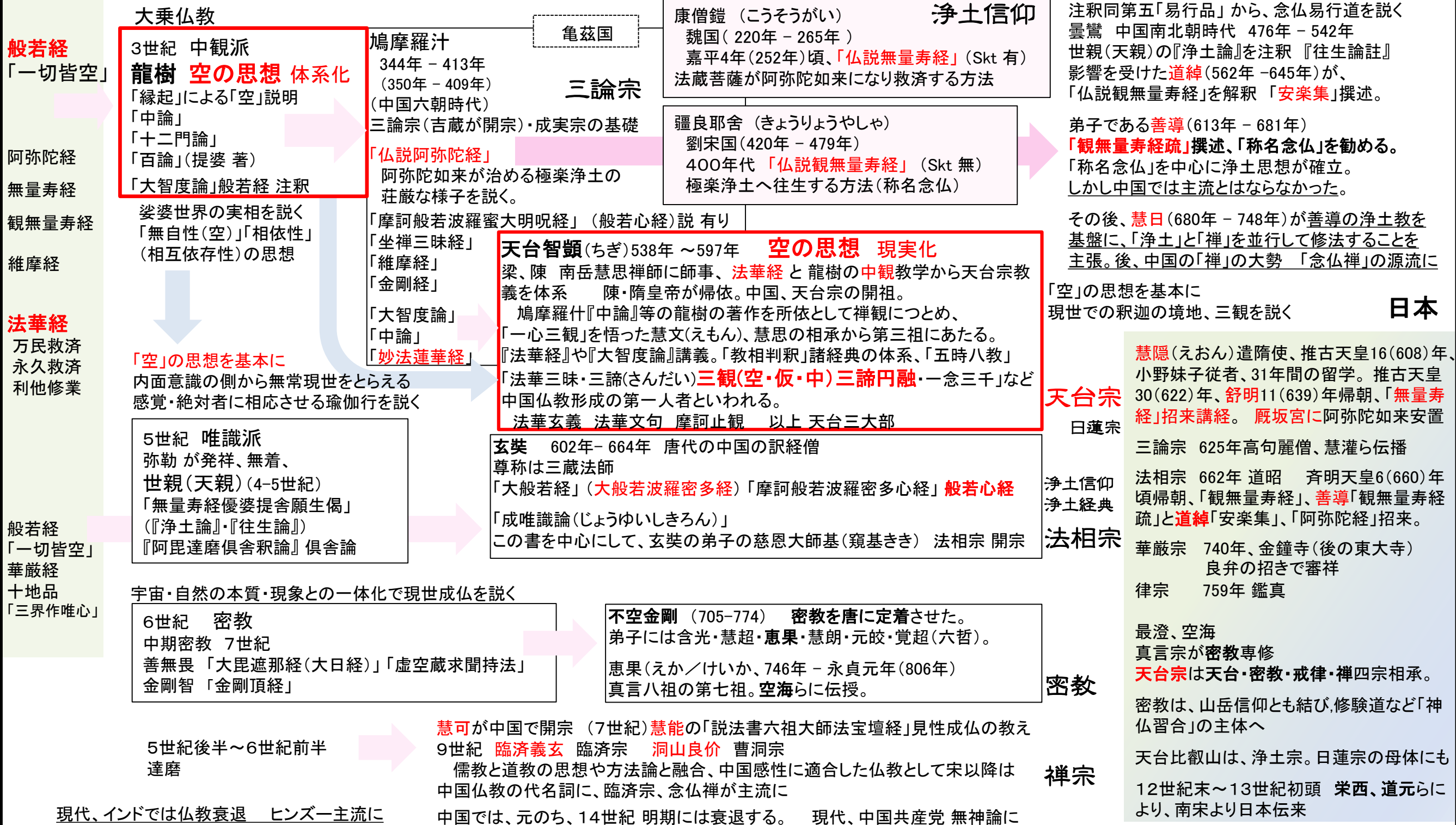
絹本着色
釈迦如来像
国宝 平安時代
神護寺
平安末期の仏画

仏教の原点は、苦からの脱却のため、因果の認識、教えと瞑想に集中する「出家」により、煩惱の消滅、「悟り」に至ることである。つまり「自分自身」の悟りを開くための上座部仏教が原初仏教である。しかし、食物の多くは在家の人々からの善意布施に依存、またその様な生活は一部の人々に限られるところに一種の矛盾がある。そのため「他の救済」までを目的とする大乘仏教が生まれた。苦を感じる原因が「十二因縁」、人生の真理(認識)が「四諦」、苦を消す涅槃への道(修業)が「八正道」である。現世の有り様が大乘仏教でいう「三法印」である。これらを基本に、現世の苦を「空の思想」で客観し、死の不安を背景に、現世での生き方や来世往生への方法を方便として説く。釈迦から伝承した言葉を、經典として記し、翻訳・解釈した。膨大な經典、解釈書、そこから誕生した多彩な仏、そして多様した宗派に混乱してはならない。**教えを伝える方便や目的で分派**しただけである。基本と全体をとらえて、何を学ぶかが重要である。

インド

中国

釈迦 紀元前7～5世紀 諸説有り。現世は苦とし、心の悩みを解決するため自己の内面から行う変革。基本「四諦・八正道 や 十二因縁の教義」苦悩をもたらす淵源を追求、「我あり」との妄執排除を説く。自己存在の問題について、現代の深層心理学を先取りする先見性がある。



「日本文化の基本原理」を 仮説し、歴史を辿りながら、その検証を試みている。 改めて、下図に概要を掲載する。（赤文字以外）
「**自然の法則・力**」を頂天とした体系は、古事記が語る初めの神「天之御中主神」と、その後の神々たちとの関係や、密教の自然の仏 大日如来と菩薩や四天王、不動などの明王、天部からなる関係と共通していることを見出した。 次に、「**循環思想**」で、古代の襖や祓や柱の文化、浄土信仰。「**和合思想**」では、古代の氏族習合、神々習合から神仏習合。「**現利思想**」では、自然神に願う恩恵、薬師と特に観音信仰、武家社会と禅との関係などが根拠である。そして、「和合と創造」の産物とし、神々・氏族習合から神仏習合、文字・物語・絵巻から習合建築、大和画から花鳥画などを創造した。

その「**三要素の均衡**」と、我が国と関係の深い思想との共通性を考えたい。 なぜなら、その原理、特性の「**均衡**」が**重要**と感じたからである。

例えば、仏教、**天台智顗**(ちぎ 538-597)の「**三諦円融**」。これはインド僧 **龍樹**が『般若経』の影響を受けて「縁起」「無自性(空)」を根幹に著した「**中論**」と「**法華経**」の影響を受けた思想である。この「三諦円融」は、「空仮中とされた三諦の調和、和合の思想」で、天台教義とし、また**日本天台宗は、浄土宗や禅宗、法華経からは日蓮宗を生みだす母体**となった。

釈迦は経典を残さず、口承から解釈、体系された。 古代インドの輪廻転生や解脱を基礎とし、それを**縁起**「因果論」で再編。 生存中の因果がもたらす苦の人生を、修業により、輪廻から解脱できるとした。 人生の苦の構造と除去の方法として**四諦**、さらに**八正道**で苦の克服を詳しく説いた。その因果の基礎状態を、「般若経」で「**空**」と表現し、固定的実体もしくは「我」のないことや、実体性を欠いていることを意味した。 そして、「空」の思想をさらに強調、発展させ「中論」を著わした人が、西暦100年代に誕生した**龍樹**である。

「中論」を漢訳した人は、現代中国の最西部、旧ソ連に近い新疆ウイグル自治区内に所在した亀茲(きじ)国の**鳩摩羅什**(350年頃～410年頃)である。 その「中論」を所依として禅観につとめ、「一心三観」を悟ったとされる中国南北朝時代の北齊の僧、天台宗初祖となる人が**慧文**である。 その孫弟子が中国天台宗の実質的開祖の**天台智顗**で、隋の皇帝煬帝(ようだい)も 帰依した。 ちなみに我が国は、煬帝在位中に**遣隋使**を4回派遣している。第二回遣隋使(607年)では、「日出處天子致書日没處天子無恙」(日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無しや)の有名な書き出しで始まる国書が倭王から送られ、東夷の島国の王が「天子」を称し、没落を意味する「日没處天子」という語句に煬帝は立腹した。しかし、当時、隋は高句麗遠征を控えて外交上倭国との友好関係を必要と判断、裴清を倭国へ派遣している。 あの**聖徳太子**の時代である。一方、**龍樹**と日本仏教との関係は強烈であり、八宗(大乘仏教)の祖師と称され、浄土真宗の七高僧の第一祖とされる。

インドの大乗仏教祖である龍樹の思想を、中国の天台智顗が、**より現実、実用的な思想に飛躍**させた。 なぜなら、当時の中国、漢国には北方胡族が侵入、南北朝といわれる乱世にあり、その梁の高官を父に持つ天台智顗は、梁、そしてのちには陳と二回の亡国に遭遇した。もはや**現実を直視**せざるえず、「空」を限定し、現実の「仮」を受け止め、そこから「中」を思想した。



龍樹像
奈良国博
平安時代

龍樹の「中論」

全ては、「無自性」(無我・**空**)であり、「仮名(けみょう)」「仮説・仮設(けせつ)」に過ぎない、事象的・概念的な「相互依存性、相対性」に注目した思想で「**縁起**」「無自性(空)」とした。龍樹の「中論」「十二門論」 提婆の「百論」の教えを中心とした論が、**三論宗**と呼ばれた。

天台智顗の「三諦円融」

「中論」と「法華経」から教義を体系「三諦」とは、「空諦」「仮諦」「中諦」の三つの諦(真理)である。「**空諦**」とは「一切皆空」の真理。 全ての存在は相互依存的で縁起的な存在であり、不滅の実体はなく、滅び去ってしまう。 そのことをしっかり認識していないと、我執に囚われて、煩惱の苦しみから逃れることは出来ない。しかし「空諦」に固着しすぎるのも問題で、全てが空で虚しいものだという思いに囚われて、物事の素晴らしさを味わい、生命の喜びを感じることができなくなってしまう。

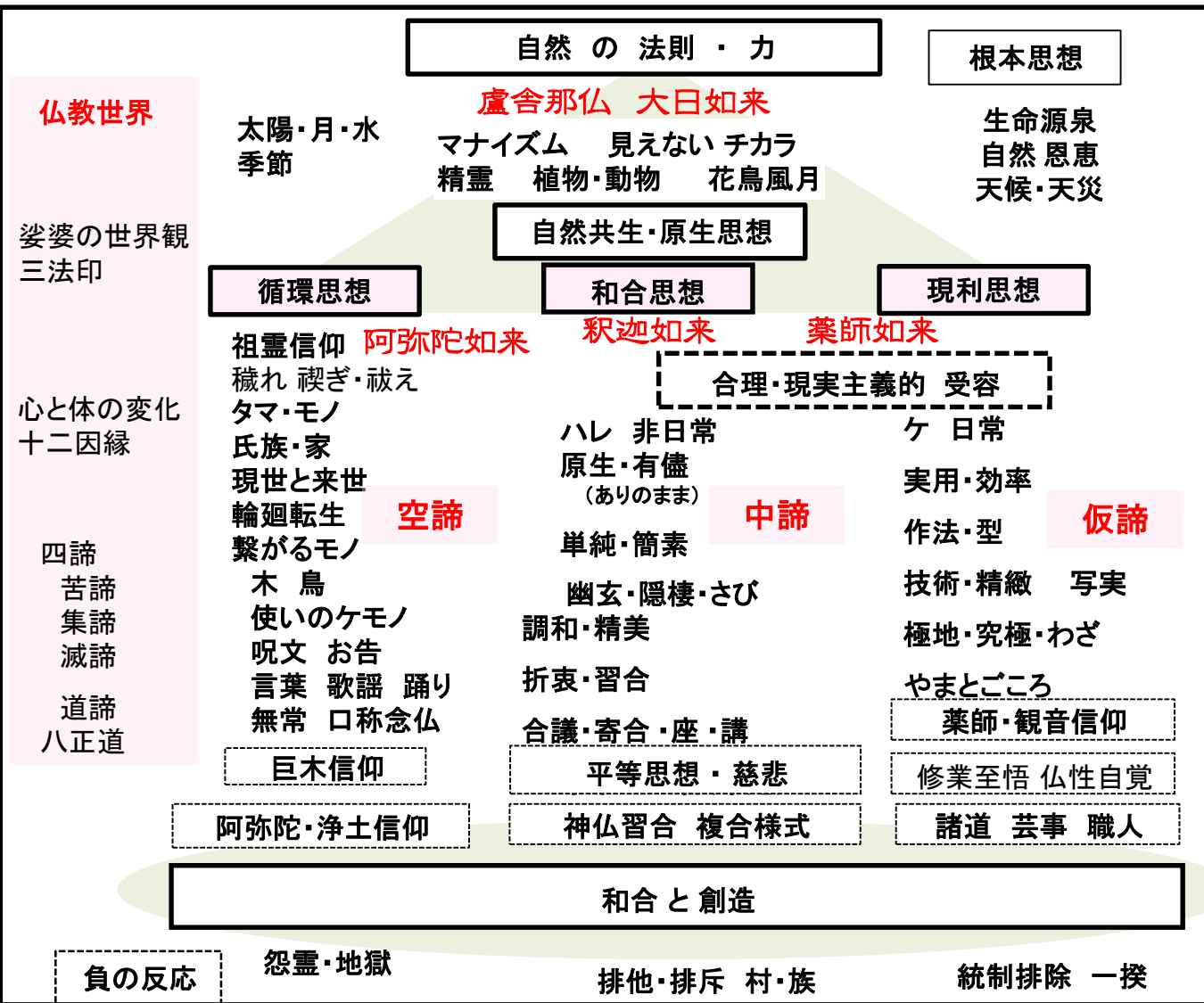
そこで智顗は、「**仮諦**」つまり全ての物事に法の現れを見出し、その素晴らしさを味わうことを正しいとする立場を取り上げた。 そうしてこそ、我々は生命の喜びを感じ取ることができる。 しかしまた、「仮諦」に固着しすぎると、物事が全て無常だという真理を忘れてしまい、我執に囚われるようになる。

「空諦」と「仮諦」のいずれにも固着しすぎないようにするのが正しいというのが「**中諦**」である。 またこれも固着しすぎるとバランスを取ることに気が取られてしまい、「空諦」も「仮諦」も中途半端になってしまう。 したがって、真理は、この三つの真理をそれぞれ限界づけ(＝批判)し、**調和的に融和**することが大切だと「三諦円融」の思想をとらえた。

つまり、日本文化の原理とした各思想とは、以下の通り、照合できる。「循環思想」は、「空諦」 因果で縁起し、具体化する輪廻を意識した 循環の世界「現利思想」は、「仮諦」 現実、生きて煩惱、苦楽を伴う事を意識した 現利の世界「和合思想」は、「中諦」 空諦と仮諦、循環と現利に偏重せず中庸を意識した 和合の世界日本仏教が、龍樹の「中論」を前提に、天台智顗 の「三諦円融」を受け入れ、他国では断絶したその**信仰を継承した理由**が、この一致にある。元来、その**思想を受容できる文化**なのである。そして、日本浄土信仰、禅宗、日蓮宗などを **創造した 原理**と考えざるえない。



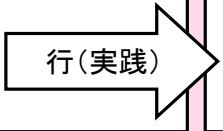
天台智顗像
一乗寺
(兵庫県加西市)
奈良国博寄託
11世紀



般若心経

「観自在菩薩」 観世音菩薩の別名 人々を苦難から救い出す存在
菩薩 悟り前の釈迦・仏教の修行者で教えを広める立場の呼称

行深 般若「(六)波羅蜜多」時
布施 パーラミター
持戒
忍辱
精進
禪定
智慧



照見「五蘊」皆「空」
(真理を極める)
色:物質
受:精神 以下同
想
行
識



度一切「苦厄」(救う)
生
老
病
死

「舍利子」 釈尊の二大弟子の一人(智慧第一) 弟子入り前からの親友「目連」(神通第一)と二大弟子

「色」不異「空」 形あるものは全て空
「空」不異「色」 しかし空は人間からは色として認識される
「色」即是「空」
「空」即是「色」

受想行識 亦復如是 精神面 これらも、主観的で変化する。また空である

是 諸法「空」相 すなわち全て「空」というあり方である

不生不滅
不垢不淨
不増不減
是故空中無色
無受想行識
無眼耳鼻舌身意
無色声香味触法
無眼界乃至無意識界 知覚や感覚にとらわれない

この世の実相 「空」の状態の説明

眼耳鼻舌身

無無明
亦無無明尽
乃至無老死
亦無老死尽
無苦集滅道
無智亦無得
以無所得故
菩提薩埵
依般若波羅蜜多故 般若波羅蜜多を知り、実践した

十二因縁

仏教の4つの真理 四諦(苦諦・集諦・滅諦・道諦)

心無罣礙(けいげ)
無罣礙故 無有恐怖(くふ)
遠離一切顛倒夢想 八顛倒をさけ中道
究竟(くぎょう)涅槃
三世諸仏
得阿耨のく多羅三藐三菩薩
是大神咒
是大明咒
は無上咒
は無等等咒
能除一切苦
真実不虛

悟りの状態

真言である説明

故説般若波羅蜜多咒 即説咒曰
羯諦 羯諦 波羅羯諦
波羅僧羯諦
菩提 薩婆訶
般若心経

真言の伝授

世の実相は、相互の縁起で成立ち、その縁起は無常で永遠に変化する。
本質は「空」であるが、互いの感覚としてその一瞬が「色」など五蘊 として認識される。
人々は「色」であることを理解し、執着せず、一方で正しいことに努め、我を超えた涅槃の境地になることで、苦から解放される。 そして救済者として菩薩を設定する。 と釈迦は説いた。

つまり、神は自然から発祥したが、仏は、人の救済のための教えのなかから発祥した。
その世界と仏は、浄土彼岸の如来として、現世での救済、菩薩として誕生する。
あくまで全体を空ととらえるが、魂の「循環思想」を背景とした、人間への教えが目的である。
その教えは、「現利思想」に包含できる現世論が中心で、浄土は方便として現世あるいは来世にあり浄土三部経を選択する人、また特定修行者だけでなく万民救済に法華経を重んずる人がいる。

大乘宗派の源となる「般若経」、その集成を玄奘が「般若波羅密多心経」の名で訳した。
以下に、「般若心経」小本(略本)を分解、釈迦の主たる教義で補足した。

空であることの認識と、捉われない心 が大切である。

この世の実相の説明

三法印 これが、この世の実相であるが、すべては空である (仏教の根幹)
この世で感知できるものは「色」、絶対的・固定的実体は存在しない
前提 「一切皆苦」 一切は皆苦であると知ること
「諸行無常」 常に変化する関係性・出来事
「諸法無我」 無数の「縁」が仮に和合した現象
「涅槃寂靜」 以上を認識した境地 やすらぎ

諸法実相 すべての存在・ありのままの姿をもっと深く理解させるために、縁起の角度から説かれた教えが「十二因縁」。
人間の肉体生成を十二種の法則(外縁起)に分類し、心の変化にも十二に分かれた因縁(内縁起)の法則があるという教え。
「縁起」(宇宙・人間が日々変化、生きていること) … 苦が生じるメカニズム
人間の肉体がどのような過程を経て生まれ、成長し、老死にいたるかということを、過去、現在、未来の三世にわたって、千変万化する人間の心のありさまを示す。
十二因縁の働き 龍樹中観派では、双方向的(相補的・相対的)な「相依性」(そうえしょう)として理解
1.無明(むみょう)⇔2.行(ぎょう)⇔3.識(しき)⇔4.名色(みょうしき)⇔5.六処(ろくしよ)⇔6.触(そく)⇔7.受(じゅ)⇔8.愛(あい)⇔9.取(しゅ)⇔10.有(う)⇔11.生(しょう)⇔12.老死(ろうし)

四諦 人生の真理 四苦八苦(しくはっく)を滅する方法を説く。

苦しみの解決策 悟りの状態

苦諦(くたい) 人間の歴史が始まって以来、暑さ寒さ・天災地変・飢饉・疫病・貧困・不仲・不安・老い・死等に対する苦しみがあり、人生は苦「生(しょう)・老・病・死・愛別離苦(あいべつりく)・怨憎会苦(おんぞうえく)・求不得苦(ぐふとつく)・五蘊盛苦(ごうんじょうく)」であることを諦(さと)る。
集諦(しつたい) 集というのは「集起(しゅうき)」の略で「原因」という意味。 欲望を必要以上に増大させ、貪りを増大させる思いや行為が、不幸を呼び起こす。 この原因を悟る方法として十二因縁の法門が説かれている。
滅諦(めつたい) この事から当然「心の持ち方を変えることによって、あらゆる苦悩は必ず消滅する。」ということになる教え。ただ捨て去ろう、解脱しよう、執着を断ち切ろうとすると、そのものへの心の引っ掛かりから苦しみを増大させてしまうので「道諦」の真理を説く。

道諦(どうたい) 釈尊は苦を滅する道について、本当に苦を滅する道は苦から逃れようと努力することではなく、以下の八正道(はっしょうどう) を説く。

- ・正しく物事を見る「正見(しょうけん)」
- ・正しく考え「正思(しょうし)」
- ・正しく語り「正語(しょうご)」
- ・正しく行為し「正行(しょうぎょう)」
- ・正しく生活し「正命(しょうみょう)」
- ・正しく努力し「正精進(しょうじょうじん)」
- ・正しく念じ「正念(しょうねん)」
- ・正しく心を決定させる「正定(しょうじょう)」

「般若波羅密多心経」
『大般若波羅蜜多経』(『大般若経』)及び『摩訶般若波羅蜜経』(『大品般若経』)からの抜粋に『陀羅尼集経』(7世紀頃)に収録されている陀羅尼(Skt:dhāraṇī)を末尾に付加したものである。
般若経典群のテーマを「空」の1字に集約して、その重要性を説いて悟りの成就を讃える体裁をとりながら、末尾に付加した陀羅尼によって呪術的な側面が特に強調されている。日本の宗派では、浄土真宗、日蓮宗・法華宗以外、多く唱えられている。

仏教は、我が国になにをもたらしたか？ どんない役割を期待されたのか？ 治世者や民衆が、神、祓えの儀式で満ため、疫病・死の救済を見える憧憬「仏像」に求める過程。古来、神とされたモノは、山、海、水たち自然。そして精霊、開拓者の祖霊、首長霊たちである。 神の中に異なる側面があり、和魂(にぎみたま)、幸魂(さきみたま)と奇魂(くしたま、くしみたま)、荒魂(あらみたま)。 例えば、淡海 日吉大社では、東本宮に、大山咋神の和魂と、鴨玉依姫神の和魂が、そして八王子山の磐座には、各々の荒魂が祀られている。日本書紀によれば、神託を得た**神功皇后**は、熊襲、隼人など大和朝廷に反抗する部族と、その背後の三韓を征討に向かった。 このとき、**住吉大神の荒魂**は突風となり船団を後押し、三韓の軍を苦しめた。高句麗「高太王の碑」から390年頃の史実との説。 日吉大社対岸の三上山 山麓の御上神社祭神 天之御影命は息長氏の祖神 本拠の地。

日本書紀原文 既而、神有誨曰「和魂服王身而守壽命、**荒魂**爲先鋒而**導師船**。」和魂、此云珥岐瀾多摩。**荒魂**、此云**阿邏瀾多摩**。即得神教而拜禮之、因以依網吾彥男垂見、爲祭神主。于時也、適當皇后之開胎、皇后則取石插腰而祈之曰「事竟還日、産於茲土。」其石今在于伊都縣道邊。既而則擣**荒魂**、爲軍先鋒、請和魂、爲王船鎮。

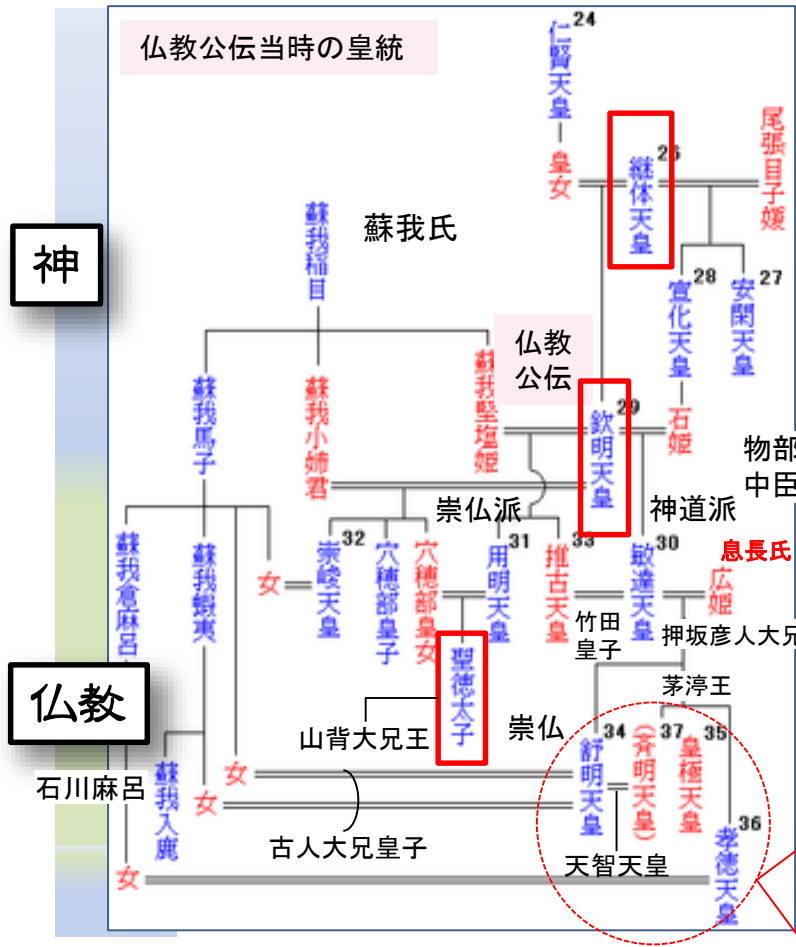


宇佐八幡宮祭神は、**八幡大神**であり、応神天皇のご神霊とされる。 527年、磐井の乱 562年、任那日本府滅亡。 社伝では、欽明天皇32年(571年)ご示顯とされる。 欽明天皇(生509～在位539～571没)仏教渡来・崇廃抗争、内憂外患の時代。 その子息、敏達天皇(538～585)には、淡海の**息長**真手王の広姫が迎えられた。 八幡神の神霊 応神天皇の母も息長氏、**息長帯比売命**である。 宇佐の地は大和や出雲との要地である。 神代に比売大神(海神、宗像三神)が降臨と『日本書紀』に記され、八幡神が現われる以前の古い神、地主神として祀られ、崇敬された。 そして713年、大隅国設置に際して隼人反乱。 その和銅年間(708-715) 宇佐八幡宮の社殿が創建される。

以上、**神**が、その役割を**武神**に比重していく過程である。 その荒神、荒魂や、神力により滅んだ**魂を弔う主体が求められた**。 そして、その役割は**仏**に託された。

飛鳥での諸氏氏寺を経て、法隆寺創建。 薬師寺、當麻寺 そして平城の諸寺創建 国分寺・国分尼寺、法華寺のあとの東大寺に至る 約150年。 徐々に盆地を北上 「治世者の仏」から「**民衆の仏**」、「鎮魂・放生の仏」から「**現世救済の仏**」に浸透 惠我藻伏崗陵(えがのもふしのおかのみささぎ)」として、第15代応神天皇の陵に治定されている地は、倭と、外交の湊 河内難波とを 二つで結ぶ。 一方は大和川で、**法隆寺**の斑鳩と、一方は石川・飛鳥川と竹内街道で**當麻寺**と結ぶ 合流地点である。

仏は、神仏習合の発祥となる宇佐の地から、瀬戸内を経て、応神神霊の眠る地で別れ、「鎮魂の役割」と、「現世利益と極楽浄土の役割」を、期待されることになる。
和合思想が鎮魂者を求め、習合した仏に、循環思想と現利思想を反映、文化を創造する



金蔵寺
本尊 **千手観音** 718年
元正天皇の勅、
行善(隆豊禪師) 開創
ふもとの「勝持寺」
679年 **役小角** が開山

岩間山 正法寺
本尊 **千手観音** 722年
泰澄、元正天皇の病を
法力で治し褒美の建立

聖武天皇・光明皇后
741年(天平13年)
国分寺・国分尼寺に
法華経設置
観音信仰
悲田院、施薬院
745年 法華寺
本尊 **十一面観音**

神

大己貴神

上賀茂神社 造営

伊勢神宮 齋宮 制度化

天照大御神

興福寺 創建 釈迦如来 法相宗

仏教

玄昉

春日大社 創建 武甕槌命

神道

道鏡

仏教重視と反省
經典と仏像 神と仏の具体性を必要とした、しかし宇佐八幡宮神託事件以後、桓武天皇が僧侶の政治関与の排除や財政再建のため寺院統制や封戸削減

630年 遣唐使 開始

645年 乙巳の変 大化の改新

659年(齊明天皇5年) **出雲国造**に命じて「神之宮」を修造。『日本書紀』

663年 白村江の大敗

680年 薬師寺 681年 當麻寺

694年 新益京

710年 平城京

716年 出雲大社

720年 隼人の乱

729年 長屋王の変

737年 藤原4兄弟病死

745年 法華寺

752年 東大寺

778年 法華寺 本尊 **十一面観音**

781年 慶俊、和氣清麻呂に勅、愛宕山中興 **五寺創建**

789年 長岡京遷都 藤原種継が桓武天皇に提唱。母は秦朝元娘。

794年 平城京遷都

806年 延暦天皇

810年 桓武天皇

824年 嵯峨天皇

842年 弘仁天皇

850年 孝徳天皇

868年 天智天皇

876年 天智天皇

884年 天智天皇

892年 天智天皇

900年 天智天皇

908年 天智天皇

916年 天智天皇

924年 天智天皇

932年 天智天皇

940年 天智天皇

948年 天智天皇

956年 天智天皇

964年 天智天皇

972年 天智天皇

980年 天智天皇

988年 天智天皇

996年 天智天皇

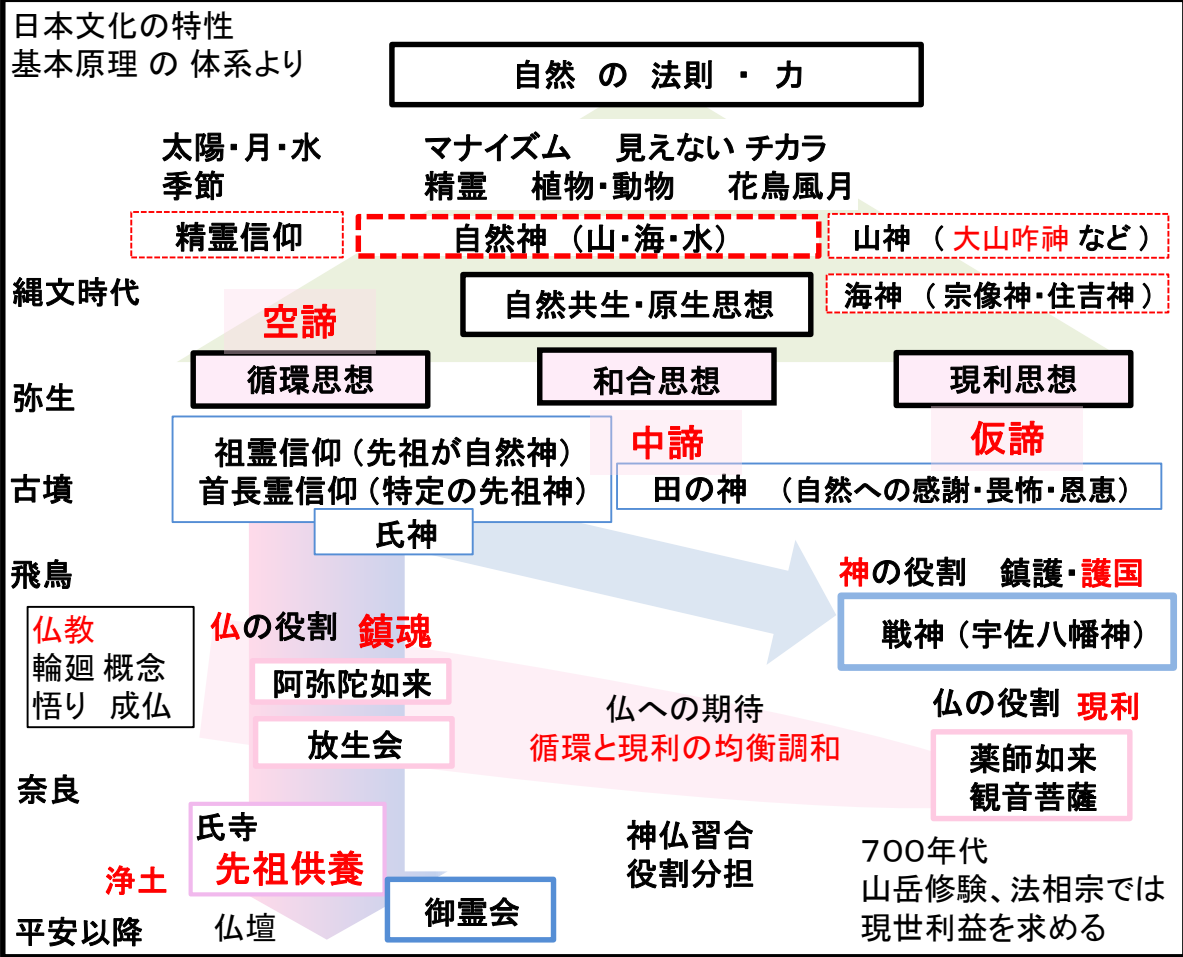
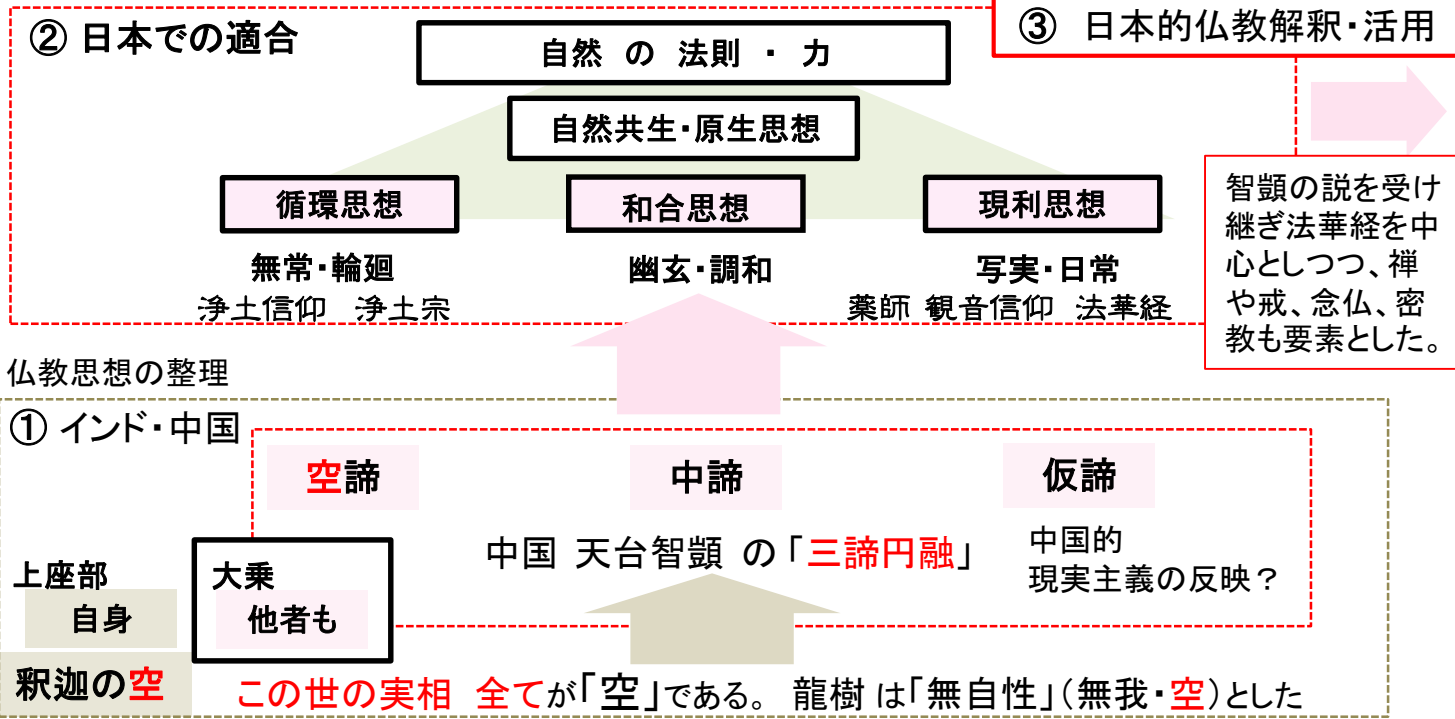
飛鳥は、今日まで続く **仏教の日本的解釈、活用と、そして 国防・国家意識発祥の時代**である。 崇峻天皇5年(592年)推古天皇即位、飛鳥豊浦宮から元明天皇期の和銅3年(710年)までを示す。その前は、古代から続く神への信仰を背景にした首長権威の時代であった。 箸墓古墳、神功皇后、応神天皇から始まる大和の首長を、大型古墳として表現した約350年間。 のちに記紀では、冒頭で神話とつながり、史実に変化していく 神の時代 である。 また中国や朝鮮半島の戦乱の関係で多くの渡来人を受け入れ、後期には継体天皇の皇子、欽明天皇の時に 仏教が公伝した。飛鳥の次は、平城京、一般には奈良時代。 元明天皇から桓武天皇の遷都までの間、仏教と国家制度としての律令政治が、我が国の内部で変化を始める。 **神仏習合**と土地所有についての墾田永年私財法である。 平安京において、「神仏習合」は神像、特に神社建築に影響、「墾田永年私財法」は荘園の拡大に繋がり、律令制度の崩壊や 貴族と武家の勢力交代 にまで遠因する。古墳と奈良時代の狭間にある**飛鳥時代**は、白村江での大敗を経験し、危機意識からも国家としての内制を整える時である。 そして、**神仏共存の模索の時**である。この時代、まず神の坐ます場所や祀る者が整えられた。 日本書紀は、斉明天皇5(659)年、出雲国造に命じて「神之宮」を修造させた、と記する。 天武天皇期には、伊勢神宮の斎宮を制度化した(壬申の乱の戦勝祈願の礼『扶桑略記』)、以後、南北朝時代まで続く。 また上賀茂神社造営も天武天皇7(678)年である。 では仏教、仏についてはどうか？

本来、仏教はこの世において、苦から脱却する修業、悟りをとく教えである。その延長に、煩惱を克服した先の浄土という夢を説いた。 浄土への注目も、仏教がインドから中国に伝わったあとのこと。だが、それは、**自分自身がおこなう「空」の認識、そして「自分で観想する浄土」**であった。 ここで**重要なこと**は、我が国で根付いた「他者の鎮魂」「自らの氏寺、先祖供養」とは違うということである。500年代中頃とされる公伝から間もない日本、飛鳥時代の仏教において、「**自分で観想する浄土**」から、「**他者の鎮魂**」、「**自らの氏寺、先祖供養**」に拡大、定着する。 そして仏教としての「**先祖供養**」は江戸時代の檀家制度から民衆に普及し、現代に伝わる「**仏壇**」にまで繋がる。平安時代の貴族の持仏堂や、室町時代、浄土真宗の蓮如が布教で配布した「南无阿弥陀仏」の掛軸も、仏壇普及の起源とされる。自ら関与した死者には「**鎮魂**」、病などで倒れた身内には「(回復祈願) **供養鎮魂**」を求める思い。この信仰、思想こそ、**日本的な仏教解釈**の変容、拡大である。それは何がもたらしたか？それまでの神、自然の精霊、祖霊・皇祖霊の殯(モガリ)、穢・禊、魂振など 魂の「**循環思想**」だと考える。 神における皇祖神、氏神の思い、信仰が、仏にも氏寺を誕生させる。その背景には、**神の変遷**がある。 農耕・漁撈・狩猟に関わる田の神、そして祭司、支配のための神、朝鮮半島や反倭勢力に対抗し、争乱から誕生した宇佐の八幡神。**戦いの神**への変遷・拡大である。その戦う神が誕生した時、神の概念は、自然世界を前提とする古代の精神から、徐々に現実的、具体的な役割に移行した。(古墳時代、熊襲・三韓征討の神功皇后、戦勝祈願から710年隼人の乱)

(他者の)「(怨霊)鎮魂」については、物部守屋死後の四天王寺、聖徳太子の死後に再建された法隆寺。 蘇我倉山田石川麻呂の死後に完成した山田寺も天智天皇2年(663年)塔の建設開始され、同様に「怨霊鎮魂」だが、孫の持統天皇による「供養鎮魂」の意義もある。別名も「浄土寺」とされる。これらは いずれも「(怨霊) 鎮魂」草創期の寺院である。 宇佐八幡などの神宮寺に繋がる。「自らの氏寺、先祖供養」は、蘇我氏の「法興寺」(のちの飛鳥寺)から始まり、宗派の本山などは別として、しだいに この目的が寺院創建の主になっていく。京都「**広隆寺**」も同様である。『書紀』によれば、推古天皇11年(603年)聖徳太子拝領の仏像を拝みたてまつるため、『広隆寺縁起』『広隆寺資財交替実録帳』縁起では、推古天皇30年(622年)同年「死去した聖徳太子**供養**のために、秦河勝が「蜂岡寺」として建立された」ともあるが、秦氏の氏寺となった。天智天皇も、母 **斉明天皇の鎮魂供養**のため、668年「崇福寺」、670年頃の「川原寺」、そして671年までに大宰府の「観世音寺」を建立発願したとされる。「山階寺」は、本来、神事・祭祀を司る中臣氏、その鎌足の病に際し、669年夫人が建立した。天武天皇元年(672年)藤原京に移り、地名から厩坂寺に、平城京では法相宗「興福寺」、藤原氏の氏寺となる。 藤原氏の仏教支配の起源となる寺院は、この飛鳥時代に起源する。 また、当麻氏氏寺の「當麻寺」がある。

白鳳14年(西暦685年)3月27日、**天武天皇**が「諸国の家毎に**仏舎**(ほとけのおおとの)を作り、乃ち仏像(ほとけのみかた)及び経を置きて以て**礼拝供養**せよ」との詔を出した。今の「仏壇」 草創起源となる。

日本では、釈迦の、この世全てが「**空**」である とする仏教元来の思想より、**天台智顗「三諦円融」の 現実的思想の方が適合**、その結果、仏教が定着、神仏習合した。 空海の真言密教、浄土宗の口称念仏、日蓮宗の立正安国論、町衆の法華門徒が誕生した理由でもある。



神が自然神から祖霊神、皇祖神となり、武神に比重していく状況下、その神の禊、神力に祈願して犠牲となった人々への鎮魂者を求めた。荒魂が主となった神にはその役割は期待しづらい。

では、鎮魂を担うことができ、崇らないものは何か？
当時、その聖徳太子や蘇我氏によって我が国に浸透した仏である。その証として「**放生の儀式**」「**浄土信仰起源**」の**記録** がある。
では**なぜ、人々は鎮魂をもとめたのだろうか？**
それは、古代からの魂再生循環の思想が継承されていたからである。
やがて、インドや中国では仏教、浄土信仰は衰退していくが、我が国で定着、浄土宗派として近代まで継承された理由、それは、**古代からの「循環思想」**が基礎に存在したからだ。「文化思想原理」の中で、重要な「循環」は、新たに渡来した仏が担う。

「放生の儀式」について、『聖徳太子伝暦』は、敏達天皇の7(578)年に六斎日に**殺生禁断**を畿内に令したり、推古天皇19(611)年に聖徳太子が天皇の**遊獵を諫した**と伝える。天武天皇5(677)年8月17日、諸国へ詔を下し**放生**を行わしたと日本書紀に記される。『続日本紀』天平勝宝3（751）年、聖武天皇の時代には**放生**により、病を免れ寿命を延ばすとの意義が明確にされた。

「浄土信仰起源」として、經典の伝来、講経や仏像、仏画が、600年から700年にかけて記録されている。
慧隱（えおん）は遣隋使として、推古天皇16(608)年、小野妹子に従って学僧の旻（みん）、南淵請安らと共に渡り、31年間の留学。推古天皇30(622)年の太子没後、**舒明天皇**11(639)年に帰朝、「**無量寿経**」を招来した。
舒明天皇 **640年 厩坂宮に阿弥陀如来を安置し、無量寿経**講経。
また、孝徳天皇 652年の難波長柄豊碕宮 **内裏でも無量寿経**を講経した、と「日本書紀」は伝える。
道昭は、白雉4(653)年、遣唐使として、玄奘三蔵に師事して法相教学を学んだ。
齐明天皇7(661)年頃に帰朝、「観無量寿経」と、当時まだ存命であった**善導**の注釈「観無量寿経疏」と**道綽**の注釈「安楽集」、そして「阿弥陀経」を我が国にもたらした。
飛鳥寺一隅に禅院を建立して住み、日本法相教学の初伝となる。679年、天武天皇の勅命で **往生院(泉南市)**建立。晩年は全国を遊行、土木事業を行った。

その間、622年の太子没に際し、妃の橘大郎女の願による「天寿国曼荼羅繡帳」(中宮寺所蔵)、太子の往生世界を紡いだ現存、日本最古の刺繡である。竹内理三 著「寧楽遺文」(ならいぶん)は、当時の文書から、齐明天皇4(658)年と翌年、**金剛阿弥陀仏像**の存在と、現生福德と恒生浄土、亡者菩提の祈願の様子を記録している。
700年初頭の再建と考えられている**再建法隆寺、その金堂壁画の「阿弥陀浄土図」**。
天平5(733)年没の光明皇后の母、橘夫人の持念仏は阿弥陀三尊と、阿弥陀・浄土への思いは顕著になってくる。
興福寺では、その資材帳に、淳仁、光仁、桓武期の阿弥陀・観音造像増加を記録、天平宝字4(760)年光明皇太后法事で、阿弥陀仏に追福祈願され、「称讃浄土経」が二千枚近く写経された。
『続日本紀』によれば、**法華寺**内に、天平宝字3年(759年)に建立された、丈六の阿弥陀三尊像を本尊とする**阿弥陀浄土院**で、天平宝字5年(761年)、光明皇太后の一周忌が営まれている。
阿弥陀仏への礼拝は毎年の法要で継続され、また全国の国分尼寺に阿弥陀三尊像を祀らせた。
これら一連の記事は光明皇太后や当時の阿弥陀、欣求浄土の信仰を充分に裏付ける。
正倉院文書からも、平城京での阿弥陀経、無量寿経の經典書写が増加、写経された經典の中で最多であると伝える。

この時代、元興寺智蔵に師事した三論宗の**智光**がいる。
浄土信仰と三論宗は、共に龍樹の「十住毘婆沙論」「易行品」に源流する。
中国三論宗の**吉蔵**も「無量寿経」など浄土関係經典を撰している。
智光は、曇鸞の「浄土論註」、世親の「浄土論」を註釈した「無量寿経論釈」などを著述し、のちに平安浄土信仰において、良源、源信「**往生要集**」などに引用され、我が国の観想念仏の典拠となった。
学友頼光の阿弥陀仏の浄土往生の夢告で浄土信仰に入り、その様子を描いた**智光曼荼羅**は、元興寺の極楽坊に所蔵されている。
法相宗からは、**善珠**が「無量寿経」註釈など多くの著述を残している。善珠は、養老7(723)年から延暦16(797)年に生き、**玄昉**に師事して法相・因明に通じた。793年(延暦12年)比叡山文殊堂供養の堂達を、翌794年(延暦13年)には延暦寺根本中堂落慶の導師をつとめた。796年(延暦15年)桓武天皇の命により故物部古麻呂のための法華経供養の導師となり、平城から平安に浄土信仰を繋いだ。

東大寺阿弥陀院、興福寺・多度神宮寺の「**阿弥陀悔過**(けか)」の記録もある。「悔過」は、仏教において、三宝に対して自ら犯した罪や過ちを悔い改め、同時に利益を得ることを目的とする儀式・法要などの行事で、薬師・十一面観音・吉祥などにも祈願された。
阿弥陀仏への礼拝は、没者の鎮魂に比重しつつ、自己の懺悔、生前からの往生祈願、現世の利益祈願へと、観想による信心を表現した。
慧隱、三論宗の智光、法相宗の道昭や善珠たちは、主として学んだ宗や寺院は違うが、時代が仏に求めてきた鎮魂、浄土への思想を、經典から撰集し、仏の姿を刻ました。

まさに、**神が現利的に武神に比重する中、仏に死者の弔い、鎮魂を求めていく過程である**。
その背景には、国内の皇統継承と勢力争い、物部氏と蘇我氏や藤原氏の抗争、隼人の乱があり、海外とは遣隋遣唐、白村江の大敗の外交から、壬申の乱での再びの国内混乱がある。
藤原不比等没後は、**藤原4兄弟病死、女帝**と玄昉、道鏡といった、仏僧の政治問題にまで、仏の存在が高まる。



わが国最古 阿弥陀三尊像「山田殿像」
東京国立博物館 所蔵 600年代作

左右脇侍の宝冠にそれぞれ観音を示す化仏と勢至を示す水瓶が表わされる。
中国の北斉から隋にかけての仏像の様式、像全体のもつ大らかで瑞々しい気分は白鳳彫刻の本領。
台座背面に刻まれた「山田殿像」銘から、蘇我倉山田石川麻呂や山田寺との関連が想起されるが不明、しかし関係を否定するものは無い。

「日本書紀」欽明天皇(繼体天皇嫡子)に、百済の聖明王が、釈迦像をもたらす 欽明天皇13年（552年）
仏教公伝 主説:戊午年 538年（548年説有り）
「上宮聖徳法王帝説」「元興寺縁起」
587年 **丁未の乱「崇仏派」**蘇我氏勝利 物部氏衰退
飛鳥仏教 592～710年

法興寺（蘇我氏寺）のちの**飛鳥寺**
用明天皇2(587)年 蘇我馬子建立発願
本尊 釈迦如来(飛鳥大仏)
推古14年(606年)日本書紀より 主説：日本最古仏609年
奈良へ分離移築後、元興寺…弥勒像
四天王寺 593年 創建開始
『三経義疏』 聖徳太子 注釈書 611～615年
『**法華経**』観音菩薩 『勝鬘経』『維摩経』

法隆寺 若草伽藍 本尊623年(伝607年)
622年、聖徳太子没
百済大寺(初の官営)(高市大寺)→**大官大寺**
舒明天皇11年（639年）起源は、聖徳太子が 現大和郡山市に 建てた 熊凝精舎(くまごりしょうじゃ) 旧本尊 釈迦如来像(金堂)
641年、蘇我石川麻呂 **山田寺** 建立開始
643年、蘇我入鹿による山背大兄王一族襲撃、法隆寺で自害
645年、乙巳の変 藤原鎌足 中大兄皇子 蘇我入鹿を討つ。
649年 蘇我石川麻呂 中大兄皇子により山田寺**金堂前で一族自決**

663年 白村江の大敗
山階寺 669年 中臣鎌足夫人 飛鳥に移築後は 厩坂寺
川原寺 670年頃 天智天皇による母、齐明天皇鎮魂
崇福寺、観世音寺も発願
薬師寺 680年 天武天皇 法相宗 道昭、義淵
當麻寺 681年 当麻氏寺 浄土の地
法隆寺 再建 700年初頭再建開始
奈良仏教 710～794年
南都七大寺 *（* * 飛鳥 から 移築寺院 ）
法隆寺、もしくは唐招提寺を含める *****

元興寺(* * 飛鳥寺を分離)極楽房 智光曼荼羅
大安寺(* * 大官大寺)十一面観音(本堂)
薬師寺(* *) 薬師如来像(金堂) 法相宗
興福寺(* * 厩坂寺)藤原氏 釈迦如来 (金堂)
法隆寺 *****(創建地再建)釈迦如来 (金堂)
720年、藤原不比等没
740年(天平12年)大宰府赴任に不満した藤原広嗣が挙兵

『国分寺・国分尼寺建立の詔』741年

法華寺 745年 十一面観音(本堂)光明皇后
759年 阿弥陀浄土院
新薬師寺 747年 薬師如来像(本堂)
東大寺* 752年 盧舎那仏 華嚴宗
唐招提寺* 8世紀末 律宗(金堂)
盧舎那仏(釈迦の本地仏)
西大寺* 765年 釈迦如来 (金堂)

記紀 と 仏教

『古事記』と『日本書紀』の違いについては、様々の指摘がある。『記』は造化三神から始まるが、『紀』本文は、国常立尊ら純男である三神から始まる。また、『記』の漢文式和文体に対する『紀』の漢文体などが、分かりやすい事例である。そのような違いの中で、最も重要な点は、『古事記』には、**仏教の記述が無い**ことである。

『記』は雄略天皇あたりまで詳しく、以降は、簡便ではあるものの推古天皇までを記す。しかし『紀』にある、欽明天皇や敏建天皇、推古天皇期の「仏教」に関連する記述は『記』に無い。『紀』で盛んに記録される、推古天皇期の聖徳太子も登場しない。

もうひとつの重要は、『紀』にある**崇峻天皇の暗殺事件**が『記』に書かれていないことである。

つまり、『古事記』は、仏教などが明確に影響する以前の、我が国古代文化を表現しているとともに、天皇家の一系を普遍化する内容である。上田正昭先生『私の日本古代史』で、天照大御神以来の「世つぎ」の史書とされている通り、日本人の**血脈**への価値観が表現されているものが『古事記』である。

日本書紀

欽明天皇　552年

冬十月、百濟聖明王更名聖王、遣西部姬氏達率怒唎斯致契等、獻**釋迦佛金銅像**一軀・幡蓋若干・**經論**若干卷。別表、讚流通禮拜功德云「是法、於諸法中最爲殊勝、難解難入、周公・孔子尚不能知。此法、能生無量無邊福德果報、乃至成辦無上菩提。譬如人懷隨意寶・逐所須用・盡依情、此妙法寶亦復然、祈願依情無所乏。且夫遠自天竺爰泊三韓、依教奉持無不尊敬。由是、百濟王・臣明、謹遣陪臣怒唎斯致契、奉傳帝國流通畿内。果佛所記我法東流。」

敏達天皇　578年

六年春二月甲辰朔、詔置日祀部・私部。夏五月癸酉朔丁丑、遣大別王與小黑吉士、宰於百濟國。王人奉命爲使三韓、自稱爲宰。言宰於韓、蓋古之典乎。如今言使也、餘皆倣此。大別王、未詳所出也。冬十一月庚午朔、百濟國王、付還使大別王等、獻**經論**若干卷、并律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造佛工・造寺工、六人。遂安置於難波大別王寺

推古天皇　594年

二年春二月丙寅朔、詔皇太子及大臣令興隆**三寶**。是時、諸臣連等各爲君親之恩競造**佛舍**、即是謂**寺**焉。

推古天皇　604年　十七条憲法

二曰。篤敬**三寶**。三寶者佛法僧也、則四生之終歸萬國之極宗。何世何人、非貴是法。人鮮尤惡、能教從之。其不歸三寶、何以直枉。

推古天皇　606年

秋七月、天皇、請皇太子令講**勝鬘經**、三日說竟之。是歲、皇太子亦講**法華經**於岡本宮、天皇大喜之、播磨國水田百町施于皇太子、因以納于斑鳩寺。

この時代　三経義疏

『**勝鬘経**義疏』『**維摩経**義疏』『**法華経**義疏』の総称。聖徳太子の撰述とされ、上宮御製疏ともいう。成立年代は『上宮聖徳太子伝補闕記』によると、推古天皇17年(609)から同23年までの7年間に、相ついで作成されたと伝える。

日本書紀

舒明天皇　640年

十二年春二月戊辰朔甲戌、星、入月。夏四月丁卯朔壬午、天皇至自伊豫、便居廐坂宮。五月丁酉朔辛丑、大設齋、因以請**惠隱**僧令説**無量壽經**。冬十月乙丑朔乙亥、大唐學問僧清安・學生高向漢人玄理、傳新羅而至之、仍百濟・新羅朝貢之使共從來之、則各賜爵一級。是月、徙於百濟宮。

皇極天皇　642年

秋七月甲寅朔壬戌、客星入月。乙亥、饗百濟使人大佐平智積等於朝。或本云、百濟使人大佐平智積及兒達率　闕名・恩率軍善。乃命健兒、相撲於翹岐前。智積等、宴畢而退、拜翹岐門。丙子、蘇我臣人鹿豎者、獲白雀子。是日同時、有人、以白雀納籠、而送蘇我大臣。戊寅、群臣相謂之曰、隨村々祝部所教、或殺牛馬、祭諸社神。或頻移市。或禱河伯。既無所效。蘇我大臣報曰、可於寺々轉讀**大乘經典**。悔過如佛所説、敬而祈雨。庚辰、於大寺南庭、嚴**佛菩薩像**與**四天王像**、屈請衆僧、讀**大雲經**等。于時、蘇我大臣、手執香鑪、燒香發願。辛巳、微雨。壬午、不能祈雨。故停讀經。

孝徳天皇　651年

冬十二月晦、於味經宮請二千一百餘僧尼使讀**一切經**。是夕、燃二千七百餘燈於朝庭内、使讀安宅・土側等經。於是、天皇從於大郡遷居新宮、號曰難波長柄豐碕宮。孝徳天皇　652年夏四月戊子朔壬寅、請沙門惠隱於内裏、使講**無量壽經**、以沙門惠資爲論議者、以沙門一千爲作聽衆。丁未、罷講。自於此日初連雨水至于九日、損壞宅屋傷害田苗、人及牛馬溺死者衆。

天武天皇　673年

三月丙戌朔壬寅、備後國司、獲白雉於龜石郡而貢。乃當郡課役悉免、仍大赦天下。是月、聚書生、始寫一**切經**於川原寺。675年　冬十月辛未朔癸酉、遣使於四方、覓**一切經**。676年　十一月乙丑朔、以新嘗事、不告朔。丁卯、新羅、遣沙湊金清平、請政。并遣汲湊金好儒・弟監大舍金欽吉等、進調。其送使奈末被珍那・副使奈末好福、送清平等於筑紫。是月、肅愼七人、從清平等至之。癸未、詔近京諸國而放生。甲申、遣使於四方國、説**金光明經**・**仁王經**。677年　秋七月辛酉朔癸亥、祭龍田風神・廣瀨大忌神。八月辛卯朔乙巳、大設齋於飛鳥寺、以讀**一切經**。

680年

五月乙亥朔、勅、絶綿絲布以施于京内廿四寺各有差。是日、始説**金光明經**于宮中及諸寺。

681年　　閏七月戊戌朔壬子、皇后、誓願之大齋、以説**經**於京内諸寺。

685年　　壬申、詔、諸國每家作佛舍、乃置佛像及**經**、以禮拜供養。

以下、誦經・**金剛般若經**・**藥師經**　（の記事）

持統天皇期

天皇世作佛殿經藏　・　誦經　・　講説金光明經　・　講仁王經、**金光明經**一百部送置諸國、・　勅旨、緣讀**金光明經**　・　詔讀**經**於京畿諸寺

聖徳太子の建立と言われる寺院は多いが、確実なものは二寺とする説もある。 その、四天王寺 と 法隆寺 について考えてみたい。その二寺には、共通する目的と、信仰・思想があると考える。 その手掛かりは、時代を遡れば、古代のハレ・ケ 穢・禊、タマ・モノ 、殯(モガリ) 魂振に表現された**「循環思想」にある**。 そして、時代を進めれば、700年代から歴史に登場する神仏習合であり、その**靈魂信仰**への思いは、天武天皇5(677)年を初見とする**「放生会」**(日本書紀)。 そして平安時代 貞観5 (863)年、神泉苑での**「御霊会」**、今日まで、祇園祭、上御霊神社と下御霊神社、北野天満宮にまで伝わる**「怨霊鎮魂」**である。

法隆寺建立(**再建**)の目的、「鎮魂」は、梅原猛の「隠された十字架」に詳しい。 その結論は、**643年**、蘇我入鹿による襲撃、法隆寺で自害した太子の子、山背大兄王一族に対する **敏達天皇の皇族と藤原一族による鎮魂、怨霊封じ**とする。 山背大兄皇子一族襲撃において蘇我氏主導を疑問視し、事件の背景に、軽皇子(のちの孝徳天皇)と、実行者として側近の**巨勢徳太**、そして藤原氏自身の「藤氏家伝」で、軽皇子と親しい交流を記し、政治顧問でもあった**藤原鎌足の関与**を指摘する。 この悲劇で、**用明天皇の子**、聖徳太子の**系統は断絶**した。 推古天皇の皇位継承で、山背大兄王に勝ったのは、**蘇我蝦夷と強い姻戚関をもっていた田村皇子、舒明天皇**であった。 その皇后、皇極天皇の皇位継承をめぐり、また、山背大兄王に対抗し蘇我氏は古人大兄皇子を擁立しようとし、そして事件が勃発した。 のちに皇極天皇が斉明として重祚し、あとを継いだのが、舒明天皇との間に誕生していた中大兄皇子である。 31才の中臣(藤原)鎌足とともに、645年、乙巳の変で蘇我入鹿を討った、まだ19才の皇子、のちの天智天皇である。 その変は、山背大兄王一族の事件から間もない2年後のこと。 二つの重大事件が短期間に連続したことも、最終的な勝者が両方に関わっていた証である。 結果として、**敏達皇統、孝徳天皇が即位し、中大兄皇子と藤原氏族が興隆することになる**。 常識的には、年長者の鎌足主導に異論は無い。 620年頃の「若草伽藍」と呼ばれる太子建立の法隆寺が、670年に焼失。 711年、中門に仁王像完成を記録する法隆寺、その再建法隆寺が、実は**「鎮魂」**のために建立されたことは、当時の神仏の役割分担、寺院建立の目的から判断すると明白である。 また、若草伽藍と同じ時期、593年創建開始の「四天王寺」も、「鎮魂」が必然となる。誰のための鎮魂かが問題で、戦勝御礼ではない。寺院名称の由来でもある四天王像以外に、「太子伝古今目録抄」所引の「大同縁起」によれば、推古天皇31年(624)大唐将来の阿弥陀三尊が伝えられたといい、これを当初の本尊とする説もある。

古事記からも判るように、神信仰は自然への畏敬・恩恵が発祥、山・海・水にあり、そして太陽と系統すると物語された氏族、首長霊に変貌した。 そのあと、朝鮮半島や反倭勢力に対抗し、争乱から誕生した神が、宇佐の八幡神である。 **宇佐八幡宮**には、海神、宗像三女神とされる比売神(ひめがみ)に加え、三韓征伐に語られる神功皇后、その闘争の中で誕生したとされる応神天皇に由来する八幡大神が祀られる。 縄文から弥生時代にかけての農耕・漁撈・狩猟に関わる神、そして祭司、支配のための神、その次に求められた**戦いの神**への変遷・拡大である。その**戦う神**が誕生した時、神の概念は、自然世界を前提とする古代の精神から、徐々に現実的、具体的な役割に移行した。

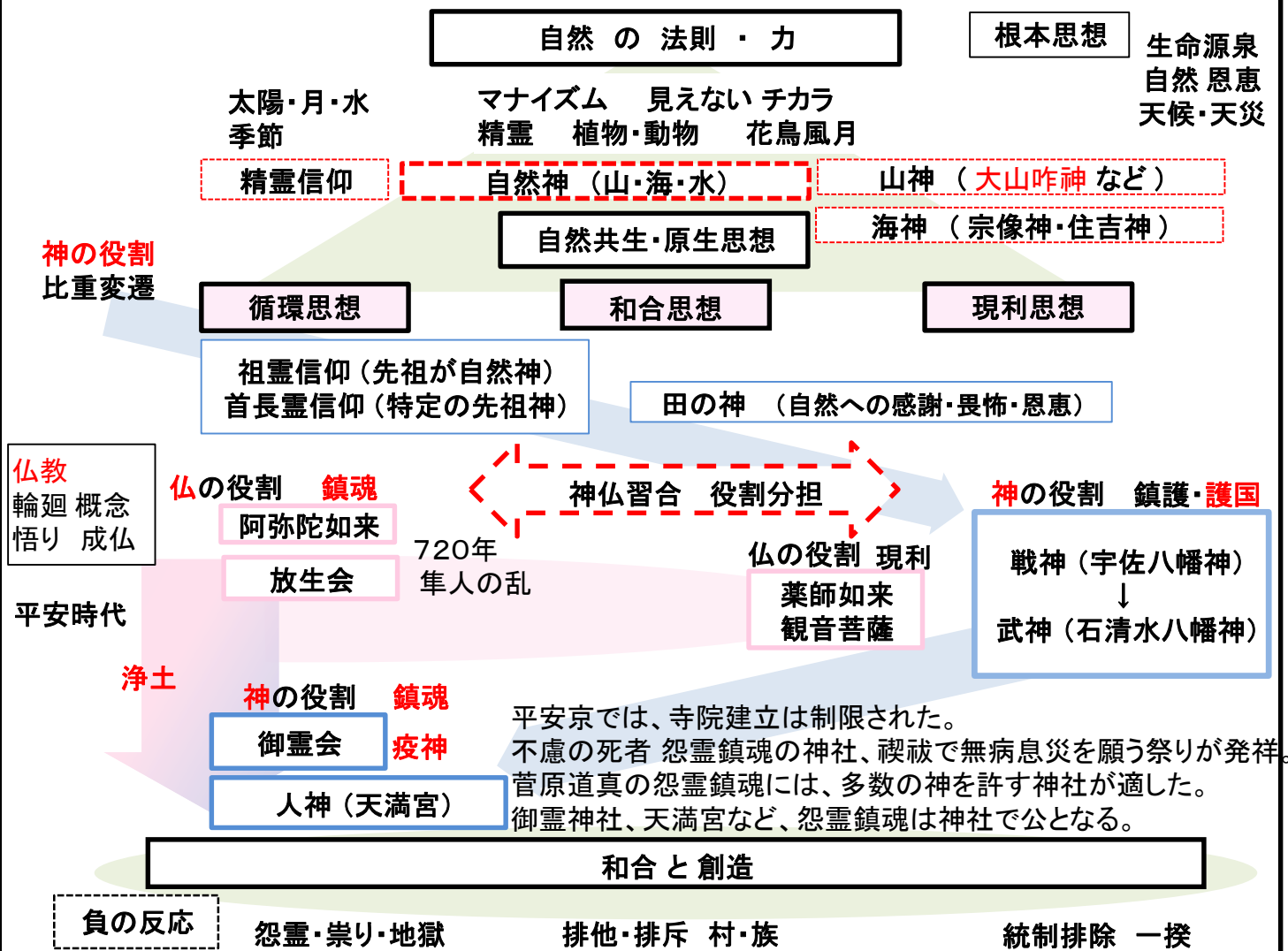
山背大兄王一族の悲劇のあと、神信仰と関係がある 禊や祓も行われたかもしれない。日本書紀で、「祓」は、その孝徳天皇紀に一度、そしてもう一つのクーデター壬申の乱のあと 天武天皇紀にも見られる。だがしかし、神は崇る可能性がある。

では、崇らないものは何か？ 当時、その聖徳太子や蘇我氏によって我が国に浸透した仏である。 その証として「放生」の概念、記録がある。敏達天皇の7年(578年)に六斎日に**殺生禁断**を畿内に令したり、「聖徳太子伝暦」は、推古天皇19(611)年に聖徳太子が天皇の**遊獵を諫した**と伝える。 さらに、天武天皇5年(677年)8月17日には、諸国へ詔を下し**放生**を行わし『日本書紀』、聖武天皇の時代には**放生**により病を免れ寿命を延ばすとの意義が明確にされたとする。『続日本紀』天平勝宝3 (751)年。 まさに、**神が現利的に武神に比重する中、仏に死者の弔い、鎮魂を求めていく**。文化思想原理の中で、重要な「循環」は、新たに渡来した仏が担うことになった。

では、**四天王寺**はどうか？ 創建開始は593年、既に仏への鎮魂期待は始まっている。**587年**、仏教を巡って物部氏、中臣氏を討った蘇我氏、聖徳太子、しかし574年誕生の太子はまだ13才にすぎない。 蘇我氏の母系であったため、太子の本意は隠された。

古代から続く物部氏、古事記では、瓊瓊杵命よりも前に天孫降臨したとされる饒速日命を祖先と伝えられる、河内本拠の軍事部民、倭では、石上神社を祭祀。 507年、継体天皇即位や、528年 磐井の乱鎮圧で活躍したを物部麿鹿火(あらかひ)を一族に持つ、歴史ある貢献者である。 その物部氏の尾興や、**中臣鎌子、中臣勝海**(中臣氏は神祇を祭る氏族)を中心とする排仏派が蘇我氏に討たれた。 その時、**中臣勝海**は、**敏達天皇の皇子** 押坂彦人大兄皇子の像と竹田皇子の像を作り**呪詛**したとされる。押坂彦人大兄皇子については謎が残る。 神に本拠する物部氏に対抗するため、新しい価値観である仏教を推進し、皇統に外戚関係を進めてきた 新興の蘇我氏の闘争である。 そして、古代豪族の息長氏広姫を皇后とした**敏達天皇は、神道派であり、用明天皇は蘇我氏母系の崇仏派である**。 蘇我氏や用明天皇の孫、山背大兄王一族を討つ動機は、神道派中臣氏に隠されていた。 つまり、崇仏派蘇我氏によって討たれた神道派中臣氏が、山背大兄皇子一族襲撃の背景にいながら、蘇我氏を単独犯とした。その成敗大義も借りて中臣氏の 鎌足が逆襲した。

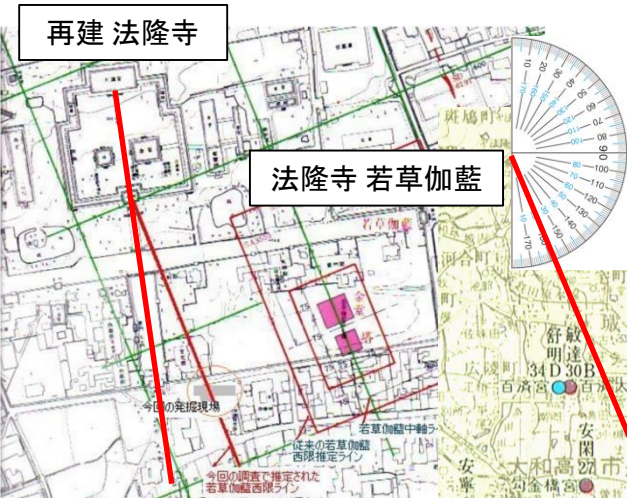
日本文化の特性 基本原理 の 体系より



神道派の**敏達皇統**、物部氏と中臣氏、 対抗する**用明皇統**と、その外戚関係を持つ蘇我氏の仏教推進派。 物部守屋、山背大兄王一族、蘇我入鹿の死の影には、中臣氏の思惑が隠されていた。その闘争の中で、仏教に学び十七条憲法の「和」に努めようとした聖徳太子は、「四天王寺」と、670年に焼失した「若草伽藍」と呼ばれる法隆寺に何を表現、求めたか？ また、その**四天王寺と、再建後の法隆寺に共通する動機、目的は何か？** 四天王寺の本尊は救世観音であって四天王ではない。末法思想の時代に入ると、四天王寺を中心に霊場化が進み、救世観音信仰は次第に浄土念仏信仰へと変容していく。 鎌倉時代、親鸞らによって救世観音が和讃や講式に取り込まれ、救世観音信仰は西方浄土信仰と同一視されるようになる。その理由は発祥にある。

四天王寺と若草伽藍の創建目的は、聖徳太子による**物部氏たちの怨霊鎮魂**と考える。まず四天王寺所在の河内は物部氏の本拠地である。その聖域 太子奥殿と呼ばれ、太子を祀る八角堂が所在する場所のすぐ東側に**物部守屋の祠**(ほくら)が伝わる。そこには敗死した守屋の親族、弓削小連、そして**中臣勝海連** も合祀されている。587年、仏教を巡って物部氏、中臣氏を討った蘇我氏、そしてまだ13才にすぎない聖徳太子も蘇我氏の母系であるために不本意にも従ったと考える。 隠された太子の本意として、仏による鎮魂のため、593年、四天王寺の創建が開始された。**「八角堂」の様式**は、すでに唐の中期以降、墓としての形態である。 現に、養老5年(721)、興福寺の八角堂 北円堂は、藤原不比等一周忌に、その慰霊のため、元明太上天皇と元正天皇により創建されている。 二寺に共通する証が、**伽藍配置と方向**である。それは意味無しに設計されない。例えばのちの天満宮、防府と大宰府、北野は、いずれも西方向に傾斜、**「怨霊」を恐れて** 都からそむけた方向だ。 法隆寺若草伽藍は、20度東方を向いていた。 藤原京の南、推古天皇の豊浦宮、小墾田宮の方向である。 その先には太子誕生の地、橘寺もある。 **伽藍方向**には意味がある。 四天王寺の伽藍配置は、中門、塔、金堂、講堂を南から北へ一直線に配置する、いわゆる「四天王寺式伽藍配置」である。 発掘調査の結果、「若草伽藍」の伽藍配置もまた四天王寺式であった。**目的は、共通する「鎮魂」**である。「若草伽藍」は全焼しているため、その詳細はわからないが、礎石位置から四天王寺と配置は共通。 四天王寺は593年創建開始、605年に、太子が斑鳩で居住開始。そして、二寺に同じ鋳型が使われた**八葉素弁蓮華紋の軒丸**(のきまる)本瓦葺の丸瓦の軒部分に葺く瓦、別名「鐙瓦」(あぶみがわら)から、 同時期の創建であると考えられる。 では、四天王寺と再建法隆寺はどうか？ 二寺とも、2度から3度、東方を向いている。 測量の誤差と考え、少しあとの創建、680年薬師寺、752年東大寺を見るが、真南を向いている。 真南をむけず、わずかに傾斜させた寺院の軸、「鎮魂」の形式を表現しているかもしれない。 その後、四天王寺には、浄土信仰が大きく習合していく、「鎮魂」とは関係が深い。 再建法隆寺の伽藍配置は、塔、金堂が横に並ぶ。 622年、太子没。 その後、他者によって設計され建築、711年、中門に仁王像完成となる。 藤原氏の興福寺創建開始は、同じ頃の710年。 再建法隆寺と同じく 塔と金堂は東西に並らぶ。 **藤原氏による「鎮魂」寺院**の形態と考える。 鎌足の子、藤原不比等が没するのは養老4(720)年。その前のけじめ、禊かもしれない。

八葉素弁蓮華紋
四天王寺、法隆寺若草伽藍の軒瓦



四天王寺は、平安時代、承和2年(836年)の落雷、天徳4年(960年)の火災で主要伽藍が失われた。たびたびの災害を経て、天正4年(1576年)石山本願寺攻めの兵火焼失。豊臣秀吉の再建、慶長19年(1614年)大坂冬の陣で焼失。江戸幕府の援助で再建。幕末の享和元年(1801年)の落雷焼失再建。昭和9年(1934年)の室戸台風で五重塔と中門が倒壊、金堂も大被害を受けた。五重塔は昭和14年(1939年)に再建されるが、昭和20年(1945年)の大阪大空襲で国宝の東大門他伽藍とともに焼失。現存の中心伽藍は昭和38年(1963年)に完成、鉄筋コンクリート造で、飛鳥建築の様式を再現した。

その歴史で守られ、現存する建物は、重要文化財に指定された永仁2年(1294年)の石鳥居、元和4年(1618年)建立の元三大師堂、元和9年(1623年)建立の浄土**六時堂**、五智光院、本坊方丈となる。

石舞台は住吉大社の石舞台、厳島神社の平舞台と「日本三舞台」の一つとされ重要文化財である。この舞台では毎年4月22日の**聖霊会**(聖徳太子の命日法要)の日に、四天王寺の雅楽は、宮中(京都)、南都(奈良)と共に三方楽所とされた「天王寺楽所」によって伝えられ、雅楽の最古の様式を持つ。また、**法隆寺**でも**夢殿**が建立された後の、天平20年(748)から「お会式」として聖徳太子のご命日にその遺徳をたたえ、同様に供養法要される。

聖徳太子は日本仏教の祖として、宗派や時代を問わず広く信仰されてきた。また、四天王寺の西門が西方極楽浄土の東門(入口)であるという信仰から、**浄土信仰の寺**としての性格が大きく習合している。

延喜2年(904年) 防府天満宮 延喜19年(919年)大宰府天満宮 天曆元年(947年) **北野天満宮**



622年の聖徳太子没から、4年後、のちの天智天皇、中大兄皇子は推古34年(626年)に誕生、父の**舒明天皇**は、641年に崩御、皇子はまだ15才。 舒明天皇のあとその妻で、皇子の母が皇極として天皇についたが、継承問題は収まっていなかった。 聖徳太子の子孫である山背大兄王に対して、蘇我宗家は蝦夷娘と舒明天皇の間の皇子、古人大兄皇子を強く支持していた。 そして643年に、蘇我入鹿が山背大兄王一族を襲撃し、滅亡させている。 645年、乙巳の変で蘇我宗家滅亡後、古人大兄皇子は出家、中大兄皇子が攻め殺した。 中大兄皇子は、その変で共謀した蘇我氏傍系の石川麻呂も、649年謀反嫌疑で滅ぼしている。 660年、**百済が滅亡**、救援に向かった斉明天皇、崩御。663年、百済復興をかけて中大兄皇子が、唐・新羅連合軍と対峙するも、**白村江の戦いで大敗**した。

聖徳太子の意向「熊凝精舎の本格的寺院化」を受け、最初に仏教帰依した天皇、**舒明天皇**による初めての国家寺院「**百済大寺**」**639年創建**から 668年の天智天皇による崇福寺建立までの約30年、山田寺以外の寺院創建は無い。その後は、669年中臣鎌足の病氣平癒を祈願した夫人の山階寺、670年頃の川原寺、680年薬師寺、681年當麻寺と続き、710年以降は平城京でさらに盛んとなる。その山田寺は、蘇我倉山田石川麻呂の創建。『上宮聖徳法王帝説』裏書に詳しく、舒明天皇13年(**641年**)「始平地」、整地工事を始め、2年後の皇極天皇2年(643年)には金堂の建立となる。

山田寺の目的は何か？ それは、聖徳太子の仏教信仰、和の思想に傾倒した石川麻呂による、蘇我宗家興隆の影となった人々、物部氏や父たちへの「**鎮魂**」、**浄土への寺院**であると考える。石川麻呂の父は、倉麻呂。 日本書紀では、推古天皇継承者について、田村皇子と山背大兄王で別れたが、倉麻呂だけは保留したと記す。 そしてその子 石川麻呂は、田村皇子を舒明天皇とした蘇我本家と敵対する。 山田寺創建着手の641年は、父の倉麻呂没年頃である。 父の追善供養・鎮魂のため、蘇我宗家の587年馬子創建の氏寺、飛鳥寺とは別に創建、この通説は当然の動機である。しかし、その**配置**(南から北へ一直線に、南門、中門、回廊に囲まれた搭、金堂、北側・回廊の外側に講堂)は、**若草伽藍と類似**する。 若草伽藍の回廊・講堂の位置は、現在まで特定されていないが、搭と金堂の配置、そして何よりも以下の状況からそう考える。 建立の目的は、**伽藍配置に表現されている**。

石川麻呂は600年過ぎの誕生で青年期までは、聖徳太子も存命、斑鳩の若草伽藍へは父と訪れていたはずだ。 **山田寺は、若草伽藍を規範**とした。 なぜなら、太子の法隆寺「若草伽藍」 建立の一般的な目的は、崇仏であった父、用明天皇の鎮魂、浄土安寧とされるが、物部氏たち反蘇我宗家を祀る四天王寺との共通性から、彼らを含む大きな意味での「鎮魂」と考えるからである。 用明天皇崩御の直後、蘇我馬子は物部氏を滅ぼしている。 蘇我氏と血縁関係、一族の渦中にあり、仏法信仰に依る自身の本意を少なからず隠蔽しなければならなかった 太子と石川麻呂 の状況は似通う。 石川麻呂は、**649年**中大兄皇子に攻められ、その**金堂前で一族自決**する。太子の子孫、山背大兄王一族が蘇我入鹿に攻められ、若草伽藍で自決した643年から6年後のことである。 山田寺の法号は浄土寺、太子の伝記「上宮聖徳法王帝説」への山田寺の記事掲載、金堂前での自決と併せ、今回検討した建立目的を裏づける。

石川麻呂は、二人の娘を中大兄皇子に嫁がせていた。 蘇我傍流ながら、反蘇我氏の中大兄皇子に対する和合の表れと解釈できる。 遠智娘(おちのいらつめ)の娘は、天武天皇の皇后となり、持統天皇に。 姪娘(めいのいらつめ)の娘は、元明天皇となり、その皇子は文武天皇、孫は聖武天皇となる。 山田寺は、天智天皇2年(663年)塔の建設開始、天武天皇5年(676年)に完成。 同7年(678年)「丈六仏像を鑄造」、同14年(685年)にはその丈六仏像が開眼(「丈六」は仏像の像高。立像で約4.8m、坐像はその約半分)。 この丈六仏像は頭部のみが興福寺に現存、国宝指定。 山田寺整備の陰に、姪娘やのちの持統天皇、鸕野讃良皇女(うののさららのひめみこ)の思いがある。

一方、649年、蘇我倉山田石川麻呂の悲劇のあと、660年唐・新羅による百済滅亡までの間、寺院建立は無く、仏教関係の活動は少ないが、注目すべき二件がある。 一つは、640年に続き、652年の内裏での**無量寿経講経**。 もう一つは、3度の遣唐使派遣の初回、653年第二回遣唐使の中に24才の**道昭**がおり、玄奘三蔵に師事し660年に帰朝、**法相宗を伝来**したことである。 次の時代に中心となる経典、宗派である。

661年、百済救援途上で、筑紫朝倉宮にて斉明天皇崩御、663年、白村江で大敗した中大兄皇子は、664年から対馬、壱岐、筑紫国に**防人**(さきもり)と**烽**(とぶひ 敵襲などの変事を都に急報する ための山上などの煙火設備)を置き、大宰府政庁を直接防衛する水城(みずき、土塁と濠)を築く。 さらに百済の亡命者の指導で、筑前に大野城(おおのじょう)、肥前に基肄城(きいじょう)、肥後に鞠智城(くくちじょう)、対馬に金田城(かねたのき)、長門に長門城(ながとのき)、讃岐に屋嶋城(やしまのき)、大和に高安城(たかやすのき)などの**朝鮮式山城**を築いていった。 天智6(667)年には、都を難波から内陸の**大津京**に移す。

天智天皇は、大津京の鎮護のため、668年 大神神社から、日吉大社に**大己貴神**を勧請。 元々の神である大山咋神よりも上位に「大宮」とした。のちに、天武天皇が壬申の乱の戦勝祈願の礼として正式に制度化する天照大御神 伊勢神宮奉祭とは対象的である。以後は天皇の代替わり毎に必ず新しい斎王が選ばれ、南北朝時代まで続く制度となった。いずれにしても、護国戦勝祈願の対象は神である。

668年崇福寺、670年頃の川原寺、そして671年までに発願とされる大宰府の観世音寺、天智天皇が母、**斉明天皇の鎮魂供養**のために建立発願したとされる寺である。 このうち、**川原寺**は斉明天皇の川原宮跡でありその主旨は明瞭である。(川原寺の日本書紀初見は、天武天皇2年(673)年2月即位後の3月で、一切経書写事業の初見でもある。 主旨が隠されて、天武期の事業として取り込まれた可能性が高い)**観世音寺**も、続日本紀の和同二年に**斉明天皇のために発願と記録**、崩御された筑紫朝倉宮近隣から判断し同様に考える。 この宮の場所は確定していないが、日本書紀「御船還りて娜大津(ナノオオツ)に至り磐瀬(イワセ)行宮に居す」娜大津は博多で、「或本に云はく、天皇、朝倉宮に遷り居しますといふ」から、御笠川の上流、大宰府の近隣であろう。 観世音寺は政庁の東に位置する。但し、完成には**741年**まで70年かかる。しかし、**崇福寺**は検討を要する。 大津京の西北山岳にあり、同時期の創建となる南滋賀廃寺、穴太廃寺、園城寺前身寺院で都を囲む。鎮魂供養の目的より、都の警護が合理的である。

その観世音寺の当初の目的は、唐との緊張、やがて朝鮮半島で勢力を拡大した新羅との緊張により変化していく。 北九州大宰府の立地は、畿内より敏感にならざるえない。 その当初と変化の目的の変遷は、観世音寺の伽藍配置と仏、特に新たに加わった仏に明確である。剣を持ち戦う仏、不空羂索観音の登場、「鎮護国家」の仏の誕生である。 我が国初の**夷狄脅威の時代**。守護神にだけでなく、**鎮魂、浄土を託す 仏にも 護国を願う** 時が来た。



北九州は渡来の玄関であり、また国防の要所である。**古事記**に、安曇/住吉、宗像氏族と記される**海人族**は、航海に長じ、漁労も兼ねる海洋集団で、弥生時代以降も続文化として沿岸から内陸する。**安曇/住吉系海人**は、渡来当初、北九州海域を根拠地とし、のち瀬戸内海中心に沿岸と島々、さらに鳴門海峡を出て紀州沿岸を回り、伊勢湾に入り込み伊勢海人として一大中心点を構成した。さらに外洋に出て東海道沿岸から伊豆半島ならびに七島の島々に拠点をつくった。そして房総半島から常陸沿岸にかけ分布した。山陰沿岸を北上した一族もあった。出雲杵築、丹波安曇郷(和名妙)などに、安曇氏、海部氏の痕跡が残る。**宗像系海人**は、手づかみ漁、弓射漁、刺突漁など潜水漁を得意とした。本拠を筑前宗像郡鐘ヶ崎に置き、筑後・肥前・壱岐・対馬・豊後の沿岸に進出、そして日本海側では、向津具半島の大浦、出雲半島と東進、但馬・丹波・丹後から 若狭湾に入り、能登半島・越中・越後・佐渡に渡り、羽後の男鹿半島に及ぶ。

その伝来の遺跡、信仰の拠点である**宗像大社**。田心姫(たごりひめ)神を祀る「沖津宮(おきつぐう)」神域 沖ノ島は、巨石群祭祀遺跡から三角縁神獣鏡、武器、金銅製装身具など出土。湍津姫(たぎつひめ)神を祀る「中津宮(なかつぐう)」大島には、天の真名井、七夕信仰が伝わる。市杵島姫(いちきしまひめ)神を祀る「辺津宮(へつぐう)」は、神湊から釣川を上った、高宮という古代祭場を南に持つ総社。市杵島姫神たちは、宇佐神宮、岡山や奈良桜井、京都の**松尾大社**や**市比賣神社**に、延暦14年(795年)には、桓武天皇の勅命で、藤原冬嗣が皇居鎮護として勧請した**御所の宗像神社**、またのちには、厳島や関東にも祀られる。一方、仏教の弁才天と習合し、本地垂迹においては同神とされた。イネは、まず熱帯ジャポニカが南西諸島を通して列島に伝播した。縄文時代のイネは、炭化米が後期後半の熊本県東鍋田遺跡や、鹿児島県の列島最古、縄文時代早期から集落した**上野原遺跡**などから検出されている。縄文晩期から弥生時代へ、銅剣、銅矛、中期からは銅鏡の出土が多く、主たる遺跡、**吉野ヶ里**、**紀元前400年頃、日本最古の弥生・環濠集落の江辻や板付の水田**。弥生後期には、方形・円形周溝墓を持ち、内行花文八葉鏡(46.5cm)を出土した**平原遺跡**など。その鏡について、考古学者(原田大六氏、森浩一氏)は、「皇太神宮儀式帳」の本鏡内容器の記事などを元に、**伊勢神宮内宮「八咫鏡」**と同様の大きさ・文様とする。神と考古の時代から、畿内大和に関係する。古墳時代中期、390年頃 **神功皇后**が三韓征伐の際、**宗像神**に航海の安全を祈り靈験があったとされ、事あるごとに国に幣使を遣わす習いになった。またこの逸話からは航海安全の**守護神**として崇められるようになった経緯がうかがえる。大化の改新(645年)により国郡の制が敷かれると、宗像一郡が神領として与えられ、豪族**宗像氏**が神主として神社に奉仕し、神郡の行政も司ることになった。一方、**宇佐神宮**、社伝では、欽明天皇32年(571年)に起源。720年、隼人の乱で戦勝祈願、社殿創建 和銅年間(708-715)～神亀2年(725年)現地へ。祭神は、応神天皇由来の**八幡大神**、対新羅として祀られた宗像三女神、比売神(ひめがみ)、三韓征伐に由来する神功皇后が祀られる。

大宰府の「大宰」の初見は609年(推古天皇17年)であるが、『日本書紀』宣化天皇元年(536年)条の「夫れ筑紫国は、とおくちかく朝(もう)で届(いた)る所、未来(ゆきき)の関門(せきと)にする所なり。(中略)官家(みやけ)を**那津**(なのつ、博多大津の古名)の口(ほとり)に脩(つく)り造(た)てよ」と記され、大宰府の起源はさらに遡ると考えられる。推古天皇16年(608年)、遣唐使**小野妹子**が隋の使者裴世清を伴って那津に着いた頃から、官家(みやけ)は、大陸や朝鮮半島からの使者の接待をも担うようになった。筑紫大宰は九州全体の統治と外国使節の送迎などにあたり、以後は大宰府に引き継がれていく。大宰(おほ みこともち)とは、地方行政上重要な地域に置かれ、数ヶ国程度の広い地域を統治する役職で、いわば地方行政長官である。天武天皇期には、吉備、周防、伊予などあり、『続日本紀』文武天皇4年(700年)10月の条に「直大寺石上朝臣麻呂を筑紫総領に、直広参小野朝臣毛野を大貳(次官)と為し、直広参波多朝臣牟後閑を周防総領と為し」とあるように「総領」とも呼ばれた。**大宝律令(701年)**によって、九州の大宰府は政府機関として確立したが、他の大宰は廃止され、一般的に「大宰府」と言えば九州のそれを指す。

622年、聖徳太子没、643年、蘇我入鹿による山背大兄王一族の襲撃、法隆寺で自害。中大兄皇子は、中臣(藤原)鎌足とともに、645年、乙巳の変で蘇我入鹿を討った。その混乱期に659年(斉明天皇5年)出雲国造に命じて**神之宮**を修造。『日本書紀』660年、**百済が滅亡**、救援に向かった斉明天皇は、筑紫の朝倉宮に遷幸し戦争に備えたが遠征軍が発する前の661年、崩御した。663年、百済復興をかけて中大兄皇子が、唐・新羅連合軍と対峙するも、**白村江の戦いで大敗**した。そして、我が国初の**夷狄脅威の時代**を迎える。「若草伽藍」と呼ばれる太子建立の法隆寺が、670年に焼失。671年、天智天皇崩御。翌年、壬申の乱で国内争乱、天武天皇の**伊勢神宮斎宮制**、女帝時代から 藤原台頭 そして聖武天皇へ。守護神にだけでなく、**鎮魂、浄土を託す 仏にも 護国を願う** 時が来た。

「古事記 原文」 変体漢文 岩波古典文学大系本(訂正 古訓古事記) 近代デジタルライブラリー 国宝「真福寺本」照合済

「伊邪那岐命 と伊邪那美命」

(前略)是以、伊邪那伎大神詔「吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音穢國而在祁理。此二字以音。故、吾者爲御身之禊」而、到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐此三字以音原而、禊祓也。(中略)於是詔之「上瀬者瀬速、下瀬者瀬弱而。」初於中瀬墮迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神。訓禍云摩賀。下效此。次大禍津日神。此二神者、所到其穢繁國之時、因污垢而所成神之者也。次爲直其禍而所成神名、神直毘神。毘字以音。下效此。次大直毘神。次伊豆能賣神并三神也。伊以下四字以音。次於水底滌時、所成神名、底津綿上津見神。次底箇之男命。於中滌時、所成神名、中津綿上津見神。次中箇之男命。於水上滌時、所成神名、上津綿上津見神。訓上云宇閑。次上箇之男命。 此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字以音。下效此。故、阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。宇都志三字以音。 其底箇之男命、中箇之男命、上箇之男命三柱神者、墨江之三前大神也。於是洗左御目時、所成神名、**天照大御神**。次洗右御目時、所成神名、**月讀命**。次洗御鼻時、所成神名、**建速須佐之男命**。須佐二字以音。

「天照大神 と須佐之男命」

故爾各中置**天安河**而、**宇氣布**時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劔、打折三段而、奴那登母母由良邇此八字以音、下效此振滌**天之眞名井**而、佐賀美邇迦美而自佐下六字以音、下效此、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、**多紀理毘賣命**此神名以音、亦御名、謂**奥津嶋比賣命**。次**市寸嶋上比賣命**、亦御名、謂狹依毘賣命。次多岐都比賣命。三柱、此神名以音。速須佐之男命、乞度天照大御神所纏左御美豆良八尺勾璫之五百津之美須麻流珠而、奴那登母母由良爾、振滌**天之眞名井**而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。亦乞度所纏右御美豆良之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、天之菩卑能命。自菩下三字以音。亦乞度所纏御縹之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、天津日子根命。又乞度所纏左御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、活津日子根命。亦乞度所纏右御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、熊野久須毘命。自久下三字以音。并五柱。於是天照大御神、告**速須佐之男命**「是後所生五柱男子者、物實因我物所成、故、自吾子也。先所生之**三柱女子者、物實因汝物所成**、故、乃汝子也。」如此詔別也。故、其先所生之神、多紀理毘賣命者、坐胸形之**奥津宮**。次市寸嶋比賣命者、坐胸形之**中津宮**。次田寸津比賣命者、坐胸形之**邊津宮**。此三柱神者、**胸形君等之以伊都久三前大神**者也。故、此後所生五柱子之中、天菩比命之子、建比良鳥命此**出雲國造**・无邪志國造・上菟上國造・下菟上國造・伊自牟國造・津嶋縣直・遠江國造等之祖也、次天津日子根命者。

661年、百済救援途上で、筑紫朝倉宮にて斉明天皇崩御、663年、白村江で大敗した中大兄皇子は、664年から対馬、杵岐、筑紫国に**防人**(さきもり)と**烽**(とぶひ)を置き、大宰府政庁を直接防衛する水城(みずき)を築く。さらに百済の亡命者の指導で、筑前に大野城、肥前に基肄城(きいじょう)、肥後に鞠智城(くくちじょう)、対馬に金田城(かねたのき)、長門に長門城(ながとのき)、讃岐に屋嶋城(やしまのき)、大和に高安城(たかやすのき)などの**朝鮮式山城**を築いた。天智6(667)年、今の如意ヶ岳と牛尾山を最後の砦とし、都を難波から内陸の**大津京**に移した。

天智天皇は、大津京の鎮護のため、668年 大神神社から、日吉大社に**大己貴神**を勧請。元々の神である大山咋神よりも上位に「大宮」とした。天武天皇が壬申の乱の戦勝祈願の礼として正式に制度化した天照大御神 **伊勢神宮**奉祭とは対象的である。しかし、いずれも **護国 戦勝祈願の対象は 神** である。

668年崇福寺、670年頃の川原寺、そして671年までに発願とされる大宰府の観世音寺、天智天皇が母、斉明天皇の**鎮魂供養**のために建立発願したとされる寺である。**観世音寺**は政庁の東に位置する。但し、完成には**741年**まで70年かかる。その観世音寺の当初の目的は、唐との緊張、やがて朝鮮半島で勢力を拡大した新羅との緊張により、伽藍整備の遅延とともに、変化していく。新羅との関係改善は752年までかかる。北九州大宰府の立地は、畿内より敏感にならざるえない。その当初と変化の目的変遷は、観世音寺の伽藍配置と仏、特に新たに加わった仏に明確である。剣を持ち戦う仏、不空羂索観音の登場、**「鎮護国家」の仏の誕生**である。我が国初の**夷狄脅威の時代**。守護神にだけでなく、**鎮魂、浄土を託す 仏にも 護国を願う** 時が来た。

「鎮魂」の仏として、四天王寺・法隆寺・山田寺・川原寺を代表に辿った。この観世音寺には、その**「鎮魂」と、新しい「戦仏」「護国」の仏が習合**している。717年から735年遣唐使として帰朝した**玄昉、岡寺**の義淵に良弁と学んだ、物部氏分流阿刀氏の玄昉が、唐より多数の經典と招来した「不空羂索観音」である。720年に藤原不比等が没、玄昉帰朝後には737年、不比等の子 藤原四兄弟が病死。**橘諸兄**の下、遣唐使盟友の**吉備真備と、聖武天皇の政権に入る**。740年(天平12年)大宰府赴任に不満した藤原広嗣が挙兵するも鎮圧。しかし聖武天皇の遷都遍歴の原因となった。翌741年(天平13年)7月15日**千手経**1000巻を発願、書写・供養。聖武天皇の聖武天皇の母、宮子、異母妹で王妃である光明子(光明皇后)にも接近。光明子は玄昉が話す唐の則天武后が行った政治や仏教政策に興味し、天平13年(741)「国分寺建立の詔」、即ち大仏建立、国分寺、国分尼寺建立へと結実していく。観世音寺、東大寺三月堂(天平12年 740年～748年頃)や興福寺講堂(天平18年 746年)の「不空羂索観音」が誕生することになる。しかし、藤原仲麻呂が勢力を持つと、745年(天平17年)筑紫観世音寺別当に左遷、封物も没収され、翌746年(天平18年)任地で没した。川原寺や崇福寺と同じく東向きに開口する金堂、本尊は、阿弥陀如来座像で**「鎮魂」が当初の目的**。南向きに開口する金堂の不空羂索観音は**「戦仏」「護国」を祈願された**。そして、平安時代後期、「鎮護国家」の仏として、**憤怒形相の「馬頭観音」**が加わる。変遷、重層する目的が重なる伽藍配置と、二つの御本尊が並ぶ構造となった。

北九州で600年代末に鑄造された梵鐘が継承され、兄弟の京都妙心寺鐘と共に国宝となる。天智天皇が大津京鎮護で大己貴神を勧請した**日吉大社も分霊、門前鳥居とともに、神仏も習合している**。

観世音寺 本尊 伽藍配置と方向

創建当初、金堂本尊：阿弥陀如来 講堂本尊：不空羂索観音

平安末期に、馬頭観音、聖観音、十一面観音

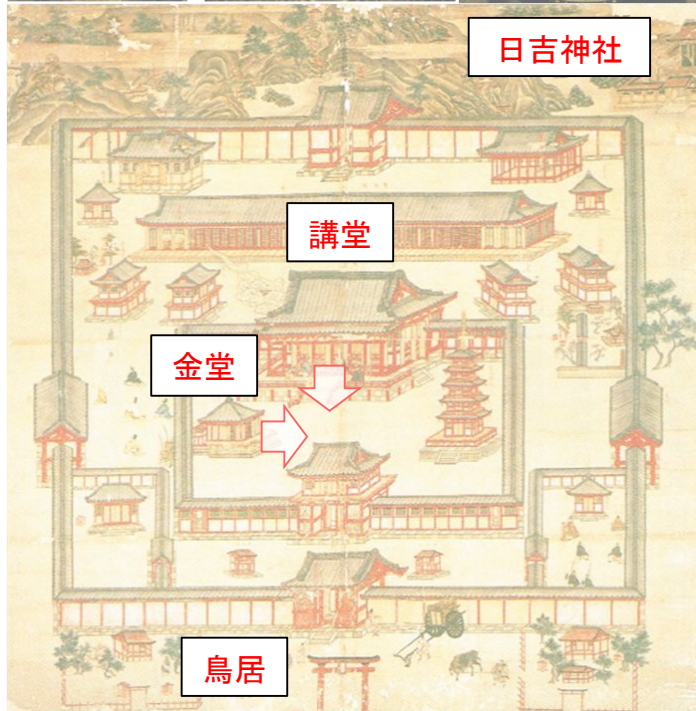
馬頭観音



不空羂索観音



日吉神社

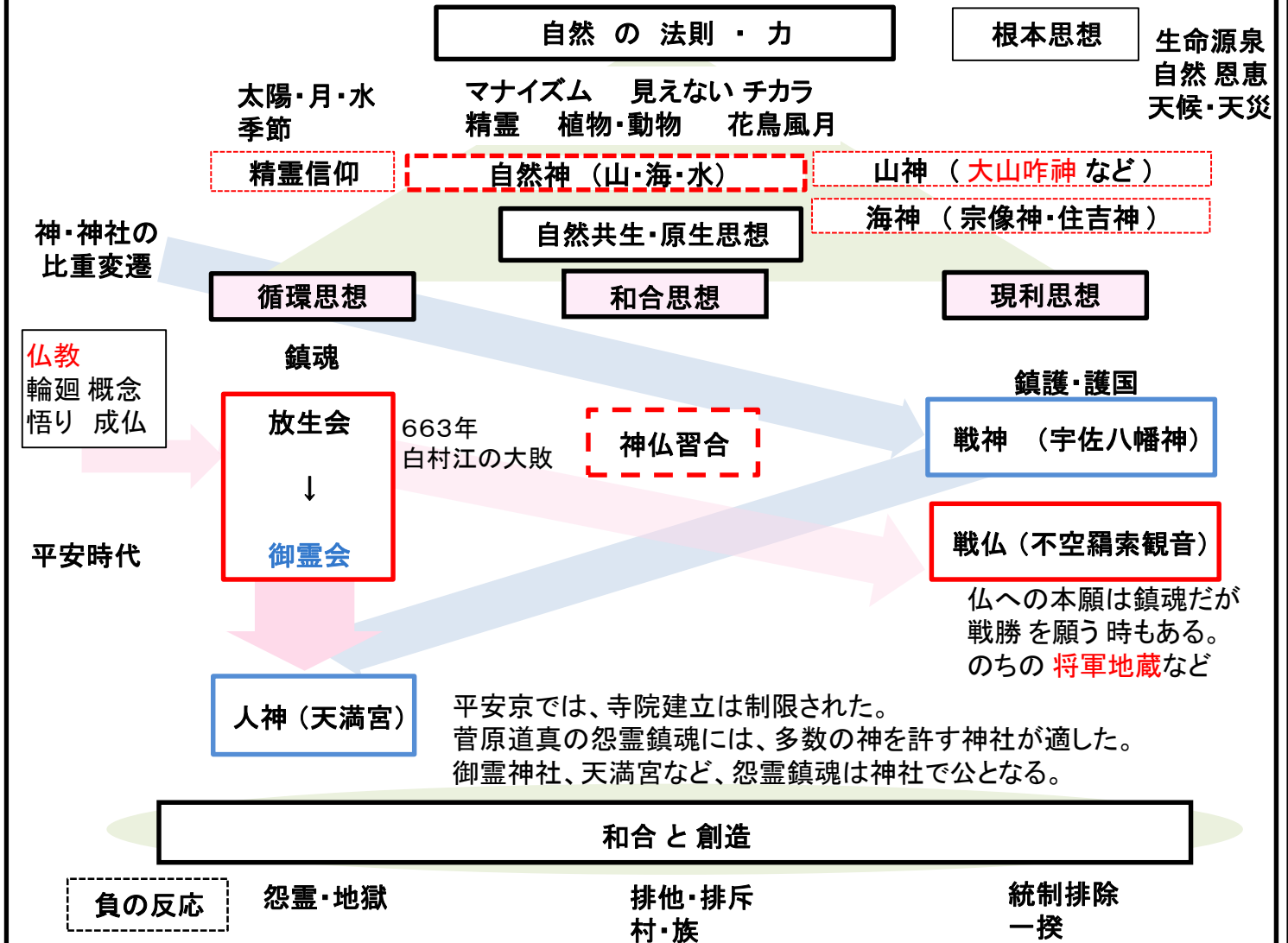


阿弥陀如来座像



日本文化の特性

基本原理の体系より



神仏史 「観音信仰」の 源流

ガンダーラ 仏三尊像 の 観音菩薩

ガンダーラには単独の菩薩像のほか、仏三尊像と呼ばれる、中央の仏陀像とその左右に脇侍菩薩像を従える三尊形式の高浮彫の石板パネルの作例が42例ほど確認される。これらの仏三尊像は作例によってそれぞれ細部のヴァリエーションはあるが、多くの場合、中央の仏陀は大きな蓮華座上に**結跏趺坐**して説法印を結び、両側には菩薩立像が配され、仏陀の両肩部にはしばしば梵天と帝釈天が姿を現し、仏陀の頭上には花樹や天人・化仏・仏菩薩が表される。

42例の仏三尊像の作例で、部分的に破損や欠損を含むものもあるが、少なくとも現在確認できる限りでは、両脇侍菩薩は左右の位置は一定しないが、束髪式（もしくは肉髻式）・持水瓶タイプの菩薩像とターバン冠飾タイプの菩薩像（無持物もしくは持蓮華・持華鬘）とをセットにして配置しており、前述の検討から前者は弥勒菩薩、後者は無持物の場合は**悉達菩薩**、持蓮華もしくは特筆鬘の場合は**観音菩薩**に同定しうる。つまり、仏陀・弥勒菩薩・悉達菩薩の組合せより、**仏陀・弥勒菩薩・観音菩薩の組合せが多い**。これらの仏三尊像は様式的に見て2～3世紀に遡るが、特にガンダーラ美術の後期、**3～4世紀頃**に流行したことが窺われ、弥勒菩薩と観音菩薩を両脇侍とする仏三尊像がガンダーラで定着していったと考えられる。弥勒菩薩と観音菩薩を一対にした仏三尊像がガンダーラで好まれた理由は、菩薩の**対照的な二つの性格や働き**が関わっているものと思われる。

束髪にして水瓶を持つ**弥勒菩薩**の姿は、実は頭髪を結って水瓶を執る梵天（ブラフマー）の図像を基にしており、精神界の主である梵天の後裔とされるバラモン（婆羅門）の姿も同様で、装身具などを一切つけず、**行者**としてのイメージを表している。これは弥勒がバラモンの出自をもつことや、当初仏弟子として修行者の性格を強く持っていたためであろう。インドではバラモンは僧侶・祭祀階級であり、いわば精神界を司る。一方、ターバン冠飾をつけて蓮華（華峯）を持つ**観音菩薩**の姿は、冠を被る帝釈天（インドラ）の図像を基にしており、神々の王である帝釈天の後裔とされるクシャトリヤの姿もターバン冠飾や装身具をつけ、王者としてのイメージを表している。インドでは王者は国を繁栄させ、人民を安穏にさせる責務を負うという**王権観**があり、クシャトリヤは武士・王侯階級であり、いわば世俗界を司る。ただ、帝釈天は金剛杵を執って武神としての性格を持つのに対し、観音菩薩は持物を蓮華（華鬘）に代えて、武神的性格を消して**慈悲の性格**を現している。

このように弥勒菩薩と観音菩薩の図像は梵天と帝釈天、バラモンとクシャトリヤ、**行者と王者という対立的かつ相互補完的なインドの世界観・社会観**を基にして成り立っていることが分かるが、それは菩薩の二つの基本的な働きとも密接、自ら努力し修行して、悟りを得ようとする「**上求菩提**」の働きと、苦しむ衆生に対して、慈悲心を起こし救い、悟りに導こうとする「**下化衆生**」の働きに関係する。これは「成道」とそれに続く「梵天勧請」によって仏陀が備えた徳であるが、仏陀亡き後、それを菩薩は現実的な働きとして具現化するものといえよう。ガンダーラの仏三尊像はおそらく大乘的な仏身観に基づく永遠存在としての法身的な**釈迦仏を中心**に、仏陀の徳を具現化する菩薩の二つの働きを持つ**弥勒菩薩と観音菩薩を両脇侍として従えることによって、仏国土を表現**したものと考えられる。その後、観音菩薩は、法華経の「普門品」から、また尊像としても仏三尊像から独立し、特に日本では、密教と連携し、現世利益の世界で、多様な下化衆生の仏として祀られていく。



1C 「法華経」 観音信仰の成立

インド

中国



三尊石仏
仏陀
弥勒菩薩
観音菩薩



10 C パーラー朝



弥勒信仰 唐時代・長安3年(703)
インドでは発展しなかったが、
ガンダーラから中央アジア・中国で、**半跏思惟像**を伴い発展

鳩摩羅汁 344年 - 413年 (350年 - 409年) 亀茲国
(中国六朝時代)「**妙法蓮華経**」 25番「普門品」に「**観世音**」



半跏思惟像
悉達(釈迦)菩薩で始まり、
インド西北のガンダーラで**観音菩薩**へ展開。

観音信仰

300～500年頃には 全インドへ
南インド**補陀洛山**を住处とし、「航海安全祈願」



ポスト・グプタ朝 多臂観音 **密教系観音**

密教系観音

インドでは、シヴァ神を中心にヒンドゥー教の神の特徴を取込み発展。

変化観音 不空羼索観音以外は発展せず。

シヴァ、ブラフマー、インドラ、ヴァルナなど神の特性を
観音の功德として取り入れている。

8 C 実際の修法でイメージされ、造尊に至らなかったと考えられている。



密教系観音

インドの密教系観音は受容されず

変化観音が、特に日本で発展する。十一面・千手・如意輪など中国で変化観音についての陀羅尼經典が漢訳され、**尊像礼拝**が重視されたことが要因と考えられている。

起源

観音菩薩のルーツを探ると、古代宗教の神々に到達するといわれる。古代イランの女神**アナーヒター**、ヒンドゥー教のシバ神やその妃**ドゥルガー**・女神**ラクシュミー**など多くの神々の属性が取り入れられ、複合されて観音菩薩という一つの存在に結晶したものと考えられている。

紀元1世紀頃の観音菩薩像が ガンターラから発見されており、**紀元1世紀頃までには信仰**が形作られていた。バラモン教の十一荒神(一説にはヒンズー教の多面神)は、5, 6世紀の頃、仏教(密教)に融合したとされる仏である。6世紀後半「**十一面神咒心経**」の中に、十一面観音の様相や役割(功德や利益)について書かれている。

中国での発展 観音信仰はインドから中央アジアを経て中国へ。北魏(376～534)の都、洛陽の近く、「竜門石窟」には阿弥陀仏像に先行し、観音像が多く作られ、早くから信仰されていた。

観音菩薩への信仰を支えた教典は『法華経』を亀茲国 **鳩摩羅汁**が『妙法蓮華経』で訳す。「普門品」には観世音が衆生に与える利益が説かれ、普門品が独立して『観音経』となり、中国などで大きな影響力を持つ教典となった。北魏の観音信仰は、個人の現世利益・浄土教的で、死後救済が目的でなく、中国では仏教が「**家**」の**信仰という祖先の追善が中心**。朝鮮も、北魏の仏教継承。唐(618～907)・宋(960～1127)の時代、中国観音信仰が開花・結実。特に密教が興隆した**唐代**に **密教的観音像**の創作信仰が盛んとなる。

日本での融合

追善から現利 国家鎮護、民間信仰

古墳時代の末である500年代中期に仏教公伝。

「観音菩薩」はその公伝後の早い時期から、法隆寺などで独尊像として信仰される。伝来初期は、追善供養への信仰であったが、く奈良時代には密教的現世功德を願う。その理由は何か？ 水瓶を持ち慈悲、すなわち「現世利益」をもたらすからである。

神話時代の、水をもたらす神山「磐座信仰」の源流が、「**現世利益**」という共通点で仏教と合流、ここでも「和合」が進み、山岳での観音信仰となる。そこでは、宗派を超えた「観音信仰」があり、その特性の強さが感じられる。その「和合」の特性、流れから、「神仏習合」 神と仏の役割分担と共存が誕生する。つまり、**古代からの「神々習合」の歴史を経験して、「神仏習合」があった。** 日本仏教の歴史は、聖徳太子の法華経から理論化され具体化する。 伝 推古天皇23(615)年、法華経の注釈「法華義疏」が著わされる。**法華経の二十五番**「観世音菩薩普門品第二十五」に、観音菩薩が語られている。

実際、太子建立と伝えられる寺院の多くは、観音菩薩が本尊である。推古天皇元年(593年)創建の「四天王寺」が、その代表である。

飛鳥・白鳳時代 592～710年

【 聖徳太子～天智天皇～天武天皇 】

★**追善**的 観音信仰 （中国の影響で、初期は同様な信仰）

『追善』とは功德を積んで、**死者の冥福**を祈る仏事。

聖徳太子は法隆寺夢殿の救世観音に皈依した。

615年、「法華義疏」など 三経義疏の成立。

600年代末、**法隆寺の壁画に十一面観音の絵**が描かれた

外陣壁画 7号壁 観音菩薩 12号壁 十一面観音菩薩

7世紀末、白鳳末期 従来の追善的観音信仰に加えて密教的観音信仰 那智山出土の観音像に十一面観音像がある。朱鳥元(686)年、天武天皇病氣平愈のため観音像仏誦経する。(紀)

奈良時代 710年～794年 ～平安中期

【 元明天皇～聖武天皇～桓武天皇 】

★密教 **現世利益** 的観音信仰 （日本独自 発展）

国家鎮護 「観音経」

聖武天皇の時代 (724～749年)

東大寺法華堂 『東大寺要録』『諸院章』などから、

前身「羅索院」は天平5年(733年)頃、良弁が不空羅索観音を本尊として創建。(～740年代)

天平7(735)年、**玄昉**、遣唐使と帰国、「**十一面神呪心経**」などを招来。「玄昉願経」と言われる経典に「千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼経」があり千巻写経が現在も伝わり著名。

天平8(736)年、聖武天皇は **長谷寺本尊**を十一面観音とした。

長谷寺は、神亀4(727)年、**徳道** 開山の説もある。徳道は、観音霊場巡りを説いた。

天平12(740)年、藤原広嗣の乱に際し、**聖武天皇は国ごとに観音像を造り、観音経写経を命じた。**

また、「**日本霊異記**」でも、観音の現世功德への民衆信仰が記録されている。

すでに養老2(718)年、三論宗**道慈**が唐より招来の「金光明最勝王経」に説く四天王に護国を願い、

天平13(741)年、国分寺建立の詔。「金光明経」に代わり「法華経」「仁王経」と護国三部経となる。

玄昉も、同じ目的で「千手千眼経」千巻書写発願。天平15(743)年、東大寺盧舎那仏像建立の詔天平年間、東大寺に**千手(観音)堂**が建てられ、今はない講堂にも千手観音像が安置された。

聖武天皇の皇女、孝謙天皇の時代 天平勝宝4(752)年、**東大寺で十一面悔過**(懺悔)

(現 本尊十一面観音の二月堂 お水取り**修二会**)

母の光明皇后を形どったとされる十一面観音が**法華寺**に造られた。

この時代までの雑密伝来で、飢饉天災・政変鎮静のため、呪術的な力を、**変化観音**に期待した。

変化観音はインドでは衰微、**特に日本では盛んに千手観音や不空羅索観音などが祀られた。**



参考
広隆寺
半跏思惟像
600年代初期



現存最古 **観音像**

法隆寺 伝来

651年 白鳳期の銘文

四十八体仏 165号

飛鳥奈良時代の49件

(57体)の金銅仏の一体

笠評君への追善供養

(東博所蔵)



現存最古 **十一面観音像**

那智山経塚出土

680年頃

天武天皇 白鳳末期

金銅仏群中の1体

銅造、鍍金 像高30.9 cm

法隆寺金堂壁画と並ぶ、

装身具の装飾に用いられた

特殊タガネによる複連

点文は、法隆寺再建期の

金銅仏に共通(東博所蔵)

法隆寺壁画

十一面観音菩薩

外陣壁画

600年代末

7号壁 観音菩薩

12号壁



九面観音

法隆寺

白檀製

唐時代

国宝

推定白鳳時代



十一面観音

木造(白檀)

唐時代・7世紀

多武峯伝来

重要文化財

(東博所蔵)

最古期

木造観音菩薩

法隆寺 百済観音

奈良時代

700年代初～中期

伝六観音菩薩

法隆寺

奈良時代

700年代初～中期

クスノキ



十一面観音

聖林寺

大神神社の神宮寺の大御輪寺に祀られが、

慶応四年(1868)に寺の廃絶とともに当寺に移された。

フェノロサ、岡倉天心らにより開扉。

木心乾漆十一面観音立像 (国宝・天平時代)

十一面観音

大安寺

奈良時代前半

(天平時代)

秘仏

10月1日～11月30日開扉

「**十一面神呪心経**」

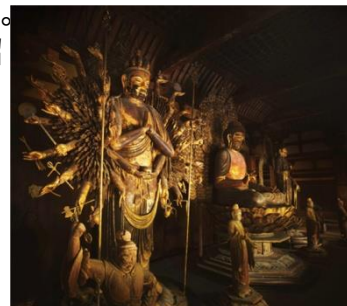
十一面観音は衆生のために善法を念ぜしめ、病を取り除き、憂悩を去り、障難、災怪、悪夢を除き、一切の諸魔鬼神の難を退ける心呪を持つ像で、像を拝むとご利益に預かれる

十一面観音は変化観音である。観音はもともとはひとつのものだったが、功德が多岐にわたるために、その功德をいろいろな形で、表すようになり、さまざまな形の観音像が作られた。

千手観音や**十一面観音**は、人々に理解しやすいために、多く広まったと考えられる。

後世、変化観音の区別して、変化をしていないはじめの形の観音を**聖観音**と呼ぶようになる。

超性別であるが、西インド起源では女神の側面、「水と豊穡」を示す水瓶を持つ。



千手観音

唐招提寺 奈良時代

本尊「盧舎那仏」

左右「梵天」「帝釈天」

右「薬師如来」

三尊四隅「四天王」

* 寿宝寺 千手 平安時代



現存最古 **千手観音**

葛井寺 奈良時代

700年代中期

聖観音

薬師寺 奈良時代

700年代中期 国宝



平安時代中頃 1,000年頃～

★来世救済的観音信仰 阿弥陀仏への橋渡し

古代国家に衰退の兆しが見え、藤原氏が天皇の外戚として権益を独占した。藤原氏と対立して没落した不遇な貴族たちの間から、来世の信仰としての観音信仰が芽生えた。この時期の観音信仰は、阿弥陀信仰に代表される来世の浄土を求める信仰への橋渡しを担う役割を果たした。11世紀には、反藤原氏貴族たちから生まれた藤原氏など権勢貴族たちにも浄土信仰が広がり、造像・建築の華美を競う。

六道輪廻に苦悩する衆生を導く六観音信仰

天台智顗『摩訶止観』のなかで、「請観音経」の六字章陀羅尼を6つの観音にたとえ、それぞれを六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天）に配した。その考えに基づいて、平安中期、六観音信仰が生まれる。密教の観音として、今まで現世利益中心であった観音信仰は、来世救済の利益も兼ね備えて、観音を本尊とする寺院に「**現当二世**（げんとうにせい）の利益」を求め、人々が参詣する。真言六観音 小野仁海（じんかい）が藤原道長の下問に対して挙げた六観音像 聖・千手・馬頭・十一面・准胝（じゅんてい）・如意輪（にょいりん） 天台六観音 聖・千手・馬頭・十一面・不空羂索（ふくうけんじゃく）・如意輪

また、養老年間（717—724）大和国初瀬寺（現 西国第八番 長谷寺）にいた**徳道上人**が病気で仮死状態になったとき、夢に閻魔大王が現れて、「悩める人々を救うため、観音霊場をつくるように」と告げられたという。息を吹き返した上人がこの言葉を守り、畿内の三十三ヶ所に観音霊場を設けたのが現在の西国三十三ヶ所の始まりとする説がある。法華経「観世音菩薩普門品第二十五」（観音経）には、観世音菩薩はあまねく衆生を救うため相手に応じて「仏身」「声聞（しょうもん）身」「梵王身」など、33の姿に変身すると説かれていることにちなむ。当時はあまり普及しなかったが、平安中期になって**花山法皇**が自ら霊場を訪ね歩いたことが巡礼の始まり、あるいはその復活のきっかけとする説もあり、平安末には山岳での聖たちの活動に倣い、徐々に民衆にも拡大していく。

平安時代末 ～ 室町時代

★二求両願的観音信仰

京都七観音詣（革堂、河崎、吉田寺、清水寺、六波羅蜜寺、六角堂、蓮華王院） 平安終末には、**聖**（ひじり）と呼ばれる修験的仏教者の活動が活発化。聖の多くは霊山・霊場で苦行を重ね、法力・験力を得たとされ、多くの貴族・民衆はこのような異能の行者に対して「**現世利益や、来世救済の二求両願**」を求めて帰依した。この結果、聖たちの住む山や寺院が参詣・参籠の対象となり、新しい霊場が誕生。また、聖たちが回国修行する各地の霊山・霊場をその帰依者も辿ることにより、霊験・求道の成果を得ようとするが行われ始め、先の**六観音信仰の興隆と合流して三十三力所観音巡礼**が成立した。（『観音信仰事典』速見侑編・戎光祥出版(株) 速見侑「観音信仰のあゆみ」） 鎌倉時代、観音巡礼が盛んになると、「西国写し霊場」として**源頼朝や実朝**の創建と伝える**坂東三十三箇所**、京都に洛陽三十三ヶ所。室町時代には**秩父**三十四箇所も創建され、西国・坂東・秩父と秩父三十四番水潜寺を合わせて「百観音」といわれ、百観音巡礼をする修験者なども増加した。（西国）三十三力所観音巡礼の本尊 **14ヶ寺が「千手観音」で最多**、6ヶ寺が「十一面観音」。

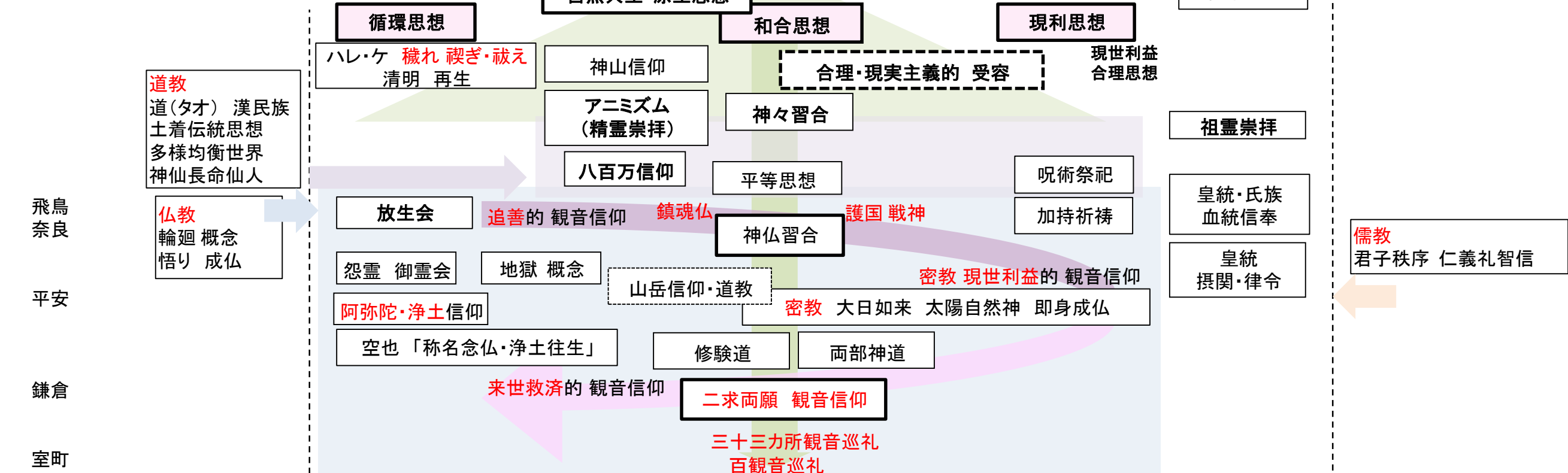


大報恩寺（千本釈迦堂）六観音 鎌倉時代/1224年・定慶作 重文 等身大の六観音像が揃って残っている稀有な重要文化財



白衣観音図 室町時代 狩野元信・画

日本文化の特性 基本原理の体系より 「観音信仰」の位置付け



天武天皇と法相宗の**道昭**、**義淵**により、680年 **法相宗 薬師寺**開基。天武期を境に、仏呪、道呪に系統した**役小角**が、葛城、吉野金峯山から山代 山岳修業の拠点発祥。 700年代、文武、聖武期に義淵と弟子の**行基**や**良弁**、また道昭に師事した**泰澄**らにより、信仰拠点が山代周辺に拡大する。

平城京(710年)奈良時代、717年(養老元年) 入唐した義淵の弟子**玄昉**も、ともに濮陽の智周に師事して法相を修め、帰国後これを広めた。玄昉は興福寺に入り当宗を興隆、法相宗興福寺の基をきずく。 **聖武天皇**は、仏教による災厄(飢餓・疫病)戦乱鎮静の『鎮護国家』の思想に基づき、741年『国分寺・国分尼寺建立の詔』。 また、唐の**華嚴宗**第3祖法蔵に学んだ**審祥**は736年に帰朝、金鐘寺(後の東大寺)良弁の招きを受け『華嚴経』・『梵網経』を講義、その思想により東大寺盧舎那仏像が構想された。 743年5月『墾田永年私財法』 同年10月東大寺『大仏造願の詔』 優婆塞行基集団 が貢献。 749年、聖武天皇に菩薩戒を授けた行基は没す。751年、良弁が東大寺初代別当に。 同時代、**延鎮**(法相宗)による「山科、法厳寺」と、**慶俊**(法相、華嚴、真言宗)による「愛宕、五寺」開山で、山代から山背にかけた山岳での信仰拠点が整う。 南都六宗は、三論・成実・俱舎・法相・華嚴・律 の 6 宗。 宗教的としてよりも教学思想的に、朝廷や文化に影響した。 そのうち現存するのは、興福寺と薬師寺を二大本山とする法相宗、東大寺の華嚴宗、東大寺で授戒の制を確立した鑑真が開創した唐招提寺の律宗の三宗。 南都六宗は国家を安定させるために信仰する『鎮護仏教』としての性格が強い。

「**神仏習合**」**発祥** 南都の教学仏教と平行して、宇佐八幡宮での**法蓮**、のちに**雑密**と呼ばれる断片的密教僧や私度僧の活動がある。「神仏習合」は発祥過程から三種に分類される。 「護法善神」奉斎神が仏を招来 (福井 剣神社 宇佐八幡宮) 「神身離脱」奉斎神が託宣を告げて仏を招来 (若狭彦神社 越前気比神社 山城賀茂社の岡本堂) 「神奈備・磐座・神籬信仰習合」 古来信仰に仏を招来 (木津川 神雄寺 岸和田 神於寺)である。 「**神宮寺**」が、神祇に仕える目的から神社に付属し建立された。霊亀年間(七一五―一七)の越前国気比神宮寺や、養老年間(七一七―二四)の若狭国若狭彦神宮寺の建立はその先駆をなす。720年隼人の乱後、宇佐での放生以来、八幡神と仏は、相互関係にある。神に祈願し勝利した相手、敗者の霊を鎮魂させる仏である。741年までに宇佐八幡宮神宮寺として弥勒寺が建立された。 “【神仏習合】【神宮寺】”, 国史大辞典 逆に、仏の守護を神に求める役割が「護法善神」である。「東大寺」創建の前、749年、大仏の鑄造が完成し、宇佐から**八幡神**を勧請し「**東大寺**」の鎮守社として「手向山八幡宮」が創建された。その南都教学と神仏習合発祥の時代、752年、聖武天皇・光明皇后が東大寺大仏(盧舎那仏)開眼供養。 天平宝字2年(758年)竣工した。 777年、八幡神は神で初めて出家、八幡大菩薩となる。 766年までに伊勢神宮にも神宮寺が、奈良時代末までに大神神社に大御輪寺が創建される。(大御輪寺の観音菩薩は、明治、廃仏棄釈の折、聖林寺に遷され国宝となる)

特に「**神身離脱**」**習合の背景**には、神主や祝部(はふりべ)、豪族たちの**富の蓄積**がある。 神祇祭祀を基礎とする当時の租税制度は 皇祖神の霊力が宿るとした幣帛(へいはく)、律令で定められた幣帛班給を受けるための租税としての初穂徴収である。 しかし一方、律令などの近代化、開墾と条里や灌漑の整備で生産量が増加、富が村に残るようになった。 村長や富農へ、さらに地方豪族や郡司に富が蓄積し、財力で田夫を雇うようになり、**所有の概念**が生まれた。 幣帛への価値観が崩壊し、受領する村が減少、また初穂奉納や班給を私物化する豪族も出現、税制が揺らぎ始めた。 朝廷は、幣帛を受領するように太政官符(行政命令)を出し、ある時期まで一定の効果が得られた。 豪族や富農は、皇祖神への裏切りと所有の**罪悪感**にとらわれ、**密教僧による「神宮寺」を勧進**。 それと相乗して初穂(税収)低迷、幣帛受領の減少もさらに拡大した。

やがて朝廷も、僧統(僧都などの官僚機構)の承認を出して神宮寺の僧を合法化した。 古来の神祇祭祀と律令による近代化との矛盾を、仏教による国家統一に方針変換したわけである。 その結果、豪族の悩みも解消し国家も『墾田永年私財法』などで私的所有を承認したので、仏教ばかりか皇祖神への信仰も厚くなり、仏教と神道の合祀が促進された。 神信仰が無くならなかった理由は、村人や田夫たちは**自然に左右される農耕**の実務者として古来の神祭りと宴を必要としたからである。 そして難解な南都教学とはちがう**密教**は、古来の神祇祭祀となじむ呪術的であり、世俗の富を現世利益として肯定する思想として、この神仏習合の主体となった。 しかし、密教はまだ国家として認知できる大乘仏教、体系を備えてはいなく、空海を待つことになる。

司馬遼太郎によると、**空海**は大安寺の勤操(ごんぞう)の私的給仕人としての自由な立場を得て、その南都教学を消化した。 **法華経**に混在する「人間としての釈迦仏」と「永遠の空なる法身仏」、この存在的矛盾に盧舎那仏(るしゃなぶつ)という思想的法身を創造した思想が、東大寺に伝わった**華嚴経**である。 空海は、その中に 宇宙原理の手掛かりを求める、そして、大和高市郡の久米寺で「大日経」毘盧遮那仏(びるしゃなぶつ)、特に日本密教では「**大日如来**」と呼ぶ思想的存在と出逢う。 延暦23年(804年)遣唐し、密教第七祖 長安 青龍寺の**惠果**から、灌頂名 遍照金剛(へんじょうこんごう)と、伝法印信 阿闍梨付嘱物など授けられた。 大同元年(806年)10月「虚しく往きて実ちて帰る」 大同4年(809年)嵯峨天皇が即位。空海は、和泉国槇尾山寺から、7月の太政官符を待って入京、**和気氏**私寺であった愛宕山麓「**高雄山寺**(後の神護寺)」に入った。

「高雄山寺」所在の**愛宕山**は、愛宕神社略記などによれば、文武天皇期の大宝年間(701～704年)に、役小角と泰澄が開山し神廟を建立したとする。元来は山岳修験の山であり、明治の神仏分離のあと分離成立となる愛宕神社には、その時の伝承から日本一の天狗として「太郎坊」が伝わる。 泰澄は、秦氏の系統で、越前国、豪族三神安角(みかみのやすずみ)の次男が通説。越智山にのぼり、十一面観音を念じて修行を積んだ。のちに開山する白山信仰の創始者である。

天応元(781)年、光仁天皇(桓武天皇の父)の勅により、**慶俊**僧都と**和気清麻呂**が、国家安泰を祈願し、慶俊僧都と愛宕山全域を中興、愛宕一帯を聖地化した。 興福寺の伝えによると弘法大師は法相学を 義淵僧正一道慈一**慶俊**・勤操一空海(弘法大師)という系統で学ばれた。とする。 唐の五台山に倣って、5箇所的高峰に寺を創建。 朝日峰の白雲寺、大鷲峰(おおわしみね)の**月輪寺**、高雄山の**高雄山寺**、龍上山(たつかみやま)の日輪寺、賀魔蔵山の伝法寺である。「**月輪寺**」は、**千手観音菩薩**を本尊とし、神護寺とともに現存、光仁天皇の勅願所となっている。 清麻呂は、同じ頃、河内にも「神願寺」を創建した。 天長元年(824)清麻呂の子、真綱、仲世の要請により「神願寺」と「高雄山寺」を合併し、寺名を「**神護国祚真言寺**((じんごくそしんごんじ 略して神護寺)」と改め、空海に付嘱し定額寺(官が保護を与える一定数の私寺のこと)に列せられた。それ以後、真言宗として今日に伝わる。

その**慶俊**は、730年頃に生まれ、延暦年間(782～806)まで生きた。 百済王族の子孫である渡来人系氏族葛井(藤井)連(ふじいのむらじ)の出身。奈良時代の720年に白猪氏から**葛井氏**に改姓。8世紀中頃に創建されたと推定される**藤井寺**を氏寺としている。出家後大安寺に属し、入唐僧の道慈を師として三輪、法相、華嚴などを学ぶ。 天平勝宝5(753)年には法華寺(光明皇后の宮を寺院とした宮寺を起源とする)の大鎮。 同8年、聖武天皇の死に際して律師に。昇進の背景には学問的教養のほか、光明皇后、藤原仲麻呂との強い連携が想定される。 孝謙天皇と道鏡の関係進展で、藤原仲麻呂政権の崩壊とともに失脚するも、道鏡の没落後、律師に復帰していた。



聖林寺 観音菩薩 (元 大御輪寺 像)



我が国古代からの「**自然神**への信仰」と**清浄心**、陰陽の「自然・宇宙の森羅万象」、道教の「神仙思想」、本来の仏教である「現世での煩惱克服」、孔子の儒教からは「性善説と治世者の徳と実践」を強調する孟子的な考え。 修験道の信仰を考えると、それらを原初的にすでに内在し、そのため、渡来した各々の信仰思想を受容融合できた、と考える。

日本信仰思想と修験道本山派の教えを総合的に比較すると、「循環思想」である来世往生、浄土信仰が含まれていない様に見え、見受けられる。しかし、熊野が本来、「**観音補陀落**の地」であることは、特に奈良・京都の多くの山岳寺院の起源である修験活動と、本尊観音信仰の一致に受継がれていると考える。 聖護院など修験道寺院で、読経されている「法華經」教義も、三世益物(さんぜやくもつ)の本仏釈尊を強調し、二十五番の妙法蓮華經「観世音菩薩普門品」では、「仏言。若復有人。受持観世音菩薩名号。乃至一時礼拝供養。 是二人福。正等無異。於**百千万億劫**。不可窮尽。無尽意。受持観世音菩薩名号。」と、その功德の永遠性を説く。 吉野金峯山の「蔵王権現」は、過去・現在・未来の三世にわたる衆生の救済を誓願して出現した、とその部分を強調する。 しかし修験道宗派全般では、個別の經典に執着無く、実践重視である。

熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社の三社からなる**熊野三山**の祭神神々を「熊野権現」と呼ぶ。 特に主祭神である家津美御子(けつみみこ)・速玉・牟須美(ふすび、むすび、または「**結**」とも表記)のみを指して熊野三所権現、熊野三所権現以外の神々も含めて熊野十二所権現ともいう。 各神社の主祭神は以下の通りであるが、相互に祭神を勧請しあい、前述のように三山では三神と一緒に祀り、熊野として一体習合している。 熊野本宮大社の主祭神の家都御子神(けつみこのかみ)または家都美御子神(けつみこのかみ)は阿弥陀如来、新宮の熊野速玉大社の熊野速玉男神(くまのはやたまおのかみ)または速玉神(はやたまのかみ)は薬師如来、熊野那智大社の熊野牟須美神(くまのむすみのかみ)または夫須美神(ふすみのかみ)は千手観音とされる。三山はそれぞれ、本宮は西方極楽浄土、新宮は東方浄瑠璃浄土、那智は南方補陀落浄土の地であると考えられ、平安時代以降には熊野全体が浄土の地であるとみなされるようになった。

熊野祭神の初見は、大同元(806)年『新抄格勅符抄(しんしょうきやくちょくふしょう)』で、天平神護2(766)年、**速玉神**と**熊野牟須美神**にそれぞれ4戸の封戸(ふこ)が与えられたと記される。周辺の考古学情報からも、沿岸部の縄文から弥生時代の自然信仰に原初する。 **熊野と吉野**は、古代の自然信仰と、仏教的習合を繋ぐ古道である。 奈良の平城京、京都の平安京から見れば、まさに、その時々、時代から、古代にさかのぼる古道でもある。 原初原点に回帰し、清浄なる地で、その自然なる力と一体になり、神名の「速玉・牟須美」(タマ 魂・ムス 産霊)に表現される生命力、再生を憧憬する古道である。 天皇や上皇たちの**熊野詣の本質**は、「天変地異」や、「貴族社会と武家社会」混乱に際し、それらの心情、信仰を背景とした「皇祖神以前、自然神への畏敬崇拜」と考える。

「**修験**」の初見は、「日本三大実録」の貞観10(868)年、吉野深山で修行した**道珠**に「修験」があると聞かれた天皇が招かれたとある。 当時は**清和天皇**であり、その記事の前日7月8日、播磨国で地震。官舎、諸寺堂塔ことごとく頽倒。前年から引き続き、毎月のように地震があったことも記されている。

鎌倉時代、**熊野を拠点とする熊野修験**、大和諸大寺から金峯山修行、廻国修行する二つのグループが形成。室町末期、前者の聖護院本山派(天台系)が地域組織「霞」を結成し、後者、興福寺などから醍醐寺に結集し当山派(真言系)で組織対抗。江戸時代には「修験道法度」で修験者の二派帰属・統制され、金峯山寺は天台傘下となるが、戦後に「金峯山修験本宗」として独立する。

「**熊野**での仏僧入山修行」は、「日本霊異記」宝亀3(772)年、興福寺沙門「**永興**」が初見。**天台**の第5代座主、智證大師**円珍**(814―891)が、熊野那智の滝に一千日籠居をされた後、熊野より大峰修行された。 平安時代には、浄蔵、花山法皇、文覚たちの山籠、大治5(1130)年、天台沙門「**行誉**」らによる埋経など末期にかけて記録が増える。「熊野権現御垂迹縁起」は長寛元(1163)年までに記されており「家津美御子大神本地が阿弥陀如来」など**熊野三所権現**として神仏習合した。「熊野権現金剛蔵王法殿造日記」には、熊野から吉野金峯山までの踏破を試みた山伏の一人、「**長円**」が延久2(1070)年、熊野権現縁由を説明したことで、**白河上皇**御幸に至った、と記する。 吉野の金峯山、熊野を拠点とし大峯山への入峯修験者、貴紳の熊野詣、御嶽詣(金峯山参詣)が盛んとなりその先達活動が増える。

増誉(ぞうよ、長元5年(1032年) - 永久4年(1116年))は、平安時代中期の天台宗の僧。父は大納言藤原経輔。一乗院大僧正と称される。園城寺(三井寺)の乗延に師事し、行円の下で得度、行観(ぎょうかん)から灌頂を受けた。 葛城山や、師と慕したう**円珍**が生前行っていた熊野で大峰修行し、修験僧として名をはせ、寛治4(1090)年、**白河上皇**の熊野詣の先達(案内役)を務めた。 この功により増誉は初代の**熊野三山検校**(霊場の統括責任者)に任じられ、役行者が創建したとされる常光寺を下賜され、同年、「聖体護持」を意味する「**聖護院**」の名で修験道寺院を創建した。この後上皇による熊野御幸案内は代々聖護院大先達が勤め、「伊勢へ七たび 熊野へ三たび 愛宕まいりは月まいり」と言われるほど、熊野詣は盛んになり、また**愛宕山**も修験の行場として栄えた。

「**修験道**」は、煩惱で曇る本来の本性(仏性)を、修行で験徳を顕わす業道である。

以下、「本山修験宗 聖護院門跡」より

人は本来、仏様と同じ本性(**仏性**)を持っている。ところが煩惱という迷いの中で悪い事を行ってしまい、本性を曇らせている。修行してこの曇りを磨き、悪から離れて**清らかな本心**を発揮する。そして「**法の徳を顕わす**」ことが修験の意味で、これを実践する人を「修験者」と言う。修験十二箇条に、「凡ソ修験ト称シ候ハ、実行ヲ修シ験法コレヲ成スル之義也」秘訣集に、「修トハ修生始覚ノ修行、験トハ本有本覚ノ験道ナリ」とある。

修行とは、”毎日の生活が則ち修行である”ということに気づき行動する事。 經典は主として、法華經(妙法蓮華經)・不動經(稽首聖無動大威怒王秘密陀羅尼經)・般若經、錫杖經(得道梯橙錫杖經)を読む。しかし天台宗の影響を受け、法華懺法や例時作法(阿弥陀經)も日課とする。修験道の思想からすると、宇宙一切の事象や音声は、皆「**法身の顕れ**」である、ありとあらゆる全て経でないものはない。

日本人は昔から山には神々が宿ると信じ、山の神を信仰して来た山岳信仰、**自然崇拜**に源を発した民族信仰を持っている。これは日本の国土が山に覆われ、四季折々に変化する大自然と信仰が結びついてきたからである。山自体をご神体(法体)として拝むことに始まり、山の中、つまりご神体の中に入って修行することにより呪術的な験力を得る事を望んだ。また仏教が伝えられると仏教と融和し、**神道・儒教・道教・陰陽道**等をも融合して**仏教的神道的色彩の濃い「日本独自の神仏習合・権現信仰の色彩が強い修験道」**が完成されて来た。修験道では今から約1300年前に誕生された役行者神変大菩薩を開祖と仰ぎ、聖護院では平安期の高僧、第5代天台座主智證大師圓珍を中興の祖と呼んでいる。修験道は山岳崇拜の精神を基とし、厳しい山々で修行し、困苦を忍び、心身を修練し、悟りを開いて仏果を得る、という出家・在家を問わない菩薩道、即身即仏を実修する日本古来の宗教である。



聖護院門跡
本尊 不動明王
平安時代 後期

吉野の金峯山寺は、600年代後期、**役小角**が金峯山山上ヶ岳で一千日の修行に入り、修験道独特の本尊・金剛蔵王大権現を感得し、この姿を山桜に刻んで、山上ヶ岳（現：大峯山寺本堂）と山麓の吉野山（現：金峯山寺蔵王堂）に祭祀したことを開創と伝える。 権現とは権（仮り）に現われるという意味で、本地仏の**釈迦**如来（過去世）、千手**観音**（現在世）、**弥勒**菩薩（未来世）が権化されて、過去・現在・未来の三世にわたる衆生の救済を誓願して出現した。また金剛蔵王とは、金剛界と胎蔵界を統べるという意味も表わす、とする。 現在の本尊、木造蔵王権現立像三軀は、本堂が再興された天正19年（1592年）頃の制作である。

金峯山寺創建縁起について、「金峯山秘密伝」は、「天智天皇**白鳳十一年**正月八日**役行者**始」とする。 延元元年（北朝建武3年）1336年、持明院統の北朝光明天皇による足利尊氏が京都を制圧し開幕した。「金峯山秘密伝」は、その歴史の中で、後醍醐天皇の吉野南朝樹立にあたり護持僧となった醍醐寺の**文観**が著し、後醍醐天皇に献上された書物である。今の「**金輪王寺**」は、その時に後醍醐天皇が皇居とした金峯山寺の塔頭「**実城寺**」で、吉野朝皇居跡とされている。その「天智天皇**白鳳11(671)年**」は、「日本霊異記」に語られる当時の役小角記録や、大宝年間（701～704年）の愛宕山に伝わる越前「泰澄」との開山、天狗伝承とも時代が一致する。「金峯山秘密伝」には、役小角が修行霊山として金峯山と大峯山を開山したことや、金剛蔵王権現、眷属の八大金剛童子、子守、勝手、天川弁才天の五尊や諸尊、諸神の次第も詳細されている。 また、そこに掲載されている「**吉野種子曼荼羅**」には、金剛蔵王権現を中心とした信仰の大成が表現され、金剛蔵王権現を中心に、釈迦、観音、弥勒三尊と、金剛界大日と退蔵界大日など中核に祀られ、上部には吉野熊野とも呼ばれる弥山の神格とされる龍神の**天川**（天河）**弁財天**を中央に祀り、天満（御霊神）、牛頭（疫神）などで外隔が構成されている。

「金剛蔵王権現信仰」の成立過程
古代神山信仰の流れから、「木曾御嶽」に残るように多くの岩石が折り重なる各国の高山を、美称「御」を冠し「御嶽」と呼んだ。その中で、吉野金峯山は「**金**の御嶽」と呼ばれていた。

奈良時代天平神護2年（766年）、元興寺法相宗青年僧の**護命**（ごみょう）が、吉野山麓の比蘇寺で「**虚空蔵求聞持**（ぐもんじ）法」を行った。**弘法大師**が護命僧正八十才の寿を賀した詩文が、『**性霊**（しょうりょう）**集**』にあり、『元興寺の大徳僧正、年八十に登（すす）んで、智ほ十二（十二部経）に明かなり、無着（むちゃく）世親（せしん）の論、奥きを探（さぐ）り、旨（むね）を諳（そら）んず。……二美（福と智）兼修し、六度（六パラミツ）具（つぶさ）に行ず。謂（いい）つべし仏家の棟梁、法門の良将なる者なり』等と最高讃辞をつらね、美しい詩文で『卓たる彼の人宝（じんぼう）、謂うべし国の珍』と人間的国宝であることを宣言して結んでいる。 **護命**は、南都仏教の護持につとめ、最澄の比叡山「一乗止観院」の大乘戒壇設置には反対している。

平安時代に、役小角伝承が広がる。 800年代後半、**空海**の実弟真雅の入室弟子であり、東大寺で修行していた**聖宝**が役小角に私淑した。 吉野の金峰山（きんぷせん）で山岳修行を行ない、参詣道を整備。吉野山に本尊如意輪観音と脇侍の多聞天（毘沙門天）、金剛蔵王菩薩を祀った。 貞観16(874)年、聖宝は、京都山科の笠取山山上に准胝（じゅんてい）・如意輪（にょいりん）の両観音像を安置し、山岳修業から「**醍醐寺**」が始まる。 今日、上醍醐と呼ばれている場所である。 その後、聖宝は、宇多法皇の帰依をうけ、延喜元（901）年、東寺大僧都に任ぜられる。 延喜7(907)年には、醍醐寺が醍醐天皇御願寺となる。以後、山麓の下醍醐を中心に飛躍的に発展。**聖宝**は、醍醐天皇のために、准胝堂で皇子誕生を祈願し、のちの朱雀・村上両帝たちが生まれる。 金峰山の発展に尽力したことから、聖宝を役小角以降途絶えていた修験道の再興の祖とする伝承が生まれた。 のちに「修験道当山派」の本山となる「**三宝院**」は、永久3年（1115年）、左大臣 源俊房の子で醍醐寺14代座主勝覚が灌頂院（かんじょういん）として開き、後に仏教の三宝にちなんで現在の名に改めた。 康治2年（1143年）に鳥羽上皇の御願寺となっている。 鎌倉から南北朝時代にかけて、成賢（7世）・憲深（11世）・賢俊（21世）と高僧を輩出し、足利尊氏から厚く保護された。 応安7年/文中3年（1374年）**足利義満**が三宝院23世である光助を室町幕府の祈祷を行う武家護持僧の管領役に任じられた。25世満濟は「黒衣の宰相」とも呼ばれ、応永3年（1396年）に足利義満の猶子となって醍醐寺座主に任じられ、後には足利義教の將軍擁立にも活躍するなどした。以後、歴代院主が醍醐寺座主を兼ねる慣例が成立する。また、古くから醍醐寺は真言宗系の修験の中心であったが、この頃から三宝院が真言宗系の修験者・山伏の取締にあたるようになる。室町時代中期から形成され、江戸幕府によって公式に成立する「**当山派修験道**」では、聖宝を祖とし、以上の経緯から真言宗との関係が深い。

「金剛蔵王権現」の**初見**は「藤原道長金剛経筒銘文」で、寛弘4（1007）年、**藤原道長**が金峯山上に納経し、釈迦の化身として金剛蔵王権現に弥勒菩薩下生まで埋経守護を祈願している。

1100年代に記された「東大寺要録」では、盧舎那仏である大仏鑄造のため、**良弁**が金掘出を吉野の蔵王権現に依頼するが、弥勒菩薩下生の準備であると断られた。代わりに告げられた通り、近江志賀に河辺に如意輪観音を祀り祈願すると、東北より金が発掘できた。そのため、如意輪観音と、脇侍として執金剛神と金剛蔵王を祀り寺とした、とする。 その寺が、天平19(747)年創建の「**石山寺**」である。石山寺寺伝では、聖武天皇の勅願による同年もしくは天平勝宝元(749)年、開基とする。国宝本堂の正堂は永長元年(1096年)再建で、滋賀県下最古の建築である。 内陣には本尊如意輪観音を安置する巨大な厨子がある。合の間と礼堂は淀殿寄進で慶長7年（1602）に建立された。合の間の東端は「紫式部源氏の間」と称され、執筆中の紫式部像が安置されている。**礼堂**は傾斜地に建ち、正面は長い柱を多数立てて床を支える懸造（かけづくり）で最古建築。懸造本堂は、清水寺、長谷寺など、観音菩薩を祀る寺院に多い。山岳での観音信仰を象徴している。

現存最古の蔵王権現 彫刻
鳥取県東伯郡三朝町の三徳山（みとくさん）**三仏寺**（さんぶつじ）は、『伯耆民談記』で、慶雲3年（706年）、修験道の開祖である**役小角**（役行者）が子守権現、勝手権現、**蔵王権現**の三所権現を祀ったのが始めとされている。 永和元年（1375年）の修理棟札で「蔵王殿」と名称された国宝「三仏寺奥院（**投入堂**）」がある。 平安時代末の、投入堂正本尊である木造蔵王権現立像と、本尊像とともに安置されていた木造蔵王権現立像 6軀がいずれも国重要文化財で、現在は宝物殿に安置されている。

本尊は、右足を高く上げ、焰髪を逆立てる典型的な蔵王権現像であるが、忿怒の表情は控えめで、全体に平安後期彫刻特有の穏やかな作風。像内納入文書に仁安3年（1168年）の年記がある。その他の6軀の内、一番古い像は、年輪年代法によって1025年の伐採年代が確定されている。**蔵王権現の最古の彫像**である。

吉野種子曼荼羅



吉野金峯山寺 本尊



吉野曼荼羅図（重文）

西大寺所蔵
南北朝時代



三仏寺奥院
（投入堂）本尊



「不動明王」の漢訳初見は、不空羂索観音の典拠でもある、北インドの菩提流志(ぼだいるし)が、709年「**不空羂索神変真言經**」に記した「**不動使者**」の名称である。 善無畏(ぜんむい)訳「**大日經**」では、「**大日如来使**」として、子供の姿として明確化する。 そのサンスクリット語のアタチャラナータは「不動の守護者」の意味であるが、同じ頃、唐の一行は、「大日經疏」で「不動明王」と訳した。 善無畏の「大日經」の所説を図示したものが「退蔵界曼荼羅」で、金剛智による「**金剛頂經**」の所説が、「金剛界曼荼羅」である。 この中心經典成立前の密教を雜密、以降を純密と呼ぶ。 金剛界曼荼羅の自性は、中央・大日如来、東方・阿閼如来、南方・宝生如来、西方・阿弥陀如来、北方・不空成就如来によって分担されているが、これら五如来は、それぞれが真理の当体(自性)であり**自性輪身**(仏・如来)という。この真理は、菩薩として化現し衆生を教化救済のために正法を説くため、**正法輪身**(菩薩)という。さらにその済度を徹底するために強剛難化の衆生を忿怒(ふんぬ)相をもって折伏する役割が**教令輪身**(明王)である。それらを「**三輪身**」と呼ぶ。 自性輪身である大日如来の、正法輪身が般若菩薩で、教令輪身が**不動明王**である。そのため不動明王は、未だ教えに従わない救い難い衆生を力づくでも帰依、教化するための役割を持つ。「大日如来の命を受けた」とも、「如来が自ら明王に変化した」とも、伝えられている。 釈迦などの如来や、観音などの菩薩とは違い、不動などの明王はすべて**密教**の下で形成されている。 恐ろしい外貌と激しい憤怒の相が特徴だが、同じ明王でも「孔雀明王」は唯一、慈悲を表した菩薩の顔をしている。

不動明王は、インドや中国では独尊仏としての作例は乏しく、独立した信仰対象ではなかったが、日本では密教を招来した**空海**が胎蔵界曼荼羅の象徴として重視したため信仰が広まった。 その理由は、我が国古代からの神山信仰と、空海たち山岳修行僧にとっての「**山の守護神としての不動明王**」の**信仰一致**にあると考える。 左に索髪(さくはつ)を垂らし、右手に剣、左手に羂索を持つ。常に火の中にいることから、光背に迦楼羅炎がある。向かって右(向かって左)に、童顔の**矜羯羅童子**(こんがらどうじ)、左に金剛杵(こんごうしよ)と金剛棒(いずれも武器)を手にしていたずら小僧の**制多迦童子**(せいたかどうじ)に従えた三尊(不動三尊)の形式で祀られることが多い。**その二童子は、中国で考案されたとされる**八大童子の二名で、残りの六名は、慧光(えこう)童子、慧喜(えき)童子、阿耨達(あのくた)童子、指徳(しとく)童子、烏俱婆伽(うぐばが)童子、清浄比丘(しょうじょうびく)である。八大童子彫像の作例として、高野山金剛峯寺不動堂に伝わる国宝像がある。 真言宗(東密)では、不動明王、降三世明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王の五つを**五大明王**という。東寺、大覚寺、醍醐寺、不退寺など多くの寺で、五大明王がそろって祀られている。天台宗(台密)では、金剛夜叉明王の代わりに烏枢沙摩(うすさま)明王が、五大明王の一尊として数えられる。五大明王像は、中国でも若干の遺例があるが、不動明王独尊と同様に日本で造像盛んとなる。 平安時代前期に密教が隆盛し、五壇法の本尊として五大明王が祀られた。 東寺講堂に、承和6年(839年)頃の国宝彫刻。醍醐寺には、上醍醐五大堂と靈宝館に重文彫刻がある。東寺、醍醐寺、岐阜の来振寺には国宝画像が伝わる。

我が国、最古の「不動明王」は、その**東寺講堂**の国宝像である。東寺は国家鎮護の寺院とし、薬師三尊(現像 桃山時代)を本尊に金堂(国宝)から創建された。弘仁14(823)年、空海が嵯峨天皇より下賜されたあと、真言宗根本道場として、天長2年(825年) **講堂**(重文)が着工された、承和2(835)年の空海入定後、承和6(839)年に講堂諸像が開眼供養された。(『続日本後紀』) その際の21像の内、現存は15像だが、五仏の中尊の大日如来と、五菩薩の中尊の金剛派羅密は文明18(1486)年の土一揆で、講堂とともに焼失したため、中尊としては不動明王のみが平安時代から存続する。 五大明王像(国宝) - 不動明王像を中心に、降三世明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王像を配す。 貞観9(867)年創建の**御影堂**の不動明王像(秘仏)も、明王像では日本最古期の作例である。 講堂は、金堂の背後(北)に建つ。 800年代の作、「**波切不動**」は、空海が唐で彫り持ち帰ったとされ、高野山南院にある。その面貌は、空海撰「**唵十九種相観想略頌**(かんじゅうきゅうしゅそうかんそうりやくしょう)文」にある「**19観**」に由来し、900年頃より、天台宗の安然や真言宗の淳祐が説き、青黒い身体に片目を閉じる等の特徴をもつ不動明王像が増える。青蓮院の「青不動」(平安後期 国宝)が画像としてその典型である。それ以外の造形画像では、円珍が感得して描かせた「黄不動」(三井寺 800年代 国宝)、同じく円珍が比叡山横川で感得したという伝説を元にした「赤不動」画像(鎌倉時代 高野山明王院)がある。「赤不動」は、**修験道**との関係を表現する「三環つなぎの飾り」と、俱梨伽羅剣をもち二童子に従える。竜が剣に巻き付く俱梨伽羅剣は不動明王の化身ともいわれている。

- 不動明王祈願「不動法」 目的の変遷
- ① **護国**修法 天変消弱・反乱鎮圧 四壇立て(大壇、護摩壇、十二壇、聖天壇) 東密の太元帥法(たいげんのほう)、台密の熾盛光法(しじゅうこうほう) 天慶3(940)年、平将門の乱、広沢遍照寺 寛朝が空海作不動明王を下総に移管、**調伏**祈願。のち成田山新勝寺。
 - ② 上級貴族の**私的祈願** 安産祈願・物怪調伏 不動法(護摩一壇) 延喜3(903)年、天皇に入内した娘、穩子(やすこ)の安産祈願を願い、藤原基経が祈願。 五壇法(五大明王を本尊とする) 天台僧 良源の修法 藤原道長の祈願 寛弘5(1008)年、藤原道長の彰子(あきこ)の安産祈願・**物怪調伏**。寛仁2(1018)年、道長重病の回復祈願。 寛仁5(1021)年、政敵であった藤原顕光と娘延子の怨霊に対する、寛子や嬉子のための調伏祈願。 治安2年(1022)年、無量寿院を改称し「**法成寺**」、金堂・五大堂の落慶供養 五大堂の不動明王を主尊とした五大明王への、現世での政敵**調伏**と後世のための念仏専念の守護。 金堂の大日如来(現世利益)。薬師堂の薬師像七体(七道諸国除災)、観音像六体(来世六道衆生拔苦)。 阿弥陀堂の九体阿弥陀仏(来世往生)。
 - ③ 平安から鎌倉 「**身代り不動**」の伝承 「大日如来の教令輪身」から「信者の身代り」 円仁、覚鑿(かくばん)、証空 園城寺修験道による民衆への伝承流布。
 - ④ 鎌倉幕府や朝廷の**政敵調伏**祈願 建保元(1213)年、北条義時の和田義盛討伐 台密僧 **忠快**による不動法など 承久3(1221)年、承久の乱での後鳥羽上皇の幕府**調伏**祈願。 その後、源頼経の五大堂建立北条執権**調伏**祈願 東密僧 定豪 後醍醐天皇の密教受戒と幕府**調伏**祈願 円珍の「赤不動」を守本尊とした
 - ⑤ 修験道 山伏による、**民衆への現利功德**信仰の伝播 「太平記」 役小角の奈良・平安からの山岳修行から、室町・戦国の山伏の組織化 (円珍 園城寺～聖護院本山派 熊野 / 空海～**聖宝** 醍醐寺当山派 金峯山) 神山信仰と山の守護神としての不動明王 **修験道の本尊**へ



東寺 不動明王



聖護院門跡
本尊 不動明王
平安時代 後期



「地蔵信仰」は、インドや中国と比較し我が国で最も信仰された菩薩である。その成立過程も、他の仏と違い民間から信仰拡大し、子供の守護神、地域の六地蔵として、生活に密着し多様な功德通称を持つ菩薩が誕生した。 また、武家からも信仰も集め、「**将軍地蔵**」という独自の菩薩を創造した。その背景には古代からの他界・地域的な靈観や、他界と媒介する靈憑依の巫女の流れがある。

「地蔵菩薩」のサンスクリット名はクシチガルハで、「大地の包蔵」の意味である。この信仰を説く代表經典「**地蔵十輪經**」では、「此土**末法の教え**なり」として以下に功德を説く。「安忍の動かざることは台地の如く」 地蔵菩薩は、耐え忍ぶこと大地のようにおおらかである。「よく善根を生じることは**大地の徳**の如し」 善根とは、元々持っている心の能力(真の人間性)。大地の徳とは、大地はさまざまな資源を蔵し、草木の生命を育てる。すなわち、大地はわれわれの生活の土台であり、あらゆるものを支える忍耐と堅固さがある。「失道の者を照らすことは明炬(めいきょ)の如し」 お地蔵さまは松明のような明るさ(小さな灯り)で、迷った人の行く手(人生という道)を照らしてくれる。 飲食・衣服・医療が充実し除病とする。 また「**地蔵本願經**」では、土地は豊饒、家宅は永安、長寿除災二十八種利益を説く。 両經共通し冒頭「末法」にあるように釈迦入滅後、弥勒出現までの五濁悪世無仏世界で、六道輪廻する衆生救済を仏から任された菩薩で、地獄救済が地蔵菩薩の本願である。宝珠と錫杖を持つ比丘の姿は、衆生救済の応化身である声聞(せいもん)形で、その親しみやすい出家の姿は中国密教僧、不空による「地蔵儀軌」の影響がある。

地蔵菩薩は、元来、インド古来の**地神**信仰に由来するが、インドでは普及せず、中国には400年前後に伝来し、600年代、**玄奘**により両經が訳された。 初見として唐時代の地蔵菩薩が竜門石窟などに残る。隋から唐に興った「三階教」宗派が唱える第三階としての「末法の時代観」が地蔵信仰を興隆させた。 他宗の排斥により宋に滅亡するが、唐末に発祥した**道教**の「**十王思想**」と結合し民間には残存した。「**十王思想**」とは、地獄には亡者審判を行う**閻羅王**(閻魔)などの十王がおり、生前に十王を祀れば、死後、罪が軽減されるという信仰である。十王は死者の罪の多寡に鑑み、地獄へ送ったり、六道輪廻を司るなどの職掌を持ち畏怖された。閻魔もインドの古代神格で仏教に混入され、「地蔵十輪經」でも地獄で地蔵が閻魔に変化すると説かれている。そのため中国「十王思想」では地獄の支配者**閻魔の本地を地蔵**とした。

日本では、奈良時代「十輪經」は伝来していたが注目されず、平安時代前半も現世利益中心で同様に注目されなかった。寛和元年(985年)比叡山横川の恵心院に隠遁していた**源信**が著した「往生要集」が転機となる。その中では、極楽と地獄が対比され、生善無ければ**閻魔王**に裁かれるとした。 また「十輪經」を引用し、阿弥陀や観音と並び「地蔵菩薩の救済」が描かれた。天台僧から疎外されていた源信は、同じく摂関体制に疎外された貴族の念仏結社「観学会」「二十五三昧会」に影響し、その恐怖と救済が注目された。 だが、当時はまだ、阿弥陀如来を中心とした観音・勢至・龍樹とともに「弥陀五尊」の一員として祀られたにすぎなかった。

しかし、その天台浄土教の流れをくむ「聖」から、「**六波羅密寺供花会**」などで結縁した**民衆**に地蔵信仰は伝播していた。平安時代末期の「**今昔物語集**」には、園城寺の**実叡**(じっけい)著書「**地蔵菩薩靈驗記**」の、1000年代中期の説話が引用され、地獄の苦を代行してくれる「地蔵菩薩の**代受苦信仰**」、つまり娑婆(自土)に留まり救済してくれると考えられた。経済的に仏像や寺院が作れず、そのため念仏以外の仏教的善行として物量的な諸行往生がかなわず、また観想による阿弥陀信仰が出来ない庶民に適合し普及した。 すでに平安初期の「**日本靈異記**」で地蔵菩薩や閻魔王が登場し、当時は**現世善行**で浄土往生がかなうと考えられていた。しかし、この平安末期には、**前世悪業**で地獄に召される「**地獄必定**」が信じられ、唯一地蔵菩薩だけが救済蘇生できると信仰された。 その背景には、天台浄土僧による因果応報の説法、「現世苦役は前世因縁が原因、現世功德なければ来世も地獄」という、絶望的な「**前世・現世・来世の輪廻観**」があった。

鎌倉初期には、来世浄土の役割は、法然の口称念仏によって、阿弥陀如来が主流となるが、明恵や貞慶ら旧仏教僧たちの反阿弥陀専修により、来世ではなく現世に寄り添い救済する地蔵菩薩が擁護された。同中期の弘安6(1283)年、**無住**道暁が編纂した仏教説話集『沙石集』(しゃせきしゅう)などでは、農耕生活にも関係し、「小さき僧」や「若い僧」、「田植女」に変身した地蔵の現世利益が強調された。

南北朝から室町にかけ、**武家**にも地蔵信仰が広がる。 平安末「今昔物語集」には早くも武士の危惧を救う「矢取地蔵」が初見され「**太平記**」にも再掲、また壬生寺縄目地蔵の**身代り**説話も登場。**足利尊氏**は伝空海作の地蔵像を守り仏とし、好んで地蔵画像を与え、暦応2(1339)年創建の**等持院**には地蔵十万体を安置した。 殺生で落ちる地獄からの救済を地蔵に願った。この時代に、「**勝軍地蔵**」が登場する。 文保2(1318)年、中古天台教学の口伝である「溪嵐拾葉集」の中で、怨敵消散させる地蔵の「勝軍」利益が初出される。 元亨2(1322)年、「元亨釈書(げんこうしゃくしょ)」には清水寺創建に関係し、坂上田村麻呂の戦勝祈願に応える、**延鎮**の「**勝軍地蔵**」「毘沙門天」の法力を記し、この時代の説話と造仏と考えられる。「元亨釈書」は、臨済宗の僧、虎関師錬(1278～1346年)による、漢文体で記された日本初の仏教通史。 貞和4(1348)年、尊氏も勝軍地蔵を書写したとされる。 **愛宕勝軍地蔵**の初見も室町時代の「愛宕地蔵之物語」である。愛宕明神は、のちに徳川幕府が江戸に勧請し、「武士の勝軍、庶民の防火」祈願が各地に広がる。

庶民では、西院にちなむ「賽(さい)ノ河原」で、夭折した子供の霊を鬼から守る「**子供の守護神**」としての地蔵信仰が広がる。これには集落の**清浄**を保つために**周縁埋葬**した弥生時代の葬送に起源し、古代民俗信仰の影響がある。 古事記に登場する**黄泉比良坂**(よもつひらさか)は、死者の住むあの世(黄泉)とこの世(現世)を分かť境であり、「ひら」はアイヌ語で「崖」を意味する。 また、賽(さい)は「塞(さえ)」に由来し「賽ノ河原」に繋がったともされる。 子供の縁結びや運を定める「塞の神」とも呼ばれる「**道祖神信仰**」や、また「六道冥界と現世の境」で救済する地蔵の功德から、現実の「集落の境」に地蔵が祀られた。「都の境」である愛宕など京の四方山岳に祀られた塞神からも地蔵に繋がる。

子供と地蔵を結び付ける信仰は**日本特有**である。 古代のシャマニズムでは、神が子供の言葉を借りて靈託する風習があり、東北地方では地蔵霊を子供に憑依させ、諸事相談をする「地蔵つけ」が近代まであった。**地蔵盆**や**水子地蔵**も、その様な民族信仰と仏教地蔵が習合した習俗・信仰である。 室町時代には、薬師信仰に変わり**治病神**としての信仰が庶民に広がり、江戸時代には、延命・腹帯・子育て・子守・片目・油掛・しばら地蔵など治病利益を中心に流行神的に多様化した。

「法隆寺」 平安時代初期 唯一の国宝指定の地蔵菩薩であり現存最古。
奈良県の大三輪神社の神宮寺・**大御輪寺**(おおみわでら)」から明治時代に移された。同じく大御輪寺から移された「聖林寺」十一面観音立像も国宝指定。



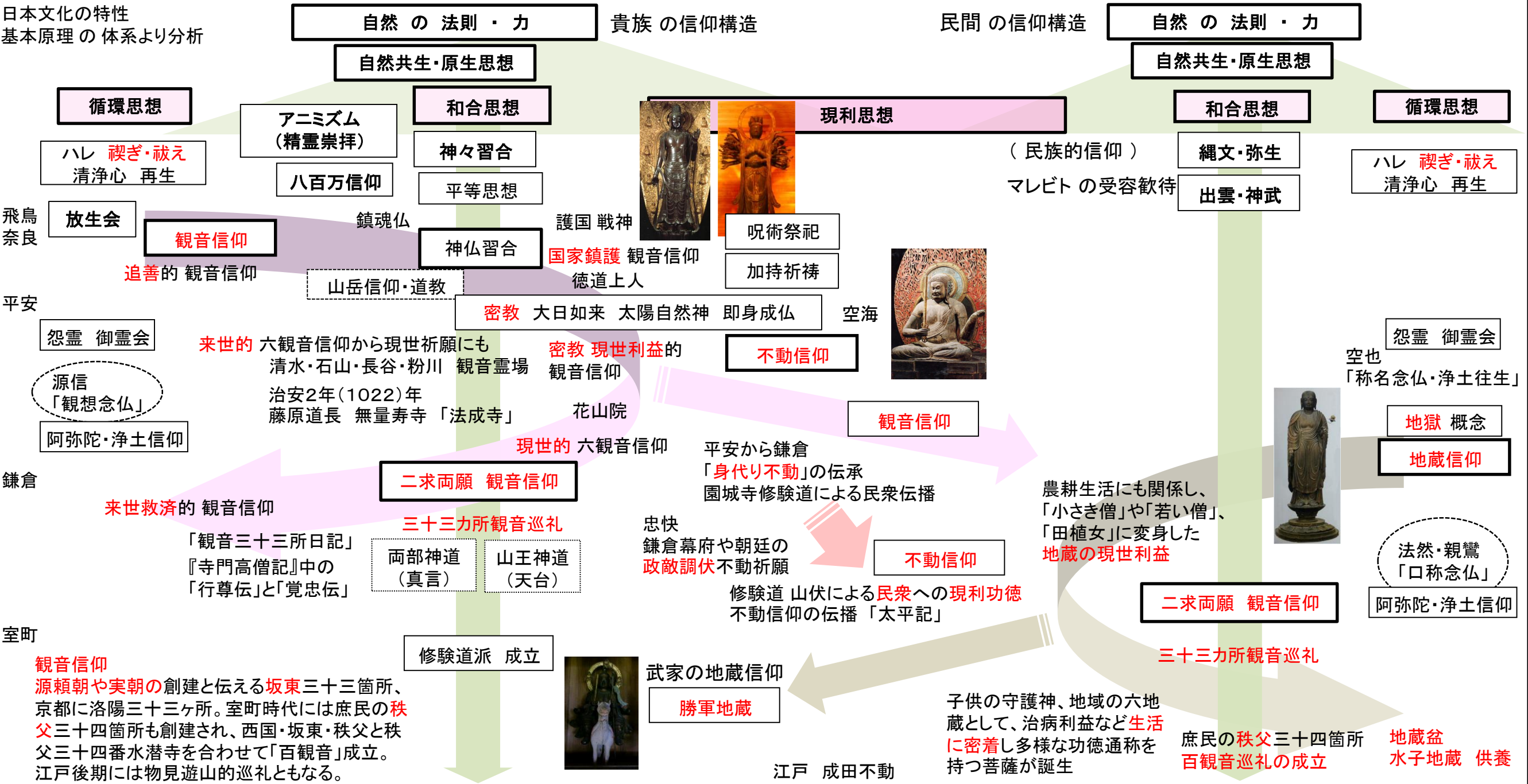
奈良「十輪院」
石仏龕(がん)
平安～鎌倉時代
過去の釈迦、
現在の地蔵、
未来の弥勒と過去、現在、
未来の三世仏

「六波羅蜜寺」
木造地蔵菩薩立像 平安時代。
六波羅地蔵堂に安置されていた。
左手に頭髪を持ち、鬘掛(かつら
かけ)地蔵と呼ばれ信仰。『**今昔
物語集**』にもこの像の説話があり、
古来著名な像。

「金蔵寺」
将軍地蔵(秘仏)
愛宕白雲寺から
明治に還座。
愛宕信仰の本地

観音信仰は、聖徳太子の法華経信仰に起源する。法隆寺聖徳宗によると、三教義疏は「大乘一仏乗経と空観理解による平等」、つまり万人平等の成仏を説いた。三教の内、帰着尊重された法華義疏に登場する救済者が観音菩薩である。伝来した観音菩薩の功德と、我が国古代からの魂の継承循環信仰が結び、追善供養が行われた。法隆寺若草伽藍が、蘇我馬子に討たれた穴穂部皇子と宅部皇子、あるいは崇俊天皇の御陵とされる藤ノ木古墳の東方に創建され、さらに四天王寺の太子殿の側に同じく蘇我氏に討たれた物部守屋らの祠があるのも、その死者追善と太子の「和」の証である。法隆寺や和宗の四天王寺「救世観音」はその功德を解釈総合する呼称であり、北魏の「家」を中心とした死者追善から、国家レベルの救済に進化した。天智天皇は法相宗義淵に勅し、のちに観音霊場となる岡寺を創建、また山科法厳寺には観音像お手彫りの伝承がある。天武天皇朱鳥元年(686年)の日本書紀記事で、観音信仰の依拠經典が「法華経」ではなく「観世音経」として初見される。これらの史実を繋ぐと、聖徳太子に始まり、天智天皇を経て天武天皇に至る過程で、信仰の典拠収斂が伺える。

他界と現世の通交観念が日本民族的に底流し、死者追善と自身の来世往生を願う、しかし一方では、時代状況に応じて現世利益を願うが、最後は来世への継承循環意識に帰着両願した。この信仰変遷は、観音信仰に加えて、民間主導で武家にも波及した地蔵信仰にも共通する我が国の信仰特性である。地蔵信仰も同様に、我が国古代の魂に対する継承循環信仰を前提に、前世来世の他界観と現世体験に裏打ちされた地獄の概念によって成立。精霊憑依の巫女の流れから子供と関係し、神信仰を中心とした地域社会や黄泉の国との「境」を意識し、そこを祀る場所とした。他国と比較し際立って興隆・多様した地蔵菩薩への信仰もまた、農耕など日常に根つき治病利益を願うが、地蔵盆や水子地蔵を証として他界への意識へも回帰習合した。この信仰の歴史的潮流は、観音信仰における二求両願と同様である。不動信仰は、さらに我が国特有である。古代からの神山信仰と山で関係し、役小角に発祥・象徴される山岳修行に密教の尊格が適合し空海が抽出した。修験道山伏の活動で「貴族の不動」から「武家の不動」そして「民衆の不動」へと変遷。藤原道長の往生守護から政敵調伏、現世功德へと、祈願内容と信仰者が拡大した。地蔵と比較し自然猛威や物怪、強力なものへの調伏祈願が主である。注目したいのは、三信仰が全て現世利益への祈願を媒介に、身分社会を超越して伝播したことだ。このことは逆に浄土信仰が循環的であるのに、貴族から民間に浸透したことが特殊との認識をもたらす。空也に前兆し法然・親鸞が大衆化させた口称念仏が、革新的で、往生という目的とは違い、口称という方法が現利的であったということだ。



二上山 と山麓の **當麻寺** この場所は奈良盆地をはさんで**三輪山**の西方にあり、神山信仰や記紀物語、浄土から密教への痕跡を伝える。古代から平安京への歴史が習合している場所である。日本書紀に語られる、箸墓古墳上部に載せられたサヌカイトの産地であり、宮内庁が比定するその主の甥にあたる崇神天皇は和風諡号「みまき**いり**びこいにえのすめらのみこと」。垂仁天皇とともにいわゆる西方を意味するイリの系統となる。東征してきた鏡信仰、神武勢力の到来方向であると共に、倭盆地、三輪山からは**西方浄土**の方向となる。夕陽が2つの峰の中間に沈むことから、西方極楽浄土の入口、死者の魂がおもむく先であると考えられた特別な山であった。また、古代よりサヌカイトは石器にも用いられ、二上山は、古墳の石室や寺院の基壇の材料になる凝灰岩（松香石）や、研磨剤となる金剛砂の原料、柘榴（ざくろ）石の産地でもあった。その山、北側鞍部を通る穴虫越えと南側鞍部を通る竹内越えは、奈良盆地と大阪平野を結ぶ重要な街道である。古代には中国大陆や朝鮮半島から渡来の文物が難波（大阪）の港から都へと運ばれるルートである。雄岳に**大国魂神**（おおくにたまのかみ）**豊布都神**（とよふつのかみ）雌岳に**深蛇大王**（じんじゃだいおう）修験者守護。天武天皇を父に、天智天皇皇女の大田皇女を母とする大津皇子は、謀反の罪に処せられ二上山の雄岳山頂に埋葬されたと伝えられ、葛木二上神社も鎮座している。のちの平安時代、浄土教僧で『往生要集』著者、恵心僧都**源信**の出身地。**司馬遼太郎**の母実家もあり少年を暮した。また、**折口信夫**（釈迢空）の幻想的小説『死者の書』の舞台としても知られる。

當麻寺、現在地への還造時期、天武9（680）年作との日本最古の塑像 国宝**弥勒仏坐像**が金堂に祀られる。当初は三論宗との説、同じ頃、創建氏族の当麻氏が仕えた天武天皇と、道昭、義淵により、薬師寺開基があることから法相宗の影響も確証させる。また役小角や孔雀明王像に関連、600年代後半の四天王像の存在から山岳修験 や 雑密 の習合も伺える。現本尊でもある 阿弥陀如来を中心とした曼荼羅は、平安京で興隆する以前の浄土信仰が確認できる。つまり、ここ **當麻寺で**、空海の真言密教が重層し、現在まで真言と浄土、宗派共存しえた理由は、それ以前の信仰和合が、基礎に存在するからである。その和合の有り様は、東を意識した浄土本堂、南を意識した密教金堂と双搭 その複合した伽藍配置に表現される。**循環と現利 その和合が生んだ創造の世界**。

その當麻寺は、この地に勢力をもっていた豪族**葛城氏**の一族「当麻氏」の氏寺。金堂に安置される弥勒仏像と四天王像、境内の梵鐘と石灯籠、出土した塼仏、古瓦など、天武朝頃（600年代後半）の様式を示し、寺の草創はこの頃と推定される。寺伝では、「推古天皇20年(612)、用明天皇第3皇子、麻呂古（麻呂子・まろこ）親王が、兄である聖徳太子の教えにより、二上山西麓「万法蔵院 禅林寺」建立が起源。大和鴨氏一族である修験者、**役小角**による 自らの最初の修行地でもある領地寄進で、親王の孫、当麻国見が現地に遷造、金堂に本尊として弥勒仏が祀られ講堂とはじまる。**創建は天武天皇10年（白鳳9年・681）**。684年、落慶法要は、隋の吉蔵に三論宗を学んだ高句麗僧・**惠灌**（えかん）導師の説有り。**当麻国見**は、朱鳥元年（686年）、天武天皇の葬儀に際し、直大参の位にあり左右兵衛の事を誅した。これにより、天武朝で軍事に関わっていたことがわかる。そのため物部氏との関係を探る説もある。また、役行者の所持していた孔雀明王像を、本尊弥勒仏の胎内に納めたという伝承もある。その後、**東塔**（奈良時代末期：現存）、**西塔**（平安初期：現存）、千手堂（現・曼荼羅堂）、中院（現・中之坊）と、徐々に寺容を整えた。その間、当初は大和と河内を結ぶ**竹内街道**を正面に南方した寺として建立。のち、都が飛鳥から藤原京を経て奈良に移り、地の利を優先して東を正面とする寺に柔軟に変化した。我が国で唯一創建から残る 双搭式伽藍。1229年、法然弟子 浄土宗西山派 **証空**が参詣、曼荼羅を広める。南北朝戦乱では仏宝避難のため、1370年知恩院の奥院創建。現在、阿弥陀三尊（鎌倉）二十五菩薩来迎像（室町）が並び立つ。現本堂（曼荼羅堂） 解体修理時の調査結果、奈良時代の前身建物の天平尺部材再用法が判明。原本の**根本曼荼羅は、天平宝字7年（763年）作**『建久御巡礼記』。製法から唐伝来が主説。『弘法大師年譜』には弘仁14年（823年）、空海が當麻寺を訪れて曼荼羅を拝し、それ以降、當麻寺は真言宗寺院となったという伝承。現本堂は棟木墨書から永暦2年（1161年）建立と判明した。**當麻曼荼羅については中将姫の物語がある**。藤原豊成の娘として天平19年（747）に生まれ、継母に妬まれた末、観音菩薩に導かれ阿弥陀如来の極楽浄土を目指して辿りついた當麻寺。女人禁制を解かれ、剃り落とした髪を糸に 阿弥陀、観音、勢至の梵字を、そして蓮の茎を染めて織りあげたのが、国宝 綴織當麻曼荼羅との伝説。中之坊剃髪堂に十一面観音像「導き観音」を祀る。

日本書紀 御間城入彦五十瓊殖天皇 崇神天皇期
是後、**倭迹々日百襲姫命**、爲大物主神之妻。然其神常晝不見而夜來矣、倭迹々姫命語夫曰「君常晝不見者、分明不得視其尊顔。願暫留之、明旦仰欲觀美麗之威儀。」大神對曰「言理灼然。吾明旦入汝櫛笥而居。願無驚吾形。」爰倭迹々姫命、心裏密異之。待明以見櫛笥、遂有美麗小蛇、其長大如衣紐、則驚之叫啼。時大神有恥、忽化人形、謂其妻曰「汝不忍、令羞吾。吾還令羞汝。」仍踐大虛、登于御諸山。爰倭迹々姫命、仰見而悔之急居急居、此云菟岐干、則**箸撞陰而薨**。乃葬於大市。故時人號其墓謂**箸墓**也、是墓者、日也人作、夜也神作、故**運大坂山石**而造、則自山至于墓、人民相踵、以手遞傳而運焉。時人歌之曰、
飢朋佐介珥 菟藝迺煩例屢 伊辭務邇塢 多誤辭珥固佐縻 固辭介氏務介茂 「大坂に 継ぎ登れる 石群を 手遞傳に越さば 越してむかも」「おほさかに、つぎのぼれる、いしむらを、たごしにこさば、こしかてむかも」。

現在、「**貞享曼荼羅**」が曼荼羅堂に祀られ、當麻寺のご本尊として仰がれている。
建保5年（1217年）第1回の転写本「建保曼荼羅」が制作され、京都の**蓮華王院（三十三間堂）**に収められ、後に當麻寺に戻ったというが、現存していない。
2回目の転写本は法橋慶舜の筆で、文亀2年（1502年）に図柄が完成し、永正2年（1505年）に供養された「文亀曼荼羅」（重要文化財）、3回目の転写本は、貞享2年（1685年）裏書「貞享曼荼羅」で、いずれも織物ではなく絵画。

位置関係

国宝
綴織當麻曼荼羅

本尊
文亀曼荼羅（重文）

本堂 国宝
奈良時代創建
1161年再建

講堂 重文 鎌倉時代
本尊 丈六 阿弥陀如来

大師堂

奥院 (往生院)

奥院鐘樓門

西南院

西塔

護念院

灯籠

中之坊

梵鐘

東塔

金堂 重文
鎌倉時代再建

弥勒如来仏坐像 四天王

西塔 国宝 25m
平安初期
胎蔵界
大日如来（平安）
「禅定印（坐禅）」
弥勒菩薩 阿弥陀如来

東塔 国宝 24m
奈良時代末
金剛界
大日如来（奈良）
「智拳印」
院内最古建築

當麻寺のご本尊として根本當麻曼荼羅の転写本「**文亀曼荼羅(重文)**」が、曼荼羅堂に祀られ、仰がれている。
いわゆる浄土変相図・浄土曼荼羅はどのような信仰、思想をもとにしたものか？ また、のちの平安京に影響したものは何か？

2014年9月、文部科学省 文化審議会は、**本願寺(通称 西本願寺)**の御影堂と阿弥陀堂を国宝として答申した。 現存する江戸時代の最大規模の建築物であるとともに、浄土真宗本願寺派本山の象徴としての意義が評価された。 その日本浄土諸宗の信仰の拠り所たる**三經典**は、『仏説無量寿経』康僧鎧(こうそうがい)訳『大経』、『仏説観無量寿経』曇良耶舎(きょうりょうやしゃ)訳『観経』、『仏説阿弥陀経』鳩摩羅什(くまろじゅう)訳『小経』であり、いずれも600年代までに中国で漢訳され、我が国に伝来した古典である。

なかでも「**観無量寿経**」は、中国、日本の浄土信仰、仏教文化に大きな影響をもたらした。 そこには、インドのマガダ国王親子の悲劇と、釈迦による極楽浄土への観想が説かれている。以下、物語の概略。 今だ王子をさずかれないマガダ国王夫妻、頻婆娑羅(びんばさら)王と、皇后の韋提希(いだいけ)夫人。 ある仙人が死ぬと王子が誕生すると相師(うらないし)の言葉に、その仙人を殺してしまう。 恨みをはらすと死んだ仙人、そのあと王子阿闍世(あじゃせ)が誕生する。 しかし、かの誕生にまつわる非業から、相師からその王子による親 (つまり国王と皇后自身)殺しを予言され、王子の命を狙うが生命力強く、生き延びた。 成長した王子が、釈迦に対抗していた提婆達多(だいばだつた)にそそのかされて、国王を幽閉、餓死させようとした「王舎城の悲劇」が導入部。国王を助けようとし自らも幽閉され王子から命を狙われた皇后、 その苦悩救済と願いにより釈迦が、極楽世界や阿弥陀仏、観音・勢至の二菩薩を観想する13の観法を、皇后に説く。 そして、**極楽世界に往生する者を「上品上生」から「下品下生」まで九品に分類し、最後に釈迦が阿難に向って「無量寿仏の名号を、常に心にとどめ続けよ」と説いた。**

その「観無量寿経」の情景を描いたものが浄土変相図・浄土曼荼羅と呼ばれる図画である。 衆生が臨終をむかえるにあたり、阿弥陀如来が二十五菩薩を従えて来迎する。画面の主要部「**玄義分**」には、転法輪印を結ぶ阿弥陀如来を中心とする阿弥陀三尊と左右各17体の菩薩からなる三十七尊を表し、その上下に宝池や楼閣などを表す。 左辺の「**序分義**」は『観無量寿経』の序にあたる部分で、浄土往生の機縁となるマガダ国の王妃韋提希(いだいけ)夫人の説話(「王舎城の悲劇」)を主題とする。 右辺の「**定善義**」は、『観無量寿経』に説く十六観のうちの13の観法(阿弥陀浄土をイメージし認識する方法)を主題とする。 下辺の「**散善義**」は**九品往生図**で、十六観のうちの残りの3つにあたるものである。

「観無量寿経」は、藤原道長の「**無量寿院**」(のちの法成寺 消失)、**平等院**、**浄瑠璃寺**、極楽院(現 **三千院** 極楽往生院)、浄土寺(三木市) など、現在までその信仰を伝承させた。 浄土三曼荼羅としては、「観無量寿経」をもとにした当麻曼荼羅と 奈良市元興寺の**智光曼荼羅**、そして「阿弥陀経」をもとにした京都市寺町綾小路 **聖光寺**の**清海曼荼羅(非公開)**の3種がある。 浄土三部経の内、「観無量寿経」は法然の浄土宗が最高經典とし、親鸞の浄土真宗・真宗は「大無量寿経」を、一遍の時宗は「阿弥陀経」を重視し、浄土諸宗で相違がある。

「観無量寿経」を表現するものとして、「**二河白道図**(にがびやくどうず)」が知られている。 そして、平安時代中期の寺院に多く見られる「**池**」に影響したと考える。 法然が師とした善導、かれが著した『仏説観無量寿経』の注釈書、『観無量寿経疏』(かんむりょうじゅきょうしよ)に登場する、貪欲の水の川と憎しみの火の川の間に懸る白い道を渡る様に勧める場面、それを描いた観想図が「二河白道図(にがびやくどうず)」である。 法然は「選択本願念仏集」第八章の「念仏行者必可具足三心之文」等で、親鸞も教行信証、信巻や愚禿鈔、等々で紹介している、二河白道図は、奈良国立博物館、京都**光明寺**、香雪美術館などに伝わる。

現在、浄土変相図で、當麻曼荼羅の様な軸装の絹本なり紙本の図は日本にだけ現存する。 インドには存在せず、中国では、唐から宋代の壁画などにとどめるのみである。 1000年を超える行事、通称「練供養」、「聖衆来迎練供養会式」は、ここ當麻寺が発祥である。 平安京で興隆する浄土信仰の源流がここにあり、地域の講が継承する。 當麻寺に参詣した**証空**が第四世を務めた西山浄土宗総本山 **光明寺**では、2006年、西京区の仏画家、藤野正観氏が描いた、約2メートル四方「当麻曼荼羅」の開眼法要が営まれた。 また、2014年2月、當麻寺では、各伽藍にLED照明とワイヤレススイッチを導入。 そのスイッチは、京都の**ローム株式会社** 電源不要のシステムで、全国社寺で初めて採用、先端技術とも習合した。

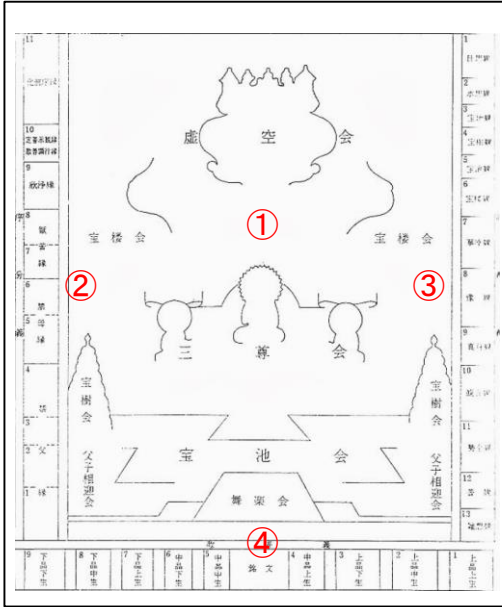


阿弥陀三尊のいる華座段

水上に浮かぶ島を形成し、庭上には八角七重蓮華座に結跏趺坐する阿弥陀如来を正面に、五重蓮台に趺坐する観音、勢至両菩薩を左右に対置、その間にさまざまな姿態の供養菩薩、左右各17体をめぐらす。本尊は偏袒右肩で、7-8世紀の阿弥陀仏に共通な転宝輪印

② 序分義 經典の由来

悪逆の子阿闍世太子の父王幽閉と、これを悲しんだ韋提希夫人の阿弥陀仏への皈依を、下から上へ11図に分けて収め、最上段には、本観経が釈尊の靈鷲山説法中に説かれたものであることを述べる



④ 散善義 九段階の往生の方法

十六観中の後三観を開いて**九品来迎図**とし、向かって宇より左へ9図を並べる。すなわち、上品上品より下品下生に至る棧根の深浅にもかかわらず、等しく弥陀の来迎と印撰にあずかることができることを説明する

① 玄義分

虚空、楼閣、華座、宝池、舞楽、樹下、父子相迎会の諸図を图示

③ 定善義 修業の手順

右辺には、韋提希の要望により開示された、極楽浄土を観想するための16の手段(十六観想)のうち、第1日観想より、水、地、樹、池、楼、華座、形像、真身、観音、勢至、普想、そして第十三雑相観に至る13図を、上から下へ順番に配置する。したがってこの十三観は、心静めて観想する方法となる。

往生要集の原点である『観無量寿経疏』を読み解くことで、浄土寺院の『池』そして、また、その橋や、中島の意味が、理解できる。また、同時に、典型的な浄土寺院 阿弥陀堂の意味も理解できる。「観無量寿経」の世界を、二河白道を、阿弥陀堂へと続く、池と橋で表現したのである。平等院、川をはさんで恵心院 法勝寺の池と橋 これらも同じ表現であり、確証をもたらす。

『観無量寿経疏』

散善義 観経正宗分散善義 巻第四

2 上輩観 2.2 上品上生釈

2.2.3 回向発願心釈

2.2.3.1 二河白道譬喩

また一切の往生人等にまうさく、いまさらに行者のために一の譬喩を説きて、信心を守護して、もつて外邪異見の難を防がん。何者かこれなるや。

たとへば、人ありて西に向かひて百千の里を行かんと欲するがごとし。忽然として中路に二の河あるを見る。一にはこれ火の河、南にあり。二にはこれ水の河、北にあり。二河おのおの闊さ百歩、おのおの深くして底なし。南北辺なし。

まさしく水火の中間に一の白道あり。闊さ四五寸ばかりなるべし。この道東の岸より西の岸に至るに、また長さ百歩、その水の波浪交はり過ぎて道を湿し、その火炎また来りて道を焼く。水火あひ交はりて、つねにして休息することなし。この人すでに空曠のはるかなる処に至るに、さらに人物なし。多く群賊・悪獣ありて、この人の単独なるを見て、競ひ来りて殺さんと欲す。この人死を怖れてただちに走りて西に向かふに、忽然としてこの大河を見て、すなはちみづから念言す。

「この河は南北に辺畔を見ず。中間に一の白道を見るも、きはめてこれ狭小なり。二の岸あひ去ること近しといへども、なにによりてか行くべき。今日さだめて死すること疑はず。まさしく到り回らんと欲すれば、群賊・悪獣漸々に来り逼む。まさしく南北に避り走らんと欲すれば、悪獣・毒虫競ひ来りてわれに向かふ。まさしく西に向かひて道を尋ねて去かんと欲すれば、またおそらくはこの水火の二河に墮せん」と。時に当りて惶怖することまたいふべからず。

すなはちみづから思念す。「われいま回らばまた死せん。住まらばまた死せん。去かばまた死せん。一種として死を勉れずは、われむしろこの道を尋ねて前に向かひて去かん。すでにこの道あり。かならず度るべし」と。 （中略）

次に喩へを合せば、「東の岸」といふは、すなはちこの娑婆の火宅に喩ふ。「西の岸」といふは、すなはち極楽の宝国に喩ふ。「群賊・悪獣詐り親しむ」といふは、すなはち衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩ふ。「無人空迴の沢」といふは、すなはちつねに悪友に随ひて真の善知識に値はざるに喩ふ。「水火二河」といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとく、瞋憎は火のごとくなるに喩ふ。「中間の白道四五寸」といふは、すなはち衆生の貪瞋煩惱のなかに、よく清浄の願往生心を生ずるに喩ふ。すなはち貪瞋強きによるがゆゑに、すなはち水火のごとしと喩ふ。善心微なるがゆゑに、白道のごとしと喩ふ。 （中略）

仰ぎて釈迦発遣して指して西方に向かはしめたまふことを蒙り、また弥陀悲心をもつて招喚したまふによりて、いま二尊(釈尊・阿弥陀仏)の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遺ることなく、かの願力の道に乗じて、捨命以後かの国に生ずることを得て、仏とあひ見えて慶喜することなんぞ極まらんといふに喩ふ。

二河白道（にがびゃくどう）の意味

極楽浄土に往生したいと願う人の、入信から往生に至る道筋をたとえたもの。「二河」は南の火の川と、北の水の川。火の川は怒り、水の川はむさぼる心の象徴。その間に一筋の白い道が通っているが、両側から水火が迫って危険である。しかし、後ろからも追っ手が迫っていて退けず、一心に白道を進むと、ついに浄土にたどりついたという話。煩惱にまみれた人でも、念仏一筋に努めれば、悟りの彼岸に至ることができることを説く。

九品往生（くほんおうじょう）

仏教(特に浄土教)では、衆生の機根の違いによって、同じ極楽浄土へ往生するにも、9つのパターンがあると『観無量寿経』に説かれている。またこれを九品往生ともいう。

九品のそれぞれはこれは「〇品〇生」(〇は上・中・下)と言い、「〇生」の読みはそれぞれ上生(じょうしょう)、中生(ちゅうしょう)、下生(げしょう)である。

のちに、善導は九品皆凡といい、一切衆生は本質的にみな迷える存在であると捉えた。また上下の差を大乘・小乗の乗教や悪などとの接触による相違に帰するという独自の解釈を唱え、これが法然や親鸞などに大きく影響を与え、また継承された。

上品(じょうぼん)・中品(ちゅうぼん)・下品(げぼん)の3つに大きく分け、これら一品ずつにまたそれぞれ上中下の三品があったとした。これを三三九品ともいう。

九品(くほん)とは、物質や人の性質を3×3で分類したもの。三三品(さんさんぼん)。

現在俗にいわれる上品・下品(じょうひん・げひん)の語源とされる。

浄瑠璃寺 九体阿弥陀堂 平安時代の代表的な阿弥陀堂建築

平安中期に末法思想が流布し、人々は浄土教の教えにより、死後に極楽浄土に生まれ変わることを願って、方三間の阿弥陀堂、九体阿弥陀堂などが数多く造られました。藤原道長が1022年に法成寺に無量寿院を造立したのが、九体阿弥陀堂の始まり。

極楽往生の仕方は、生前の業により九段階あり、九体の阿弥陀様を祀ることにより救済を願った。

九体阿弥陀堂は30棟ほど造られたが、現存するのはこの本堂だけ。

この阿弥陀堂、身舎は9間あり中央に阿弥陀如来坐像、その左右に4体ずつの脇仏、合計9体の阿弥陀仏が安置されています。伽藍中央の宝池を挟んだ東側の三重塔には東方瑠璃光浄土の教主薬師如来が、人々に現世で生きる知恵と力を与えて送り出し、釈迦如来の教えにより煩惱の火と水の二つの川を渡りきると、西方の阿弥陀仏が浄土に迎え入れてくれるという三世三仏思想による伽藍の配置です。

仮説、予想通り、昔はその池、中島に橋がかけられていた。その絵図は浄瑠璃寺に伝わっている。



平等院と同じく定朝系仏師作

天智天皇崩御、672年の壬申の乱に勝利した**天武天皇**は、神武天皇「第一次鏡威信勢力」の象徴、「**内行花文鏡**」伝来当時の原初太陽信仰を復活させ、その鏡を神体として、**内行花文鏡**天照大神を祀る「伊勢神宮」を創建した。 そのため、日本書紀にその鏡を奉祭した勢力を神日本磐余彥天皇 神武天皇として記録した。「天照大神」の名としての信仰が、崇神以前か、記紀編纂当時か、は別として「内行花文鏡」は、弥生時代中期から後期に北九州より伝来している。 そのあと「前方後円墳」とともに「画紋帯・三角縁神獣鏡」威信勢力台頭の事実も遺跡に残る。 その交代が、崇神から垂仁天皇期に表現される「崇り」を理由とした「**天照大神の宮中排除と変遷**」と記され、丹後**籠神社**や元伊勢伝承に残った。

天武天皇により伊勢神宮の斎王が制度化。 持統天皇4(690)年、内宮で 第1回式年遷宮が行われた。また伊勢に一度、紀伊に一度の行幸を記録する。 その内行花紋鏡は、古墳時代当初、崇神天皇の「第二次鏡奉祭勢力」により宮中から遷却され、大阪湾周辺は**画紋帯神獣鏡が主となった**。 遷却された天照大神を復活させ、天津神の頂点とする物語として、「古事記、日本書紀」神話の基本構想が創られた。 そして、**仏教からは「帝王神権」、**道教からは「仙人真人の天皇」を採用、新しい**天皇信奉を構築**した。

武力によって得られた地位を確実にし、秩序するための天武天皇の政治的、宗教構想である。 その根拠となる「根本思想」 信仰典拠を本紙後半に記す。



686年、天武天皇亡き後、**藤原不比等**が、平城京への遷都と平行して、神話に天孫降臨や神武東征で活躍する「**建御雷之男神**」を加えた、と考える。 春日大社社伝では、『およそ1300年前、**奈良に都ができた頃**、日本の国の繁栄と国民の幸せを願って、遠く**鹿島神宮**から武甕槌命(タケミカヅチノミコト)を神山御蓋山(ミカサヤマ)山頂浮雲峰(ウキグモノミネ)に迎えた。神護景雲2年(768年)11月9日、称徳天皇の勅命により左大臣 藤原永手によって、中腹となる今の地に壮麗な社殿を造営して香取神宮から経津主命、枚岡神社から天児屋根命・比売神を招き、あわせ祀った』と鎮座の時期を明確にしない。『春日古社記』では、神護景雲2年(768)創建とされる。

『古事記』では登場させていない経津主神(ふつぬしのかみ)は、正史である『日本書紀』の天孫降臨では「**建御雷之男神**」と共に登場する。 また『古事記』で、建御雷之男神の別名が建布都神(たけふつのかみ)または豊布都神(とよふつのかみ)であるとし、建御雷之男神が中心となって葦原中国平定を行うなど、**建御雷之男神と経津主神が同じ神であるかのように記載**している。ではなぜ『日本書紀』では、その様な配慮が必要であったのか？ 藤原氏としては「**建御雷之男神**」の活躍だけでよかったのではないかと推測される。

物部氏は平城京遷都の折、まだ過去の氏族ではなく、現存していた。 **物部氏 石上神宮の主祭神**は布都御魂剣(ふつのみたまのつるぎ)に宿る神霊は「**布都御魂大神**」であるが、似通う別称として**経津主神**を『日本書紀』で活躍させたのである。 その藤原氏が配慮すべき物部氏は、石上 麻呂(いそのかみのまろ、舒明天皇12年(640年) - 霊亀3(717)年)、氏姓は物部連、のち物部朝臣、石上朝臣である。 大華上・物部宇麻乃の子。官位は正二位・左大臣、贈従一位。 彼は、**壬申の乱**で天智天皇の息子、**大友皇子側**につき、皇子の自殺まで従った。のちに赦されて遣新羅大使、筑紫総領になった。701年に大納言となって以後、右大臣、左大臣に任じられ**717年**に死去するまでの数年は太政官の最高位者であった。 つまり、平城京で復活する「天智天皇皇統と中臣氏」側である。公の歴史書である『日本書紀』からは、消すことはできない。 仮に、古事記から「**建御雷之男神**」を消し「**経津主神**」と**入れ替えて**も、大意遜色なく神話は成立する。『日本書紀』に記された「**神宮**」は 伊勢神宮 と 物部氏の石上神宮 だけであり、当時の氏族の勢力、価値を表現している。 石上麻呂は、平城京遷都に反対した。万葉集の元明天皇「ますらをの 鞆の音すなり もののふの 大まへつ君 楯立つらしも」、姉である御名部女「わが大王 物な思ほし 皇神の つぎて賜へる 吾無けなくに」が、根拠である。 しかし、石上麻呂は藤原京の留守司に甘んじ、養老元年(717年)没した。 その子、石上乙麻呂も中納言。孫、宅嗣(やかつぐ)は藤原永手らと光仁天皇を擁立した。宅嗣の弟は息嗣、その子 振麻呂の子孫が石上神宮祠官家につながる。古代豪族の代表物部氏は、平安時代、中央政権から遠ざかる。 神山 **三輪山**を中心とした祭祀から、新たな神山**三笠(春日)山**の祭祀へ 蘇我氏、物部氏 から 藤原氏へ その集大成であり、「平城京」遷都の理由である。

鹿島神宮の地名「カシマ」は、養老5年(721年)に成立した『常陸国風土記』では「**香島**」と記載されてる。風土記の中で、「香島郡」の名称は「香島の天の大神」に基づくと説明されている。「カシマ」を「**鹿島**」と記された初見は、延暦16年(797年)に完成した『続日本紀』の記述、「養老7年(723年)条」である。つまり、日本書紀が記されたあとに神護景雲2年(768)春日大社が創建され、そのあとに「香島」が「鹿島」に改称された。そして、それまで、神格が与えていなかった鹿島神は、突如、宝亀8年(777)、正三位(『続日本紀』)となり、承和6年(839)には従一位勲一等(『続日本後紀』)となる。 710年の遷都後間もない、712年「古事記」が元明天皇に 献上。養老4年(720)『日本書紀』完成した。先に記述された歴史があり、その内容に合せて「**香島**」が「**鹿島**」となり、**春日大社が創建**されたのである。『古事記』『日本書紀』『常陸国風土記』に、鹿島神宮の祭神をタケミカヅチとする記述はなく、初見は『古語拾遺』(807年成立)または『延喜式』所収の「春日祭祀詞」(768～927年)にまで下る。 興福寺と同じ時期に春日大社が創建できなかった事情には、元来、その地に先住していた春日氏(和邇氏の一族)の存在がある。春日氏は、**猿田彦大神(榎本明神)**を祀っており、その神は、記紀で天孫降臨の先導役として活躍させられる。 同じ和邇氏一族の小野氏が、桜井の阿部山と交換に『三笠山譲り』したことが「**春日古社記**」に記されている。 小野氏一族の小野朝臣人足たちは、遷都で造京司になっており、当時、従二位まで昇進し権勢した小野毛野(けぬ)も藤原不比等の腹心で、小野妹子の孫であった。 「**榎本明神**」は、今も春日大社の一角で、摂社として祀られている。



武甕槌命 - 藤原氏守護神(常陸国 鹿島の神)
経津主命 - 同上(下総国 香取の神)
天児屋根命 - 藤原氏 祖神(河内国 平岡の神)
比売神 - 天児屋根命の妻(同上)

卷向遺跡祭殿は三輪山を遥拝する東西方向 天平勝宝8年(756)「東大寺山堺四至図」によると 春日大社 神地は三笠山を遥拝する東西方向

以下、天武天皇の、信仰・宗教関連記事 天武・持統天皇期には、飛鳥の大官大寺など以外に、関東から九州に500以上の寺院創建、急増した。「国家仏教」創始の時でもある。また、飛鳥浄御原令に起源説がある**神祇官制度**により、各地の八百万の神々の掌握をもくろんだ。 朝廷による幣帛の直接授受などで、太政官を介入させずに全国の神社を掌握するための構想である。

- ・ 壬申の乱の戦勝祈願を「天照大神に望拝」日本書紀 天淳中原瀛真人天皇 天武天皇 丙戌旦、於朝明郡 迹太川邊、**望拜天照大神**。
- ・ 仏教『**金光明經**』正論品の「**帝王神権**」 **日本書記 天武天皇期に、三度説かれる。**
『**金光明經**』曇無讖の同名漢訳や、唐の義浄(ぎじょう、635年-713年)が漢訳した『**金光明最勝王經**』がある。
『金光明經』『金光明最勝王經』は、四天王などが国王や皇帝の利益を第一に守ることを説いている護国經典である。のちに最澄は、『金光明經』『法華經』『仁王經』を**護国三部經**(ごこくさんぶきょう)として括めた。
『金光明經』四天王品で、世尊(せそん・梵語で「福德ある者」「聖なる者」の意・仏の尊称)、如(も)し諸の国王の所有する土境、是の經を持(たも)つ者、若し其の国に至らば、是の王、応(まさ)に当(まさ)に是の人の所に往いて、是の如き微妙の經典を聴受し、聞き已(おわ)って歡喜すべし。復(また)、当に是の人を護念し恭敬すべし。世尊、我等四王、復た当に勤心(ごんしん)に是の王、及び国の人民を擁護し、為に衰患(すいげん)を除き安穩を得せしむべし。『**金光明最勝王經**』滅業障品にも、この經典を講説して得られる種々の利益があげられる。
 1. 国王が無病息災、
 2. 国王の寿命が長遠、
 3. 怨敵がなく、将兵が勇健、
 4. 国が安穩豊楽で、正法が流通することという。

以下、天武天皇の、信仰・宗教関連記事 天武・持統天皇期には、飛鳥の大官大寺など以外に、関東から九州に500以上の寺院創建、急増した。「国家仏教」創始の時でもある。 またその時代、飛鳥浄御原令に起源説がある**神祇官制度**により、各地の八百万の神々の掌握をもくろんだ。 朝廷による幣帛の直接授受などで、太政官を介入させずに全国の神社を掌握するための構想である。

- ・ 壬申の乱の戦勝祈願を「天照大神に望拝」 日本書紀卷第廿八 天淳中原瀛真人天皇 上 天武天皇 丙戌旦、於朝明郡迹太川邊、**望拜天照大神**。
- ・ 仏教『**金光明經**』正論品の「**帝王神権**」 日本書紀 **天武天皇期に、三度説かれる**。

十一月乙丑朔、以新嘗事、不告朔。丁卯、新羅、遣沙湊金清平、請政。并遣汲湊金好儒・弟監大舍金欽吉等、進調。其送使奈末被珍那・副使奈末好福、送清平等於筑紫。是月、肅慎七人、從清平等至之。癸未、詔近京諸國而放生。甲申、遣使於四方國、説**金光明經・仁王經**。丁亥、高麗、遣大使後部主簿阿干・副使前部大兄德富、朝貢。仍新羅、遣大奈末金楊原、送高麗使人於筑紫。是年、將都新城。而限内田園者、不問公私、皆不耕悉荒。然遂不都矣。

『**金光明經**』曇無讖の同名漢訳や、唐の義浄（ぎじょう、635年–713年）が漢訳した『**金光明最勝王經**』がある。『金光明經』『金光明最勝王經』は、四天王などが国王や皇帝の利益を第一に守ることを説いている護国經典である。のちに最澄は、『金光明經』『法華經』『仁王經』を**護国三部經**（ごこくさんぶきょう）として括めた。

『金光明經』四天王品で、世尊（せそん・梵語で「福德ある者」「聖なる者」の意・仏の尊称）、如（も）し諸の国王の所有する土境、是の經を持（た）もつ者、若し其の国に至らば、是の王、応（まさ）に当（まさ）に是の人の所に往いて、是の如き微妙の經典を聴受し、聞き已（おわ）って歡喜すべし。復（また）、当に是の人を護念し恭敬すべし。世尊、我等四王、復た当に勤心（ごんしん）に是の王、及び国の人民を擁護し、為に衰患（すいげん）を除き安穩を得せしむべし。

『**金光明最勝王經**』滅業障品にも、この經典を講説して得られる種々の利益があげられる。1.国王が無病息災であること、2.国王の寿命が長遠であること、3.怨敵がなく、将兵が勇健であること、4.国が安穩豊樂で、正法が流通することという。

『金光明經』正論品の偈（げ） **集業**（しゅうごう）に因るが故に、人中に生じ、王として国土を領す。その**前世で積み重ねた善業**によって、人と生まれて王として国土を領すとし、**胎中**（たいちゅう）に処在（あり）て、諸天守護し、或いは先に守護して、然して後に胎に入る。人中に在って、生まれて人王と為ると雖（いえど）も、天、護るを以ての故に、復た天子と称す。三十三天、各己（おの）が德を以て、是の人に分与す。故に天子と称す。 『日本書紀』は、「繼体紀」6年12月条に、住吉大神、初めて海表（わたのほか）の金銀の国、高麗（こま）・百濟・新羅・任那（みまな）を以て、**胎中（はらのうちにまします）****誉田天皇に授記**（さず）けまつれり。とある。『日本書紀』は、応神が、住吉大神などの神意によって生まれたとし、「**胎中**誉田天皇」と書いた。「**授記**（じゅき）」は、仏教用語で、「仏が弟子の未来の成仏を予言すること」を意味し、『金光明經』と『金光明最勝王經』にはそれぞれ「**授記品**」がある。 天皇が、自己の王統の正当性を『金光明經』『金光明最勝王經』によって主張していたこと、また、応神天皇の生誕に皇統の正当性を含ませた。

また、『金光明經』が重視されたもう一つの理由は、この經典が**農業**を護り、繁栄させることを約束していることである。『金光明經』堅牢地神品では、堅牢な地の神が、『金光明經』の演説を聞くと、「身力を増益し、世界中の大地を**豊穰**にし、「凡そ是れ地に因って生ずる所の物は、悉く増長滋茂広大なることを得、諸の衆生をして、快樂を受けしむ」と説いている。

- ・ 道教の神格「**天皇大帝**」

天武**天皇**、和風の諡は、「天淳中原瀛**真人**」（あまのぬなかはらおきのまひと）。**真人**は中国で仙人の上位階級。 天武天皇が定めた身分秩序「八色の姓」の最上位とされる。 天皇も道教の最高神に近い存在であることを示す。ここに天武天皇の宗教観に道教の要素がみられる。**天皇の称号**（大宝律令で制定） 古代中国で、天体の中心である**北極星**を意味し、道教にも取り入れられ神格化され「**天皇大帝**」（てんおうだいてい）などと呼ばれた。 ここから、中国の唐の**高宗**（649年– **683年**）は「天皇」と称し、死後は皇后の則天武后によって「天皇大帝」の諡（おくりな）が付けられた。 称号天皇を定めた大宝律令編纂の起源は、その当時、**681年**まで遡る。 天武天皇（673年– 686年）により律令制定を命ずる詔が発令、天武没後の689年（持統3年6月）には、まず飛鳥浄御原令が頒布・制定された。

コラム「庭」 庭は、「石」「樹木」「池」という素材を使い大自然を抽出する 知的な芸術活動の所産である。

人間はいかに機械化されようと自然の一部であり、大自然から離れて生きることが出来ない。

自然と共に生きるから安らぎを得ることが出来る。これが「自然なるこころ」「自然なる思考」である。

日本人にとって「**庭**」の**原点**は、「神の坐ます場所」、「仏のおわす場所」であった。

神話の「庭」は、神の坐ます場所、神聖な田であった。実在としては、古代の神奈備「祭場」が、その場所と考えられる。**言葉**として正式に「祭場」が「庭」と呼ばれた用例として「**石上神宮の高庭**」がある。

（縄文・弥生時代）

巨石、磐座、磐境、依り代として巨石・巨木信仰。

天の**齋庭**（ゆにわ）の発想「古代祭場」麓は祀り場 神社起源。

磐境：垣根のように依代と磐座を取り囲んで配置されている添え石、神域との境界を示すもの

古墳時代になると巨石を移動させ、身近に祀る場所で再現した。

（飛鳥・奈良時代） **神仙蓬莱思想**は不老不死の願望を満たす

飛鳥時代になると中国、韓国から、不老不死を願う神仙蓬莱思想が伝えられた。

（秦の始皇帝、漢の武帝など古代中国の権力者がこの思想に熱狂）

蘇我入鹿は、池、蓬莱山島を作り「嶋大臣」（しまのおおおみ）と言われた。

齐明天皇 外国使者を迎え「**須弥山石**（しゅみせんせき）」のもと饗宴した記事。

この時代、文献と一致する、庭として唯一の石造物。

天武天皇・持統天皇 飛鳥浄御原宮「**飛鳥京庭園**」は、我が国独自に工夫した流水・涼み台。

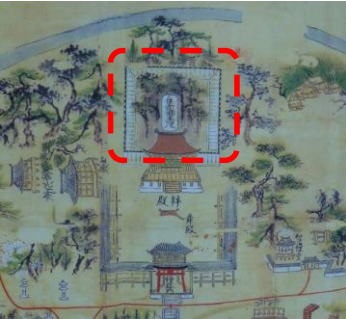
天武天皇14年(685) 飛鳥京庭園推定として「白錦後苑」の記述 以上3件『日本書紀』

飛鳥の園池は百濟渡来の「方型池」が多いが、奈良時代は新羅渡来の「曲型池」が多くなる。

「飛鳥京庭園」は、その習合的で過渡的な形態。



貴船神社 「石庭」
天津磐境がモデル



飛鳥浄御原宮
「**飛鳥京庭園**」



苑池のイメージ



張り出し部から見た苑池の景観



『日本書紀』
神に捧げる稲穂を耕作する
神聖な田（庭）
「**齋庭**（ゆにわ）」

日本文化の源流 日本 の 自 覚

国号「日本」は、以下の文献考証から、天武天皇3年(674)から、持統太上天皇 文武天皇期の大宝元年(701)の間に定められた。

『国史大辞典』並びに上田正昭著『私の日本古代史』より加えて、中国・朝鮮の史書によると、対外的には、それ以前である天智天皇9年(670)に、すでに実用されていたことも指摘されている。つまり、それまでの「倭国」から「日本」への転換は、三韓・中国などとの**国際的関係**から生じてきた呼称である。

そして、その国号となる以前の先駆けが、推古天皇15年(607)の隋への国書、日の出る方の意の「**日出処**」(日の出づる処の天子)である。 (『隋書』東夷伝倭国条 大業三年)

・国号「**倭国**」 最期の用例 我が国初の銀産出の記事

天武天皇3年(674)『日本書紀』天武天皇

三年春正月辛亥朔庚申、百濟王昌成薨、贈此小紫位。二月辛巳朔戊申、紀臣阿閉麻呂卒。天皇大悲之、以勞壬申年之役贈大紫位。三月庚戌朔丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、即貢上。由是、大國授小錦下位。凡銀有**倭國**、初出于此時。故、悉奉諸神祇、亦周賜小錦以上大夫等。秋八月戊寅朔庚辰、遣忍壁皇子於石上神宮、以膏油瑩神寶。即日勅曰、元來諸家貯於神府寶物、今皆還其子孫。冬十月丁丑朔乙酉、大來皇女、自泊瀬齋宮向伊勢神宮。 ※ 同四年、五年には、大和国の意として「倭国」記載有り

・国号「**日本**」 確かな、令による初の国号制定

大宝元年(701) 持統太上天皇 文武天皇期4年 大宝律令「**公式令**(くしきりょう)」勅書式「大事を蛮国使に宣するの辞」として「明神御宇日本天皇勅旨」とする。

大宝元年三月に「大宝」と建元すると同時に新位階を授け官制を改め、四月から中央の貴族や官人に対し撰者らを分遣して大宝令の講義を始め、六月には全国に施行。八月に律令が揃って体裁を整え献上されると地方でも講義が始まった。

【**律令**】日本では、七世紀後半の天智天皇期『近江令』(体系的な法典ではない可能性が強い)、天武・持統朝に編纂施行された『浄御原令(きよみはらりょう)』を経て、八世紀初めに『大宝律令』が制定され、「律令」法典が完成する。大宝元年(701)『大宝律令』施行後、定説では養老二年(718)に、『養老律令』が編纂されるが、それ以後、日本では律令の本格的な編纂は行われない。『大宝律令』『養老律令』共に、藤原不比等が編纂を主導した。

・上記、天武天皇3年(674)以前の、中国・朝鮮の記述として、以下に示す。

中国の史書に「日本」の称呼が出てくるのは『**旧唐書**(くとうじょ)』倭国日本伝からであり、そこでは倭と日本の二つを別にあげており、「倭国者、古倭奴国也、(中略) **日本国**者、倭国之別種也、以其国在日边、故以 **日本** 為名、或曰、倭国自恶其名不雅、改為日本、或云、日本旧小国、併倭国之地」と記す。 それに続く『**新唐書**』日本伝では「日本、古倭奴也、(中略)咸亨元年(670)、遣使賀平高麗、後稍習夏音(中国の**音**)、恶倭名、更号 **日本**、使者自言、国近日所出、以為名、或云、日本乃小国、為倭所并、故冒其号」と述べる。

新羅本紀文武王十年(670)十二月の条にも、「倭国更めて、日本と号す。自ら言う、日出づる所に近し、以て名と為す」とする。

国号「日本」の読み

前段の通り、音読されるのがならいであつたと判断される。「日」は呉音では「**ニチ**」、漢音では「ジツ」であり、「本」は呉音・漢音ともに「**ホン**」であるから、「ホン」が入声(につせい)の「ニチ」に続く場合は「ポン」となって(「一(イチ)」に「本」が続いて「イッポン」となるように)、はじめは**呉音での「ニッポン」**といったと考えられる。それが、促音をいわない和げた「ニホン」の方も用いるようになってきたのであろう。 以上、『国史大辞典』より

「**国旗**」 法律上は「**日章旗**」、古くから一般的に「日の丸」

平成11年(1999)には国旗及び国歌に関する法律(国旗国歌法)が公布され、正式に国旗として定められた。 以下、それまでの歴史について通説

日本人の古代信仰として古神道に分類される原始宗教では自然崇拝・精霊崇拝を内包し、特に農耕や漁労において太陽を**信仰**の対象としてきた。

皇祖神・**天照大神**は太陽神である。弥生時代から古墳時代にかけて祭器として使われた**内行花文鏡**の模様は太陽の輝きをかたどったものと言われ、三種の神器の一つ八咫鏡をこの鏡とする説がある。記・紀神話で、神武天皇は東征の時に生駒山で敗北するが、私は日の神の子孫として日に向かって戦うのはよくない、**日**を背にして(西に向かって)戦おう、と言って近畿地方の征服を成し遂げた。

聖徳太子が隋の皇帝・煬帝へ「日出處天子…」で始まる国書。飛鳥時代末期に国号を「日本」(日ノ本)命名からも、「日が昇る」という現象を重視していたことが窺える。天武天皇は壬申の乱の時に伊勢神宮を望拝した。これが勝利に結びついたと考えられ、在位中に伊勢神宮の遷宮を制度化し、持統天皇の代に第1回目式年遷宮が行われ、国家統治と太陽の結びつきはますます強くなった。

法隆寺の玉虫厨子背面の須弥山図に、**赤い真円**の日象が確認できる。これは平安時代の密教図像などにも見出される表現であり、大陸から仏教とともにもたらされた意匠であろうと推測される。世俗的には『平家物語』などの記述などからも平安時代末期の頃までの「日輪」の表現は通常「**赤地に金丸**」であつたと考えられている。

日本で「白地赤丸」が日章旗として用いるようになった経緯は諸説あり正確には不明である。一説には源平合戦の結果が影響していると言われている。平安時代まで、朝廷の象徴である**錦の御旗**は赤地に金の日輪、銀の月輪が描いてある。平安時代末期に、平氏は自ら官軍を名乗り御旗の色である赤旗を使用し、それに対抗する源氏は白旗を掲げて源平合戦を繰り広げた。古代から国家統治と太陽は密接な関係であることから**日輪は天下統一の象徴**であり、**平氏**は御旗にちなんで「**赤地金丸**」を、**源氏**は「**白地赤丸**」を使用した。源氏によって武家政権ができると代々の将軍は源氏の末裔を名乗り、「白地赤丸」の日の丸が天下統一を成し遂げた者の象徴として受け継がれていったと言われる。現存最古の日章旗としては、山梨県甲州市の裂石山雲峰寺所蔵のものが知られている。これは天喜4年(1056)に後冷泉天皇より源頼義へ下賜されたという伝承があり、「御旗」(みはた)と呼ばれて、頼義三男の新羅三郎義光から、義光の系譜に連なる甲斐源氏宗家の甲斐武田家に代々伝えられて家宝とされてきた。事実であれば、遅くとも11世紀半ばには「白地赤丸」の日の丸が存在していたことになる。中世前半に遡る遺例として貴重である。また中世の日章旗とされるものとして奈良県五條市の堀家に伝わる後醍醐天皇下賜のものが知られる。

江戸時代には、徳川幕府は**公用旗**として使用し、寛永期(1624～1644年)に描かれた『江戸図屏風』の幕府船団や、東京国立博物館所蔵『御船図』(19世紀作)の安宅丸船尾にも日の丸の幟が描かれている。安政元年(1854)日米和親条約調印後、外国船と区別する標識が必要となり、日本国共通の船舶旗(「日本惣船印」)を制定する必要が生じ、**日の丸**を当てることが同7月9日、老中阿部正弘により布告された。安政6年(1859)、幕府は日章旗を、縦長の幟(四半旗)から**横長**の旗に代え「**御国総標**」とした。**日章旗が事実上「国旗」としての地位を確立した最初**である。万延元年(1860)、日米修好通商条約のため、日章旗を掲げた咸臨丸がアメリカに派遣された。

明治政府も、明治3年(1870)に太政官布告の商船規則で「**御國旗**」を**日章旗**とし、事実上、国旗となった。 また同年同布告で「陸軍御國旗」として**旭日旗**が定められた。

神武天皇の記述を水耕稲作文明の大和地方伝来の象徴とし、日本書紀で、神武天皇は始馭天下之天皇(はつくにしらすすめらみこと)、崇神天皇も「御肇國天皇(はつくにしらすすめらみこと)」と記されることから、神武天皇の实在を否定、崇神天皇の实在を肯定し二人を集約させる説がある。しかし、この二つの時代には以下の通り、考古学的に**二種の新しい動き**が認められる。そして、その御名前の天皇、实在是非とは別に、原初の出雲信仰や文化を残しつつ、先入していた大和の氏族や信仰と習合し、和合していくことに注目したい。

神武天皇(東征)・・・弥生時代後期 **大型内行花文鏡**(出雲の祭器銅鐸に代わる鏡)、大和南西部での出雲系(鴨氏)との習合、都宮の記載比定地(奈良盆地南西地域)

神武東征が稲作伝播の象徴とする説があるが、水耕稲作は、弥生時代初頭からであり、銅鐸から鏡への変化の時期とは一致しない。伊勢神宮神鏡や記紀より、**内行花文鏡の伝播と一致する**。

鏡威信の勢力 天照大御神から三種の神器(八咫勾璫、**鏡**、及草那藝劔)授かり、天降(あまくだ)った天孫 邇邇藝命(ににぎのみこと)。 神武天皇はその子孫とされる。

神武天皇は大物主の娘、媛蹈鞬五十鈴媛命(ひめたたらいすずひめのみこと)を娶った。 その姫は、日本書紀の一書や先代旧事本紀では**事代主神**の娘とも記される。

神武天皇の皇子で二代天皇の綏靖天皇も、**事代主神**の娘、五十鈴依媛命(いすずよりひめのみこと)を娶る。 その皇子は三代安寧天皇となる。 先入の出雲系 在来氏族との和合である。

崇神天皇・・・古墳時代初頭 先行鏡との不一致・和合、四道将軍平定過程、**画紋帯神獸鏡の大阪湾周辺集中**、前方後円墳・三角縁神獸鏡・鉄器の瀬戸内拡大 都宮比定地(三輪山麓 磯城瑞籬宮)

内行花文鏡と**画紋帯神獸鏡**はホケノ山古墳(大神神社所蔵)、大和天神山古墳に伝わる。**内行花文鏡だけは400年代** 丹波蛭子山古墳や、丹後「**籠神社**」(長宣子孫八葉鏡と照明鏡)に伝わる。

崇神天皇6年、**疫病を鎮めるべく、従来宮中に祀られていた 天照大神 と 倭大国魂神(大和国魂神)を 皇居の外に移した**。

「天照大神」を豊鍬入姫命に託し、笠縫邑(現在の檜原神社)に祀らせ、その後各地を移動し(元伊勢)、**垂仁天皇**25年に現伊勢神宮内宮に御鎮座。 伊勢神宮八咫鏡主説「**大型内行花文鏡**」

「倭大国魂神」(大国主神、もしくは大己貴神(大国主神)の荒魂)を淳名城入媛命に託し、長岡岬に祀らせたが(現在の大和神社)、媛は身体が痩せ細って祀ることが出来なかった。

崇神天皇7年2月、大物主神が 倭迹迹日百襲姫命に乗り移り託宣する。11月、**大田田根子**(大物主神の子とも子孫ともいう)を**大物主神**を祭る神主とし(これは現在の大神神社に相当し、三輪山を御神体としている)、市磯長尾市(いちしのながおち)を**倭大国魂神を祭る神主としたところ、疫病は終息し、五穀豊穰**となる。先入する古代からの神(奉祭する氏族)との和合である。

三角縁神獸鏡副葬の主たる前方後円墳 福岡県京都郡の石塚山古墳3C中～4C初、西都原古墳群81号墳3C中(鏡無し)、京都府木津市の**椿井大塚山古墳**3C末、大分県宇佐の川部・高森古墳群赤塚古墳3C末、岡山県備前車塚古墳4C初、奈良三輪山南方、**桜井茶臼山古墳**4C初、西都原13号(4～5初)などで多数の船舶同範鏡、鉄刀・鉄剣・鉄鉾・鉄鏃など鉄器副葬も多い。

桜井茶臼山古墳の近隣、**宗像神社**も、北九州との交流を示す(天武天皇期以前からの奉祭)。 石塚山古墳、椿井大塚山古墳、赤塚古墳、原口古墳(時代初頭)は同範鏡であるとされる。

弥生時代

後期
50年

250年頃

古墳時代へ

300年頃

400年代

以上の神獸鏡出土古墳で、**椿井大塚山**や**桜井茶臼山**、**備前車塚古墳**では、**内行花文鏡も 副葬**されている。なぜか？これはすでに**出雲系と和合していた神武皇統、そこにあとの勢力、崇神皇統が重層し和合していく 象徴**と考える。

伊勢神宮に祀られている神宝「八咫鏡」について、 考古学者(原田大六氏、森浩一氏)は、「皇太神宮儀式帳」の本鏡内容の記事などを元に、福岡県糸島市にある平原遺跡出土の大型内行花文鏡(46.5cm)と、同様の大きさ文様と推定。それら古墳の被葬者や氏族が、「先入である神武皇統」と「後入である崇神皇統」のそれぞれの**鏡威信**を受け入れた証である。

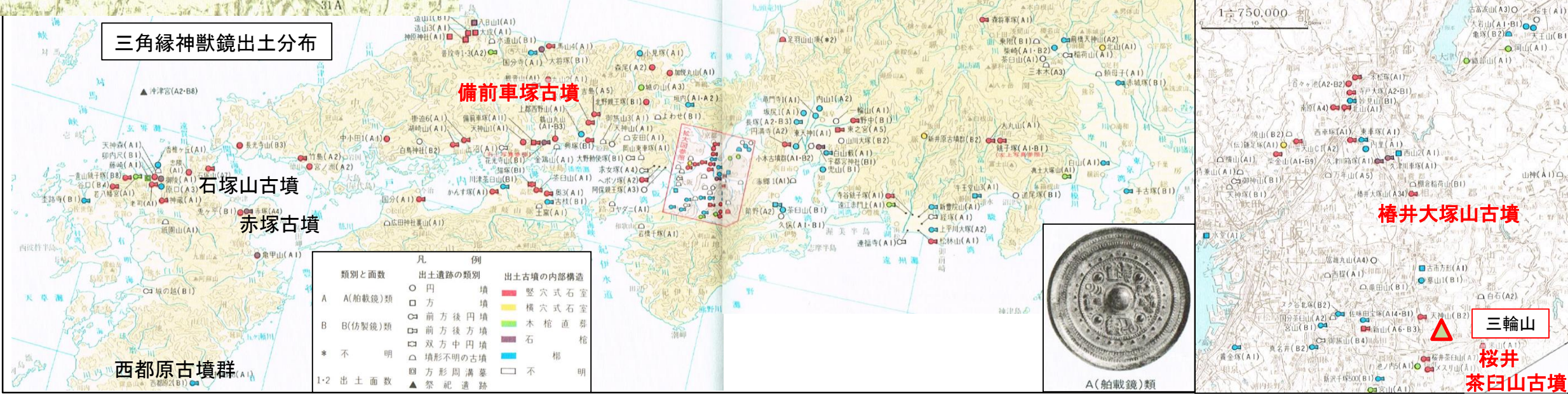
倭建命やマトタケルの重要な視点は、(第1皇子豊城入彦命の東国派遣、四道将軍の派遣などを前提に)

① 父である景行天皇への絶対服従を強調し、権威を著わした。 派遣先は前方後円墳や三角縁神獸鏡出土とも一致する。

② この時代における、出雲、九州、蝦夷など勢力存在と、英雄的ではない記述、出雲系姫との婚姻など、倭統一への過程。そこには、**武力ではない 和合への苦心**も伺える。また、伊勢以外に、息長氏などの古代豪族が勢力した、淡海國の山神の登場にも注目したい。 終焉の「河内陵」は、応神から仁徳天皇陵などに比定される 河内古墳群に繋がる。

神武天皇 から孝元天皇の都宮 大和平野南西地域(鴨氏の本拠)から徐々に東へ

崇神天皇都宮 三輪山の西南麓**磯城瑞籬宮**へ「師木の水垣宮(みづかきのみや)」に坐しまして、天の下治めらしめしき』『古事記』崇神天皇より垂仁、景行天皇の巻向宮後 350年以降、三角縁神獸鏡は急減。 古代氏族との姻戚習合との因果関係有りと考える。



奈良時代 元明天皇から桓武天皇の遷都までの間、信仰と律令政治が変化し始める。 神と仏の役割分担として**神仏習合、土地所有の改変として墾田永年私財法**である。

その前、飛鳥時代は、白村江での大敗を経験し、危機意識からも国家としての内制を整える時であり、**神仏共存の模索**の時であった。 日本書紀は、斉明天皇5(659)年、出雲国造に命じて「神之宮」を修造させた、と記する。 天武天皇期には、伊勢神宮の斎宮を制度化した(壬申の乱の戦勝祈願の礼(『扶桑略記』)。 上賀茂神社造営も天武天皇7(678)年である。 つまり、神の坐ます場所や祀る者が整えられた。 また、仏については、「**自分で観想する浄土**」から、**日本特有に「他者の鎮魂」、「自らの氏寺、先祖供養」**に拡大、変貌した。 奈良時代のあと、平安京で、「神仏習合」は神像、神社建築に影響、「墾田永年私財法」は荘園拡大に繋がり、律令制度の崩壊や 貴族と武家の勢力交代 にまで遠因する。 その飛鳥と平安の間、平城は、政治的な根本思想の下、**神仏はそれぞれの立場を確立していく時代**である。

前述、新天地への遷都の理由を、壬申の乱で衰微した**天智天皇皇統 と 中臣氏による「復活への活動」**と考えた。 その都、平城では、**新たな信仰政策、神仏が習合**し、絶大となる。

仏は、その名のごとく興隆する藤原氏「興福寺」を頂点に、蘇我氏飛鳥寺を起源とする「元興寺」を従え、飛鳥京での配置を再現した「薬師寺」と、大官大寺を改名した「大安寺」を西から南に配す。そして、都の内部で左(大臣)を標榜し、また独立した東方の地域、戦闘上も有利な山麓にかけて、日の出方向に「春日大社」を鎮座させた。それが平城京の原型である。日本書紀で天武期に初見される川原寺(弘福寺)は興福寺にすり替えられた。 その興福寺の発祥は山科の山階寺で創建者は「**鏡女王**」。 896年作の藤原良世『興福寺縁起』は、元々は天智天皇の妃だったが、後に藤原鎌足の正妻となり、藤原不比等を生む。と伝える。『日本書紀』天武天皇が見舞う「鏡姫王」、『延喜式』舒明天皇の押坂陵内に墓がある「鏡女王」と別人かどうかは別にしても、藤原氏の母であり、時の天皇の近親者の女性が、天照大御神に通ずる「鏡」と名付けられたことに注目したい。

天武天皇の神仏政策。 つまり神は鏡の元祖、神武天皇に、「循環思想」を基礎とする皇祖、天照大御神を見だす皇統「**根本思想**」、仏には、持統天皇の病気平癒祈願「**現利思想**」。その政策を藤原氏は取込、強化した。神は、その皇統の支援者、武甕槌命を春日大社に祀り、仏は、その根本、釈迦如来を「興福寺」金堂の本尊とした。「根本思想」を踏襲する。ここでは阿弥陀如来は影を潜める。

「薬師寺」と「興福寺」は共に**法相宗**。 法相とは、森羅三千の万象である、諸法の性(真如)と相(現象)を分別する意味で、『成唯識論』を所依として万法唯識の本質を識と説く。ここから「唯識宗」ともいわれる。インド唯識派の祖師、世親の教えを解釈した**玄奘**の漢訳『成唯識論』は、六経と十一部論を引用、その六経とは『**華嚴経**』『**解深密教**』などである。『法華経』では、一切衆生の悉皆成仏(どのような人も最終的には仏果(悟り)を得られる)を説く一乗説に立ち、經典の三乗は一乗を導くための方便と解釈したが、対して法相宗では、小乗(声聞乗・縁覚乗)・大乘(菩薩乗)の**区別を重んじ**、それぞれ**悟りの境地が違うとする三乗説**を説く。 つまり教学として、厳密には万民平等な仏教ではない。 律令の官僚制、官位、位階。 また良民と賤民に大別される身分制に通じるかもしれない。

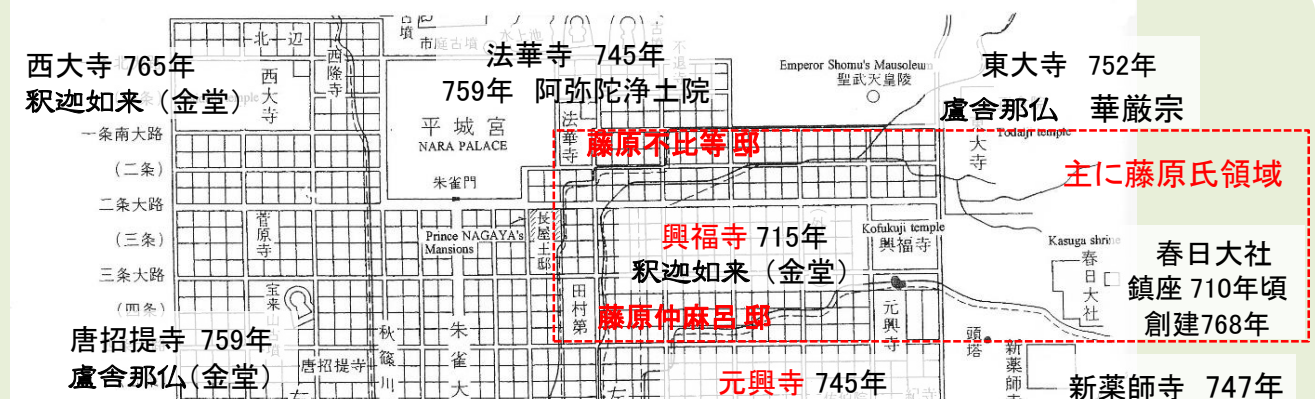
そして、この法相宗も、元来、653年(白雉4年) 道昭が入唐し玄奘に師事、**蘇我氏の飛鳥法興寺**に伝えたことに始まる。 717年(養老元年) **義淵**の弟子**玄昉**も入唐、興福寺を盛り、僧正位にもなった。 仏教は、鎮護国家の思想の下、国家の管理下で統制、得度を制限する年分度者の制度が施行され、原則として私度僧は認められていなかった。このことは仏僧と国家権力が結びつく原因ともなった。

「**根本思想**」は、聖武天皇の「東大寺」や、その大仏殿前で、聖武天皇、光明皇太后、孝謙天皇らに菩薩戒を授けた鑑真の「唐招提寺」にも出現する。二寺の本尊は『華嚴経』に詳しく説かれる「**盧舎那仏**」、釈迦を超えた宇宙仏(法身仏)で、宇宙の真理を全ての人に照らし、悟りに導く仏である。 密教では「摩訶毘盧遮那仏」(大毘盧遮那仏)は、**大日如来**と呼ばれる。巨大なる根本仏である。

聖武天皇は、仏教による災厄(飢餓・疫病)戦乱鎮静の『鎮護国家』の思想に基づき、741年『国分寺・国分尼寺建立の詔』。 743年5月 『墾田永年私財法』 10月東大寺『大仏造頭の詔』 私度僧、優婆塞 **行基**集団 が貢献。 平城京での「神仏習合」は、同時に各地でも発祥していた。 宇佐八幡宮での**法蓮**、のちに雑密と呼ばれる密教僧や私度僧が密教、観音菩薩も広めていく。「東大寺」創建の前提として、749年、宇佐から**八幡神**を勧請した。 同年、聖武天皇に菩薩戒を授けた行基は没す。751年、良弁が東大寺初代別当に。「**東大寺**」鎮守社として「手向山八幡宮」が残る。

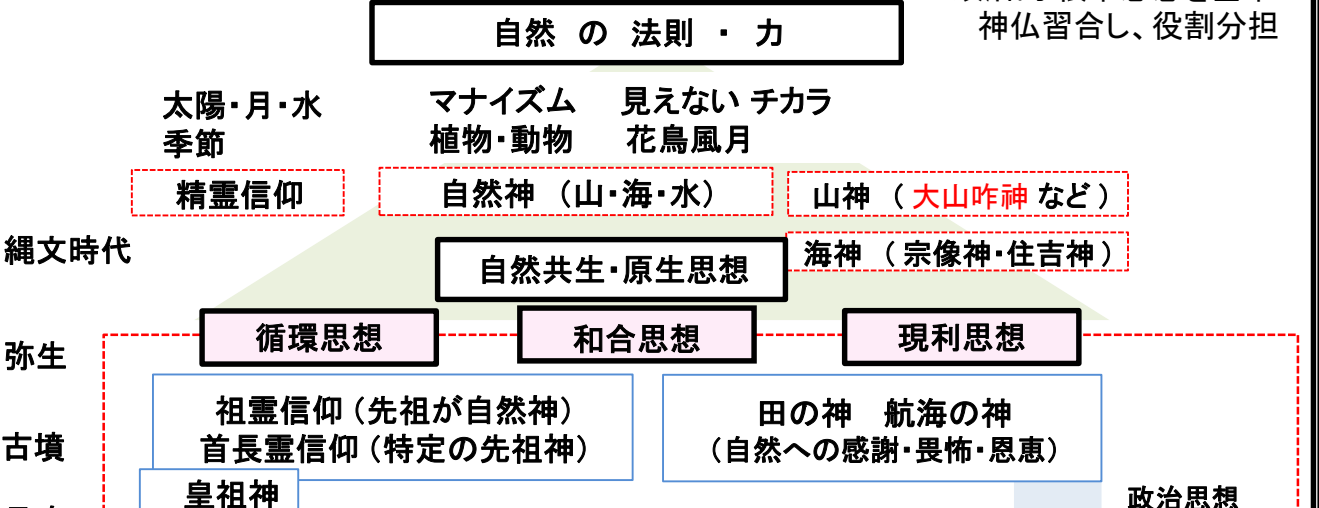
777年、八幡神は神で初めて出家、八幡大菩薩となる。

その時代、758年には住吉大社に、766年までには伊勢神宮にも**神宮寺**が、奈良時代末までに大神神社に大御輪寺が創建される。 京都では**延鎮**(法相宗)による「山科、法厳寺」、**慶俊**(法相、華嚴、真言宗)による「愛宕、五寺」開山で、山代から山背にかけた山岳の信仰拠点が整う。

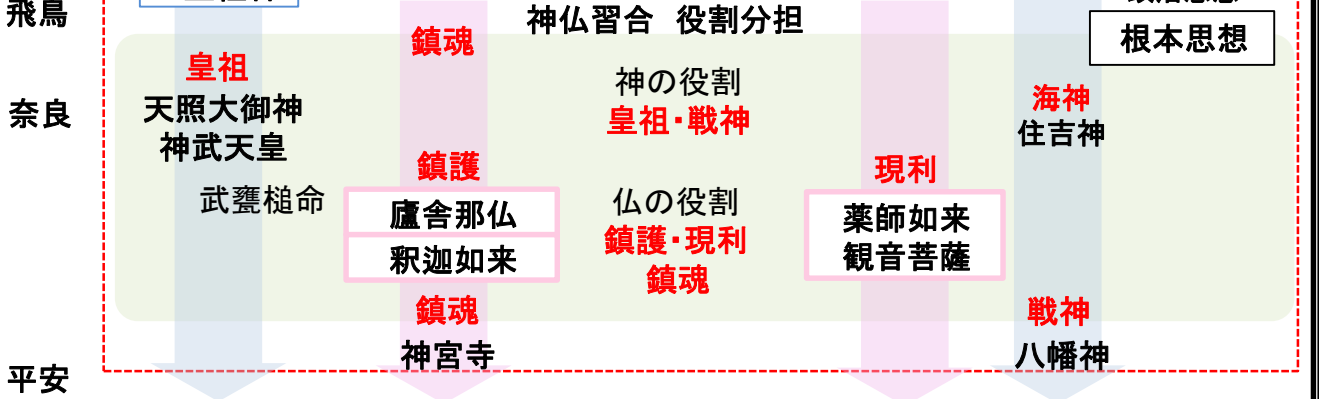


日本文化の特性 基本原理 の 体系より

政治的 根本思想を基本に
神仏習合し、役割分担



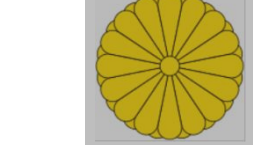
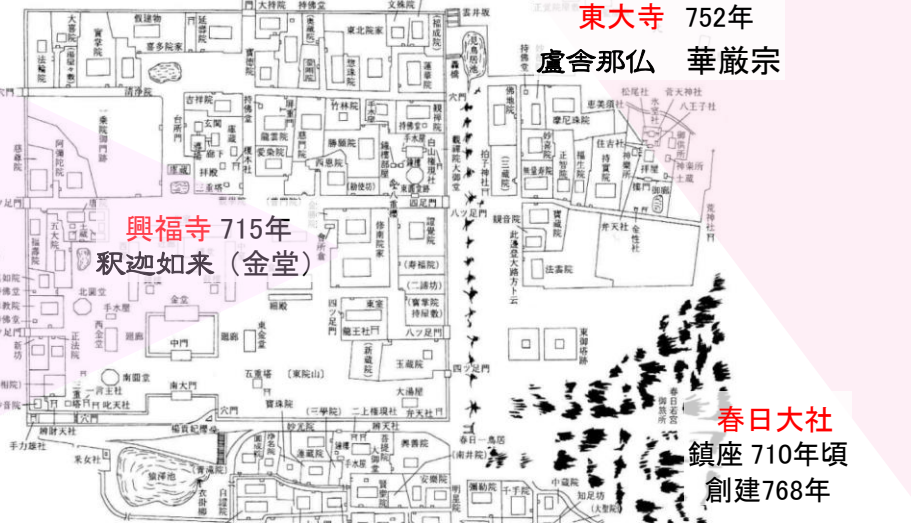
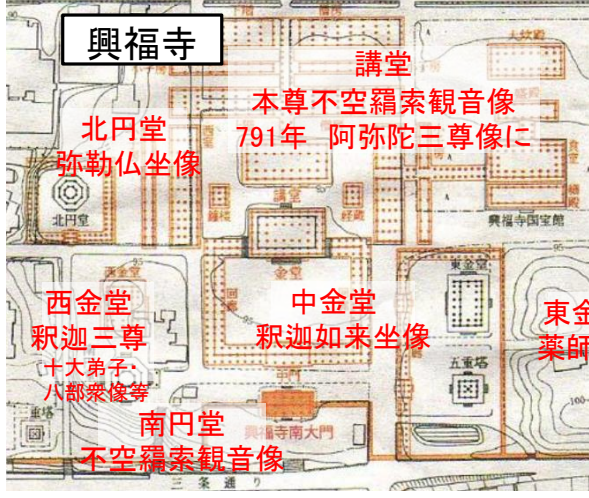
政治思想
根本思想



神仏史 平城京の神仏構造 興福寺と東大寺

興福寺は、藤原氏、天智天皇の姫たちによる、その仏教権威象徴と一族鎮魂の寺である。中央の主たる金堂に仏の根本、釈迦如来を祀り、不比等のための**北円堂**には、**氏族繁栄を願ってか将来に期待する弥勒菩薩坐像**。東の金堂には、現世利益の薬師三尊を加える。そして734年、橘三千代のための西の金堂に、光明皇后は釈迦三尊を祀る。ちょうど藤原四兄弟が全盛の時であり、もし737年兄弟没後であれば、西には違う仏をまつたかもしれない。しかし興福寺はあくまで力強い。746年、講堂に**玄昉**が招来した強力な現世利益仏**不空羂索観音像が鎮座**。のちに藤原北家貢献者、冬嗣が父追善供養で創建する南円堂に還座される。しかし、その興福寺でも資材帳 天平宝字4(760)年光明皇太后法事で、**阿弥陀仏**に追福祈願し、「称讃浄土経」が二千枚近く写経された。そして、都が平城より去ったあと、791年、**講堂に阿弥陀三尊**が祀られる。ようやく鎮魂、安らぎを求める寺院にもなった。

東大寺は、鎮魂、救済のための秩序を願う寺院である。前身寺院は、同地に建立された**金鐘山寺**。聖武天皇と光明皇后の皇子、基王が神亀5(728)年に夭折、供養鎮魂のため建立された。そして、現二月堂付近に阿弥陀堂を持つ**福寿寺**も前身とする説がある。共に都の東方山岳に所在した。皇子に続き、光明皇后の母、県犬養三千代が天平5(733)年に没しており、その鎮魂の寺院と考える。いずれにせよ鎮魂の寺院を前身に、国分寺としてまず再創建される。そして、平城京に戻った聖武天皇が、行基や知識寺の影響を受け、広く万民のための公共寺院として東大寺が誕生した。その時代は、**藤原氏衰退から平安期再興までのわずかな狭間**であった。737年、聖武天皇期、藤原四兄弟が没し、橘諸兄、玄坊、吉備真備が藤原氏に対抗、藤原広嗣も乱で処刑、不比等の諸領土は全て朝廷に返上された。橘諸兄は県犬養宿三千代と美努王の子で、彼にとって不比等は母を奪われた宿敵である。一時は藤原仲麻呂が勢力するが、764年吉備真備が大宰府より帰還し「造東大寺長官」に任命、孝謙上皇勅命により高齡70歳で藤原仲麻呂も追討した。興福寺と東大寺は、仏の世界でも主導したい藤原一族と、その姻戚にありつつ対抗する聖武天皇や橘氏、真備の象徴である。東大寺に**宇佐八幡**を勧請し守護とした理由はここにもあると気づかされる。また双方共に祀る**不空羂索観音**も、それぞれの違う目的のためと考える。



元福寿寺付近
二月堂

元金鐘山寺「羂索堂」
法華堂(三月堂)

手向山八幡宮
宇佐八幡宮より勧請

- 645年(大化元) この頃、鎌足が釈迦三尊像を造立
- 669年(天智8) 鎌足の妻、鏡大王が夫の病氣平癒を願い山階寺造営 鎌足の釈迦三尊像を安置
- 672年(天武元) 壬申の乱、飛鳥浄御原宮に遷る
- この頃、山階寺を大和国高市郡厩坂に移し、厩坂寺と称す
- 685年(天武14) 山田寺講堂の薬師三尊像造立—銅造仏頭
- 710年(和銅3) 平城遷都。藤原不比等、厩坂寺を平城京左京3条7坊に移し、興福寺と号す
- 714年(和銅7) 3月 金堂(こんどう)供養
- 720年(養老4) 不比等没 10月17日「造興福寺仏殿司」を初めて置く
- 721年(養老5) 北円堂建立 不比等一周忌、元明上皇、元正天皇が長屋王に命じ創建
- 本尊木造 弥勒仏坐像、木造無著菩薩・世親菩薩立像
- 8月3日 橘 三千代、金堂に弥勒(みろく)浄土像を造る
- 726年(神亀3) 7月 聖武天皇、東金堂(とうこんどう)を建立 聖武天皇が伯母、元正天皇の病氣平癒を祈願し、本尊薬師三尊で創建
- 727年(神亀4) 12月 興福寺観禅院梵鐘(ぼんしょう)铸造
- 730年(天平2) 光明皇后、五重塔建立
- 734年(天平6) 正月11日 西金堂(さいこんどう)建立。光明皇后が母・橘三千代の一周忌に際し、釈迦三尊を安置する堂として創建。 十大弟子・八部衆像等も造立
- 737年(天平9) 藤原四兄弟没
- 738年(天平10) 3月28日 山階寺(興福寺)に食封千戸を施入
- 746年(天平18) 正月 講堂本尊不空羂索観音像造立 (のち南円堂移祀)
- 749年(天平勝宝元) 5月20日 寺田百町施入される
- 757年(天平宝字元) 12月8日 山階寺(興福寺)施薬院に越前国の水田百町を施入
- 761年(天平宝字5) 2月 東院西堂建立 764年(天平宝字8) 9月 東院東堂建立
- 771年(宝亀2) 2月22日 東院地蔵堂建立
- 791年(延暦10) 3月10日 講堂に阿弥陀三尊像を造立 4月 北円堂四天王像造立
- 813年(弘仁4) 藤原冬嗣(ふゆつぐ)、南円堂を建立 藤原北家冬嗣が父・内麻呂追善 講堂本尊不空羂索観音像を移祀

神亀5年(728年) 金鐘山寺 聖武天皇と光明皇后の間に生まれた唯一の皇太子で夭逝した基王の菩提を弔うため建立。 良弁(のちの東大寺初代別当)を筆頭に智行僧九人を住持させた。 その宇堂の一つ「羂索堂」は現在の法華堂「三月堂」天平12(740)年~748年頃建立。 乾漆立像として、本尊不空羂索観音、梵天・帝釈天、金剛力士 2軀、四天王。塑造立像は執金剛神、日光・月光菩薩(全国宝) 創建時伽藍で唯一現存。 福寿寺 光明皇后が創建に関わる。福寿寺写一切経所(正倉院)より天平13(741)年までに創建。

天平13年(741) 国分寺・国分尼寺(金光明寺・法華寺)建立の詔 国家の災害・国難などを消除することを説く『金光明最勝王経』の具現が国分寺の建立 金鐘山寺が昇格して大和金光明寺となり、これが東大寺の前身寺院とされる。福寿院との統合や、瓦より金堂所在地が現法華堂(三月堂、羂索堂)地とする説あり。

天平12年(740)2月、河内国知識寺に詣でた聖武天皇は、『華嚴経』の教えを所依とし、民間のちからで盧舎那仏が造立され信仰されている姿を見て、盧舎那大仏造立を強く願われた。 造立する前に『華嚴経(大方広仏華嚴経)』の教理の研究。華嚴経講説、盧舎那仏の意味は、金鐘山寺(羂索堂)で、大安寺審祥大徳を講師として、良弁主催で天平14年(742)に終了。世界に存在するあらゆるものは、それぞれの密接な相関関係の上に成り立ち、平和で秩序ある世界を形成するとの教理実現を目指す。東大寺の正式名称は、「金光明四天王護国之寺(きんこうみょうしてんのうごくのてら)」 天平15年(743)「大仏造願の詔」当初、紫香楽宮において造仏工事が開始されるが、山火事・地震の続発で、平城京に還ることを決意、天平十七年(745)8月、大仏造願の工事は金鐘山寺の寺地で天平19年(747年)再開。「造東大寺司」初見は天平20年(748年)

天平勝宝四年(752)4月に「大仏開眼供養会」、竣工天平宝字2年(758年)。その後も講堂・東西両塔・三面僧房などの諸堂造営は、延暦八年(789)3月の造東大寺司の廃止まで続行された。

「二月堂」 本尊十一面観音 創建 天平勝宝4年(752年)主説、修二会(しゅにえ)が良弁の弟子 実忠が創始。 罪障懺悔し、功德により興隆仏法、天下泰安、万民豊楽、五穀豊穰などを祈る法要行事 「戒壇院」 出家者の受戒(正規の僧の戒律授受)施設として、天平勝宝7(755)年に鑑真和上が創建 塑造四天王立像(国宝)。 天平年間に千手(観音)堂が建てられ、今はない講堂にも千手観音像が安置された。

奈良時代を理解するには、平城京だけでは狭小である。古代の信仰が史実を元にした神話によって復活し、大型建築として各地に出現した時代である。　まさに現利思想が神々を具体化した。改めて総括すると、今日、我々が目にしている主たる神社、**出雲大社、住吉大社、宗像大社、伊勢神宮、賀茂社**などは、弥生時代、遅くとも古墳時代初期の信仰の証、名残である。

①　縄文からの海人族、その人々と関係する弥生の出雲勢力、銅鐸祭器する彼らは畿内まで流入する。　②　九州から第一次鏡威信勢力、神武天皇の名に代表され習合していく。　③　そのあとの古墳時代、第二次鏡威信勢力が崇神天皇で、前方後円墳、画紋帯・三角縁神獣鏡などの遺跡に残る。　彼らもまた習合、和合していき、その終着が神功皇后、応神天皇の名で残り、朝鮮半島や北九州に足跡を残す。　500年代、継体天皇の頃になるともうすぐ飛鳥時代、人々の記憶、伝承を文字で残す作業が進められた。　その残欠を編集し、完成したものが　記紀・風土記となり、現代に伝わる。　それまでに信仰の依代、社があったにせよ、天武天皇から奈良時代にそれら大社、神宮が社殿として整備されていく。　**伊勢神宮以外は①の時代から信仰の歴史を持つ**。しかしその②　日の神も大和の西方から徐々に東方に侵入し、丹後海部氏の**彦火明命、天照國照彦天火明櫛玉邇速日命**(尊)の名にある様に、物部尾張の祖でもある出雲勢力　①が国譲りし習合した。『古事記』で邇藝速日命(ニギハヤヒ)とされる人は、神武天皇より先行していた出雲一族、物部氏たちの祖とされる。　和合の証として、倭(日本)大国魂神と天照大御神とは共に大殿に祀られていたが、③が到来した時、**天照大御神は、丹後に還却した**。それは、崇神天皇の時、大和で崇ったとされる天照大神の事件として記される。　元伊勢、**丹後「籠神社」や 300年代後半の蛭子山(えびすやま)古墳**に②の内行花文鏡が伝わる。　400年前後から所謂、**丹後王国**として神明山古墳など200m級の大型古墳が誕生した。　**天照大御神**は、垂仁天皇期に伊勢鎮座。　雄略天皇期には、丹後の**豊受大御神**を迎える。このことは①と②の和合の足跡で、東方への進出かもしれない。③崇神天皇の勢力は**前方後円墳、画紋帯・三角縁神獣鏡**で信仰改革に取り組むが祟り、倭建命も遠征死す。結局、古代氏族母系と習合する。応神天皇期から継体天皇、皇統のゆらぎ、外来仏教の扱い、白村江の大敗と危機、壬申の乱と混乱した。　古代の信仰、氏族を尊重し、統率力をもたらす国家的信仰、思想が必要となった。

そして、**天武天皇の復古政策、より高い皇祖を古代①②に求めるため記紀が著され、その時代の神々の社殿が奈良時代に創建、完成する**。　それぞれの神社は、生い立ちを尊重し「造り」が違う。「出雲大社」は古代にふさわしい田の字の住居、宮殿。「住吉大社」は海神として、遣唐船団のごとく　社殿が直線に並び。　天皇が即位の礼の後、初めて行う一世一度の新嘗祭が大嘗祭(だいじょうさい)だが、その建物に似ることは航海への覚悟に似る。「宗像大社」は、沖のかなたと繋がる三社。　市杵島姫神を祀る辺津宮の本殿は流造、賀茂社と同じ出雲の系統。その奥、中津宮、沖津宮は唯一神明造りで「伊勢神宮」「**籠神社**」と同じ神明造り、日の神がもたらす穀物を守り、ささげる高床式倉庫を原型とする。それら建築様式の習合は、①②の和合の証でもある。藤原氏の「春日大社」春日造は、出雲大社の大社造と同じく、切妻造・妻入だが、屋根が曲線を描いて反り、正面に片流れの庇(向拝)を付したもの。　庇と大屋根は一体となっている。屋根の反り、彩色など、寺院建築の影響を受け、古代の建築様式を取り込んだとも言える。　なかでも「**住吉大社**」の神は、天照大御神、神功皇后と関係が深い。　三神の社殿は真西からわずかに北を向いて連なる。　その先は、はるか朝鮮半島から遣唐使が目指す大陸の港の方向を向く。そして、三神の社殿の後方、真東からわずかに南方向に向けた先は、奈良の「唐子・鍵遺跡」を通り、奥社のごとく伊勢神宮、斎宮の方向になる。**底筒男命を祀る**第一本宮の北側面に伊勢神宮への遥拝所がある。　また水平西は、ちょうど住吉大社ご祭神、**筒男三神**の里である対馬を通り、遣唐使がたどりついた長安、今の西安の方向となる。海人族の航海安全の神に、戦勝祈願の神として　第四本宮　神功皇后　が寄り添う。

「住吉大社」は、北九州対馬の海人族の山幸海幸信仰を祖型に、神功皇后の朝鮮渡海の帰路、**天照大御神の神教により、航海安全のため、筒男三神を、今の地に祀ったことに始まる**。　①と②　**海人族の神と新たな日の神との和合、協力関係ができた**。対馬には、八社の「住吉神社」があり、主に山幸海幸神話の神を祀っている。　海のかなたから日の神を招く水平祭祀。

日本書紀『皇后之船、直指難波。于時、皇后之船廻於海中、以不能進、更還務古水門而卜之、於是**天照大神**誨之曰「我之荒魂、不可近皇居。當居御心廣田國。」即以山背根子之女葉山媛、令祭。亦稚日女尊誨之曰「吾欲居活田長峽國。」因以海上五十狹茅、令祭。亦事代主尊誨之曰「祠吾于御心長田國。」則以葉山媛之弟長媛、令祭。亦**表筒男・中筒男・底筒男三神**誨之曰「吾和魂、宜居**大津渟中倉之長峽**。便因看往來船。」於是、隨神教以鎮坐焉。則平得度海。』

「**住吉三神**」誕生は、伊邪那岐神が黄泉の国に行った後、その**穢れ**を落とす為に、筑紫の日向で**禊祓**をした際に天照大御神たちの直前に生まれた。　そして、古事記の**仲哀天皇**の条で、**神功皇后**に神懸かりした神が自ら名乗って「こは**天照大神の御心**ぞ、また、底筒男(そこつつのを)、中筒男(なかつつのを)、表筒男(うはつつのを)の三柱の大神ぞ」と述べている。

・　**山幸海幸**「玉の井」

本来、海人族から誕生した神奈備　磐座の神山信仰である「山幸彦」が「海幸彦」に勝つ。山幸彦と海神(大綿津見神の娘・豊玉姫との息子が鵜草葺不合命(うがやふきあえずのみこと)、また海神大綿津見神の娘、玉依姫と結婚し、**神武天皇**が誕生する。その古代海人族を復興させた天武天皇の名前は、**大海人皇子**。　天皇の殯に凡海(おおあま)鹿鎌(海人族　海部一族、阿曇氏の伴造)が壬生(養育)のことを誅したことから、幼少期の養育、影響を確信させる。　住吉大社にある「**玉の井**」は、山幸彦と豊玉姫の出会いの場とされる。

・　**船を造る楠**　「楠珣社」なんくんしゃ

虫害や腐敗に強く巨材が得られるという長所、枝分かれが多く直線の材料が得難いという欠点はあるが、古来から**船の材料**として重宝されていた。　古代西日本では丸木舟の材料として、また、大阪湾沿岸からは、クスノキの大木を数本分連結し、舷側板を取り付けた古墳時代の舟が何艘も出土している。その様は、古事記「仁徳記」に登場するクスノキ製の快速船「枯野」の逸話からもうかがえる。家具や飛鳥時代の仏像にも使われた。室町から江戸時代にかけて、軍船の材料にもなった。

・　**天鳥船神 と 猿田彦神**「船玉神社」

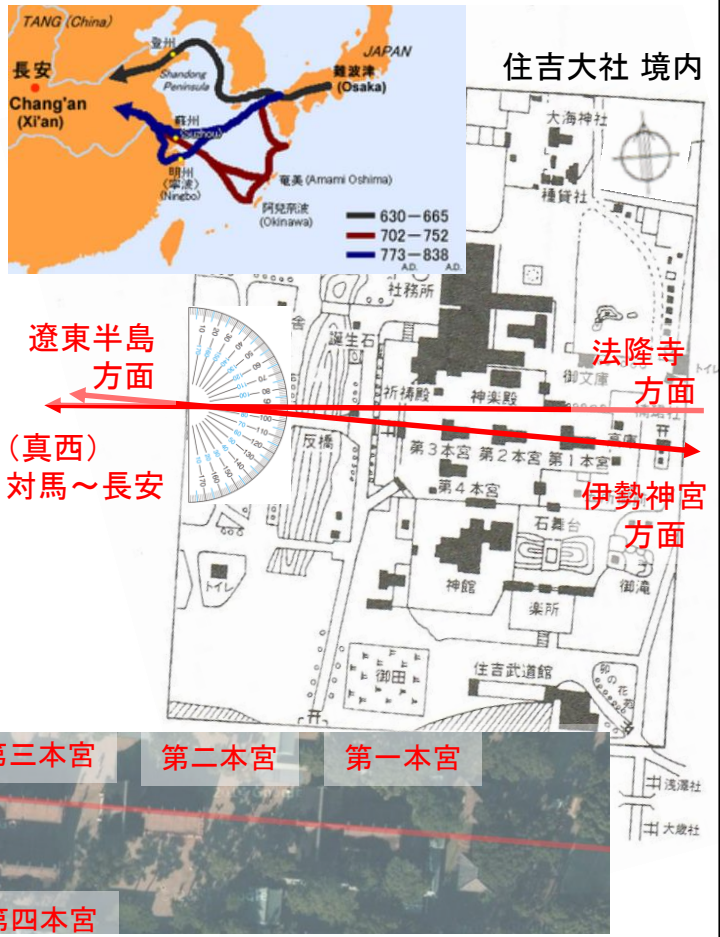
国譲り　建御雷の派遣：天之尾羽張(あめのおはばり)は「建御雷神を遣わすべき」と答えたので、建御雷神に**天鳥船神**(あめのとりふね)を副えて葦原中国に遣わした。　日本書紀では、**経津主神**(ふつぬしのかみ)が同行と記される。

天孫降臨：　天孫の邇邇藝命(ににぎのみこと)が、葦原の中つ国を治めるために天降(あまくだ)る。　天照大御神から授かった三種の神器(八咫勾璫、鏡、及草那藝劔)をたずさえ、天児屋命(あまのこやねのみこと)などの神々を連れ、高天原から地上へ向かい、**猿田毘古神**(さるたひこのかみ)が先導した。

・　**海人族　宗像氏との交流**「浅沢神社」

宗像辺津宮の祭神、市杵島姫神を祀る。　万葉集にも『住吉の浅沢小野の杜若(かきつばた)衣に摺りつけ着む日知らずも』と詠まれている。

遣唐使　航路「住吉大神」を船の舳先に祀り、住吉津から出発、細江から大阪湾に出る。創建当時は北路　対馬経由で　**遼東半島を目指す**。





天武天皇の政治・神仏政策。神は、鏡の元祖である神武天皇に、「循環思想」によって皇祖として天照大御神を据え、「**根本思想**」で皇統の価値を高め、新益京を飛鳥で構想した。そして天武天皇没後、その構想は、天智天皇の姫系統下、藤原・中臣氏により平城京に場所を移し、記紀文献と社寺創建で実現、忠臣として政治・神仏祭祀に君臨した。藤原不比等没後、**長屋王の変**で藤原四子政権が確立。不比等の次男、**藤原北家の祖、房前**が政権を主導する。以下、桓武天皇に至る天智皇統回帰、藤原氏内部、他の氏族、仏僧たちの活動をまとめた。 皇統回帰への藤原式家の貢献、**北家復興**までを辿る。

長屋王の変は、神亀6年(729)2月、漆部君足(ぬりべのきみたり)と中臣宮処東人の讒言を発端に、不比等三男の**藤原式家の祖、藤原宇合**(うまかい)ら軍勢による、長屋王、その妃吉備内親王、子の膳夫王らへの襲撃であった。 結果、9人の公卿の内、藤原武智麻呂(南家)、房前(北家)、宇合(式家)、麻呂(京家)の四兄弟が入り、729年から737年までの間、朝廷の政治を担った。 その時代、律令財政が確立され、天平6年(734)に官稻混合による正税が成立、天平8年(736)公田地子の京進が開始された。 また、京や畿内に惣管・平城京以西の道ごとには鎮撫使、のちに節度使を設置し治安維持を強化した。対外的には遣新羅使の派遣や、東北遠征などが行われた。

聖武天皇期、四兄弟は737年の天然痘の流行により相次いで病死、藤原四子政権は突然、終焉した。 四兄弟の子が若年であったため、政権は光明皇后(不比等の娘)の異父兄弟で臣籍降下した**橘諸兄**(葛城王)が右大臣として担う。 天平7年(735)には**玄昉**が唐より帰朝し、藤原宮子、聖武天皇、光明皇后の寵愛を受ける。天平12年(740)、四兄弟のうち宇合の息子広嗣が乱を起こし討伐された(**藤原広嗣の乱**)こともあり、藤原氏の高位官僚の不在時代がしばらく続くことになる。 兄たちを次々と失った**光明皇后**は、その不安から聖武天皇へ**大仏建立**を強く勧め、743年「大仏造願の詔」。広嗣の乱の年、740年に聖武天皇が河内国大県郡の智識寺を訪ね、その寺の盧舎那仏から大いに影響を受けていた。この智識寺は、智識(同信集団)の勧進銭によって建立された寺で、それは東大寺成立に影響した。 **玄昉、吉備真備**らも、藤原氏の突出を抑えようと努めたが、**光明皇后**の信任を得た藤原**南家・仲麻呂**(武智麻呂の子)の台頭により抑えられ、745年、玄昉は左遷先の大宰府で没。 天平勝宝元年(749年)聖武天皇の譲位により**孝謙天皇**即位。 757年(天平宝字元年)、仲麻呂は諸兄の子・橘奈良麻呂も排除した(橘奈良麻呂の乱)。 天平宝字2年(758年)孝謙天皇は病気で倒れた母、光明皇太后に仕えるため退位、大炊王(**淳仁天皇**)に譲位した。

藤原**南家・仲麻呂**は独裁的な権力を振るうが、天平宝字4年(760)光明皇太后が崩御すると、孝謙上皇と仲麻呂・淳仁天皇の権力関係は微妙なものとなった。同年8月に孝謙上皇・淳仁天皇らは小治田宮に、天平宝字5年(761)には保良宮に移った。病に伏せった孝謙上皇は、看病に当たった弓削氏の僧・**道鏡**を寵愛するようになった。天平宝字6年(762)淳仁天皇は平城宮に戻ったが、孝謙上皇は平城京に入らず法華寺に住んだ。ここに「高野天皇、帝と隙あり」と続日本紀が記す孝謙上皇と淳仁天皇・仲麻呂の不和が表面化した。**孝謙上皇派の道鏡、吉備真備**が台頭。危機感を抱いた仲麻呂は、天平宝字8年(764)軍事力の掌握を企てるが、謀反との密告され、淳仁天皇の保持する**御璽・駅鈴**を奪われるなど孝謙上皇に先手を打たれてしまい、平城京を脱出する。子の辛加知が国司を務める越前を目指すが、官軍に阻まれて失敗。 仲麻呂は近江国高島郡の三尾で官軍に敗北、妻子と琵琶湖で敗死した。 同年、上皇は天皇を追放し、**称徳天皇**として重祚した。天平神護2年(766)、海龍王寺で仏舍利が出現したとして、**道鏡**を法王とした。 道鏡の下には法臣・法参議という僧侶の大臣が設置され、弓削御浄浄人が中納言となるなど道鏡の勢力が拡充された。一方で太政官の首席は左大臣・藤原永手であったが、**吉備真備**を右大臣に抜擢するなど、称徳天皇＝道鏡の二頭体制が確立した。

称徳天皇は次々と大寺に行幸し、西大寺の拡張や西隆寺の造営、百万塔の製作を行うなど**仏教重視の政策**を推し進めた。 一方で**神社に対する保護政策**も厚かったが、伊勢神宮や宇佐八幡宮内に**神宮寺**を建立するなど神仏習合がさらに進んだ。 また神社の位階である神階制度も開始されている。 神護景雲3年(769)、大宰府の主神(かんづかさ)中臣習宜阿曾麻呂が「**道鏡**が皇位に就くべし」との宇佐八幡宮の託宣を報じた。これを確かめるべく、**和氣清麻呂**を勅使として宇佐八幡宮に送ったが、清麻呂はこの託宣は虚偽であると復命。怒った称徳天皇と道鏡は清麻呂を改名した上で、因幡員外介として左遷し、さらに大隅国へ配流した。

770年、称徳天皇崩御の際に左大臣・(藤原**北家**の祖、房前の次男である)**永手**、右大臣・吉備真備、参議の藤原宿奈麻呂、藤原縄麻呂、石上宅嗣、近衛大将・藤原蔵下麻呂らによる協議が行われたと『続日本紀』は伝える。「百川伝」を引用する『日本紀略』などの記述は、この協議で天武天皇系の長親王の子である文室浄三、次いでその弟・大市を推した吉備真備に対し、**白壁王**(のちの**光仁天皇**)を**推す藤原北家 永手・式家 宿奈麻呂**らの対立があり、**藤原式家百川の暗躍によって白壁王の立太子が実現**したと記する。藤原式家が擁立した**白壁王**の父は、**天智天皇**の第七皇子の**施基(志貴)皇子**(しきのみこ、生年不詳 - 霊亀2年(716))である。飛鳥時代末期から奈良時代初期にかけて生きた。志貴皇子の六男が白壁王で、父系では天武系となる聖武天皇の娘井上内親王を后とし、他戸(おさべ)親王を儲けていたため、皇嗣に擁立された。

宝亀元年(770)、光仁天皇即位後、井上内親王は皇后に、他戸親王を皇太子に立てるが、宝亀3年(772)、皇后の井上内親王が呪詛による大逆を図ったという密告のために皇后を廃され、他戸親王も皇太子を廃された。 のち、宝亀6年(775)、井上内親王・他戸親王母子が幽閉先で急死。これにより、**天武天皇の皇統は完全に絶えた**。 50年以上前に没していた志貴皇子は、「**春日宮**御宇天皇」の追尊を受けた。皇位に一切執着せず清らかな人生を終えた彼の系統が現在まで長く続く事となった。追尊「**春日宮**」の名は、鎌足から続く、天智天皇と藤原氏の執念を感じる。

宝亀4年(773)、**高野新笠**所生の**山部親王**(のちの桓武天皇)が皇太子に立てられた。 この背景には、**藤原百川ら藤原式家兄弟**と彼らが擁立する**山部親王の陰謀説**がある。 宝亀10年(779)、藤原百川は従三位に叙せられるが、同年没。 天応元年(781)、光仁天皇が病にたおれ、桓武天皇、45歳で即位。のち、**桓武天皇**は、百川への恩義から、その子 **藤原緒嗣**を厚遇した。 延暦24年(805)天皇は緒嗣の主張を受け入れ、蝦夷平定と平安京の建設中途停止も宣言している(「徳政論争」)。

桓武天皇は、延暦24年(806)崩御。大同3年(808)緒嗣は、中納言坂上田村麻呂の後任として、陸奥出羽按察使を兼務して東北へ赴任中、平城天皇の退位と続いて発生した**薬子の変**で情勢は一変。緒嗣は鎮圧側に回ったが、従兄弟・故藤原種継の子である尚侍・薬子と参議・仲成の兄弟が事件の首謀者として死亡し、**藤原式家の政治的地位は低下**した。緒嗣主導の改革政策は挫折し、1歳年下である**藤原北家、冬嗣**が嵯峨天皇の信任を得て新設された**蔵人頭**に任命されて政治の中枢に立ち、官位でも緒嗣を追い抜き、**北家が台頭**していく。さらに、冬嗣が文徳天皇の、その子**良房**が清和天皇の、そしてその養子(甥)**基経**が朱雀天皇と村上天皇の、それぞれの**外祖父**となる。 北家嫡流が三代にわたって外戚の地位を保ち続けたことが、同家の優位を確固たるものにした。これが以後の、北家嫡流 = 藤氏長者 = 摂政関白、という図式を決定づけることになり、この系統による「摂関政治」が後の道長・頼通父子の時代に全盛を極める。

嵯峨天皇809–823/淳和天皇823–833/仁明天皇833–850と「**崇文の治**」と称えられる安定期、藤原**式家緒嗣**は『新撰姓氏録』や『日本後紀』の編纂事業に参画した。嵯峨天皇がすぐに自らの皇子である正良親王(仁明天皇)に譲位せず、弟の大伴親王(淳和天皇)に譲位した事は両親王派の派閥を生む事となった。 嵯峨上皇崩御後の承和9年(842年)に起こった「承和の変」によって、中納言・藤原吉野(緒嗣の従兄弟の子)が流刑になったことも**式家に痛手**となった。 晩年は空海ゆかりの観音寺(今熊野)の整備とその隣接地、法輪寺(後の**泉涌寺**)創建に携わり、次男の春津の代に完成。承和10年(843)正二位・左大臣のまま病死した。

継体天皇が山背の筒城・弟国を一時の宮とし、天智天皇と天武天皇系統間の皇位継承を経て、その5世代のちとなる桓武天皇に至る。その約130年の間に、山背は、山代 平安京へと、その輪郭を現す。新都創成の前章として、西山山岳 金蔵寺、山科山岳 正法寺 法蔵寺、愛宕山岳には、月輪寺など五寺 が歴史に出現する。

金蔵寺（こんぞうじ）創建 法相宗 現 天台宗
養老二年（718）、元正天皇の勅によって隆豊禪師が開創し、**聖武天皇**は勅額を賜り經典を書写して埋めたといわれ、桓武天皇は長岡京遷都の際、京護持のため全山復興。また平安京遷都では、王城鎮護のため經典を埋め西岩倉山と号するに至ったと伝えられる。
千手観音を刻んだことが「金蔵寺略縁起」に見えている。平安時代以後、当寺は西山の名刹として栄えたが、応仁の乱へと続く戦乱によって当寺の建物はすべて焼失、正確な歴史を伝える古文書、記録も失われた。
現在の建物は、元禄四年（1691）、將軍綱吉の母、桂昌院によって再建

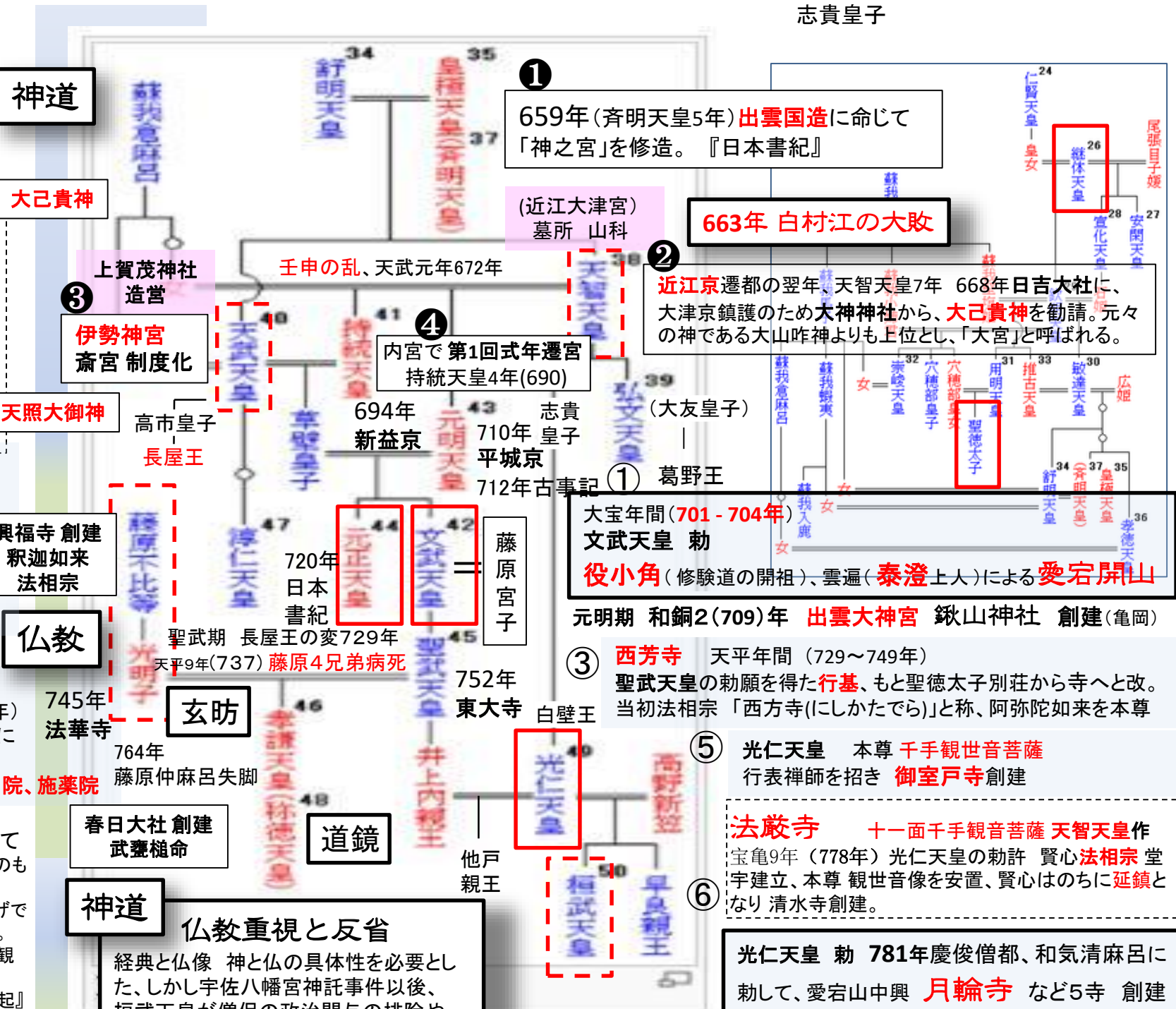
金蔵寺（こんぞうじ）本尊 **千手観音** 718年
元正天皇の勅により、行善（隆豊禪師）開創
ふもとの「勝持寺」は、679年 **役小角**が開山
岩間山 正法寺 本尊 **千手観音** 722年
泰澄が、元正天皇大厄の病を法力で治し褒美として建立

岩間山 正法寺 西国三十三所
泰澄大師が元正天皇の三十三歳の病を法力により治した褒美として建立したことに始まる、元正天皇の勅願寺院。
泰澄は、養老元年（717）白山を開山。
養老六年（722）、元正天皇の病氣平癒祈願を成満した**泰澄**は、靈地を求め岩間山を訪れた折、桂の大樹より千手陀羅尼を感得し、その桂の木で等身の**千手観音像**を刻み、元正天皇の御念持仏をその胎内に納め祀り本尊とした。
後白河・後宇多・正親町（おおぎまち）天皇など、**歴代天皇の尊崇厚く熊野、吉野に並び、日本三大霊場の一として隆盛**（平安～安土桃山）

④ 聖武天皇・光明子
741年（天平13年）
国分寺・国分尼寺に法華經設置
観音信仰 **悲田院、施薬院**
②金蔵寺 行善について
薩摩国生、元興寺の道昭のもとで仏法を納め、高麗、唐夢枕の聖観世音のお告げで小塩山山腹に一字を建立。靈樹から十一面千手千眼観音像を彫り出し本尊に。
『金蔵寺略縁起』

行基と慶俊を繋ぐ、藤井寺と大安寺の 観音信仰

行基
泰澄より「神仏習合」思想を学ぶ。八幡信仰を創設
東大寺及び大仏建立に宇佐八幡宮より守護神勧請（手向山八幡宮）
和銅6年（713年）文武天皇の母 元明天皇の勅願により、五穀豊穡、産業の興隆を祈願する **葛井寺（かどのいでら）建立**
現 法輪寺（本尊 虚空蔵菩薩） 創建当時は観音菩薩と考えます。
725年 聖武天皇の勅願で **葛井寺（河内 藤井寺）**創建
本尊 十一面千手千眼観世音菩薩（国宝）



慶俊と、藤井寺 大安寺の関係

河内 藤井寺は百済王族の子孫である渡来人系氏族葛井（藤井）連（ふじいのむらじ）の氏寺として、8世紀中頃に創建された。なお、平安時代初期に寺を再興したと伝えられる阿保親王の母も藤井氏である。
奈良時代720年に渡来人白猪氏から葛井氏に改姓し、一族から**大安寺僧慶俊**が出ている。

大安寺の経歴
起源 飛鳥時代 592～710年
百済大寺（初の官営寺）高市・大官大寺
639年
起源は聖徳太子が今の奈良県大和郡山市に建てた熊凝精舎（くまごりしょうじゃ）
奈良移築後、**大安寺**…本尊 十一面観音立像 釈迦如来像（金堂）

長岡京遷都 藤原種継が桓武天皇に提唱。母は秦朝元の娘。

★ 月輪寺には、愛宕山白雲寺から分霊された将軍地蔵を祀る「**権現堂**」がある。

愛宕権現は、愛宕山の山岳信仰と修験道が融合した神仏習合の神号であり、**勝軍地蔵**を本地仏とし、垂迹したイザナミを権現とする。 軍神として武士から信仰を集めた。

（白雲寺は勝軍地蔵(将軍地蔵)を本尊としていた）

明治の神仏分離により、白雲寺は廃絶されて**愛宕神社**になり、**勝軍地蔵**は京都市西京区大原野の**金蔵寺**に移されたが、**月輪寺の権現堂**(将軍地蔵)は、**そのまま継承**されている。

愛宕山白雲寺、及び 愛宕山全山について

神仏分離・廃仏毀釈が行われる以前は、愛宕山白雲寺から勧請されて全国の愛宕社で祀られた。塞神信仰や陰陽道の影響から、**愛宕山は平安京の北西(乾)**に位置する守護神ともされた。愛宕修験では天狗信仰が盛んだったため、愛宕太郎坊天狗も祀った。

▲ **金蔵寺**（こんぞうじ）標高は360m。 創建当初は、法相宗

山号を西岩倉山と号し、天台宗に属する。寺伝によれば、**養老二年(718)**、**元正天皇**の勅によって隆豊禪師が開創し、聖武天皇は勅額を賜り經典を書写して埋め、密教に適う寺として、「金剛界と胎蔵界」から命名。桓武天皇は平安京遷都に当たり王城鎮護のため經典を埋め西岩倉山と号するに至ったと伝えられる。

また、隆豊禪師の開創に当たり、向日町にある向日明神の神助があり、明神の手引きで楠木で**千手観音**を刻んだことが「金蔵寺略縁起」に見えている。 平安時代以後、当寺は西山の名刹(めいさつ)として栄えた。 全盛期には、官寺となり無量寿院といって白河天皇建立、金箔のお堂があり、市内からも光って見えたため、西の金閣と呼ばれた。応仁の乱など戦乱で建物はすべて焼失、歴史を伝える古文書、記録も失われた。

現在の建物は、元禄四年(1691)、将軍綱吉の母、**桂昌院**により**再建**されたもの

本堂には**十一面千手観音像**を安置する。背後には、**明治初年に愛宕山より本尊、勝軍地蔵像を移して祠る「愛宕大権現堂」**、山内には当寺の伝承にまつわる遺跡が多く、本堂の北、長嘯亭からは京都市内が一望の下に見下ろされる。

桂昌院は、京都・堀川の八百屋、仁右衛門の娘で名前は玉子。 五代将軍綱吉の母幼い頃、度々父に連れられた金蔵寺復興に尽くした。宝永2年(1705)、79歳で亡くなり遺骸は増上寺に葬られたが、金蔵寺では、遺髪を桂昌院廟所に納めて祀り、報恩供養している。(剣力タバミ紋)



御前立



愛宕山白雲寺、清水寺、そして、比叡山延暦寺にも将軍地蔵は存在した。 平安京創建との関連か？

清水寺の将軍地蔵

本堂最奥の内々陣 須弥壇上の三基の厨子内 御本尊の十一面(四十二臂)千手観音

脇侍 **勝軍地蔵菩薩** (右手に剣と左手に錫杖) 毘沙門天

錫杖: 煩惱を除去し智慧を得る、武器としても用いる。

清水寺仁王門は、愛宕山を正面としている、

(将軍地蔵、坂上氏と和気氏との関係を連想)

金蔵寺、その麓の勝持寺も、清水寺と同じく創建当初は法相宗。

室生寺と同じく元法相宗、役小角の開山の伝承。 地理的には、金蔵寺含む全山、法相宗・**役小角**が起源と考えた方が合理的である。

清水寺の起源と関係する 山科「牛尾山法厳寺」も、山岳、法相宗、観音信仰。

延暦寺滋賀院 本堂



鎌倉時代に将来された蓮華三昧経に説かれて居る勝軍地蔵は、**足利尊氏**が深く信仰して以来、足利氏歴代の将軍はいふ迄もなく、一般の武家社会に広く行はれ、吉野、室町、戦国時代を通じて、熱烈に尊崇信仰される様になった。その信仰の態度に我々は二つの場合を見ることが出来る。即ち一は、勝軍地蔵の名の示す如く、軍陣に臨みて之を信仰すれば、向ふ所敵なく、譬へば秋草の風に靡くが如しと言はれて居る所の、戦陣に際しての靈験に依つてであり、**足利義尚や、細川高国、上杉謙信**の戦勝祈願の態度の中に之を見ることが出来る。

その二は、かへる勝軍地蔵の靈威を発展せしめて、その信仰に依つて、天下国家の安全静謐を祈り、或はその居城の安全を祈らんとするものである。かへる場合として、**足利義詮以下足利家歴代勝軍が、真言宗の寺院に命じて、勝軍地蔵法を勤修して、天下静謐を祈らしめた** 森末義彰氏「勝軍地蔵考」戦国時代末期、本能寺討ち入り前の、愛宕、月輪寺詣でに繋がる。

参考画像
愛宕権現図
長谷川等伯



室町末期～桃山初期
石川県七尾美術館 所蔵

清水寺仁王門は愛宕山を、真正面に見つめる
田村氏と和気氏の関係か？
観音繋がり？



仏教世界観 六道（地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界：空居天/地居天）、また十界（六道の上に声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界を加えたもの）

如来部



阿弥陀如来

極楽浄土の教主
法蔵菩薩が四十八誓願、
修業で如来に
念仏者を救済し極楽往生

弥勒菩薩(如来)

兜率天で修業中
将来の釈迦後継者

釈迦如来

自らの悟りのための仏



盧舎那仏

大日如来

密教



東大寺

薬師如来

浄瑠璃世界の教主
現世病苦救済



薬師寺

菩薩部

極楽院

現 三千院 極楽往生院

浄土三部經
観無量寿經
無量寿經
阿弥陀經

薬上菩薩

法隆寺

薬王菩薩

普賢菩薩

文殊菩薩

五智如来 (東寺講堂)

大日如来(中心)
阿閼如来(東)
宝生如来(南)
観自在王如来(阿弥陀如来)(西)
不空成就如来(北)

月光菩薩

日光菩薩

観音部

勢至菩薩

観音菩薩

変化観音

雑密

不空羂索観音

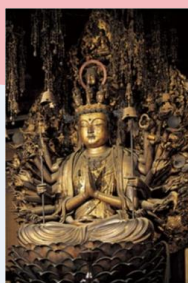
千手観音



広隆寺

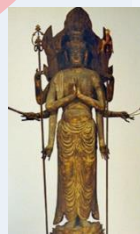


法性寺



妙法院

三十三間堂



広隆寺

不空羂索観音

地藏菩薩



六波羅蜜寺



蟹満寺
奈良時代
国宝

五大菩薩 (東寺講堂)

金剛波羅蜜菩薩・金剛薩埵・
金剛法・金剛宝・金剛業菩薩

虚空蔵菩薩 (神護寺多宝塔)



東寺観智院

五大虚空蔵菩薩

明王部 五大明王 大元帥明王 愛染明王 孔雀明王 馬頭明王 六字明王

天部 護法善神 密教では神々を意味する尊格の一つ

ヒンドゥー教の神に由来

梵天 帝釈天 大自在天 弁才天(七福神の石柱)

大黒天 吉祥天

韋駄天(陰天) 鳩摩羅天 摩利支天 歓喜天

那羅延天 鬼子母神 荼吉尼天 焰摩天(閻魔)

金剛力士(仁王) 十二天 堅牢地神 伊舎那天 黒闇天

羅刹天 他化自在天 八大龍王

八部衆 十二神将 二十八部衆

不動八大童子(「不動明王」の眷属) 妙見菩薩 飛天

技芸天 摩多羅神 深沙大将 寿老人 福祿寿 布袋 恵比寿

二十八部衆 (三十三間堂)

千手観音の眷属

典拠「千手観音造次第法儀軌」善無畏訳



八部衆

五大明王 (東寺講堂・大覚寺・醍醐寺)

不動明王 が中心

東に降三世明王(ごうざんぜ)

南に軍荼利明王(ぐんだり)、

西に大威徳明王(だいいとく)

北に金剛夜叉明王(こんごうやしや)配置は真言密教(東密)

天台宗密教(台密)は金剛夜叉明王の代わりに烏枢沙摩明王(うすさま)



大覚寺

御本尊



西岩倉山

四天王 (法隆寺金堂 東大寺戒壇院 東寺講堂)

持国天 - 東勝神洲を守護。乾闥婆、毘舍遮を眷属

増長天 - 南瞻部洲を守護。鳩槃荼、薜荔多を眷属

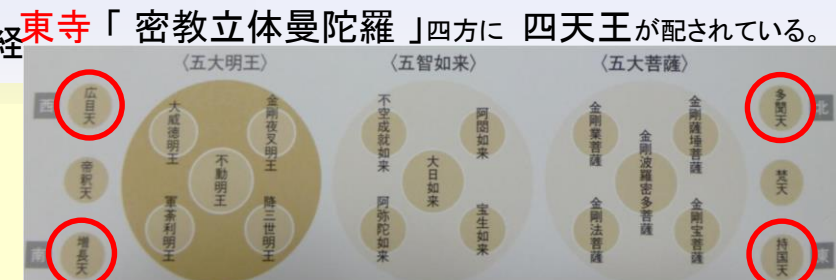
広目天 - 西牛貨洲を守護。龍神、毘舍闍を眷属。

多聞天 - 北俱盧洲を守護。毘沙門天とも呼ぶ。

典拠「金光明經」

護国三部經

金光明經・法華經・仁王經



知恩院

十六羅漢 (東福寺・知恩院・南禅寺三門 建仁寺楼門)

羅漢は三界の煩惱を断ち、修学を已に成じて世の供養を受ける資格のある聖者で、釈迦の眷属として修行者の姿に表わされる。特に禅宗で尊崇される仏滅800年経ち、ナンディミトラ大阿羅漢が大眾に説いたとされる、仏勅を受けて永くこの世に住し、衆生を済度する役割をもった16人



仏教世界観 六道（地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界：空居天/地居天）、また十界（六道の上に声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界を加えたもの）

眷属とは、仏に従い、その意思を伝える使者、また仏を守る者、神格のこと。ここでは、各菩薩との関係を示す。伝播した仏像は日本で発達、**木の文化と習合し様々に創造**された。

観音菩薩

天台と真言系寺院

観音菩薩（十一面観音、千手観音など）

脇侍 毘沙門天 不動明王

薬師如来、虚空蔵菩薩や文殊菩薩なども同様



三十三間堂

二十八部衆

千手観音の眷属

典拠「千手観音造次第法儀軌」善無畏訳

- 1.密迹金剛力士（みっしやくこんごうりきし）（密遮金剛）
- 2.那羅延堅固王（ならえんけんごおう）
- 3.東方天（とうほうてん）
- 4.毘楼勒叉天（びるろくしゃてん）
- 5.毘楼博叉天（びるばくしゃてん）
- 6.毘沙門天（びしゃもんてん）
- 7.梵天（ぼんてん）
- 8.帝釈天（たいしゃくてん）
- 9.毘婆迦羅王（ひばからおう）
- 10.五部浄居天（ごぶじょうごてん、五部浄居炎摩羅）

毘沙門天

鞍馬寺



- 11.沙羯羅王（しゃがらおう）
 - 12.阿修羅王（あしゅらおう）
 - 13.乾闥婆王（けんだつばおう）
 - 14.迦楼羅王（かるらおう）
 - 15.緊那羅王（きんならおう）
 - 16.摩侯羅王（まごらおう）
 - 17.金大王（こんだいおう、宝賢**夜叉**）
 - 18.満仙王（まんせんおう、満賢**夜叉**）
 - 19.金毘羅王（こんぴらおう）
 - 20.満善車王（まんぜんしゃおう）
 - 21.金色孔雀王（こんじきくじゃくおう）
 - 22.大弁功德天（だいべんくどくてん）
 - 23.神母天（じんもてん）
 - 24.散脂大将（さんしたいししょう、散脂夜叉）
 - 25.難陀龍王（なんだりゅうおう）
 - 26.摩醯首羅王（まけいしゅらおう）
 - 27.婆藪仙人（ばすせんにな、聖仙ヴァシシュタ）
 - 28.摩和羅女（まわらによ）
- * 20.満善車王（まんぜんしゃおう、満善車鉢真陀羅満仙王、緊那羅王と重複している）

仁王像

像容は上半身裸形で、筋骨隆々とし、阿形像は怒りの表情、吽形像は怒りを内に秘めた表情が多い。寺院守護神。

二十八部衆では、阿形像は「那羅延堅固王」（ならえんけんごおう）、吽形像は「密迹金剛力士」（みっしやくこんごうりきし）と呼ばれる。

風神雷神 三十三間堂



釈迦如来



蟹満寺

奈良時代 国宝

十大弟子

釈迦如来の眷属

興福寺、734年 **清涼寺**、平安時代 **大報恩寺**、快慶作、鎌倉時代



優波離

快慶

目犍連

- 1.舍利弗（しゃりほつ）舍利子とも書く。智慧第一。パーリ語でサーリプッタ（Sāriputta、सारिपुत）。サンスクリット語でシャーリプトラ（Śāriputra）。『般若心経』では仏の説法の相手。
- 2.摩訶目犍連（まかもつけんれん）一般に目連（もくれん）、神通第一。中国仏教では目連が餓鬼道に落ちた母救済供養が『盂蘭盆会』（うらぼんえ）起源
- 3.摩訶迦葉（まかかしょう）大迦葉とも、頭陀（ずだ）第一。釈迦の死後、その教団を統率、第1結集では500人の仲間とともに釈迦の教法を編集する座長。禅宗は付法蔵（教えの奥義を直伝）の第2祖。
- 4.須菩提（しゅぼだい）解空第一（げくう・だいいち）。空を説く大乘經典にしばしば登場する。
- 5.富楼那弥多羅尼子（ふるなみたらし）略称として「富楼那」。他の弟子より説法が優れていた。説法第一。
- 6.摩訶迦旃延（まかかせんねん）論議第一。迦地では5人の師しかいなくても授戒する許可を仏から得た。
- 7.阿那律（あなりつ）天眼第一（てんげん・だいいち）。釈迦の従弟。阿難とともに出家した。盲目、真理を見る眼をえた。
- 8.優波離（うばり）持律第一。
- 9.羅睺羅（らごら）羅云とも書かれる。密行第一（みつぎょう・だいいち）。釈迦の長男。最初の沙弥（少年僧）寺院の子弟を仏教用語で羅子（らご）と言う。
- 10.阿難陀（あなんだ）阿難とも書く。多聞第一。釈迦の従弟。nandaは歓喜（かんぎ）という意味。釈迦が死ぬまで25年間、付き人。第一結集のときアーナンダの記憶に基づいて経が編纂

風神

『古事記』では、イザナギとイザナミの間に生まれた神、志那都比古神（しなつひこのかみ）、『日本書紀』では級長津彦命（しなつひこのみこと）と表記、神社の祭神志那都彦神などとも神名の「シナ」は「息が長い」という意味

雷神

黄泉の国で、伊邪那美命から生じた8柱の雷神（火雷神）

薬師如来



神護寺

十二神将

仏教の信仰・造像の対象である天部の神々、十二**夜叉**大将、十二神明王とも呼称、薬師如来薬師経信仰する者を守護する武神。典拠 玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功德经』（薬師経）

宮毘羅大将（金毘羅童子、宮比羅）くびら こんぴら
伐折羅大将（金剛力士）ばさら
迷企羅大将めきら
安底羅大将あんちら あんていら
頻伽羅大将あにら
珊底羅大将さんちら さんていら
因達羅大将（帝釈天）いんだらndraインドラ
波夷羅大将はいら
摩虎羅大将（摩睺羅伽）まこら
真達羅大将（緊那羅）しんだら
招杜羅大将しょうとら
毘羯羅大将びから



新薬師寺

八部衆

典拠「法華経」「金光明最勝王経」
天衆
龍衆
夜叉衆
阿修羅衆
乾闥婆衆
迦楼羅衆
緊那羅衆
摩睺羅伽衆（まこらが）
* 夜叉：古代インド神話に登場する鬼神。
八部衆の一つとして、また毘沙門天の眷属として羅刹と共に北方を守護

興福寺八部衆

五部衆（天衆） **沙羯羅**（さから 龍衆）
迦楼羅（かるら）
鳩槃荼（くはんだ、夜叉）
阿修羅 **乾闥婆**（けんだつば）
緊那羅（きんなら）
畢婆迦羅（ひばから）